京都府遺跡調査報告集

第177冊

1. 平成27～30年度府営農業競争力強化基盤整備事業
   女布地区関係遺跡
   女布北遺跡第7次、女布遺跡第3･6･9次
2. 平成30年度新設高等学校(丹後地域)校舎整備工事関係遺跡
   奈具遺跡第5次
3. 平成27～29年度由良川緊急治水対策事業関係遺跡
   阿良須遺跡第1～3次

2019

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　由良川緊急治水対策事業関係遺跡

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａトレンチ全景(北東から)

(2) 出土土器

序

平成31年４月には文化財保護法の一部改正が施行され、文化財の保護とともにその活用が一層重視されます。国内屈指の文化財を有し、文化庁の移転も控えた京都府として、文化財の保護と活用に期待されているところです。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年４月に設立されて以来、38年間にわたり京都府内の各地域に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その調査成果を『京都府遺跡調査報告集』として刊行するとともに、セミナーや速報展などで公表してきました。

本書は、平成27～30年度に京都府丹後広域振興局、京都府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した、女布北遺跡、女布遺跡、奈具遺跡、阿良須遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された上記の各機関をはじめ、京丹後市教育委員会、福知山市教育委員会などの関係各機関、ならびに調査にご参加、ご協力をいただきました多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成31年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　井　上　満　郎

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

（1）平成27～30年度府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡
　女布北遺跡第７次・女布遺跡第３・６・９次

（2）平成30年度新設高等学校（丹後地域）校舎整備工事関係遺跡　奈具遺跡第５次

（3）平成27～29年度由良川緊急治水対策事業関係遺跡　阿良須遺跡第１～３次

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1	女布遺跡 女布北遺跡	京都府京丹後市久美浜町女布	平成27年７月21日～８月28日 平成28年８月２日～９月29日 平成29年６月１日～７月28日 平成30年６月19日～７月28日	京都府丹後広域振興局	細川康晴 引原茂治 竹原一彦 福山博章 綾部侑真 荒木瀬奈
2	奈具遺跡	京都府京丹後市弥栄町黒部	平成30年９月25日～11月９日	京都府教育委員会	桐井理揮
3	阿良須遺跡	京都府福知山市大江町北有路大坪ほか	平成27年11月５日～平成28年２月26日 平成28年5月25日～12月26日 平成29年８月22日～12月25日	国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所	石井清司 竹原一彦 桐井理揮

3．上記３事業４遺跡は本部事務所（向日市寺戸町）で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。

4．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5．土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。土層断面図の粒径区分は粒度標本を用いた。

6．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7．現場写真は主として調査担当者が撮影した。

本 文 目 次

1．平成27～30年度府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡
女布北遺跡第７次・女布遺跡第３・６・９次発掘調査報告 1
2．平成30年度新設高等学校(丹後地域)校舎整備工事関係遺跡
奈具遺跡第５次発掘調査報告 75
3．平成27～29年度由良川緊急治水対策事業関係遺跡
阿良須遺跡第１～３次発掘調査報告 83

挿 図 目 次

1．府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡
女布北遺跡第７次・女布遺跡第３・６・９次
第１図　調査地及び周辺遺跡分布図 3
第２図　既往調査区配置図 5
第３図　女布北遺跡第７次調査調査区配置図 7
第４図　女布北遺跡第７次調査断ち割り１土層断面図 8
第５図　女布北遺跡第７次調査断ち割り２土層断面図 8
第６図　女布北遺跡第７次調査遺構配置図 9
第７図　女布北遺跡第７次調査土坑ＳＸ01実測図 10
第８図　女布北遺跡第７次調査掘立柱建物ＳＢ07実測図 11
第９図　女布北遺跡第７次調査柱穴ＳＰ08実測図 12
第10図　女布北遺跡第７次調査杭列ＳＸ10実測図 13
第11図　女布北遺跡第７次調査自然流路ＮＲ11実測図 13
第12図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図１ 14
第13図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図２ 15
第14図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図３ 16
第15図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図４ 18
第16図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図５ 19
第17図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図６ 20
第18図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図７ 20
第19図　女布遺跡第３次調査調査区配置図 22
第20図　女布遺跡第３次調査土層柱状図 23
第21図　女布遺跡第３次調査１～３トレンチ実測図 24

第22図　女布遺跡第３次調査竪穴建物ＳＨ101・201実測図 25
第23図　女布遺跡第３次調査14トレンチ実測図 27
第24図　女布遺跡第３次調査出土遺物実測図 29
第25図　女布遺跡第６次調査調査区配置図 31
第26図　女布遺跡第６次調査１・２トレンチ遺構配置図 32
第27図　女布遺跡第６次調査１トレンチ西壁土層断面図 33
第28図　女布遺跡第６次調査２－Ａトレンチ北壁土層断面図 34
第29図　女布遺跡第６次調査２トレンチ ピットＳＰ201実測図 35
第30図　女布遺跡第６次調査２－Ｂトレンチ北壁土層断面図 36
第31図　女布遺跡第６次調査３・４トレンチ遺構配置図 37
第32図　女布遺跡第６次調査３トレンチ北壁土層断面図 38
第33図　女布遺跡第６次調査３トレンチ土坑ＳＫ304・305遺物出土状況図 38
第34図　女布遺跡第６次調査４トレンチ南壁土層断面図 39
第35図　女布遺跡第６次調査４トレンチ竪穴建物ＳＨ401実測図 40
第36図　女布遺跡第６次調査４トレンチ竪穴建物ＳＨ402実測図 41
第37図　女布遺跡第６次調査４トレンチ竪穴建物ＳＨ402主柱穴等土層断面図 42
第38図　女布遺跡第６次調査５トレンチ北壁土層断面柱状図 42
第39図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図１ 44
第40図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図２ 46
第41図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図３ 48
第42図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図４ 49
第43図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図５ 51
第44図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図６ 52
第45図　女布遺跡第９次調査調査区配置図 54
第46図　女布遺跡第９次調査１トレンチ遺構配置図 55
第47図　女布遺跡第９次調査１トレンチ東壁土層断面図 55
第48図　女布遺跡第９次調査１トレンチ検出遺構土層断面図 55
第49図　女布遺跡第９次調査東側調査区土層柱状図 56
第50図　女布遺跡第９次調査５トレンチ遺構配置図・土層断面図 57
第51図　女布遺跡第９次調査６トレンチ遺構配置図・土層断面図 57
第52図　女布遺跡第９次調査５・６トレンチ検出遺構土層断面図 58
第53図　女布遺跡第９次調査出土遺物実測図 59

２．新設高等学校（丹後地域）校舎整備工事関係遺跡　奈具遺跡第５次

第１図　調査地及び周辺の遺跡 76

第２図　調査区配置図……77
第３図　東壁土層断面図……78
第４図　遺構配置図……79
第５図　竪穴建物ＳＨ15実測図……79
第６図　各遺構断面図……80
第７図　出土遺物実測図……81

３．由良川緊急治水対策事業関係遺跡　阿良須遺跡第１～３次

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図……85
第２図　阿良須遺跡周辺地形図……87
第３図　年度別トレンチ配置図……88
第４図　阿良須遺跡地区割り図……90
第５図　平成27年度調査各トレンチ柱状図……93
第６図　Ａ・Ｂ１トレンチ全体図（１）……96
第７図　Ａ・Ｂ１トレンチ全体図（２）……97
第８図　Ａトレンチ東壁土層断面図……98
第９図　Ａトレンチ北壁西側土層断面図……99
第10図　Ａトレンチ第２遺構面ＳＸ06・23実測図……101
第11図　Ａトレンチ第２遺構面ＳＤ37・ＳＤ22ほか実測図……102
第12図　Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58上層実測図……103
第13図　Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層実測図……104
第14図　Ｂ１トレンチ平面図……105
第15図　Ｂ１トレンチ北壁土層断面図……106
第16図　Ｂ１トレンチ西壁及びＳＸ03土層断面図……107
第17図　Ｂ１トレンチ東壁土層断面図……108
第18図　Ｂ２トレンチ第１遺構面平面図……110
第19図　Ｂ２トレンチ北壁土層断面図……111
第20図　Ｂ２トレンチ北壁及び東壁土層断面図……112
第21図　Ｂ２トレンチ第１遺構面ＳＸ01・02検出状況図……113
第22図　Ｂ２トレンチ中央南北畔土層断面図……114
第23図　Ｂ２トレンチ第２遺構面平面図……115
第24図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面北壁土層断面図１……116
第25図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面北壁土層断面図２……117
第26図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＸ101実測図……118
第27図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＫ03・04実測図……119

第28図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＫ06 ～ 10実測図 ---------- 120
第29図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＸ11実測図 ---------- 121
第30図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面東半部包含層遺物出土状況図 ---------- 122
第31図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面中央包含層遺物出土状況図 ---------- 123
第32図　Ｂ２トレンチ第３遺構面平面図 ---------- 125
第33図　第１次調査出土遺物実測図 ---------- 126
第34図　第２・３次調査出土弥生土器実測図 ---------- 127
第35図　第２次調査ＳＸ58出土遺物実測図１ ---------- 129
第36図　第２次調査ＳＸ58出土遺物実測図２ ---------- 130
第37図　第２次調査ＳＸ58出土遺物実測図３ ---------- 131
第38図　第２次調査包含層出土遺物実測図 ---------- 132
第39図　第１・３次調査ＳＸ101及び包含層出土遺物実測図 ---------- 133
第40図　第３次調査包含層出土遺物実測図１ ---------- 134
第41図　第３次調査包含層出土遺物実測図２ ---------- 135
第42図　第２・３次調査出土土製品実測図 ---------- 136
第43図　第２・３次調査出土鉄製品実測図 ---------- 136
第44図　由良川下流域の地形分類と遺跡の立地 ---------- 138
第45図　由良川下流域における古墳時代後期末から飛鳥時代の土器様相 ---------- 140

付 表 目 次

１．府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡

女布北遺跡第７次、女布遺跡第３・６・９次

付表１　女布北遺跡発掘調査一覧 ---------- 6
付表２　女布遺跡発掘調査一覧 ---------- 6
付表３　女布北遺跡土坑ＳＸ01出土土器破片集計表 ---------- 17
付表４　出土遺物観察表 ---------- 66

２．新設高等学校（丹後地域）校舎整備工事関係遺跡　奈具遺跡第５次

付表１　方形土坑一覧 ---------- 80
付表２　出土遺物観察表 ---------- 81

３．由良川緊急治水対策事業関係遺跡　阿良須遺跡第１～３次

付表１　由良川流域における検出建物数 ---------- 139

付表２　出土土器観察表 ---------- 146
付表３　出土鏃観察表 ---------- 151
付表４　出土鉄製品観察表 ---------- 151

図 版 目 次

巻頭図版　由良川緊急治水対策事業関係遺跡　阿良須遺跡第１～３次
(1)Ａトレンチ全景(北東から)
(2)出土土器

１．府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡
女布北遺跡第７次
図版第１　(1)調査区上層全景(南から)
(2)調査区上層全景(北西から)
図版第２　(1)調査区上層遺物出土状況(西から)
(2)溝ＳＤ02全景(南から)
(3)柱穴ＳＰ08柱根出土状況(南から)
図版第３　(1)土坑ＳＸ01遺物出土状況(南から)
(2)土坑ＳＸ01遺物出土状況(西から)
(3)土坑ＳＸ01完掘状況(西から)
図版第４　(1)掘立柱建物ＳＢ07全景(北東から)
(2)柱穴ＳＰ04半截状況(南から)
(3)柱穴ＳＰ06半截状況(南から)
図版第５　(1)調査区下層全景(北西から)
(2)調査区下層全景(南東から)
図版第６　(1)杭列ＳＸ10検出状況(北西から)
(2)杭列ＳＸ10検出状況(南から)
(3)杭列ＳＸ10検出状況(南から)
図版第７　(1)自然流路ＮＲ11完掘状況(南から)
(2)柱穴ＳＰ12・13・14・15完掘状況(北東から)
(3)杭列ＳＸ09検出状況(南西から)
図版第８　(1)調査区断ち割り１断面(北から)
(2)調査区断ち割り２断面(北から)
(3)調査区南壁断面(北から)
図版第９　女布北遺跡第７次調査出土遺物１

図版第10　(1)女布北遺跡第７次調査出土遺物２
(2)女布北遺跡第７次調査出土遺物３

女布遺跡第３次

図版第11　(1)調査対象地北半部調査前全景(南西から)
(2)調査対象地南半部調査前全景(北東から)
(3)１トレンチ全景(南から)
図版第12　(1)１トレンチ全景(東から)
(2)１トレンチ竪穴建物ＳＨ101全景(北西から)
図版第13　(1)２トレンチ全景(東から)
(2)２トレンチ竪穴建物ＳＨ201(南から)
図版第14　(1)２トレンチ土坑ＳＫ202全景(南から)
(2)３トレンチ全景(西から)
(3)４トレンチ全景(東から)
図版第15　(1)５トレンチ全景(南東から)
(2)６トレンチ全景(南西から)
(3)７トレンチ全景(北東から)
図版第16　(1)８－１トレンチ全景(南から)
(2)８－２トレンチ全景(南から)
(3)８－２トレンチ遺物出土状況(南から)
図版第17　(1)９－１トレンチ全景(南から)
(2)９－２トレンチ断面(西から)
(3)10トレンチ全景(南から)
図版第18　(1)11トレンチ全景(南西から)
(2)12トレンチ西半部全景(南から)
(3)13トレンチ全景(南西から)
図版第19　(1)14トレンチ全景(東から)
(2)14トレンチ溝ＳＤ1401全景(東から)
図版第20　女布遺跡第３次調査出土遺物

女布遺跡第６次

図版第21　(1)１トレンチ調査前状況(北から)
(2)１トレンチ全景(南東から)
(3)１トレンチ溝ＳＤ101・102完掘状況(東から)
図版第22　(1)１トレンチ谷地形遺物出土状況(北東から)
(2)２－Ａ・Ｂトレンチ調査前状況(北東から)
(3)２－Ａトレンチ全景(南西から)

図版第23　(1) 2－Aトレンチ全景(北東から)
(2) 2－Aトレンチ ピットＳＰ201遺物出土状況(南から)
(3) 2－Bトレンチ全景(南西から)
図版第24　(1) 2－Bトレンチ土坑ＳＫ219完掘状況(南東から)
(2) 3トレンチ調査前状況(北から)
(3) 3トレンチ全景(北東から)
図版第25　(1) 3トレンチ土坑ＳＫ301遺物出土状況(東から)
(2) 3トレンチ土坑ＳＫ301完掘状況(南東から)
(3) 3トレンチ土坑ＳＫ304・305検出時遺物出土状況(北西から)
図版第26　(1) 3トレンチ土坑ＳＫ304遺物出土状況(南西から)
(2) 4トレンチ調査前状況(南東から)
(3) 4トレンチ全景(東から)
図版第27　(1) 4トレンチ全景(西から)
(2) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ401掘削状況(南から)
(3) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ401内焼土半截状況(西から)
図版第28　(1) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ402遺物出土状況(西から)
(2) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ402完掘状況(南から)
図版第29　(1) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ402粘土塊出土状況(南から)
(2) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ402粘土塊半截状況(南西から)
(3) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ402主柱穴ＳＰ425四分割状況(北東から)
図版第30　(1) 4トレンチ竪穴建物ＳＨ402主柱穴ＳＰ425完掘状況(東から)
(2) 4トレンチ ピットＳＰ424遺物出土状況(西から)
(3) 5トレンチ全景(南西から)
図版第31　女布遺跡第６次調査出土遺物１
図版第32　女布遺跡第６次調査出土遺物２
図版第33　女布遺跡第６次調査出土遺物３
女布遺跡第９次
図版第34　(1) 1～4トレンチ調査地遠景(南西から)
(2) 1トレンチ土層断面(北から)
(3) 1トレンチ土坑ＳＸ02・03掘削状況(西から)
図版第35　(1) 1トレンチ遺構完掘状況(東から)
(2) 1トンレチ全景(北から)
(3) 2トレンチ遠景(北から)
図版第36　(1) 2トレンチ全景(北東から)
(2) 3トレンチ土層断面(北から)

(3) 3トレンチ全景(北東から)
図版第37　(1) 4トレンチ土層断面(北西から)
(2) 4トレンチ全景(北から)
(3) 5・6トレンチ遠景(南から)
図版第38　(1) 5トレンチ土層断面(東から)
(2) 5トンレチ遺構完掘状況(北東から)
(3) 6トレンチ土層断面(東から)
図版第39　(1) 5トレンチ土坑ＳＸ01・溝ＳＤ02掘削状況(東から)
(2) 5トレンチ全景(北東から)
(3) 6トレンチ全景(北東から)
図版第40　女布遺跡第9次調査出土遺物

2．新設高等学校(丹後地域)校舎整備工事関係遺跡　奈具遺跡第5次

図版第1　(1)調査地遠景(北から)
(2)調査地遠景(北から)
図版第2　(1)土坑群検出状況(東から)
(2)土坑群検出状況(西から)
(3)溝ＳＤ17・18検出状況(東から)
図版第3　(1)土坑ＳＫ02断面(南から)
(2)土坑ＳＫ07・08断面(南から)
(3)溝ＳＤ17断面(東から)
図版第4　(1)竪穴建物ＳＨ15検出状況(南から)
(2)東壁断面の地震痕跡(西から)
(3)調査地完掘状況(南から)

3．由良川緊急治水対策事業関係遺跡　阿良須遺跡第1～3次

図版第1　(1)阿良須遺跡全景(北から)
(2)阿良須遺跡全景(西から)
(3) 1トレンチ全景(西から)
図版第2　(1) 2トレンチ全景(南東から)
(2) 3トレンチ全景(西から)
(3) 4トレンチ全景(北西から)
図版第3　(1) 5トレンチ全景(北西から)
(2) 5トレンチ東壁土層断面(西から)
(3) 8トレンチ全景(北西から)

図版第４　(1) ８トレンチ遺物出土状況(南から)
(2) ９トレンチ全景(東から)
(3) ９トレンチＳＸ102遺物出土状況(南西から)
図版第５　(1) 10トレンチ全景(北から)
(2) 10トレンチ北部東壁面(南西から)
(3) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況１(東から)
図版第６　(1) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況２(南東から)
(2) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況３(南東から)
(3) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況４(南東から)
図版第７　(1) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況５(西から)
(2) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況６(東から)
(3) 11トレンチ全景(南西から)
図版第８　(1) Ａ・Ｂトレンチ調査前全景(北東から)
(2) Ａトレンチ第１遺構面調査地全景(南西から)
(3) Ａトレンチ第２遺構面調査地全景(南西から)
図版第９　(1) Ａトレンチ第２遺構面調査地遠景(北東から)
(2) Ａトレンチ第２遺構面調査地全景(右上が北)
図版第10　(1) Ａトレンチ第２遺構面遺構検出状況(北東から)
(2) Ａトレンチ第２遺構面東部遺構検出状況(北西から)
(3) Ａトレンチ第２遺構面ＳＤ22・ＳＸ23全景(南西から)
図版第11　(1) Ａトレンチ第２遺構面柱穴ＳＰ19(南西から)
(2) Ａトレンチ第２遺構面土坑ＳＫ32(北西から)
(3) Ａトレンチ第２遺構面溝ＳＤ37(南西から)
図版第12　(1) Ａトレンチ第３遺構面調査地全景(北東から)
(2) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58上層遺物検出状況(北西から)
(3) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58上層遺物検出状況(北西から)
図版第13　(1) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層遺物出土状況(北東から)
(2) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層遺物出土状況(南西から)
(3) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層遺物出土状況(南東から)
図版第14　(1) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層遺物出土状況(南西から)
(2) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層遺物出土状況(北西から)
(3) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58下層遺物出土状況(北東から)
図版第15　(1) Ｂ１トレンチ第２遺構面調査地全景(北西から)
(2) Ｂ１トレンチ第２遺構面調査地全景(南西から)
(3) Ｂ１トレンチ第３遺構面調査地全景およびＳＸ03断ち割り調査状況(北東から)

図版第16　(1)Ｂ１トレンチＳＸ03断ち割り南壁面全景(西から)
(2)Ｂ１トレンチ西壁面にみるＳＸ03砂利堆積状況(北東から)
(3)Ｂ１トレンチ第３遺構面断ち割り調査状況(南西から)
図版第17　(1)Ｂ２トレンチ第１遺構面全景(北東から)
(2)Ｂ２トレンチ第１遺構面全景(南西から)
(3)Ｂ２トレンチ第１遺構面北壁土層堆積状況(南東から)
図版第18　(1)Ｂ２トレンチ第２遺構面全景(北東から)
(2)Ｂ２トレンチ第２遺構面全景(南西から)
(3)Ｂ２トレンチ第２遺構面砂利層全景(北西から)
図版第19　(1)Ｂ２トレンチ西壁土層断面(北東から)
(2)Ｂ２トレンチ中央南北畦土層断面(西から)
(3)Ｂ２トレンチ西半部北壁土層断面(南西から)
図版第20　(1)Ｂ２トレンチ第２遺構面完掘状況(南西から)
(2)Ｂ２トレンチＳＸ01全景(北東から)
(3)Ｂ２トレンチＳＸ01遺物出土状況(南西から)
図版第21　(1)Ｂ２トレンチＳＸ11完掘状況(北東から)
(2)Ｂ２トレンチＳＸ11南東半部断ち割り状況(南西から)
(3)Ｂ２トレンチＳＸ11南東半部断ち割り状況(北東から)
図版第22　(1)Ｂ２トレンチ第２遺構面西拡張部西壁遺物(91)出土状況(南東から)
(2)Ｂ２トレンチ第２遺構面西拡張部西壁遺物(114)出土状況(南東から)
(3)Ｂ２トレンチ第３遺構面遺物(17)出土状況(北から)
図版第23　(1)Ｂ２トレンチ第３遺構面掘削状況(北東から)
(2)Ｂ２トレンチ北側東壁砂利層の深さ(北西から)
(3)Ｂ２トレンチ西半部第３遺構面完掘状況(南西から)
図版第24　(1)Ｂ２トレンチＳＸ02遺物出土状況(北東から)
(2)Ｂ２トレンチ第１面から第２面間遺物出土状況(北から)
(3)Ｂ２トレンチ第３面遺物出土状況(東から)
図版第25　(1)Ｂ２トレンチ第２・３遺構面遺物(31)出土状況(南西から)
(2)Ｂ２トレンチ第２・３遺構面遺物(109)出土状況(北東から)
(3)Ｂ２トレンチ第２遺構面遺物(113)出土状況(北から)
図版第26　出土遺物１
図版第27　出土遺物２
図版第28　(1)出土遺物３
(2)出土遺物４

１．平成 27 ～ 30 年度府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡発掘調査報告
女布北遺跡第７次・女布遺跡第３・６・９次

１．はじめに

今回の府営農業競争力強化基盤整備事業に伴う発掘調査は、京都府京丹後市久美浜町女布地区を対象に京都府丹後広域振興局の依頼を受けて実施した。調査は平成27年度から平成30年度までの４か年度にわたり実施した。対象となったのは女布北遺跡・女布遺跡の２遺跡である。実際の調査は、平成27年度に女布北遺跡、平成28～30年度に女布遺跡で実施した。

女布北遺跡は佐濃谷川中流域に形成された河岸段丘上に位置する。平成５年度に当調査研究センターが丹後国営農地開発事業（丹後西部地区）に伴って調査を実施し、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることを確認している。

一方、女布遺跡は、佐濃谷川中流域の扇状地に位置する。調査地は女布北遺跡の南側約400mに位置する。弥生時代から近世にかけての集落跡とされており、弥生土器片などが採集されている。周辺は佐濃谷川流域でも遺跡が密に分布する地域である。女布遺跡は、中心的な集落跡と考えられているが、具体的な様相は不明である。

調査にあたっては、京都府教育委員会や京丹後市教育委員会、女布地区土地改良組合、女布区、丸山区などにご協力いただいた。現地調査には、地元の方々を中心に参加していただいた。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、京都府丹後広域振興局が全額負担した。

（引原茂治）

〔調査体制等〕

平成27年度（女布北遺跡第７次）

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課調査第２係長	中川和哉
	同　調査員	福山博章
調査場所	京丹後市久美浜町女布	
現地調査期間	平成27年７月21日～８月28日	
調査面積	200㎡	

平成28年度（女布遺跡第３次）

現地調査責任者	調査課長	森　正
現地調査担当者	調査課長補佐兼調査第１係長	細川康晴
	同　副主査	引原茂治

調　査　場　所　京丹後市久美浜町女布
現地調査期間　平成28年８月２日～９月29日
調　査　面　積　430㎡

平成29年度（女布遺跡第６次）

現地調査責任者　調　査　課　長　　小池　寛
現地調査担当者　調査課課長補佐兼調査第１係長　細川康晴
同　　副主査　竹原一彦
同　　調査員　荒木瀬奈
調　査　場　所　京丹後市久美浜町女布
現地調査期間　平成29年６月１日～７月28日
調　査　面　積　500㎡

平成30年度（女布遺跡第９次）

現地調査責任者　調　査　課　長　　小池　寛
現地調査担当者　調査課課長補佐兼調査第１係長　細川康晴
同　　主　任　綾部侑真
調　査　場　所　京丹後市久美浜町女布
現地調査期間　平成30年６月19日～８月１日
調　査　面　積　262㎡

２．位置と環境

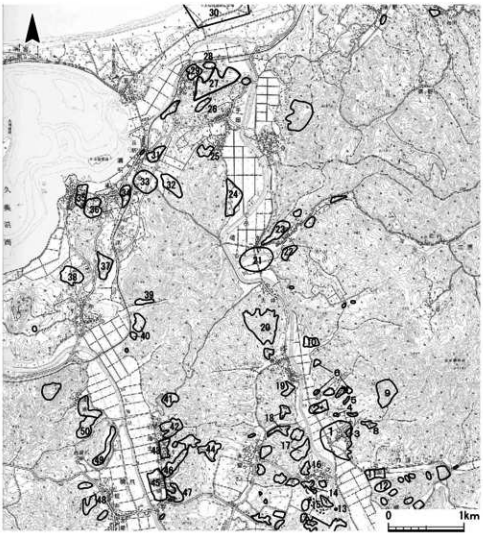
女布北遺跡及び女布遺跡は、京都府の西北端の兵庫県境に接する京丹後市久美浜町女布に位置し、江戸時代までの熊野郡内に所在する。この地域は東から域内を縦断する佐濃谷川、川上谷川、久美谷川の３本の河川により形成される小平野からなる河川流域ごとに３つの地域区分がなされるが、女布北遺跡及び女布遺跡はこのうち最も東側に位置する佐濃谷川流域の中流域にあたる。佐濃谷川流域に所在する遺跡は、河口部に位置する貨泉の出土で著名な史跡函石浜遺物包含地をはじめ、多くの遺跡や古墳が知られている。

女布北遺跡及び女布遺跡は、東方から舌状に伸びる丘陵の端部に形成された標高30m前後の台地上に位置する。女布北遺跡では、これまでの調査で、縄文時代早期の押型文土器の出土が知られるほか、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物が確認されている。また、古墳時代後期の横穴式石室墳である鶏塚古墳もあらためて確認された。一方、女布遺跡は、これまで弥生時代から近世の散布地として知られてきたが、面的な調査としては今回が初めてとなる。

女布北遺跡及び女布遺跡が立地する佐濃谷川流域の中でも、河口部と並び最も遺跡の密度が高

い地域であるが、周辺の丘陵上には、多くの弥生時代の墳墓、あるいは古墳時代の古墳の存在が知られている。北方から北東に近接して、大型円墳（直径約40m・木棺直葬・緑色凝灰岩製紡錘車形石製品出土）の北谷１号墳が立地するほか、木棺直葬墳と横穴式石室墳を含む南谷古墳群や薬師古墳群、丘陵裾部には横穴式石室墳からなる塚ヶ谷古墳群が立地する。

対岸の佐濃谷川左岸では、丘陵上に弥生時代中期前葉の豊谷墳墓群、古墳時代前期後半前後の木棺直葬墳による堤谷古墳群など多くの弥生時代の墳墓や古墳群が知られるほか、古墳時代後期



1．女布遺跡
2．女布北遺跡・鵜塚古墳
3．女布神社遺跡
4．薬師古墳群
5．北谷古墳群
6．南谷古墳群
7．塚ヶ谷古墳群
8．大堀池古墳群
9．女布城跡
10．椎ノ坪遺跡
11．竹藤遺跡
12．卯谷古墳群
13．豊谷遺跡・豊谷古墳
14．堤谷古墳群
15．堤谷窯跡群
16．墓の谷古墳群
17．サト古墳群
18．谷垣古墳群
19．大谷古墳群
20．大井城跡
21．田村関遺跡
22．平野遺跡
23．岡がなる古墳群・開城跡
24．加悦岡遺跡
25．明神古墳群
26．ドウブン古墳群
27．天王山古墳群
28．別荘遺跡・別荘古墳群
29．鹿野入遺跡
30．南石浜遺跡
31．長良遺跡
32．鳥取城跡
33．日光寺遺跡
34．浦明遺跡
35．岡野遺跡
36．長良城跡
37．こくばら野遺跡
38．雲晴遺跡
39．休場古墳群
40．東山古墳群
41．岡坂古墳群
42．海士城跡・外垣古墳群
43．海士遺跡
44．永留城跡
45．橋爪遺跡
46．八幡山古墳群
47．茶臼ヶ岳古墳群
48．大久保谷古墳群
49．陵神社古墳群
50．油池古墳群

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図（国土地理院1/50,000　城崎）

後半から奈良時代前半の須恵器、瓦を焼いた堤谷窯跡群などがこれまでの発掘調査により知られている。また、平安時代の遺跡として南東の近隣に嘉応２(1170)年銘の銅製経筒の出土が知られる山の神経塚が存在していることも注目される。　（細川康晴）

３．調査の経過

本件は、女布北遺跡及び女布遺跡地内において府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区が計画されるにおよび、京都府教育庁指導部文化財保護課、京丹後市教育員会及び京都府丹後広域振興局により当該埋蔵文化財の取扱いについて協議の結果、京丹後市教育委員会による確認調査の成果を受けて、計画水路及び切り土工事が及ぶ範囲について、遺物包含層もしくは遺構が確認された箇所については、京都府から依頼を受けて当調査研究センターが発掘調査を実施することとなった。

１)平成27年度

女布北遺跡の範囲において、切り土によって削平される予定の水田に調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査では、上下２面の遺構面を確認し、上層では平安時代後期の掘立柱建物を、下層では古墳時代前期頃の柱穴等を検出した。

２)平成28年度

女布遺跡の範囲において、切り土及び計画水路部分に調査区を設定し、発掘調査を行った。全体として当初見込みよりも地形の削平及び流出が著しく、掘削深度も浅くなった。遺構密度は比較的低く出土品も少なめであった。

なお、京都府文化財保護課が小規模調査を行った地点について、若干の遺構の検出が見られたため、京都府文化財保護課と京都府丹後広域振興局で協議の結果、当調査研究センターが追加調査(約70㎡)の依頼を受け、追加調査を実施した。その結果、弥生時代後期の竪穴建物等を検出したことから、９月14日に関係者説明会を行い、前年度の女布北遺跡の出土品の一部も併せて公開した。

３)平成29年度

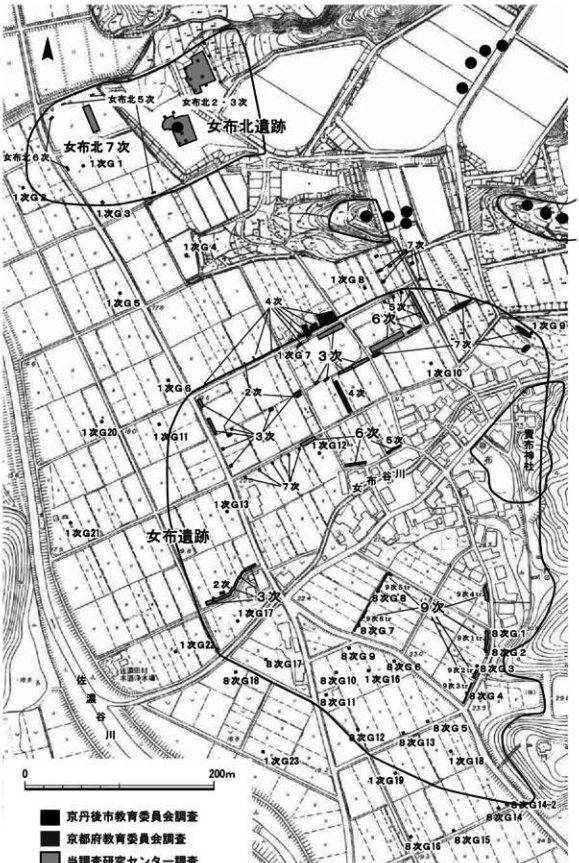
女布遺跡の範囲において、切り土及び計画水路部分に調査区を設定し、発掘調査を行った。

なお、京都府文化財保護課と京都府丹後広域振興局で協議の結果、発掘調査の地点の追加(約50㎡)について依頼を受け、追加調査を実施した。調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物等を検出し、７月26日に関係者説明会を行った。

４)平成30年度

女布遺跡の範囲において、計画水路部分に調査区を設定し、発掘調査を行った。調査では、溝、土坑等を検出し、弥生土器等が出土した。８月28日に４か年の調査成果をまとめ、遺跡報告会を行った。

（細川康晴）



第２図　既往調査区配置図(1/4,000)

付表１　女布北遺跡発掘調査一覧

次数	調査機関	調査年次	報告書
1	京都府教育委員会	平成４年	『埋蔵文化財発掘調査概報』　1993 年
2	京都府教育委員会	平成５年	『埋蔵文化財発掘調査概報』　1994 年
3	（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成５年	『京都府遺跡調査概報』第 60 冊
4	京丹後市教育委員会	平成 24 年	『女布遺跡発掘調査報告書』 （京都府京丹後市文化財調査報告書　第９集）
5	京都府教育委員会	平成 26 年	『京都府埋蔵文化財調査報告書』　平成 26 年度
6	京丹後市教育委員会	平成 26 年	『女布北遺跡発掘調査報告書 府営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』 （『京都府京丹後市文化財調査報告集』第 11 集）
7	（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成 27 年	本報告

付表２　女布遺跡発掘調査一覧

次数	調査機関	調査年次	報告書
1	京丹後市教育委員会	平成 24 年	女布遺跡発掘調査報告書 （京都府京丹後市文化財調査報告書　第９集）
2	京丹後市教育委員会	平成 27 年	女布遺跡発掘調査報告書Ⅱ 府営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 （京都府京丹後市文化財調査報告書　第 13 集）
3	（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成 28 年	本報告
4	京都府教育委員会	平成 28 年	京都府埋蔵文化財調査報告書　平成 28 年度
5	京丹後市教育委員会	平成 28 年	女布遺跡発掘調査報告書Ⅲ （京都府京丹後市文化財調査報告書　第 15 集）
6	（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成 29 年	本報告
7	京都府教育委員会	平成 29 年	京都府埋蔵文化財調査報告書　平成 29 年度
8	京丹後市教育委員会	平成 29 年	女布遺跡発掘調査報告書Ⅳ （京都府京丹後市文化財調査報告書　第 17 集）
9	（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	平成 30 年	本報告
10	京都府教育委員会	平成 30 年	
11	京丹後市教育委員会	平成 30 年	

４．調 査 概 要

１）女布北遺跡第７次調査

（１）調査の概要

女布北遺跡はこれまでに、京丹後市教育委員会、京都府教育委員会、当調査研究センターによって調査が行われており、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されている。今回の調査は第７次調査にあたる。出土遺物は整理箱６箱である。

調査地は周辺の山間部から佐濃谷川に向かって緩やかに傾斜している。調査地の現地表面の標高は21.6m前後で、現在は水田として利用されているため、平坦な地形を呈するが、東側に隣接する水田とは高低差1.4mを測る。

調査区は、ほ場整備予定地内の切り土工によって削平される水田面に設定した（第３図）。南北20m、東西10mの長方形のトレンチを設定した。調査面積は200㎡である。調査では、遺構面を確認するため、調査区の北部、中央部、南部の３か所で断ち割り調査を先行して実施した（断ち割り１～３）。その結果、標高21.5m付近と標高20.7～21.0m付近で遺構面を２面確認した（第４・５図）。遺構面は現地形と同様に調査区北部から南部に向かって、また東部から西部に向かって緩やかに傾斜している。また、調査区南部では標高20.4～21.6mまで近代の盛り土を確認し、遺構面は削平を受けて遺存していないことを確認した。調査は切り土工の及ぶ地表下1.5mまでを対象として実施し、それよりも下層については調査を行っていない。

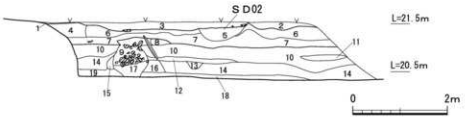
（２）基本層序

上層遺構面である灰褐色粗粒砂～細粒砂混じりシルト層（６層）を標高21.5m付近で確認した。この層から土師器・須恵器・黒色土器などが出土した。上層遺構面の北側付近は礫と極粗粒砂～極細粒砂が多く混じる。これは下層で検出した自然流路ＮＲ11の影響と考えられる。

第３図　女布北遺跡第７次調査
調査区配置図(1/2,500)

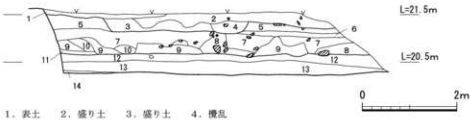
上層遺構面と下層遺構面の間には、礫の間に極粗粒砂～シルトが充填された径10～100mm程度の礫からなる礫層が約0.5m堆積している。この礫層は断ち割り２・３で確認しており、周辺の山間部からの土石流と考えられる。礫層から古墳時代の須恵器が出土した。

調査区下層遺構面は黒色粗～細粒砂混じりシルト層である。この層からは古式土師器が出土した。黒色シルト層は断ち割り１では標高21.0m付近で検出し（10層）、断ち割り２では標高20.7m付近で検出した（12層）。同一遺構面内の高低差は0.7mを測り、北側から南側に向かって傾斜する。



1．表土
2．盛り土
3．褐灰色（7.5YR5/1）粗～細粒砂混じりシルト
（黒色（7.5YR2/1）亜円礫シルトブロック10%、
褐色（7.5YR4/4）シルトブロック10%、炭・土器片を含む。）
4．灰褐色（7.5YR5/2）粗～細粒砂
5．褐灰色（7.5YR5/1）粗～細粒砂混じりシルト
（黒色（7.5YR2/1）亜円礫シルトブロック20%、
褐色（7.5YR4/4）シルトを縞状に30%、炭を含む。）（S D02）
6．灰褐色（7.5YR4/2）粗～細粒砂混じりシルト
（黒色（7.5YR2/1）亜円礫ブロック10%、褐色（7.5YR4/4）
シルトブロック10%、径2～100mmの礫を含む。）
7．黒褐色（7.5YR3/1）粗～細粒砂混じりシルト
（褐色（7.5YR4/6）シルトブロック10%、径2～100mmの礫、
土器片、炭を含む。）
8．褐色（7.5YR4/6）細砂（黒色（7.5YR3/1）シルトを縞状に30%、
炭を含む。）（N R11）
9．礫層（径2～160mm）（N R11）
10．黒色（10YR2/1）粗～細粒砂混じりシルト
（土器片、径2～100mmの礫を含む。）
11．褐灰色（7.5YR4/1）シルト混じり粗～細粒砂
12．褐色（7.5YR4/6）粗～細粒砂（径2～100mmの礫を含む。）
13．褐灰色（10YR5/1）粗～細粒砂混じりシルト
14．褐灰色（10YR4/1）粗～細粒砂混じりシルト
15．明褐色（7.5YR5/8）粗粒砂（N R11）
16．明褐色（7.5YR5/8）シルト混じり細粒砂（N R11）
（褐灰色（10YR4/1）シルトを縞状に10%含む。）
17．明褐色（7.5YR5/6）粗～細粒砂（N R11）
18．黒色（10YR2/1）粗～細粒砂混じりシルト
19．明褐色（7.5YR5/8）粗～細粒砂（径2～10mmの礫を含む。）

第4図　女布北遺跡第7次調査断ち割り1土層断面図(1/80)

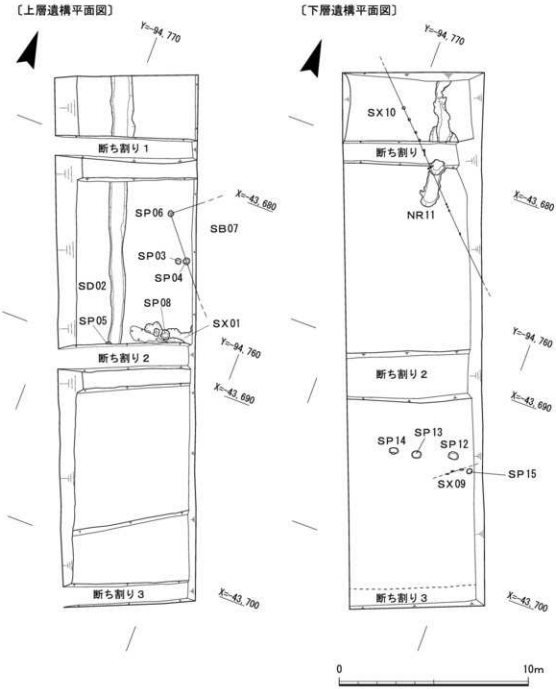


1．表土　2．盛り土　3．盛り土　4．攪乱
5．褐色（7.5YR5/1）粗～細粒砂混じりシルト（明褐色
（7.5YR5/6）シルトブロック10%、径2～10mmまで
の礫を含む）
6．灰褐色（7.5YR5/2）粗～細粒砂混じりシルト（明色
（7.5YR5/6）シルトを縞状に20%、径2～10mmまで
の礫を含む）
7．褐色（7.5YR5/1）粗～細粒砂混じりシルト
（黒褐色（7.5YR3/1）シルトブロック10%、明褐色
（7.5YR5/6）シルトブロック10%、径2～100mmまで
の礫を含む）
8．礫層（褐灰色（7.5YR5/2）粗粒砂～シルトが礫の間
に充填される）
9．灰褐色（7.5YR4/2）粗～細粒砂混じりシルト（明褐
色（7.5YR5/6）シルトブロック10%、径2～100mm
までの礫を含む）
10．灰褐色（7.5YR4/2）粗～細粒砂
11．灰褐色（7.5YR4/2）シルト混じり細粒砂
12．黒色（10YR2/1）粗～細粒砂混じりシルト
13．黒色（10YR2/1）シルト
14．褐灰色（10YR4/1）シルト混じり粗粒砂～細粒砂

第5図　女布北遺跡第7次調査断ち割り2土層断面図(1/80)

黒色シルト層の下層は褐灰色シルト混じり粗粒砂から細粒砂である。断ち割り1では標高20.7m付近で、断ち割り2では標高20.3m付近でそれぞれ確認した。高低差は0.4mを測る。堆積層に遺物は確認できなかったため、地山と考えられる。

このように、旧地形が北側から南側に向けて傾斜しており、旧地形に沿って黒色シルト層が堆積したために、調査区下層遺構面は高低差を伴う。



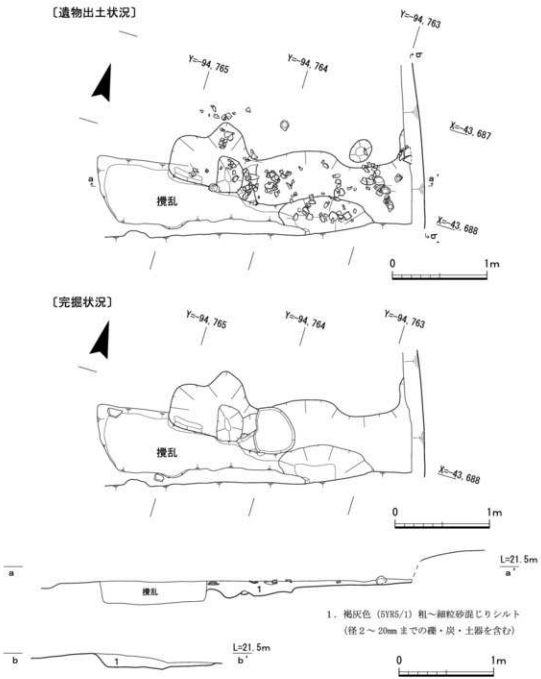
第６図　女布北遺跡第７次調査遺構配置図(1/200)

（３）検出遺構

①上層遺構面（第６図左）

上層遺構面では平安時代後期の掘立柱建物・柱穴・溝・土坑などを検出した。

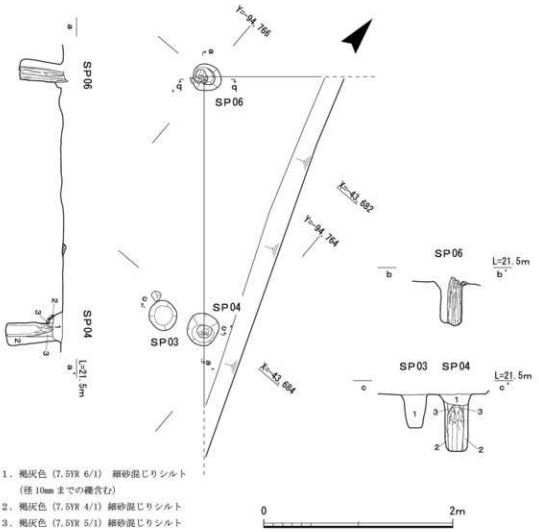
溝ＳＤ02（第６図左）　調査区北部から中央部にかけて検出した南北方向の素掘り溝である。検出長14.0m、幅0.6～0.9m、深さ0.1m前後を測る。溝の北側は調査区外に延びる。南側は、断ち割り２の南壁面では確認できなかったため、断ち割り２付近で途切れると考えられる。溝の埋土は、ブロック土混じりの褐灰色粗～細粒砂混じりシルトである。土師器片、須恵器杯身・杯蓋、



第７図　女布北遺跡第７次調査土坑ＳＸ01実測図(1/40)

黒色土器椀などが出土した。

土坑ＳＸ01（第７図）　調査区中央部東側で検出した土坑である。西側は後世の攪乱により削平され、東側は調査区外へ延びるため、正確な規模は不明である。平面は東西方向に長い不定形な楕円形を呈し、肩部はなだらかに傾斜する。検出長2.6m、検出幅0.9mを測る。底面は不整形で、深さ0.05～0.4mを測る。埋土は単層で炭とブロック土が混じるため、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は黒色土器椀・皿、土師器甕・皿、回転台土師器皿、須恵器、白磁椀、鉄釘などが出土した。



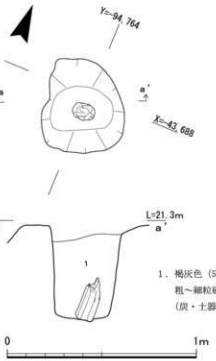
第８図　女布北遺跡第７次調査掘立柱建物ＳＢ07実測図(1/40)

柱穴ＳＰ05(第６図左)　調査区中央部西側で検出した柱穴である。平面円形を呈し、直径0.2m、深さ0.3mを測る。溝ＳＤ02と重複しており、溝ＳＤ02よりも新しい。建物を構成する他の柱穴は検出されなかった。

掘立柱建物ＳＢ07(第８図)　調査区中央部東側で検出した掘立柱建物で、柱穴ＳＰ04・06の２基を確認した。周辺の精査を行ったが、他の柱穴は検出されなかったため、調査区の東側と南側に柱穴の存在が想定される。ＳＰ06が建物北西隅の柱穴に当たり、建物は調査区の東側に展開すると考えられる。建物の主軸は北から40°西に振る。ＳＰ04とＳＰ06の柱間寸法は2.7mを測る。両柱穴には柱根が残存していた。ＳＰ04の掘形は平面円形を呈し、直径0.3m、深さ0.6mを測る。ＳＰ04出土柱根は、樹種同定と年代測定を実施した(付編１・２参照)。掘形埋土より黒色土器椀の破片が出土している。ＳＰ06の掘形は平面円形を呈し、直径0.3m、深さ0.45mを測る。

柱穴ＳＰ03(第８図)　柱穴ＳＰ04の西側で検出した。掘形は平面円形で、直径0.3m、深さ0.35mを測る。深さはＳＰ04より浅い。柱穴埋土は１層であるが、ＳＰ04と類似する。したがって、掘立柱建物ＳＢ07の造営もしくは建て替えの際に柱を付け替えた柱穴と考えられる。

柱穴ＳＰ08（第９図）　調査区中央部東側、土坑ＳＸ01の底面で検出した柱穴である。平面は不定形な楕円形を呈し、径0.4～0.5m、深さ0.5mを測る。柱根が残存しており、柱根は東側に傾いた状態で出土した。柱根は残存長0.2m、幅0.1mを測る。埋土はＳＸ01と同一であることから、建物は人為的に取り壊されたと考えられる。埋土より黒色土器椀の破片が出土した。トレンチ東側壁面で同一埋土の柱穴を検出したことから、建物北西隅の柱に当たる可能性が高く、建物本体は東側の調査区外に位置すると考えられる。掘立柱建物ＳＢ07とは柱筋が異なるため、別の建物であろう。



第９図　女布北遺跡第７次調査
柱穴ＳＰ08実測図(1/20)

②下層遺構面（第６図右）

下層遺構面では、古墳時代の柱穴・杭列・自然流路などを検出した。

柱穴ＳＰ12（第６図右）　調査区南側で検出した柱穴である。平面楕円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

柱穴ＳＰ13（第６図右）　調査区南側で検出した柱穴である。平面楕円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

柱穴ＳＰ14（第６図右）　調査区南側で検出した柱穴である。平面楕円形を呈し、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかったが、柱穴内から0.2m前後の礫を検出した。

柱穴ＳＰ12・13・14は直線に並ぶが、建物を構成する他の柱穴は検出されなかったため、建物として復原することはできなかった。

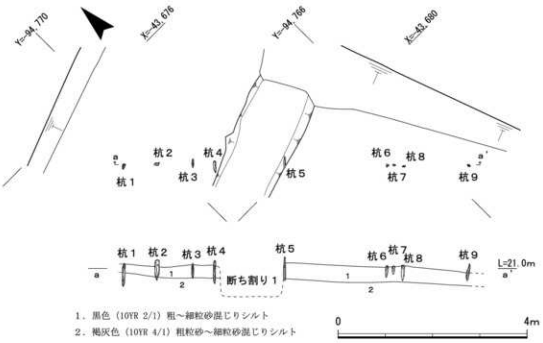
柱穴ＳＰ15（第６図右）　調査区南側西部で検出した。平面円形を呈し、直径0.2m、深さ0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

杭列ＳＸ09（第６図右）　調査区南側で一直線に並んだ杭を３本検出し、杭列と思われる。検出長は1.0mを測る。杭列の主軸は北に対して51°東に振る。掘形はなく、打ち込まれたと考えられる。杭３本が出土したが、杭の残存状態は悪く、腐植のため木材が痩せ細っている。

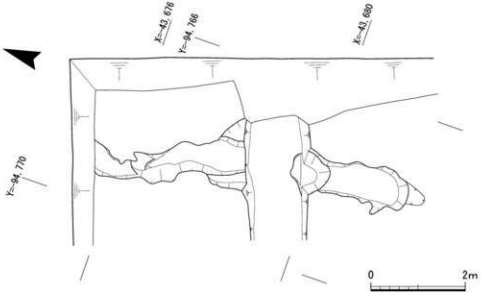
杭列ＳＸ10（第10図）　調査区北側で一直線に並んだ杭を９本検出し、杭列と思われる。検出長7.2mを測る。杭列の主軸は北に対して46°西に振る。杭間の距離は0.14～2.16mでばらつきがある。全ての杭は直立もしくは斜めに傾いており、打ち込まれた状態で検出したが、いずれの杭も上部を欠損している。

自然流路ＮＲ11（第11図）　調査区北側で検出した南北方向の自然流路である。検出長6.6m、

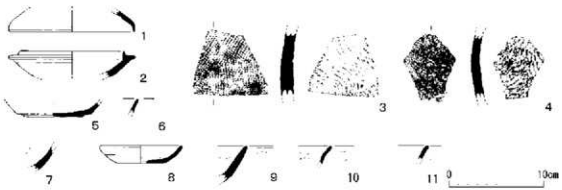
幅1.4～1.5m、深さ0.1m～0.3mを測る。埋土は細粒砂～礫で充填されている。断ち割り１の南壁面の土層観察では、自然流路の埋土上面は凸状を呈する（第４図）。埋土は礫が上層に堆積し、細粒砂が下層に堆積する逆級化の堆積状況となっている。断面と底部の形状は不定形であり、自然流路東肩は抉られている。埋土最下層より古式土師器が出土した。



第10図　女布北遺跡第７次調査杭列ＳＸ10実測図(1/80)



第11図　女布北遺跡第７次調査自然流路ＮＲ11実測図(1/80)



第12図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図１(1/4)　溝ＳＤ02

（４）出土遺物

①土器・鉄製品

溝ＳＤ02（第12図１～６）　１～４は須恵器である。１は杯蓋である。回転ナデによって成形する。２は杯身である。胎土は粗く、焼成は軟質で内外面は黒色を呈する。回転ナデによって成形する。３・４は甕体部の破片である。内外面にはタタキ成形の工具痕を残す。遺物包含層から須恵器が多数出土しており、遺構廃絶時の混入品と考えられる。５・６は黒色土器である。内面を黒色処理する。５は椀の底部である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。６は椀の口縁部である。口縁部内外面にミガキを施す。ＳＤ02の時期を示す遺物であると考えられる。

柱穴ＳＰ04（第12図７）　７は黒色土器椀である。内面を黒色処理する。体部の一部のみ残存する。内面にミガキを施す。

柱穴ＳＰ08（第12図８～11）　８は回転台土師器の皿である。底部外面は摩滅が著しいが、糸切り痕が残る。９～11は黒色土器椀である。いずれも口縁部の一部のみ残存する。内面を黒色処理し、内外面にミガキを施す。９は口縁端部を丸くおさめる。器壁は厚い。10・11の口縁部は外反し、器壁は薄い。

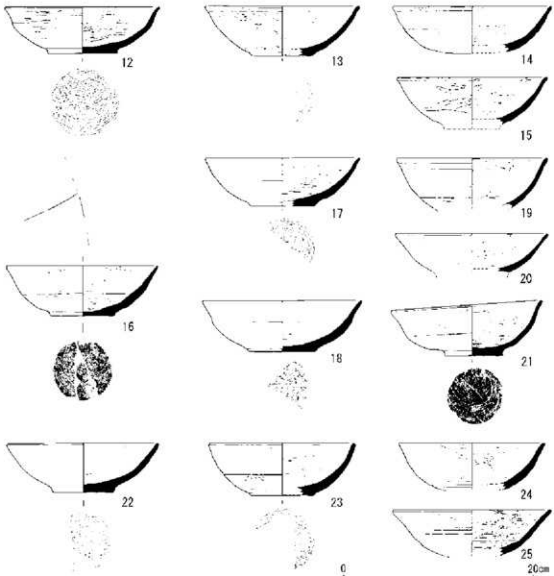
土坑ＳＸ01（第13図12～第14図61）

出土遺物の概要　土坑ＳＸ01からは土師器・須恵器・黒色土器、輸入陶磁器、鉄製品などが出土した。今回の調査では最も多数の遺物が出土した。

12～39は黒色土器の椀である。高台を持ち、内面のみ黒色処理を行う。回転台で成形し、底部外面には糸切り痕を残す。内外面にミガキを施す。ミガキは内外面に斜交状に施すが、口縁部内外面は直線状に施す。12～15は口縁部を外反させ、端部を丸くおさめる。12は底部外面には「×」字状の線刻を施す。17～21も口縁部を外反させる。体部には緩やかな稜を作り出す。体部は摩滅するが、ミガキを施す。16は内面見込み部分に「×」字状の針描きを施す。21は杯部が大きく歪む。22～25は口縁部を丸くおさめる。器壁は厚く作り出す。

26～39は底部の高台のみ残存する。26～32は高台部分が高く、33～39は高台部分が低い。27・36には底部外面に「×」字状の線刻を施す。38は内面見込みに「×」字状の針描きを施す。

40～42は黒色土器の皿である。内外面に黒色処理を行い、ミガキを施す。いずれも口縁端部は



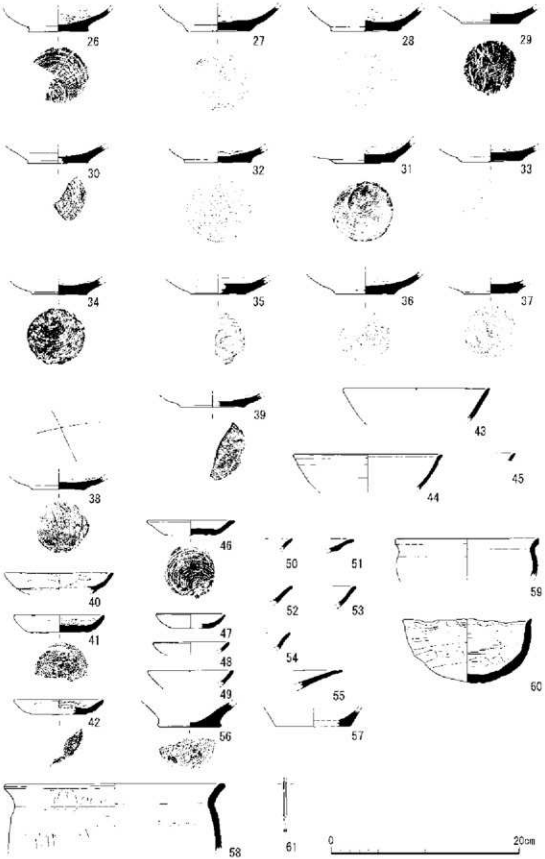
第13図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図２(1/4)　土坑ＳＸ01

丸くおさめる。40は底部に高台を持つ。口縁部から端部の器壁は薄く作り出す。41・42は外面底部に糸切り痕が残る。口縁部から底部の器壁を厚く作り出す。

43は須恵器の杯口縁部である。口縁部内外面に重ね焼き痕の黒斑を有する。

44・45は輸入陶磁器の白磁椀である。口縁部を外反させる。

46～60は土師器である。46は回転台土師器の皿である。ほぼ完存する。口縁部から体部内外面は回転ナデ、底部内面にはナデを施す。底部外面は糸切り痕が残る。口縁部から体部内面の一部に黒班を有する。47～54は皿である。胎土は精良であり、47～53は褐色を呈するが、54のみ白色を呈する。口縁部は47～49は丸くおさめるが、50～54は強いヨコナデにより外反させる。55は盤である。口縁部内面に沈線を１条施す。56は杯もしくは皿の底部である。底部外面には糸切り痕が残る。57は甕の底部である。平底を呈する。58は甕である。口縁端部はナデにより作り出す。内面は口縁部から体部にかけて横方向のハケメを施す。外面の頸部にはユビオサエの痕を残し、



第14図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図３(1/4)　土坑ＳＸ01

体部には縦方向のハケメを施す。外面の口縁部から体部にかけて黒斑を有する。59は鉢である。内面は黒色を呈する。60は鉢である。全体的に器壁は厚いが、口縁部のみ薄く作り出す。口縁部は外反させる。内外面にケズリ調整後にナデを施す。内面立ち上がり部にはユビオサエの痕を残す。

61は鉄製品である。両端部を欠損しているが、釘と考えられる。

出土土器の組成について 土坑ＳＸ01出土土器の破片数を集計した結果を付表３に示す。ＳＸ01出土土器の総破片数は671点である。内訳としては、黒色土器が468点あり、そのうち椀は461点、皿は７点である。皿の比率が圧倒的に少ないことが指摘できる。土師器は器種不明のものも含めて184点あり、そのうち回転台土師器皿は７点、台付椀は１点である。土師器皿は胎土が褐色を呈するものが43点、白色を呈するものが３点である。胎土が白色を呈する土師器皿は搬入品と考えられる。また、須恵器は杯１点、輸入陶磁器の出土は白磁椀２点のみである。

以上のように、土坑ＳＸ01出土土器の組成は、椀皿類の比率が卓越している。なかでも丹後型黒色土器椀が大多数を占める組成となっているが、わずかに土師器皿、白磁椀、須恵器杯という搬入品も存在する。

黒色土器椀の法量について 上述のように、土坑ＳＸ01出土土器の組成は、丹後型黒色土器椀が大多数を占めることを確認した。黒色土器椀の口径と器高の法量が判明する個体を計測したところ、口径は15.2～16.6cm、器高は5.1～6.2cmの範囲におさまる。(注1) ＳＸ01出土黒色土器椀の法量を丹後地域の黒色土器椀の法量と比較すると、筒井崇史による丹後２群の範囲と一致する。丹後２群は11世紀末～12世紀初頭の年代と考えられ、同時期の資料は大宮町左坂Ｂ９号横穴があげられる。(注2) さらに、ＳＸ01出土の白磁椀は11世紀後半の年代と考えられ、年代的にも一致する。(注3)

また、伊野近富による丹後２期以降は回転台土師器が消滅し、手づくね成形の土師器が生産されるため、(注4) ＳＸ01出土回転台土師器皿は丹後地域における最末期段階の土師器皿と考えられる。

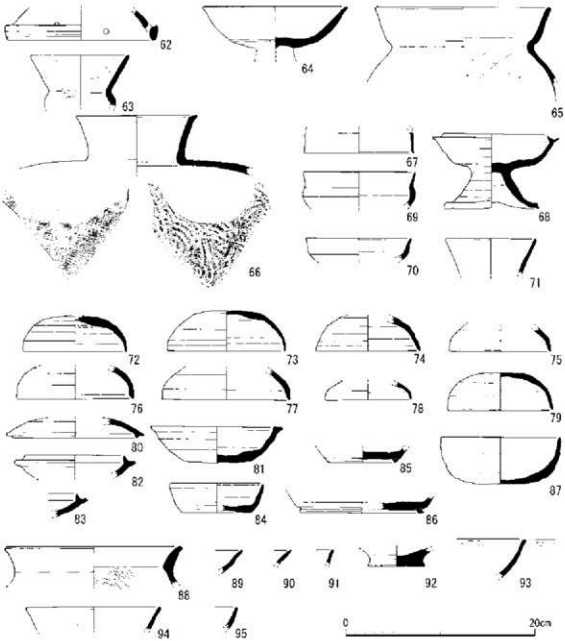
遺物包含層（第15図） 遺物包含層から多数の遺物が出土した。遺構面として確認した時期以外の遺物も出土しており、代表的な遺物を報告する。

62は弥生土器の高杯脚部である。１か所に円形の穿孔を施す。端部外面には凹線文を施す。

63～65は古式土師器である。63は小形丸底壺である。内外面にミガキを施す。64は高杯の杯部である。内外面はハケメ調整後にナデを施す。杯口縁部と杯底部の境に稜を作り出す。杯底部外面には脚部との接合痕跡を残す。65は壺である。外面は摩調査研究減のため調整は不明であるが、

付表3　女布北遺跡土坑ＳＸ01出土土器破片集計表

種類	黒色土器		土師器								須恵器	輸入陶磁器	古代須恵器	総計
器種	椀	皿	回転台土師器		皿		盤	甕	鉢	不明	杯	白磁		
			皿	台付椀	褐色	白色								
各数量	461	7	7	1	43	3	1	19	84	26	1	2	16	671
小計	468		184								1	2	16	



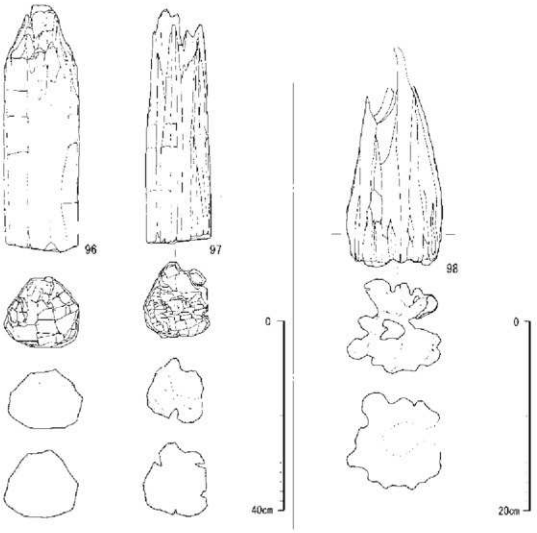
第15図　女布北遺跡第７次調査出土遺物実測図４(1/4)　遺物包含層

内面にはケズリを施す。

66～87は須恵器である。66は甕である。調査区上層南側を検出中に礫層から出土した。口縁端部は面取りして平坦に仕上げる。体部内外面にはタタキ成形の工具痕を残す。67は杯蓋である。外面に稜を持つ。68は有蓋高杯である。ほぼ完存する。調査区上層北東隅の砂層で出土した。全体を回転ナデで成形するが、杯底部外面は回転ヘラケズリを施す。胎土は粗く、長石や石英の砂粒が目立つ。焼成時の焼け歪みが認められる。69・70は無蓋高杯の杯部である。71は平瓶の口縁部である。72～80は杯蓋である。72の天井部はヘラ切り後にナデを施す。73は調査区上層北東隅の砂層にて68とともに出土した。ほぼ完存する。焼成は軟質で、灰白色を呈する。全体を回転ナデによって成形し、天井部外面に回転ヘラケズリを、内面に不定方向のナデを施す。74は外面に

回転ナデの痕跡が明瞭に残る。天井部内面に不定方向のナデを施す。79は焼成が軟質で、浅黄橙色を呈する。内外面ともに摩滅するが、全体を回転ナデによって成形し、天井部外面はヘラケズリを施す。80は口縁部にかえりが付く蓋である。天井部に回転ヘラケズリを施す。81～84は杯身である。81は口縁部を欠損する。器壁を全体的に厚く作り出す。焼成は軟質で、灰白色を呈する。84は高台を持たない平底の杯である。外面立ち上がりに回転ヘラケズリを施す。口縁部内面を面取りし、端部を尖らせる。底部外面はヘラ切り後未調整である。底部内面にナデを施す。85・86は貼り付け高台を持つ杯である。底部はヘラ切り後未調整である。87は杯である。焼成が軟質で、浅黄橙色を呈する。底部外面はヘラ切り後にナデを施す。内面は摩滅している。

88～92は土師器である。88は甕である。口縁部のみ残存する。器壁は口縁部から頸部にかけて分厚く、体部は薄く作る。外面は摩滅しているが、わずかにハケメが残る。体部内面にケズリを施す。89～91は皿である。口縁部の一部のみ残存する。胎土は精良であり、灰白色を呈する。口縁部は強いヨコナデで整形する。92は杯もしくは皿の高台である。内外面をヨコナデにより成形する。底部は摩滅しているが、糸切り痕がわずかに残る。93は黒色土器椀である。内面を黒色処



第16図　女布北遺跡第７次調査遺物実測図５(1/8・1/4)　柱穴ＳＰ04・06・08

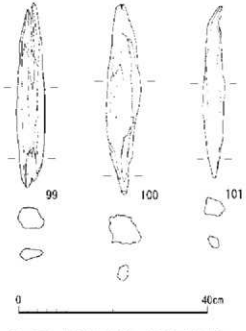
理する。口縁部を外反させる。口縁部内外面に横方向のミガキを施し、内面には斜め方向のミガキを施す。94は輸入陶磁器の青磁椀である。外面に連弁を作り出す。95は輸入陶磁器の白磁椀である。

②木製品

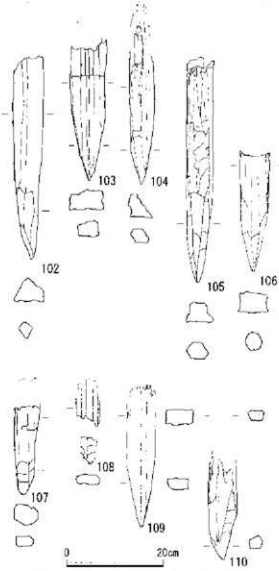
掘立柱建物ＳＢ07（第16図左）　96は柱穴ＳＰ04から出土した柱根である。上方は腐植のため劣化して先細りとなっている。木目の詰まったクリの芯去材である。側面全面を加工しており、不整形な八角形を呈する。残存長52.0cm、対角の距離は13.6～14.6cmを測る。側面にはわずかに加工痕を残す。小口面は平滑に整えられていない。多方向から粗く加工されており、加工痕には明瞭な段差を残す。

97は柱穴ＳＰ06から出土した柱根である。上方は腐植のため劣化して先細り、内部は空洞となり、側面には木目に沿った亀裂が入る。木目の粗い芯去材である。側面全面を加工しており、不整形な多角形を作り出すが劣化のため、正確な形態を復元することは難しい。残存長49.5cm、対角の距離は13.2～15.2cmを測る。側面にはわずかに加工痕を残す。小口面は平滑に整えられておらず、多方向から粗く加工されており、加工痕には明瞭な段差を残す。

柱穴ＳＰ08（第16図右）　98は柱穴ＳＰ08から出土した柱根である。全体が腐植により著しく劣化している。内部は空洞となり、側面



第17図　女布北遺跡第７次調査出土遺物
実測図６(1/8)　杭列ＳＸ09



第18図　女布北遺跡第７次調査出土遺物
実測図７(1/8)　杭列ＳＸ10

には木目に沿った亀裂が入る。木目の粗い芯持材である。残存長23.2cm、残存幅10.2cmを測る。

杭列ＳＸ09（第17図）　99～101は杭である。いずれも全体が腐植により著しく劣化している。芯去材を用いる。残存長18.3～20.2cm、残存幅2.3～3.4cmを測る。

杭列ＳＸ10（第18図）　102～110は杭である。いずれも上端部を欠損するが、先端部分は良好に残存する。全て木目の粗い芯去材を用いる。木肌は割肌を呈し、先端部分には加工痕が残る。分割材を用い、先端を加工して尖らせて製作した杭である。残存長18.5～58.2cm、残存幅5.0～6.1cmを測る。

（5）小結

今回の調査では、上層遺構面において平安時代後期の掘立柱建物２棟と土坑１基、溝１条を検出した。これまで女布北遺跡では平安時代後半の遺構・遺物は検出されておらず、本調査で検出した事例が初めてである。

掘立柱建物は２棟検出したが、調査区東側に延びているため、正確な規模は不明である。調査区の東側が集落の中心地と考えられる。調査地東側に位置する女布北遺跡第３次調査では、平安時代の掘立柱建物１棟と土器溜まり１基が検出されている。（ほう）土器溜まり出土遺物は、今回検出した遺構群よりも古い９～10世紀の遺物であるため、平安時代後期になると集落が西へ移動したと想定される。また、同時期の溝ＳＤ02は集落西側を区画する区画溝の可能性も考えられる。

土坑ＳＸ01は、掘立柱建物の柱穴である柱穴ＳＰ08の廃絶に伴う廃棄土坑と考えられる。主に丹後型黒色土器が数多く出土した。これらの黒色土器は在地産であり、当地で消費されたと考えられることから、活発な集落の様相が想定される。また、ＳＸ01からは輸入陶磁器である白磁をはじめ、白色の土師器皿などの搬入品が出土しており、遺物包含層からは白磁と龍泉窯青磁が出土していることから、女布北遺跡を含む日本海から佐濃谷川流域における当時の交易流通が想定される。

下層遺構面では、古墳時代前期の柱穴３基、杭列２条と自然流路１条を検出した。調査地東側の女布北遺跡第３次調査では、弥生時代後期末～古墳時代前期の竪穴建物が３基検出されており、当時の集落の中心域と考えられる。今回の調査では竪穴建物は検出されなかったが、杭列２条と柱穴３基を検出したことから、当時の集落の活動範囲であったと考えられる。しかし、一方で、同時期の自然流路が存在することから、居住するには適当な場所ではなかった可能性も考えられ、当時の集落の縁辺部にあたると想定される。

上層遺構面からは、飛鳥時代や奈良時代の須恵器杯・蓋が出土している。また、礫層からは古墳時代中期の須恵器甕も出土している。今回検出はされなかったが、周辺には古墳時代中期から奈良時代の遺構が存在すると考えられる。

小規模な調査のため、遺構の全容は不明であるが、平安時代後期の多数の黒色土器の出土と同じ方位を指向する掘立柱建物が２棟以上営まれたことは、当地域の歴史を考察する上で特筆される成果と考えられる。今後、当該地域や周辺の調査研究の進展により、女布地域の歴史がさらに解明されることを期待する。　（福山博章）

2）女布遺跡第３次調査

（１）調査の概要

今回の調査は、農業用水路の拡幅部分のみを対象として実施した。したがって、対象地は広範囲にわたるが、ほとんどの調査地は狭小である。

調査対象地内に１～13トレンチを設定して調査を行った（第19図）。このうち、明確な遺構を検出したのは、扇状地の上部に設定した１～３トレンチの３か所である。これらのトレンチでは、弥生時代後期の竪穴建物、弥生時代～中世のピット、中世墓とみられる土坑、時期不明の溝などを検出した。４～13トレンチでは、湿地状の水性堆積とみられるシルト層や粘質土層、あるいは佐濃谷川の氾濫原であったことを示す礫層などを確認したのみで、顕著な遺構は検出しなかった（第20図）。

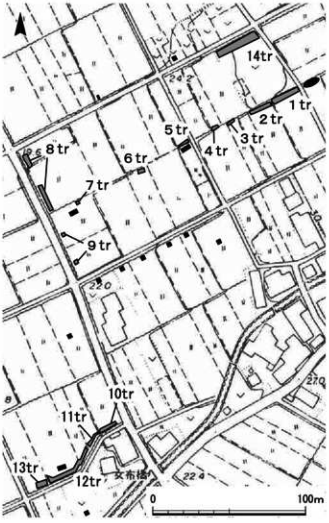
また、当調査研究センターの調査地の北側で京都府教育委員会が実施した調査で遺構が確認されたため、協議の結果、当調査研究センターが引き続き調査を行うこととなり、14トレンチとして調査を実施した。

（２）検出遺構

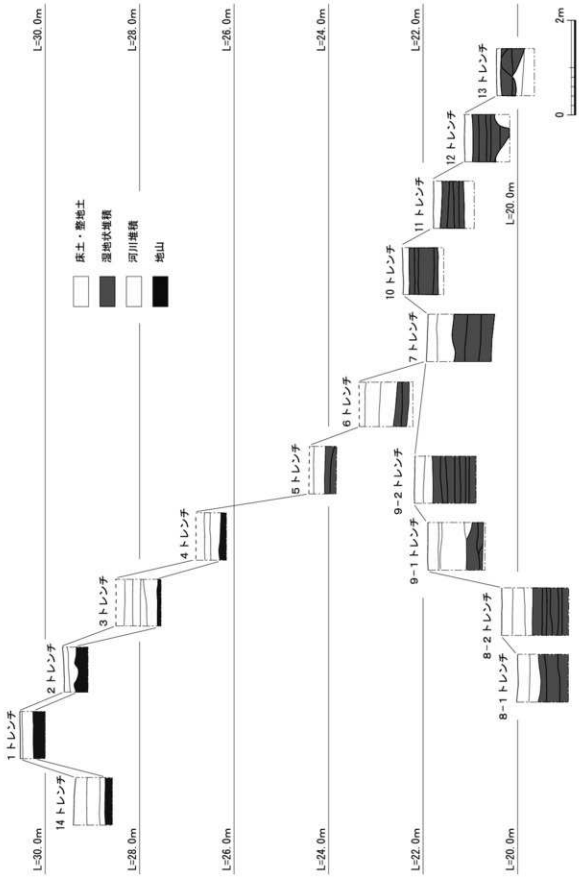
以下、トレンチごとに検出遺構等の内容を述べる。

①１トレンチ（第21図）　調査対象地内において、遺跡が立地する扇状地の最高所に設定したトレンチである。基本的な層序は、厚さ0.15mの現耕作土の下に厚さ0.2～0.3mの床土がある。その下層は東半部では地山となる。西半部では旧耕作土とみられるシルト層があり、その下層が地山となる。遺構は、地山面で竪穴建物やピット、溝などを検出した。

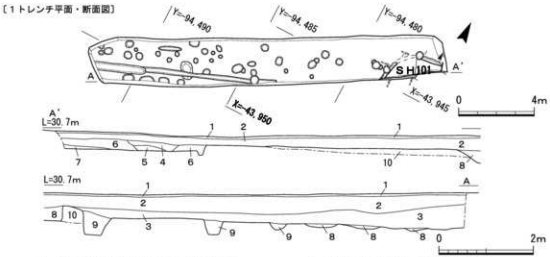
竪穴建物ＳＨ101（第22図）　調査区の東側で検出した。調査範囲が限られており、全容の検出には至らなかった。したがって規模などの詳細は不明である。検出した深さは0.2m前後である。内側に幅0.12m・深さ0.1mの周壁溝が巡る。柱穴は検出しなかった。調査当初に層序確認のための断ち割りで部分的に削平してしまったが、外形がやや



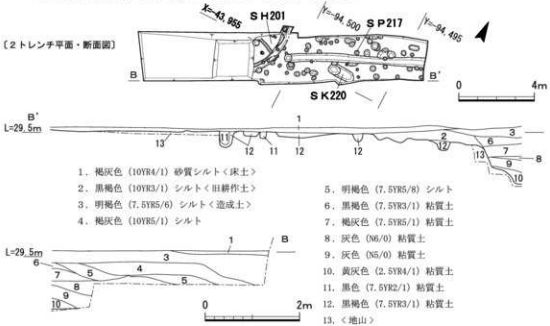
第19図　女布遺跡第３次調査調査区配置図（1/2,500）



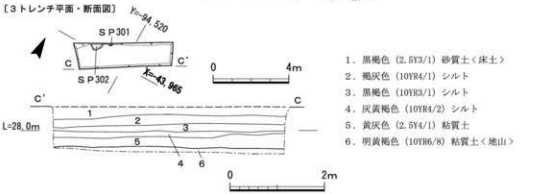
第20図　女布遺跡第3次調査土層柱状図(1/80)



1．褐灰色（10YR4/1）砂質シルト＜現耕作土＞
2．黄灰色（2.5Y5/1）シルト（地山混じり）＜床土＞
3．黒褐色（2.5Y3/1）シルト（旧耕作土）
4．黒褐色（5YR3/1）シルト（地山混じり）＜SH101＞
5．黒褐色（7.5YR3/1）シルト（焼土・地山混じり）＜SH101＞
6．黒褐色（7.5YR3/2）シルト＜SH101＞
7．暗褐色（7.5YR3/3）シルト＜SH101＞
8．黒褐色（2.5Y3/1）シルト
9．黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
10．＜地山＞



1．褐灰色（10YR4/1）砂質シルト＜床土＞
2．黒褐色（10YR3/1）シルト＜旧耕作土＞
3．明褐色（7.5YR5/6）シルト＜造成土＞
4．褐灰色（10YR5/1）シルト
5．明褐色（7.5YR5/8）シルト
6．黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
7．褐灰色（7.5YR5/1）粘質土
8．灰色（N6/0）粘質土
9．灰色（N5/0）粘質土
10．黄灰色（2.5YR4/1）粘質土
11．黒色（7.5YR2/1）粘質土
12．黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
13．＜地山＞

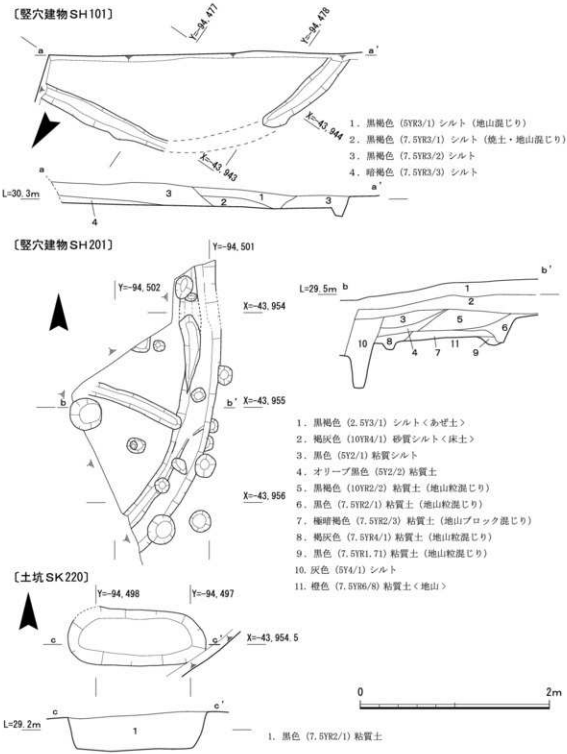


1．黒褐色（2.5Y3/1）砂質土＜床土＞
2．褐灰色（10YR4/1）シルト
3．黒褐色（10YR3/1）シルト
4．灰黄褐色（10YR4/2）シルト
5．黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
6．明黄褐色（10YR6/8）粘質土＜地山＞

第21図　女布遺跡第3次調査1～3トレンチ実測図(1/200・1/80)

弧状を呈しており、円形の可能性がある。弥生時代後期の遺物が出土しており、その時期の遺構とみられる。

②**２トレンチ**(第21図)　１トレンチの西側に隣接する水田に設定したトレンチである。基本的な層序は、厚さ0.15mの現耕作土の下に厚さ0.1m前後の床土がある。東部では、その下層が地山



第22図　女布遺跡第３次調査竪穴建物ＳＨ101・201実測図(1/40)

となる。遺構は、この地山面で検出した。中央部には床土下に厚さ0.3m前後の旧耕作土が残る部分がある。西半部では地山面上で約0.8mの段差を持つ旧地形がみられる。過去の水田造成により削平されたものとみられる。したがって、西半部の地山面には遺構は残存していなかった。現水田造成時に埋め立てられた造成土が堆積する。竪穴建物や土坑、ピット、溝などを検出した。

竪穴建物ＳＨ201（第22図）　調査区の西側で検出した。１トレンチで検出した竪穴建物ＳＨ101と同様、調査範囲が限られており、全容の検出には至らなかった。したがって規模などの詳細は不明である。平面形は明確でないが、外形がやや弧状を呈しており、円形の可能性がある。弥生時代後期の遺物が出土しており、その時期の遺構とみられる。床面は２面確認し、周壁溝も外側に掘り直した痕跡があることから、建て替えが行われたとみられる。床面には、周壁溝から建物中央に向って延びる溝をもつ。

土坑ＳＫ220（第22図）　調査区の中央南側で検出した・長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.35mを測り、平面形は長楕円形状を呈する。中国製青磁椀片などが出土した。性格は不明であるが、中世の墓の可能性も考えられる。

③３トレンチ（第21図）　基本的な層序は、厚さ0.15mの現耕作土の下に厚さ0.15mの床土があり、その下層には厚さ0.3～0.4mのシルト層が３層みられる。その下層が地山の粘質土層である。地山面からピット２基を検出したが、出土遺物がなく、時期等は不明である。

④４トレンチ　基本的な層序は、厚さ0.15mの現耕作土の下に厚さ0.15mの床土がある。その下層は、旧耕作土および床土とみられるシルト層があり、その下層が地山となる。地山は、花崗岩の風化したバイラン土がみられる。遺構は検出されなかった。

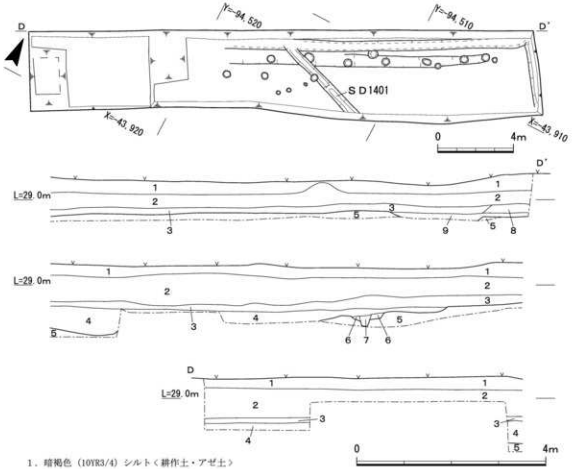
⑤５トレンチ　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に湿地状の水性堆積と考えられる砂質土やシルト層が堆積する。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。

⑥６トレンチ　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に湿地状の水性堆積とみられるシルトや砂質土が堆積する。確認した最下層は河川による水性堆積とみられる礫の混じる細砂層である。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。

⑦７トレンチ　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に厚さ0.4mの現水田造成時の整地土とみられる粗砂層がある。その下層には湿地状の水性堆積とみられる砂質土やシルトが堆積する。確認した最下層は河川による水性堆積とみられる礫の混じる粗砂層である。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。

⑧８トレンチ　北側の一段低い水田部に設定した８－１トレンチでは、床土の砂質土層の下層に沼状の水性堆積とみられるシルトや粘質土がほぼ水平堆積する。北側の水田部に設定した８－２トレンチでは、床土の砂質土の下層は、シルトと砂が水平堆積する。８－１トレンチと同じく湿地状の水性堆積がみられる。シルト層中には弥生時代後期の土器を包含する。遺構は検出されなかったので、２次堆積とみられる。

⑨９トレンチ　９－１トレンチでは、床土とみられる砂質土層の下層は、現水田造成時の整地土とみられる粗砂層がある。その下層は、湿地状の水性堆積とみられるシルトや河川の水性堆積



1．暗褐色（10YR3/4）シルト〈耕作土・アゼ土〉
2．明褐色（7.5YR5/8）粘質土〈整地土〉
3．灰色（5Y4/1）シルト〈整地土〉
4．褐灰色（10YR4/1）粘質土〈旧耕作〉
5．黒褐色（10YR3/1）砂質シルト〈耕作溝埋土・地山〉
6．黒褐色（10YR2/2）シルト
7．黒褐色（5YR1.7/1）粘質土〈SD1401〉
8．褐色（7.5YR4/6）粘質土
9．黄灰色（2.5Y4/1）シルト

第23図　女布遺跡第３次調査14トレンチ実測図(1/200・1/80)

層とみられる粗砂層がある。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。北側の水田部に設定した９－２トレンチでは、床土とみられる砂質土の下層は、シルトと砂質土が水平堆積する。湿地状の水性堆積とみられる。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。

⑩**10トレンチ**　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に湿地状の水性堆積とみられるシルトや砂が堆積する。なお、黄灰色シルト層は弥生土器片を包含していた。遺構は存在せず、２次堆積とみられる。安定した地山は確認できなかった。

⑪**11トレンチ**　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に湿地状の水性堆積とみられるシルトや砂が堆積する。確認した最下層は河川による水性堆積とみられる礫の混じる粗砂層である。粗砂層上の褐灰色シルト層には少量の遺物を含む。安定した地山は確認できなかった。

⑫**12トレンチ**　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に水性堆積とみられる砂質シルトや砂が堆積する。確認した最下層は河川による水性堆積とみられる砂礫層である。佐濃谷川の氾濫原もしくは河原であったことを示すものであろう。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。

⑬**13トレンチ**　基本的な層序は、現耕作土・床土の下層に水性堆積とみられるシルトや礫が堆積する。確認した最下層は拳大から掌大の礫層である。佐濃谷川の氾濫原もしくは河原であったことを示すものであろう。安定した地山は確認できず、遺構も存在しなかった。

⑭**14トレンチ**（第23図）　1・2トレンチの北側に隣接する水田の北端部に設定したトレンチである。基本的な層序は、現耕作土の下に厚さ0.25mの明褐色粘質土及び厚さ0.1mの灰色シルト層からなる整地層がある。これらの層が床土で、その下層が地山である。遺構は、この地山面で検出した。トレンチ東側では旧耕作地の段差とみられる0.45mの地山の落差がみられる。

このトレンチでは、耕作に伴うとみられる溝やピット、現地割りに斜交する溝等を検出した。溝ＳＤ1401は、やや傾きはあるが東西方向に延びる。検出長2.2m、幅0.2m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形を呈する。出土遺物がなく、時期等は不明であるが、耕作溝や作物栽培のための床掘とみられる溝に切られており、現地割と方向が異なることから、古い遺構と考えられる。

（3）出土遺物

今回の調査では、整理箱3箱の遺物が出土した（第24図）。量的には多くないが、弥生土器が多くを占める。また、古墳時代から中世にかけての土器、陶磁器が少量ある。このほか、石製品もある。法量等の詳細については、観察表を参照されたい。

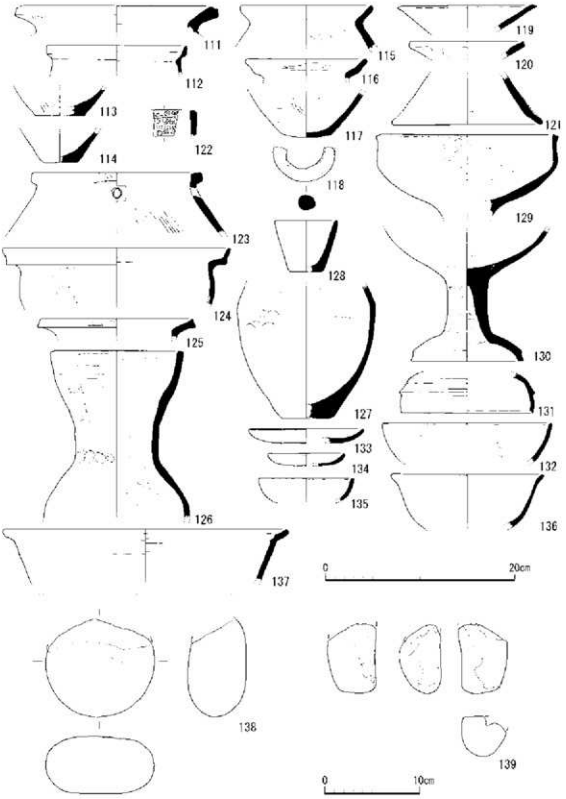
111は弥生土器甕の口縁部である。外面端部にユビオサエ状のキザミがある。弥生時代後期のものとみられる。1トレンチのピットＳＰ115から出土した。

112は弥生土器甕の口縁部で、端部が受け口状に立ち上がる。弥生時代後期のものとみられる。1トレンチの竪穴建物ＳＨ101から出土した。

113～122は2トレンチ竪穴建物ＳＨ201から出土した。113は弥生土器甕の底部である。外面はハケメ、内面はケズリ調整される。114は弥生土器甕の底部である。外面はハケメ、内面はケズリ調整される。115は弥生土器甕の上部である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は丸く終わる。外面肩部から内面口縁部にかけてナデ調整、内面にはユビオサエ痕跡が残る。116は弥生土器甕の口縁部である。口縁部は二重口縁状に屈曲する。ナデ調整とハケメ調整がみられる。117は弥生土器甕の底部である。外面ハケメ調整、内面ケズリ調整である。118は弥生土器壺の把手である。半円形で断面は丸い。壺の肩部に横方向に付けられていたものとみられる。119は弥生土器高杯の杯部または器台とみられる。内外面ともハケメ調整である。120は弥生土器の口縁部である。甕もしくは壺に伴うものとみられる。内外面ともハケメ調整である。121は高杯の脚部とみられる。端部付近がやや肥厚する。摩滅のため、調整は不明である。122は竹管文などのスタンプ文で装飾された土器片である。外面はミガキ調整される。小片のため器種は不明であるが、台付壺の肩部の可能性も考えられる。ＳＨ201出土の土器は、相対的に弥生時代後期後葉のものとみられる。

123は弥生土器短頸壺の上部である。頸部に円形の穿孔がある。口縁端部は四角状である。9－2トレンチから出土した。弥生時代中期のものとみられる。

124～130は8－2トレンチの水性堆積とみられるシルト層から出土した。124は弥生土器台付



第24図　女布遺跡第３次調査出土遺物実測図(1/4)

甕である。口縁部が受け口状に立ち上がり、外面に擬凹線文を施す。体部外面はミガキ調整、内面はケズリ調整である。125は弥生土器壺ないしは甕の口縁部である。口縁端部は面を持ち、ハケメ調整する。126は弥生土器長頸壺の上半部である。鼓状の形態である。外面はハケメ後ナデ調整で、口縁部のハケメは横方向である。内面は、口縁部が横方向のハケメ後ナデ調整される。胴部内面はヘラケズリされる。127は弥生土器甕の胴部である。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリされる。128はコップ形の弥生土器鉢である。小形のもので、平担な底部から口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。調整は摩滅のため不明である。129は弥生土器高杯の杯部である。杯底部は湾曲気味に丸みをもち、口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。外面はハケメ調整後ミガキ調整、内面は口縁部が横方向のハケメ調整、杯底部がケズリ調整される。130は弥生土器高杯である。杯部は湾曲気味に立ち上がる。脚部は円筒状の脚柱部に、むくり気味の脚部が付く。脚端部は屈曲して面を持つ。調整は、外面では、杯部がナデ後ミガキ調整、脚柱がミガキ調整、脚端部が横方向のナデ調整である。杯部内面はケズリ後ナデ調整である。８－２トレンチ出土の弥生土器は、後期中葉頃のものとみられる。

131は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は鈍くなる。口縁端部に段を持つ。陶邑編年のＭＴ15並行期のものとみられる。２トレンチのピットＳＰ217から出土した。

132は黒色土器椀で内面にミガキがある。内面のみに炭素を吸着させる黒色土器Ａ類である。12世紀頃のものか。２トレンチのピットＳＰ209から出土した。

133・134は土師器皿である。平担な底部から口縁部が湾曲して低く立ち上がる。13世紀頃のものか。133は２トレンチのピットＳＰ201、134はピットＳＰ231出土である。

135は土師器皿で、口縁部は湾曲して立ち上がる。在地系の土師器とみられ、年代は不明であるが、134と同じくピットＳＰ231から出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

136は中国製青磁椀で、口縁部が外反する。15世紀頃のものとみられる。２トレンチの土坑ＳＫ220から出土した。

137は古瀬戸鉢である。灰釉を施す。口縁部に稜を持つ。15世紀頃のものであろう。１トレンチの耕土から出土した。

138は敲石もしくは擂石とみられるもので、扁平な球形を呈する。花崗岩製である。５トレンチの耕土から出土した。

139は軽石である。２トレンチの竪穴建物ＳＨ201から出土した。顕著な加工痕はなく、材質的に使用痕も不明瞭であり、用途は不明であるが、何らかの研磨に使用したとも考えられる。

（４）小結

女布遺跡では、これまで範囲確認調査などが行われているが、具体的な遺跡の様相は不明であった。今回の調査では、弥生時代後期の竪穴建物や弥生時代～中世のピット、中世墓と考えられる土坑などを検出した。これまで明確でなかった遺跡の様相の一端を明らかにすることができた。

今回の調査では、標高30m前後から20m前後までの比高差10mの範囲を対象とした。このうち、遺構を検出し、安定した地山が確認できたのは、標高30m前後から27m前後の範囲である。具体

的には１～４トレンチ、14トレンチである。これよりも標高の低いトレンチでは、水性堆積とみられる層序を確認したのみで、安定した地山は確認できなかった。これは、女布遺跡の範囲を考える上で示唆的である。

２トレンチの竪穴建物ＳＢ201から軽石が出土した。丹後の遺跡では、京丹後市弥栄町の遠處遺跡からも出土している。女布遺跡も遠處遺跡も海浜部からはやや離れた内陸部に位置するが、両遺跡からほど近い、久美浜町小天橋の外海に面した浜や、丹後町間人付近の浜にも、軽石が漂着することを確認している。出土した軽石は、このような海浜部で採集されたれたものとみられる。用途は不明であるが、興味深い遺物である。（引原茂治）

３）女布遺跡第６次調査

（１）調査の概要

第６次調査では、昨年度に引き続き、農業用水路の設置に伴う掘削範囲の調査を実施した（第25図）。調査対象地は、女布遺跡の遺跡範囲北東部から中央付近にあたる。この付近の標高は25.8～33.2mを測り、西側を流れる佐濃谷川に向かって緩やかに傾斜する。

第３次調査の北東側に近接する箇所に１・２トレンチを設定した。２トレンチについては、当初、１つのトレンチとして設定する予定であったが、対象地内に耕作に伴う畦とコンクリート製の水路が存在したため、この部分の掘削を避けてトレンチを設定し、２－Ａトレンチと２－Ｂトレンチに区分した。１トレンチ及び２－Ｂトレンチでは谷地形を検出したが、トレンチ幅が狭く、十分な安全対策が行えない為、深さ1.5mで掘削を中止した。

第25図　女布遺跡第６次調査調査区配置図（1/2,500）

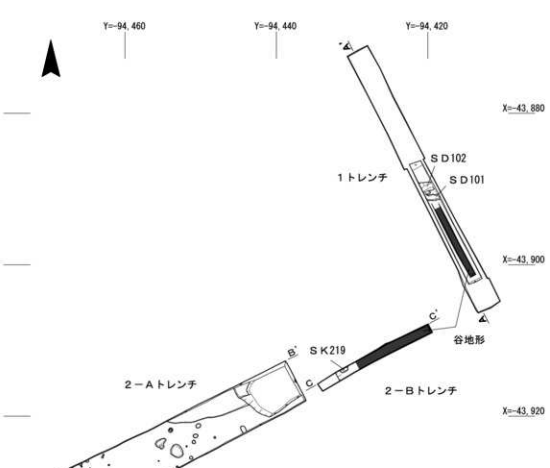
現在の女布集落北端部付近に３・４トレンチを設定した。双方のトレンチともに、標高28.1～30.1m付近で多数の遺物を含む包含層が認められたため、遺物包含層以下を人力掘削により調査を行った。

当初は、450㎡の面積を調査する予定であったが、追加で50㎡を調査する必要が生じたので、調査対象地の西側に５トレンチを設定した。以上６か所のトレンチの調査面積は、合計500㎡である。第６次調査では整理箱14箱分の遺物が出土した。

（２）検出遺構

①１トレンチの調査（第26図）

調査対象地の北東部に設定した。付



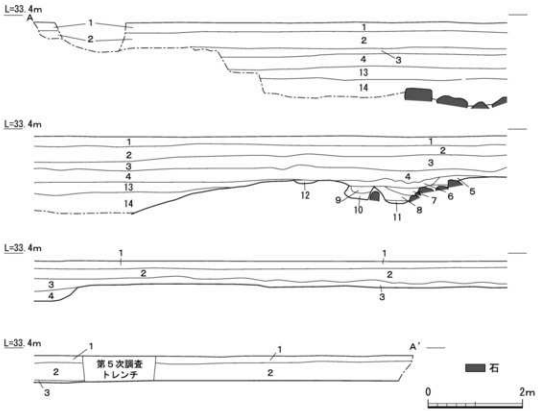
第26図　女布遺跡第６次調査１・２トレンチ遺構配置図(1/500)

近の標高は約33mである。トレンチは南北に長い長方形を呈し、全長約37.5m、幅約３mを測る。

基本層序（第27図）は、表土の下標高32.7m付近で自然堆積層を検出した。遺物包含層は確認できなかった。全体的に顕著な削平を受けていると考えられる。１トレンチでは溝２条と谷地形を検出した。

溝ＳＤ101・102（第26・27図）　トレンチ中央部の標高32.4m付近で検出した。２条の溝はいずれも不整形であり、長さ1.5m以上、幅0.6～1.4m、深さ0.4～0.5mを測る。トレンチ北西壁面付近にて合流する。平・断面ともに凹凸があり、人為的に整形された痕跡は見出しがたく、自然流路の可能性がある。埋土中より平安時代の土師器・須恵器・黒色土器等が出土した。

谷地形（第26・27図）　トレンチ南半部で谷地形の北側上端を検出し、後述する２－Ｂトレンチの東部で谷地形の南西側上端を確認した。１トレンチでは谷地形の北端を検出した。この谷地形の堆積層は２層に大別でき、上層の黒褐色土（第27図13層）は厚さ0.2～0.3mを測り、弥生時代後期から平安時代後期にかけての遺物が出土した。下層の黒色土（第27図14層）は厚さ0.5m以上を



1．灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂～粗粒砂（表土）
2．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト混じり極細粒砂～細粒砂（旧耕作土）
3．灰黄褐色（10YR5/2）細粒砂～中粒砂（旧耕作土）
4．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂～細粒砂（旧耕作土）
5．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり極細粒砂～細粒砂（褐色（10YR4/4）シルト混じり極細粒砂を畝大のブロック状に含む）（ＳＤ101・102 埋土）
6．黒褐色(10YR3/1)シルト混極細粒砂(褐色(10YR4/1)シルト混じり極細粒砂を粒状に含む、炭化物少量含む)（ＳＤ101・102 埋土）
7．褐灰色（10YR4/1）シルト混じり極細粒砂～中粒砂（ＳＤ101 埋土）
8．黒色（10YR2/1）極細粒砂混じりシルト（ＳＤ101 埋土）
9．黒褐色（10YR3/1）極細粒砂混じりシルト（にぶい黄橙色（10YR6/4）細粒砂を粒状に少量含む）（ＳＤ102 埋土）
10．黒褐色(10YR3/2)極細粒砂混じりシルト（ＳＤ102 埋土）
11．灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂（ＳＤ101 埋土）
12．褐灰色（10YR4/1）シルト混じり極細粒砂～細粒砂（耕作溝埋土か）
13．オリーブ黒色（5Y2/2）粗粒砂混じりシルト（5㎜大の礫を含む）（谷地形下層埋土）
14．黒色（10YR1.7/1）粘土（谷地形上層埋土）

第27図　女布遺跡第６次調査１トレンチ西壁断面図(1/80)

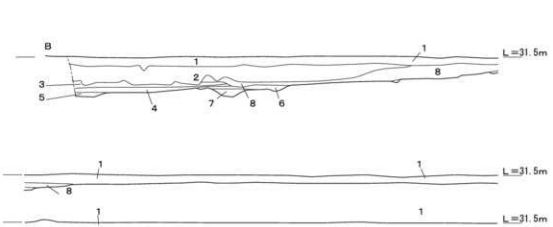
測り、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺物が出土したほか、直径0.2～0.7m大の自然石などを含む。これらの遺物は、その様相から、長い年月をかけて佐濃谷川上流部から流れ込んだものと考えられ、周辺に長期間存続する生活領域が存在する可能性がある。

②２トレンチの調査

ａ．２－Ａトレンチ(第26図)

調査対象地の北東部に設定した。付近の標高は約32mである。トレンチは東西に長い長方形を呈し、全長約38m、幅約７ｍを測る。

基本層序(第28図)は、１トレンチ及び２－Ｂトレンチと基本的には共通する。標高30.7～31.3m付近にて、自然堆積層を確認した。南西部の約10mの範囲には、厚さ0.2～0.7mほどの現在の

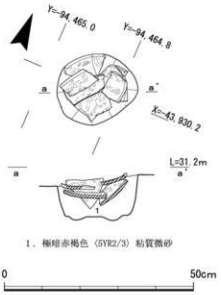


1．にぶい黄橙色（10YR7/2）細粒砂～中粒砂（1～3mm大の礫2％含む）（表土）
2．明褐色（7.5YR5/6）細粒砂～粗粒砂（1～3mm大の礫7％含む）（旧耕作土または盛り土）
3．灰黄褐色（10YR6/2）細粒砂（1～3mm大の礫3～5％含む）（旧耕作土）
4．灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂（1～4mm大の礫5～7％含む、遺物含む）（旧耕作土）
5．黒褐色（10YR3/2）極細粒砂～細粒砂（1～2mm大の礫～2％含む、遺物含む）（旧耕作土）
6．黒褐色（10YR3/2）極細粒砂～細粒砂（耕作溝埋土）
7．暗褐色（10YR3/3）極細粒砂～細粒砂（耕作溝埋土）
8．暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂（1～4mm大の礫2～3％含む）（旧耕作土または盛り土）
9．明褐色（7.5YR5/6）細粒砂～粗粒砂（暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂を拳大のブロック状に含む）（旧耕作土または盛り土）
10．明褐色（7.5YR5/6）極細粒砂～中粒砂（1～5mm大の礫を10％含む）（旧耕作土または盛り土）
11．灰黄褐色（10YR5/2）細粒砂～中粒砂（1～3mm大の礫7～10％含む）（旧耕作土または盛り土）
12．明褐色（7.5YR5/6）細粒砂～粗粒砂（拳大の礫を1％含む）（旧耕作土または盛り土）
13．にぶい褐色（7.5YR5/4）極細粒砂～細粒砂（1～2mm大の石を1～2％含む）（洪水堆積）
14．褐色（10YR4/4）細粒砂～粗粒砂（灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂を斑状に含む,拳大の角礫を10％含む,炭化物1％含む）（洪水堆積）
15．にぶい褐色（7.5YR5/3）極細粒砂～細粒砂（洪水堆積か）
16．黒色（7.5YR2/1）極細粒砂（1～3mm大の礫を1～2％含む、炭化物1～2％含む）（洪水堆積）
17．にぶい黄橙色（10YR6/3）細粒砂～粗粒砂（拳大の礫を多く含む）（洪水堆積）

第28図　女布遺跡第6次調査2－Aトレンチ北壁土層断面図(1/80)

水田造成のための盛り土層を確認した。また、北東部約8mの範囲で、北東部の丘陵側からの土石流と思われる洪水堆積層を確認した。この層は、トレンチ北東端で厚さ0.7m以上堆積しており、0.3～1m大の花崗岩を多く含む。この部分は安全対策のため完掘しておらず、重機を使用して表土下1.5mまで掘削したが、さらに下層まで花崗岩等の堆積が続く。埋土から弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器等の細片が出土しており、いずれも器表面は著しく摩滅している。このほかに、耕作に伴う痕跡や攪乱を多数確認したが、遺構はわずかである。

ピットＳＰ201（第29図）　トレンチ南西部で検出した。平面形は不整形な円形で、直径0.2m、深さ0.2mを測る。ＳＰ201の検出面で、奈良～平安時代頃の可能性のある須恵器甕の肩部から体部にかけての破片が5点出土した。外面に格子目タタキ、内面に同心円の当て具痕がみられる。検出状況から、遺構の上部が削平されたため遺構の底付近のみ残存すると考える。



第29図　女布遺跡第６次調査２トレンチ
ピットＳＰ201実測図(1/10)

その他の遺構　ＳＰ201のほかにも、南西部付近を中心に直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mのピットを10数基検出したが、建物として復原できるものはない。また、同じく南西部で溝状遺構を３条検出したが、いずれも浅く耕作溝と考える。

ｂ．２－Ｂトレンチ(第26図)

１トレンチと２－Ａトレンチの間に設定した。トレンチは東西に長い長方形で、全長約16.5m、幅約2.5mを測る。付近の標高は31.5～32mである。

基本層序(第30図)は、表土、旧耕作土の下、標高31m付近で自然堆積層を確認した。

土坑ＳＫ219(第26図)　トレンチ南西部付近で検出した。検出長は東西1.2m、南北0.4m以上、深さ0.2mを測る。北側は調査区外に広がり、全体の形状は不明であるが、検出部の状況より隅丸方形の平面形となる可能性がある。埋土から古墳時代中期頃の可能性のある土師器が出土した。

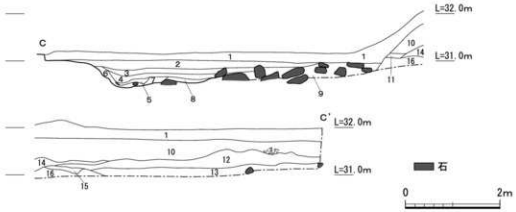
谷地形(第26・30図)　トレンチ中央から北東端まで10.5mの範囲で確認した。１トレンチと同様に、深さ1.5mまで掘削したが、底は確認できていない。埋土も同様に２層に大別でき、上層の黒褐色土(第30図12～15層)は厚さ0.2～0.4mを測り、埋土から弥生時代後期～平安時代後期にかけての遺物が出土した。下層の黒色土(第30図16層)は厚さ0.3m以上で、埋土から弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての遺物が出土した。１トレンチ及び２－Ｂトレンチ検出分を合わせても。範囲が狭いことから、谷地形の全体像については不明であるが、検出範囲の様相から、南東から北西方向に続く可能性がある。

③３トレンチの調査(第31図左)

調査対象地の南側の現在の女布集落の北側縁辺部に設定した。付近の標高は30.2～30.5mである。トレンチは東西に長い長方形で全長16.8m、幅1.3mを測る。

基本層序は、表土・旧耕作土の下、標高30m付近で、弥生時代から平安時代の遺物を含む遺物包含層を確認した(第32図５層)。厚さ0.1～0.4mで、３トレンチと西側に位置する４トレンチの全域で確認できる。遺構面で土坑・ピットなどを検出した。ピットの多くは耕作に伴う痕跡や攪乱であった。

土坑ＳＫ301(第31図左)　トレンチ中央やや北寄りの地点で検出した。検出規模は東西3.5m、南北0.86m、深さ0.32mを測る。北側は調査区外に広がる。平面形はやや不整形の半円形で、断面形は逆台形である。底面はやや平坦である。埋土底付近から平安時代の土師器・黒色土器等が出土した。

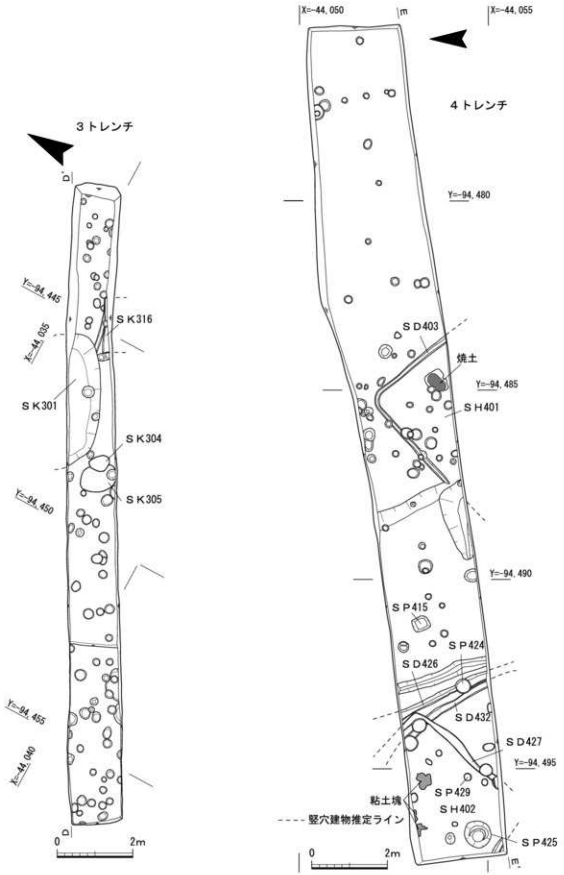


1．にぶい黄橙色（10YR7/3）細粒砂（表土）
2．黒褐色（10YR2/2）シルト混じり極細粒砂（旧耕作土）
3．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり極細粒砂～細粒砂（旧耕作土または盛り土）
4．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり極細粒砂（褐色（10YR4/4）極細粒砂を粒状に２％含む）（旧耕作土または盛り土）
5．黒色（10YR2/1）極細粒砂混じりシルト（小礫少量含む）（ＳＫ219 埋土）
6．黒色（10YR2/1）（シルト混じり極細粒砂～中粒砂
（にぶい黄褐色（10YR5/4 シルト）混じり極細粒砂を斑状に３～５％含む）（ＳＫ219 埋土）
7．黒色（10YR2/1）極細粒砂混じりシルト（ＳＫ219 埋土）
8．黒色（10YR2/1）極細粒砂混じりシルト（浅黄色（10YR8/4）極細粒砂を斑状に少量含む）（谷地形埋土か）
9．暗青灰色（10BG3/1）極細粒砂混じりシルト（0.2～0.6m大の角礫多く含む）（谷地形埋土か）
10．黒褐色（10YR2/2）細粒砂～中粒砂（径１～４mm 大の礫７%含む）（旧耕作土または盛り土）
11．にぶい黄褐色（10YR5/3）中粒砂～粗粒砂（旧耕作土または盛り土）
12．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり極細粒砂（鉄分沈着、径１～５mm 大の礫１%含む）（谷地形上層埋土）
13．黒色（10YR2/1）極細粒砂混じりシルト（谷地形上層埋土）
14．黒色（10YR2/1）極細粒砂混じりシルト（鉄分沈着）（谷地形上層埋土）
15．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり極細粒砂（黒色（10YR1.7/1）シルト混じり極細粒砂～細粒砂を斑状に少量含む）
（谷地形上層埋土）
16．黒色（10YR1.7/1）シルト混じり極細粒砂～細粒砂（谷地形下層埋土）

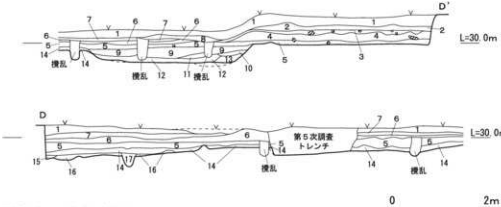
第30図　女布遺跡第６次調査２－Ｂトレンチ北壁土層断面図(1/80)

土坑ＳＫ304・305（第33図）　トレンチ中央部で検出した。両者は重複し、ＳＫ304がＳＫ305を削平する。平面形はともに楕円形である。ＳＫ304は長軸0.54m、短軸0.42mを測る。ＳＫ305は長軸0.96m、短軸0.68mを測る。ＳＫ304・305ともに深さは0.02～0.03m程度であり、ＳＫ304には黒褐色シルト混じり細砂、ＳＫ305には、灰黄褐色中粒砂が堆積する。

ＳＫ304・305付近の遺構検出面では、土師器・須恵器・黒色土器などの遺物と0.1～0.2m大の角礫が集中して出土した。角礫の多くは花崗岩と考えられる。さらに、ほとんどの角礫の表面には被熱によると思われる赤変箇所が認められた。上層の包含層の残りとも考えられたが、このような状況はＳＫ304・305周辺でのみ確認しており、何らかの意図があって人為的に投棄等された可能性があるものの、遺物・角礫ともに規則性は認められず、ＳＫ304・305についても著しく削平を受けていることから、明確な用途については不明であった。しかし、整理作業の過程で、３・４トレンチ包含層中より、鍛冶滓・精錬滓・鞴の羽口の細片等の鍛冶関連遺物が少量出土していることが判明した。鍛冶炉などの明確な遺構は確認できなかった。被熱により赤変した角礫につ

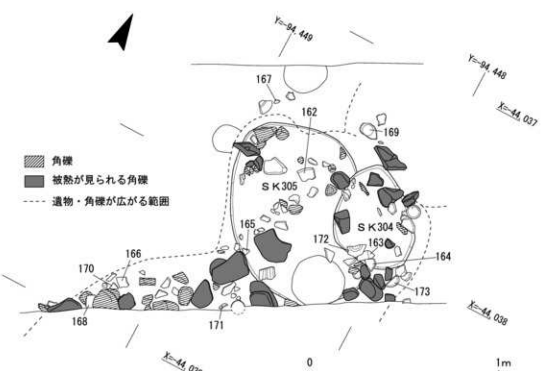


第31図　女布遺跡第６次調査３・４トレンチ遺構配置図(1/100)



1．黒褐色（2.5Y3/2）中～粗粒砂
（径1～2mm大の礫やや多く含む）（表土）
2．オリーブ黒色（5Y3/2）細～中粒砂
（径1～2mm大の礫少量含む）（旧耕作土または盛り土）
3．オリーブ褐色（2.5Y4/3）中～粗粒砂
（径7～10cm大（拳大）の礫少量含む）（耕作土または盛り土）
4．暗灰黄色（2.5Y4/2）中～粗粒砂
（径1～4mm大の礫やや多く含む）（耕作土または盛り土）
5．黒褐色（10YR2/2）極細～細粒砂（にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト混極細粒砂を径2mm大の粒状にごく少量含む、炭化物ごく少量含む）（遺物包含層）
6．灰褐色（7.5YR4/2）中～粗粒砂（耕作土または盛り土）
7．褐色（7.5YR4/3）粗粒砂（耕作土または盛り土）
8．にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂（白、透明、灰色の小礫を少量含む）（耕作土または盛り土）
9．黒色（2.5Y2/1）極細粒砂混じりシルト（橙色（7.5YR7/6）シルト混じり細粒砂を径0.5～3cm大の斑状に含む）（SK301埋土）
10．黒褐色（2.5Y3/1）極細粒砂混じりシルト（SK301埋土）
11．褐色（10YR4/4）中～粗粒砂（SK301埋土）
12．黒褐色（10YR3/1）極細粒砂混じりシルト（SK301埋土）
13．にぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂（SK301埋土）
14．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり細～中粒砂（遺物包含層）
15．黒褐色（10YR3/2）中～粗粒砂（遺物包含層）
16．黒褐色（10YR3/2）シルト混じり細～中粒砂（浅黄橙色（10YR8/4）極細粒砂を斑状に含む）（遺物包含層）
17．黒褐色（10YR3/1）シルト混じり極細粒砂（にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト混じり細粒砂を粒状に含む）（ピット埋土）

第32図　女布遺跡第6次調査3トレンチ北壁土層断面図(1/80)



第33図　女布遺跡第6次調査3トレンチ土坑SK304・305遺物出土状況図(1/20)

いても、鍛冶関連のどの工程に関わるか明確にできないが、鍛冶・精錬作業に関わる可能性がある。これらのことから、周辺の鍛冶などの作業場から出た土器や角礫などが、土坑SK304・305に廃棄され、後世の撹乱・削平などにより、土坑の底付近のみ残存している可能性がある。

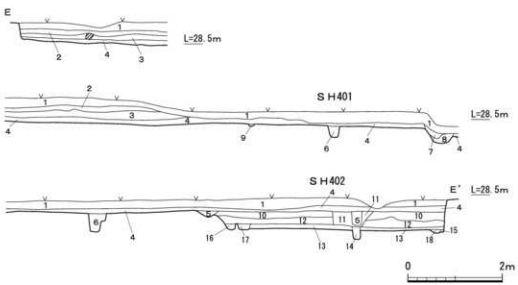
土坑ＳＫ316（第31図左）　トレンチ北東部の南壁面付近で検出した。検出長1.42m、検出幅0.18m、深さ0.2mを測る。遺構の大部分は調査区外に広がり、平面形は不明である。南壁面下部より長さ0.45m以上、厚さ0.13mの板状の木材片が出土した。さらに遺構埋土からは土師器や黒色土器の砕片が出土した。平安時代頃の木材を使用した遺構と考えられるが、検出範囲が狭小なことから、その性格は不明である。

その他の遺構　直径0.2～0.3mのピット・柱穴を多数検出したが、建物として復原できるものはない。

④４トレンチの調査（第31図右）

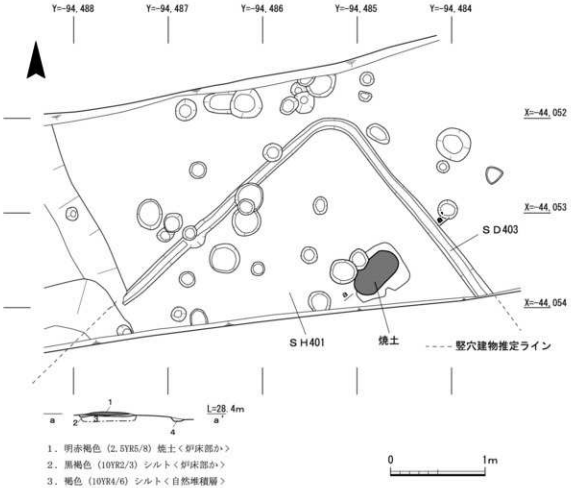
３トレンチより約23m西側に設定した。付近の標高は28.3～28.7mである。トレンチは東西に長い長方形で、全長22.3m、幅３ｍを測る。

基本層序（第34図）は、表土、旧耕作土あるいは盛り土の下、標高28.2～28.6m付近で、弥生時代から平安時代の遺物を含む遺物包含層を確認した。この層は東側の３トレンチにも堆積してお



1．褐灰色（10YR5/1）砂質土〈表土〉
2．極暗褐色（7.5YR2/3）シルト（旧耕作土）
3．暗褐色（10YR3/4）極細粒砂（５mm大の礫含む）（旧耕作土）
4．にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（遺物包含層）
5．灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂～粗粒砂（耕作溝埋土）
6．黒褐色（7.5YR3/2）シルト混じり細粒砂（ピット埋土）
7．灰色（7.5YR6/1）シルト混じり細粒砂（耕作溝埋土）
8．灰色（7.5YR5/1）シルト混じり細粒砂（耕作溝埋土）
9．黒褐色（10YR3/2）シルト混じり細粒砂（ＳＤ403埋土）
10．黒褐色（10YR2/3）粘質微砂（ＳＨ402埋土）
11．黒褐色（7.5YR3/1）砂混じりシルト（時期不明の土坑埋土）
12．黒色（7.5YR1.7/1）シルト混じり極細粒砂（炭化物含む）（ＳＨ402埋土）
13．黒色（7.5YR1.7/1）シルト混じり極細粒砂（褐色7.5YR4/3）シルトをブロック状に多量に含む）（ＳＨ402貼り床）
14．灰褐色（10YR5/1）砂質土（ピット埋土）
15．黒褐色（10YR2/2）シルト混じり極細粒砂（ＳＨ402貼り床か）
16．黒色（10YR1.7/1）シルト（ＳＤ426埋土）
17．黒色（10YR2/1）シルト〈ＳＤ432埋土）
18．暗褐色（10YR3/3）シルト混じり極細粒砂（ＳＤ431埋土）

第34図　女布遺跡第６次調査４トレンチ南壁土層断面図（1/80）

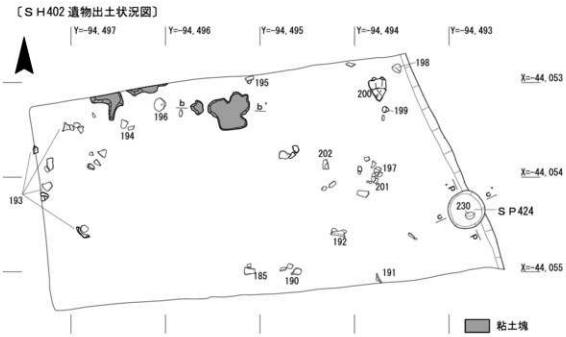


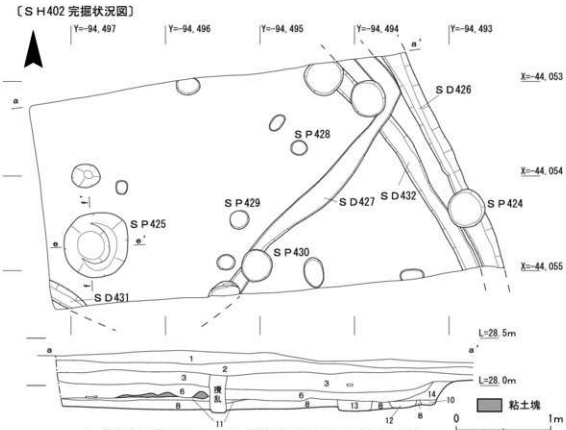
第35図　女布遺跡第６次調査４トレンチ竪穴建物ＳＨ401実測図(1/40)

り、４トレンチでは厚さ約0.1m堆積している状況を確認した。遺物包含層の下、標高28.2～28.5mで自然堆積層を検出した。調査の結果、竪穴建物・ピットなどを検出した。ピットの多くは耕作に伴う痕跡と考えられる。

竪穴建物ＳＨ401（第34・35図）　トレンチ中央部で検出した。検出長は北東～南西側３m、北西～南東側2.5mを測る。削平により遺存状況が悪く、周壁溝と床面（焼土・柱穴）を検出した。平面形は方形の可能性が高い。建物の主軸は北から49°西に振る。周壁溝は幅0.15m、深さ0.2mを測る。竪穴建物の北東壁付近で検出した焼土は長軸0.54m、短軸0.28m、厚さ１cmである。焼土は硬く焼けており、カマドの炉床部の可能性がある。遺物は周壁溝からわずかに土師器片が出土しているが、砕片であり、時期は不明である。

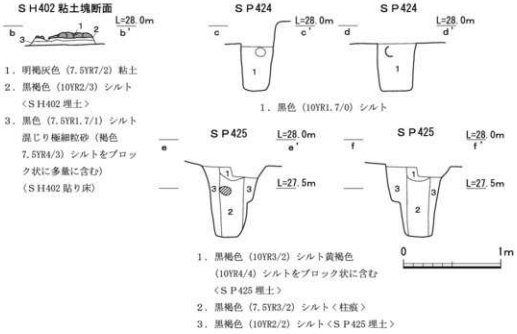
竪穴建物ＳＨ402（第34・36・37図）　トレンチ西端付近、竪穴建物ＳＨ401より約６m西側の標高28.1mの地点で検出した。ＳＨ402は検出長4.8m、検出面からの深さ0.3～0.4mを測る。検出範囲が狭いため、平面形は不明である。壁面に沿って周壁溝ＳＤ426が巡る。このＳＤ426と類似する規模の溝がほかに２条あり、円形に巡る可能性のある溝ＳＤ432と、方形に巡る溝ＳＤ427である。埋土から、ＳＤ427は、南西隅付近のＳＤ431とつながる可能性がある。その場合、一辺が



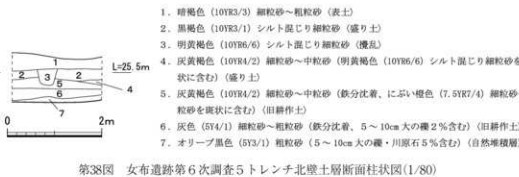


1．第34図の1層と同じ
2．第34図の2層と同じ
3．第34図の3層と同じ
6．第34図の6層と同じ
8．第34図の8層と同じ
10．第34図の10層と同じ
11．黒褐色（10YR2/3）シルト（ＳＨ402 埋土）
12．暗褐色（10YR3/3）シルト混じり極細粒砂（ＳＤ427 埋土）
13．極暗褐色（7.5YR2/3）シルト（ピット埋土）
14．暗褐色（10YR3/4）極細粒砂（橙色（7.5YR6/6）極細粒砂を粒状に含む）（ＳＨ402 埋土）

第36図　女布遺跡第６次調査４トレンチ竪穴建物ＳＨ402実測図(1/40)



第37図　女布遺跡第６次調査４トレンチ竪穴建物ＳＨ402主柱穴等土層断面図(1/40)



第38図　女布遺跡第６次調査５トレンチ北壁土層断面柱状図(1/80)

4.3mとなる。これら３条の溝が周壁溝ならば、２回の建て替えが行われたと考えられる。周壁溝の重複関係から、ＳＤ432(円形)→ＳＤ427・431(方形)→ＳＤ426(平面形不明)の順に建て替えられたと考える。床面では、主柱穴の可能性のある柱穴ＳＰ425などを検出した。主柱穴ＳＰ425は径0.67m、深さ0.72mを測り、径0.25mの柱痕跡が確認できる。この他にも床面には径0.15～0.3mのピットを数基確認した。また、床面を掘削したところ、厚さ0.1mの貼り床を確認した。しかし、主柱穴ＳＰ425を含む数基の柱穴と貼り床が、建て替え前・後のどの時期の建物に属するかを正確に把握することはできなかった。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・石器等が出土した。床面より少し遊離した状態で土師器と粘土塊が出土した。これらは竪穴建物廃絶時に伴う遺物と考える。床面付近から出土した土器から、ＳＨ402の時期は古墳時代初頭頃と考える。出土土器中には、小形の土器や手焙り形土器が出土していることから、廃絶時に祭祀行為が行われた可能性がある。粘土塊はＳＨ402内北壁面沿いの、南北0.5m以上、東西２ｍの範囲内に、大きさ0.15～0.4mの塊が４点点在する状態で検出した。北壁面外にも粘土塊が存在する。いずれも床面より約５cm遊離した状態で出土した。検出した粘土塊はいずれも未焼成である。粘土の色調は

明褐灰色で精緻な胎土なので、土器製作などの用途に使用された可能性が考えられる。出土した分の総重量は6.56kｇを測る。それぞれの形状は不整形である。周辺には同じ標高で遺物が複数散乱する。この粘土塊については、①竪穴建物廃絶後に廃棄された、②保存の目的で置かれていた、③土器が同じ標高から出土していることから、廃絶時の祭祀行為に使用されたなどのいくつかの可能性が考えられる。また、いずれも調査地内では見られない土質であることから、土器製作などの用途に使われた可能性が考えられる。複数の竪穴建物が重複した状態で検出したが、最も下層に位置するＳＤ432を伴う円形の竪穴建物は出土している土器の年代から、弥生時代後期まで遡る可能性がある。

ピットＳＰ424　竪穴建物ＳＨ402の南側で検出した。直径0.56m、深さ0.50mを測る。ＳＨ402と重複し、ＳＰ424の方が新しい。埋土上部より完形の土師器鉢が出土した。時期は古墳時代前期と考えられる。竪穴建物廃絶後、何らかの人為的な行為に伴って鉢が埋められたと考える。

ピットＳＰ429　ＳＨ402の床面中央付近にて検出した。径0.20m、深さ0.36mを測る。内部より古墳時代前期頃の土師器が出土した。

ピットＳＰ415（第31図）　トレンチやや西側の標高28m付近にて検出した。平面隅丸方形で、一辺0.4m、深さ0.25mを測る。平安時代頃の土師器・須恵器が出土した。

その他の遺構　このほか、直径0.2～0.4mのピットを数基検出したが、建物として復原できるものはない。

⑤５トレンチの調査（第25・38図）

調査対象地の西側の地点に設定した。標高は25.2～26.2mである。今回のトレンチの中でもっとも佐濃谷川に近い地点にあたる。トレンチは東西に長い長方形で、全長17.9m、幅3.2mである。

基本層序は、表土・旧表土とそれに伴う盛り土の下、標高25m付近で自然堆積層を検出した。遺構は確認できなかった。旧耕作土・盛り土から弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・陶器片などが出土した。いずれも砕片で摩滅していることから、２次堆積に伴う遺物と判断した。自然堆積層はシルト・拳大の礫・川原石などで構成されており、佐濃谷川に伴う低地堆積と考える。

５トレンチとこれまでの調査成果によると、５トレンチ付近より西側の低地部は、佐濃谷川に伴う低地堆積が広がり、遺構・遺物の分布は稀薄になると考えられる。

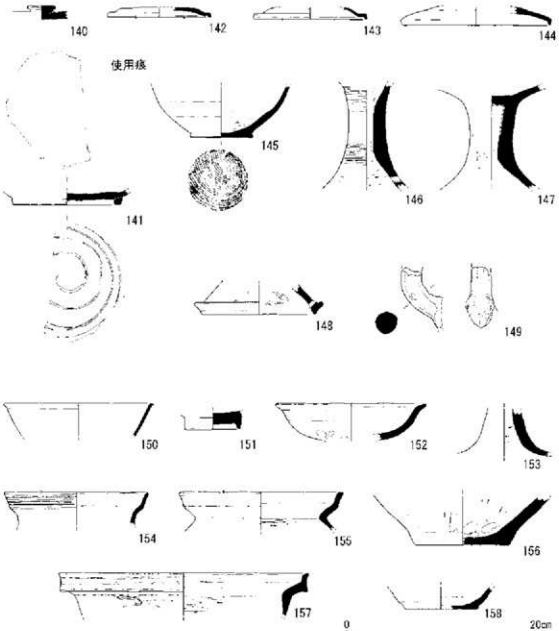
（荒木瀬奈）

（３）出土遺物

女布遺跡第６次調査で出土した遺物は、整理箱14箱である。このうち３・４トレンチ出土遺物が半数以上を占める。このことから、現在の女布集落周辺での遺構・遺物の残存状況が良好であることがわかる。個々の遺物の法量等については、観察表を参照されたい。以下、各トレンチの遺構ごとに出土遺物の詳細を述べる。

①１トレンチ出土遺物

溝ＳＤ101（第39図140・141）　140は須恵器の杯Ｂ蓋である。偏平な宝珠つまみの周囲のみが残存する。141は須恵器杯Ｂである。底径11.4cmを測る。外底面には、回転ヘラ切りに伴うヘラ



第39図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図１(1/4)

状工具の痕跡が渦巻き状に残存する。内底面中央付近には、やや平滑に研磨された面が確認できることから、転用硯として利用されていた可能性がある。

溝ＳＤ102（第39図142～145）　142～144は須恵器杯Ｂ蓋である。142・143は口縁部付近に強い回転ナデを施し、端部を下方に引き出す。144は口縁端部を下方につまみ出す。全体の形状は笠形となる。145は黒色土器椀である。内面のみ黒色処理を施す。摩滅のためやや不明瞭ではあるが、内面に細かい単位の横方向のミガキを施す。高台は高さ0.5cmの平高台で、外底面に回転糸切り痕が残る。

谷地形（第39図146～149）　146・147は弥生土器高杯脚柱部である。146は摩滅によりやや不明瞭ではあるが、外面に縦方向のミガキを施した後、７～８条を一単位とする凹線文を二段施す。

脚柱部内面には粘土の絞り痕が見られ、裾部は横方向のケズリを施す。凹線文の存在からⅣ様式であり、時期は弥生時代中期頃である。147は外面全体に縦方向のミガキを施す。脚柱部内面の観察が困難であり、接続部分の詳細は不明である。杯部内面の接続部分には、円形で径４cmを測る粘土充填時の単位が認められる。148は弥生土器高杯脚端部である。断面形はわずかに内湾し、端部を斜め上方に強く引き出す。外面には縦方向のミガキを施す。内面にはわずかにユビオサエの痕跡が残るが、器壁は粘土が乱れており、ほぼ未調整と考えられる。脚部器壁と端部の境目付近に径0.4cmの２個一組の円形の穿孔が認められる。焼成前穿孔と考えられる。149は水差し形土器などの把手と考えられる。下部にハケメが認められる。中央付近の断面形は円形である。欠損部分の断面から、厚さ2.5cmの粘土芯を作った後、その周りに粘土を貼り付けて整形している様子が見られる。

②２－Ａトレンチ出土遺物

遺物包含層（第39図150・151）　精査・清掃時に出土した。150は白磁椀の口縁部である。器壁はほぼ直線的に延び、口縁端部を外方にわずかに折り曲げ、上部に面を作る。口縁部内面付近に稜線が１条入る。時期は平安時代後期である。151は白磁椀の底部である。内面のみ施釉し、高台部分の内外面は無施釉である。高台は径5.8cm、高台高1.2cmで、垂直に延び、端部がやや丸くなるようにおさめる。

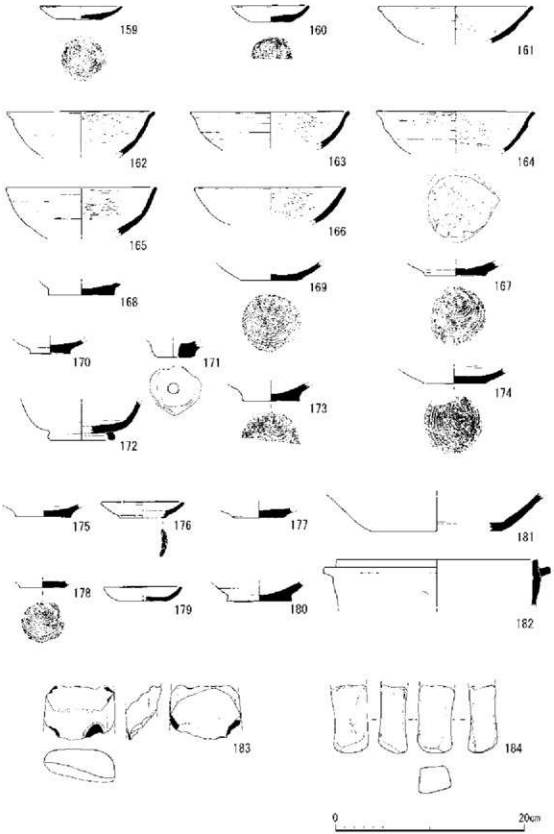
③２－Ｂトレンチ出土遺物

土坑ＳＫ219（第39図152・153）　152は土師器鉢と考える。体部は緩やかに立ち上がる。外面はやや不明瞭であるが、不定方向のナデに下部のみユビオサエが認められる。口縁端部を緩く屈折させ、端部内面に面をなす。屈折部外面にヨコナデを施す。内面は調整不明である。153は土師器高杯の脚部である。脚柱部と端部の間は緩やかに屈曲する。外面は不明瞭であるがヨコナデを施すと考える。脚裾部内面はヨコナデを施し、脚柱部内面は幅広のケズリを一周させる。152・153ともに時期は古墳時代中期頃と考える。

谷地形（第39図154～158）　154～157は弥生土器である。154は台付鉢の口縁部である。口縁端部に幅２cmの平坦面を作り、擬凹線を６条施す。頸部に横方向のミガキを施す。時期は弥生時代後期である。155は甕の口縁部である。緩やかな有段口縁をなし、端部に平坦面を作る。156は壺底部である。平底で、厚さ0.8cmを測る。外面に縦方向のミガキ、内面に縦方向のケズリを施し、底部のみユビオサエが認められる。157は鉢である。有段口縁をなし、外面に不鮮明な擬凹線を２条施す。口縁部から体部へ至る屈曲付近から急激に器壁が薄くなり、調整は一部横方向のケズリを施す。158はロクロ整形の土師器皿である。側面の器壁は粘土紐の単位による稜線が見られる。底部は高さ0.7cmの平高台で、不明瞭な回転糸切り痕が残る。時期は平安時代である。

④３トレンチ出土遺物

土坑ＳＫ301（第40図159～161）　159・160は土師器皿である。外底面に糸切り痕が残る。161は黒色土器椀である。口縁端部は真っ直ぐ外上方に引き上げて丸く終わる。体部中位付近に強いヨコナデを施す。内面のみ黒色処理を施し、やや不明瞭であるが細かいミガキが認められる。



第40図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図２(1/4)

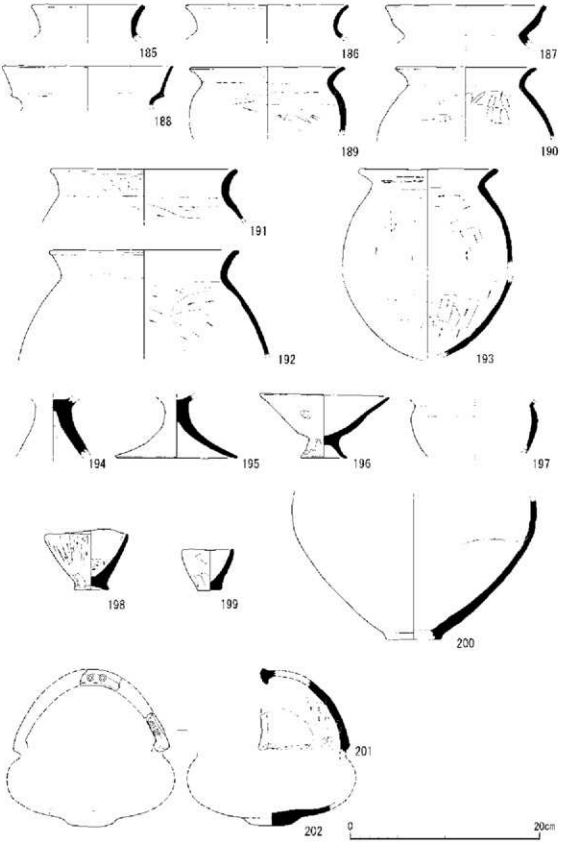
土坑ＳＫ304・305（第40図162～173）　162～166は黒色土器椀体部である。いずれも内面にヘラミガキを施すが、ミガキの単位は短くジグザグに往復している。164・165は外面にもミガキが認められる。黒色化は一部口縁部外面に及ぶものもあるが、図示していないものも含めて、内面のみ黒色化するものが主体である。器壁は0.4～0.6cmと厚く、胎土は密であるが白濁した石英と雲母を含む。162～164は口縁部を外反させ、端部は丸くおさめる。165・166は、口縁端部を直線的に延ばし、やや丸くつまみ上げて収束する。口径は15.6～15.8cmの範疇に収まる。167～169は黒色土器椀の底部である。167・168は外底面に回転糸切り痕が残る平高台である。167は底部内面に一定方向の短い単位のミガキを施す。168は高台部を直立させる。内外面ともに摩滅が著しい。169は平底である。回転糸切り痕が外底面に残る。170は土師器皿の底部である。平高台である。171は土師質の高台である。中央には焼成後に穿孔された径1.3cmの円孔が残る。172は須恵器杯Ｂである。貼り付け高台はやや内湾気味に立ち上がる。173は須恵質の杯か椀の底部である。平高台であり、外底面に回転糸切り痕を残す。

土坑ＳＫ316（第40図174）　174は黒色土器椀の底部である。平底で、底面から緩やかに立ち上がる。外底面に回転糸切り痕が残る。内面のみ黒色処理を施す。内面にミガキを施す。

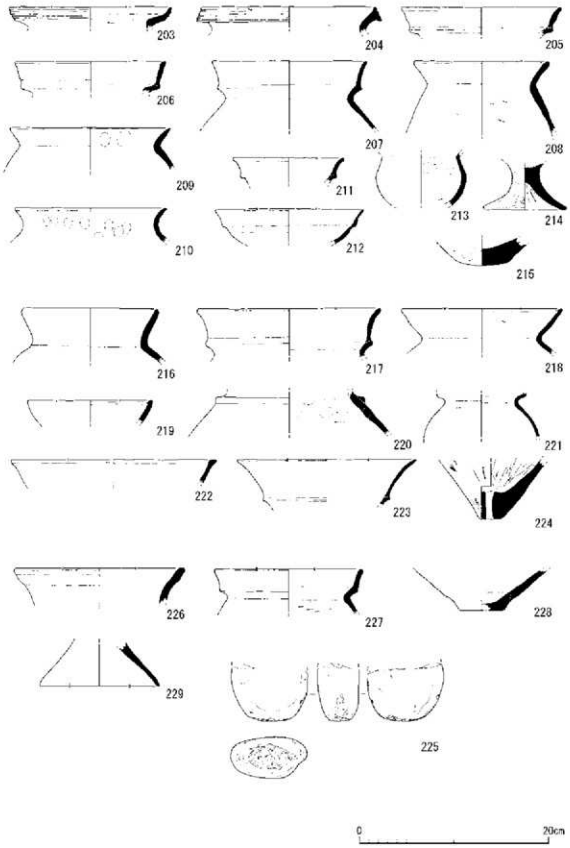
遺物包含層（第40図175～184）　175は黒色土器椀か皿の底部である。平高台で、直立気味に立ち上がる。摩滅が著しいが、底部には回転糸切り痕が見られる。176は黒色土器皿の底部である。内外面とも黒色化する。口縁端部は丸くおさめる。底部は平高台で、回転糸切り痕を外底面に残す。177は土師器椀か皿の底部である。わずかな段差により平底をつくり出す。178・179は土師器皿の底部である。178は平底であり、外底面に回転糸切り痕が見られる。179は摩滅が著しいが、底部は回転糸切り痕が見られる。180は須恵質の椀底部である。平高台でわずかに内傾気味に立ち上がる。摩滅が著しいが、底部には回転糸切り痕が見られる。181は須恵器の壺底部である。平底である。182は土師器の羽釜である。鍔は幅0.7cm、高さ1.2cmを測る。183は弥生時代の磨製石斧である。太型蛤刃石斧の一部と考える。184は砥石である。小口部分を除く長軸方向の側面部はすべて使用面で、法量からも仕上げ砥石と考えられる。

⑤４トレンチ出土遺物

竪穴建物ＳＨ402（第41図185～第42図229）　185～202は床面付近から出土した土器である。185は短頸壺である。口縁部内外面にナデを施す。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、端部は面を作る。186～193は甕である。186は緩やかに外反する「く」字状口縁である。ＳＨ402出土の甕口縁部の中では図示していないものも含め、最も多く見られる形状である。端部は丸くおさめる。187は他の甕口縁部と比較して若干厚みがある。口縁部中央付近から端部をやや屈曲させ、端部は断面方形におさめ、面を作る。この形状の口縁部は本例のみである。188は山陰系の複合口縁甕である。器壁の厚さは0.3cmと薄い。頸部上方に明確な稜を形成し、斜め上方へ直線的に立ち上げ、端部は丸くおさめる。189・190は体部内面にハケ調整のちにケズリを施す。同様の調整は北陸地域で多く見られることから、これらの地域の影響を受けていると考えられる。189は上部約1/3のみ残存する。内面に縦方向のハケを施した後、下部から上方斜め方向にケズリ



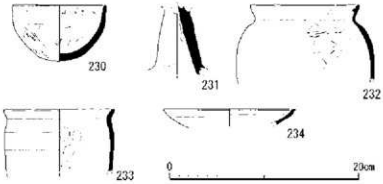
第41図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図３(1/4)



第42図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図４（1/4）

を施す。口縁部は緩やかに外反する「く」字状となり、端部を外方向につまみ出す。肩部付近が最大径となる可能性が高い。190の体部内面に、ヨコハケを施した後、ヘラなどの工具が下から上に向かって動く際に接触したことによる幅0.7cmの痕跡が残されている。191・192は甕の口縁部の中ではやや大型のもので、口径19.6～19.8cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸くおさめることや、体部内面に斜め方向のケズリを施すことなどが類似する。両者とも摩滅が著しいが、192の体部外面には縦方向のハケメが見られる。193は「く」字状口縁で、口縁部をほぼ直線的に伸ばし、端部を丸くおさめる。口縁部外面にヨコナデ時の微細な線が認められる。体部内面は下方に縦方向のケズリを施し、肩部内面に横方向のケズリを施す。器壁は若干厚い。194・195は高杯脚部である。194は脚柱部内面に粘土の絞り痕が見られる。195は脚部の高さが5.9cmの低い脚部であり、脚裾部は「ハ」の字状に広がる。裾端部は丸くおさめる。196は小形の台付鉢である。鉢部は脚台との接合部からほぼ直線的に斜め上方へ延びる。高さ２cmの外反する低い脚部を持つ。脚裾部には縦方向のユビオサエが見られる。鉢部外面に火爆ぜの痕跡が一か所認められる。形状から蓋の可能性も考えられたが、脚裾端部に平坦面を作り、地面に置いた際の安定性を考慮している様子が窺えることから、小形の台付鉢と考える。197・198は小形の鉢である。197は肩部に最大径がある。198は口縁部が歪んでいる。底部端が斜め下方にわずかに広がる。外面上部に幅0.1cmの縦方向のミガキを施し、底部内面付近に斜め方向のケズリを施した後、上半部に斜め方向のナデを施す。199は祭祀などに使用されたと推定されるミニチュアの鉢である。器壁の厚さは0.4～0.8cmと幅があり、粗雑な印象を受ける。外面はナデ・ユビオサエで整形し、内面は縦方向にナデを施す。200は壺の下半部である。底部は平底である。体部最大径よりもやや下方の内面に、粘土紐接合痕が認められる。ここより上方は幅1.5～2.0cmのヨコナデを施す。201・202は手焙り形土器である。201は覆部である。面から耳にかけて幅0.9～1.7cmの粘土帯を作り、その中央付近に径0.8cmの竹管文を0.5cm間隔で施す。覆部側面には粘土紐の単位が明瞭に確認できる。赤彩等は確認できないが、色調は赤味がかっている。意図的に粘土に着色している可能性がある。202は鉢底部であり、201と胎土・色調等が近似することから、同一個体と考える。底部は突出底で、ほぼ偏平に開く。時期は古墳時代初頭頃と考える。

203～215は埋土下層より出土した。203～210は甕口縁部である。203は口縁部がやや開く受口状を呈し、口縁部外面に擬凹線を３条施す。204は口縁端部を1.7cm拡張し、擬凹線を３条施す。205･206は複合口縁である。いずれも口縁部の調整はヨコナデと考えられ、擬凹線は見られない。口縁部外面に緩やかな凹凸やうっすらとした線状の痕跡が確認できることから、これらを擬凹線の名残とみることもできる。207も複合口縁で、器壁は薄い。不明瞭であるが口縁部はナデによる調整を施しており、205・206より新しい様相が見られる。208・209は「く」字状口縁である。208は口縁部があまり開かず、頸部の屈曲がやや緩やかである。210は緩やかに外反する「く」字状口縁である。頸部内外面にユビオサエが見られる。端部は外側に向かってわずかにつまみ出す。211は小形の壺あるいは鉢の口縁部である。複合口縁で、端部を外側に向けて丸くおさめる。212は鉢の口縁部である。器壁は薄い。複合口縁で、口縁部下段の屈曲はやや緩やかである。213は



第43図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図５（1/4）

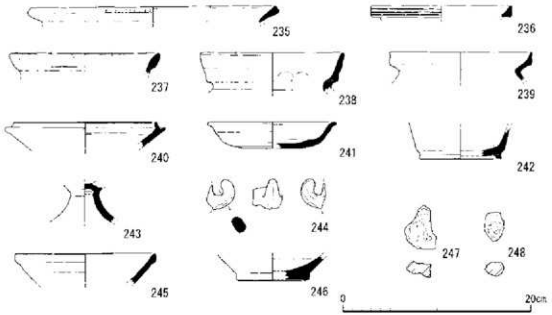
小形丸底壺の体部である。肩部に最大径が認められる。内面に幅0.2cmの横方向のミガキを施す。214は台付甕の脚台部である。裾端部は外面に緩やかな平坦面を作る。内面には縦方向の工具痕が放射状に認められる。甕部底外面の中央に径0.15cmの円孔状の痕跡があり、製作時の軸芯痕と考えられる。215は壺底部である。底は平底に近いが、中央部をわずかに突出させる。

216～225は埋土上層より出土した。216は広口壺である。口縁端部はわずかに内傾するようにつまみ上げる。217～219は甕の口縁部である。217は複合口縁である。口縁端部は緩やかに外反する。218・219は布留式甕である。220は外面に縦方向のハケメを施すことから、壺の頸部から肩部にかけての破片と考える。肩部上方に断面三角形の突帯を１条貼り付ける。221は小形の壺と考える。口縁部から頸部を強く屈曲させる。体部中央位付近に最大径部があると考える。222は高杯杯部である。端上部を拡張し、平坦面を作る。223は山陰系の鼓形器台である。器壁の厚さは0.3cmと薄い。224は有孔鉢である。内面は下方から上方へ向かってケズリを施す。底部中央に径0.8cmの円孔を焼成前に穿つ。225は敲石である。丸みを帯びた石材の小口付近を中心に敲打痕が認められる。

226～229はトレンチ南壁に設定したサブトレンチから出土した。226は壺である。口縁端部をわずかに屈曲させ、面を作る。227は複合口縁の甕である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。肩部内面に横方向のケズリを施す。228は弥生土器の壺あるいは甕の底部である。底部は高さ0.7cmの平底である。229は土師器の高杯脚部である。脚裾部をわずかに内湾させ、丸くおさめる。

ピットＳＰ424（第43図230・231）　230は土師器で小形の鉢である。完形で出土した。器形は半円形に近いが、底付近のみわずかに凹ませる。口縁部のみわずかに直線気味に立ち上げる。外面は0.3～0.6cmの細かな縦方向のハケを施した後、口縁端部にヨコナデを施す。内面には外面と同様、細かなハケを施し、口縁端部には斜め方向のハケを施す。有孔鉢と類似する形状、調整が見られる。231は土師器の高杯脚部である。裾部で屈曲して開く畿内系高杯である。脚柱部外面には幅0.4cm程度の面取り痕跡が認められる。杯部底には径0.25cmの軸芯痕が認められる。いずれも時期は古墳時代前期頃と考える。

ピットＳＰ429（第43図232）　232は土師器の小形壺である。剥離・摩滅が著しい。頸部は若干薄くなる。形状は布留式のものに類似することから、時期は古墳時代前期頃と考える。



第44図　女布遺跡第６次調査出土遺物実測図６(1/4)

ピットＳＰ415(第43図233･234)　233は土師器の壺である。体部内面にユビオサエが見られる。234は須恵器の皿である。蓋の可能性もあるが、端部に面を持つ事から皿とした。

遺物包含層(第44図235～248)　235は弥生土器の甕である。口縁部を開き、端部先端に面を作り、縦方向のキザミメ文を巡らす。236は弥生土器の高杯と考える。端部を下方に拡張して、垂直の粘土帯を作り、擬凹線を３条施す。237～239は土師器の甕口縁部と考える。237は断面観察から、口縁端部外面に粘土を貼り付けて拡張しており、外面に擬凹線の名残のような不明瞭な線状の痕跡が確認できる。238は複合口縁である。頸部が狭く、口縁部はやや斜め上方に立ち上げる。239は剝離・摩滅が著しいが、口縁部を受け口状に整形している可能性がある。端部は薄くつまみ上げる。240･241は須恵器杯身である。240はかえり部分が短く、口縁端部を丸くおさめることから、陶邑編年のTK209型式に比定できる。241は口縁端部を外方につまみ出す。242は須恵器杯Ｂの底部である。243は須恵器高杯脚柱部である。244は須恵器の把手である。中央付近の断面は隅丸方形である。薬研壺の一部の可能性がある。245は玉縁の白磁椀口縁部である。246は白磁椀底部である。輪高台の内側のケズリは0.1cmと浅い。高台の外面は無施釉である。

247は鍛冶滓である。248は精錬滓である。図示していないものも含めると、鍛冶滓は４点、精錬滓は５点出土している。いずれも細片であり、長さ２～３cm、重さ17～30ｇを測る。247・248も含めて、今回の調査で出土した鍛冶滓・精錬滓の多くは４トレンチ包含層中から出土しているが、１トレンチ旧耕作土・３トレンチ包含層中からも少量出土している。特に、精錬滓の表面はいずれも著しく摩滅しており、法量も小型であることから、鍛冶炉底部付近に堆積したものの可能性がある。この他に、鍛冶関連遺物として４トレンチ包含層中より鞴の羽口の体部片が４点出土している。いずれも長さ２～３cmの細片であり、図示しえなかった。また、３トレンチ包含層中より出土した砥石(184)についても、鍛冶関連遺物となる可能性がある。

これらの他に、図示していない特徴的な遺物として、緑色凝灰岩の可能性のある剝片（図版第33－ａ）と、須恵器の溶着資料（図版第33－ｂ）がある。緑色凝灰岩の可能性がある濃緑色の剝片は、４トレンチ包含層から１点出土している。形状は一辺約1.7cmの不正方形であり、この内２面に剝離痕が確認できる。須恵器の溶着資料も同じく４トレンチ包含層中より１点出土している。長さ６～８cmの須恵器甕と杯蓋の体部が溶着している。

（竹原一彦・荒木瀬奈）

（４）小結

今回の女布遺跡第６次調査の調査成果をまとめると、以下の通りである。

①今回の調査では、弥生時代から平安時代の竪穴建物、土坑、溝、ピット、谷地形などを確認した。

②竪穴建物ＳＨ402は古墳時代初頭の竪穴建物であり、複数の土器片が出土した。丹後地域の同時期の資料は、京丹後市浅後谷南遺跡・女布北遺跡、宮津市桑原口遺跡などで遺構・遺物が見つかっているが、竪穴建物から多くの土器が出土している例は少なく、詳細な様相は不明である。今回の調査成果により、丹後地域の同時期の集落遺跡に関する良好な資料が得られた。

③また、竪穴建物ＳＨ402の床面より少し浮いた状態で粘土塊が出土した。近畿地方における弥生・古墳時代集落から出土する粘土塊については、小森牧人氏・若林邦彦氏が集成・検討を行っている。これによれば、京都府内の同時期の竪穴建物では12例の検出例があり、京丹後市内では古墳時代終末期であるが、旧大宮町の天徳古墳群で検出された竪穴建物から出土例が１例ある[注6]。今回の調査によって新たな類例を１例追加することができた。

④３トレンチでは、平安時代の遺構・遺物を複数検出した。いずれも機能・性質は明確ではないが、近辺に同時期の集落遺跡が広がる可能性が高い。

⑤現況の女布集落近辺に設定した３・４トレンチでは、多量の遺構・遺物が出土した。このことから、この周辺は遺構・遺物や遺物包含層の残存状況が良好であり、集落の中心域であった可能性が考えられる。

⑥３・４トレンチの遺物包含層中から出土した少量の鍛冶関連遺物からは、時期不明ながらも、ある時期に近辺で鍛冶作業が行われていた可能性を指摘することができる。また、須恵器の溶着資料や緑色凝灰岩の剝片も、わずかであるが出土しており、須恵器生産や玉作りに関わる遺構が近辺に存在する可能性がある。これらの遺物は、集落の具体像を示す資料として重要である。

⑦１トレンチ、及び２－Ａ・２－Ｂトレンチにおいては、顕著な遺構は検出しなかった。しかし、谷地形中より複数時期の遺物が出土した。ここよりさらに北東側の女布遺跡第７次調査でも、奈良・平安時代の遺構・遺物を確認しており、女布遺跡の遺跡範囲の北東部にも、生活領域が存在する可能性がある。

⑧５トレンチでは、遺構・遺物は確認できなかった。これまでの調査成果も考慮すると、この周辺から佐濃谷川にかけては、低地堆積層が広がり、遺構・遺物の分布状況は希薄となることが予想される。

（荒木瀬奈）

4）女布遺跡第９次調査

（1）調査の概要

排水路設置に伴う掘削範囲の調査を実施した。調査対象地を大きく３地区に分けてトレンチを設定して調査を実施した。しかし、工事の掘削深度や地形の制約をうけてトレンチが細分されたため、報告に際して新たに１～６トレンチの名称を付与した(第45図)。調査地は現在の女布集落の南側に広がる田畑内にあたり、１～４トレンチが調査対象地の東側、５・６トレンチが同じく西側に位置する。１～４トレンチの東側にはトレンチに沿って女布集落へとつながる広域市道が通る。

（2）検出遺構

①１トレンチの調査(第46・47図)

a．調査の概要と基本層序

東側に設定したトレンチの中央付近に位置する。調査地の北側に第８次調査Ｇ２トレンチが位置しており、この調査では遺物包含層を確認している。

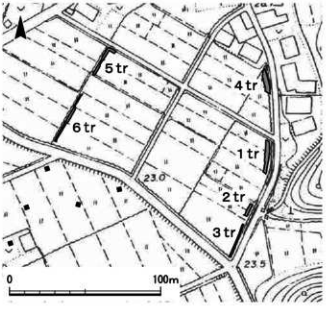
調査では、長さ約22m、幅２～３mのトレンチを設定し、19層直上まで重機で掘削を行った。黒色極細粒砂質シルト層(15層)で古代から平安時代にかけての遺物を含む。トレンチ北側では厚さ20cmで水平に堆積するが、トレンチ中央から南に向かって薄くなり、トレンチ南端では確認できない。15層より下層には黒褐色細礫を含むシルト質極細粒砂(19層)、黒色シルト質極細粒砂(20層)が堆積し、これより下層は締まりの悪い褐灰色を呈する砂礫層(21層)が堆積する。21層は南側に向かって傾斜しており、トレンチの南北両端での標高差は60cmになる。当初、15層の下面で遺構検出を行ったが遺構は確認できなかった。そのため再度掘削を行い、21層上面で遺構検出を実施した。

b．検出遺構

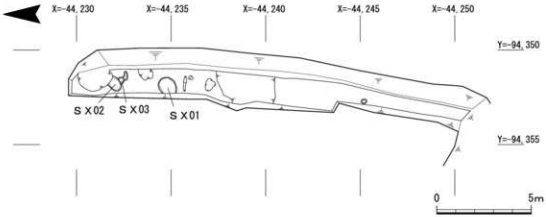
検出した遺構は、円形の土坑３基である。いずれも遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑ＳＸ01(第46・48図)　トレンチ北側西壁付近で検出した。平面は円形を呈し、規模は直径約0.8m、深さ約0.08mを測る。埋土は黒褐色粗粒砂が混じるシルト質極細粒砂で19層から切り込む。掘形平面はやや不鮮明であり、土坑状の落ち込みである可能性が考えられる。

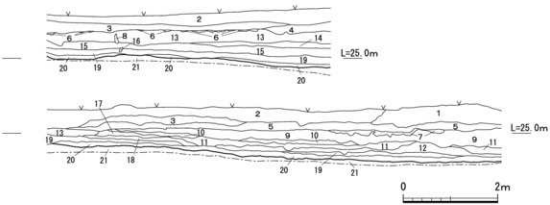
土坑ＳＸ02(第46・48図)　トレンチ北端で検出した。平面楕円形を呈し、



第45図　女布遺跡第９次調査調査区配置図(1/2,500)



第46図　女布遺跡第９次調査１トレンチ遺構配置図(1/200)



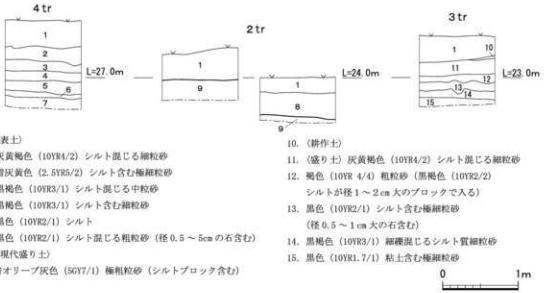
1．(現代盛り土)
2．(盛り土)
3．(旧耕作土) 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂含む粗粒砂
4．(旧耕作土) 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂
5．(旧耕作土) 黒褐色 (10YR3/1) 極細粒砂質シルト
6．灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂
7．褐色 (10YR4/4) 中粒砂
8．黒褐色 (10YR3/2) シルト含む極細粒砂
9．黒色 (7.5YR1.7/1) シルト含む極細粒砂
10．黒褐色 (10YR2/2) 極細粒砂含む粗粒砂
11．黒色 (10YR2/1) 極細粒砂含むシルト
12．黒色 (10YR2/1) 細粒砂含む極細粒砂
13．黒色 (2.5Y2/1) シルト含む極細粒砂
14．黒色 (7.5YR1.7/1) シルト・粗砂混じる極細粒砂
15．黒色 (10YR2/1) 極細粒砂質シルト
16．黒褐色 (10YR3/1) 極細粒砂質シルト
17．黒色 (10YR2/1) 極粒砂
18．褐色 (10YR4/4) 中粒砂
19．黒褐色 (7.5YR2/2) 細礫含むシルト質極細粒砂
20．黒色 (7.5YR2/1) シルト質極細粒砂
21．(地山) 褐灰色 (10YR4/1) 粗粒砂含む粗礫

第47図　女布遺跡第９次調査１トレンチ東壁土層断面図(1/80)

1．黒褐色 (10YR3/1) 粗粒砂混じるシルト質極細粒砂

1．黒色 (10YR2/1) 極細粒砂質シルト
2．黒色 (10YR2/1) 中粒砂含むシルト質極細粒砂

第48図　女布遺跡第９次調査１トレンチ検出遺構土層断面図(1/40)



第49図　女布遺跡第９次調査東側調査区土層柱状図(1/50)

規模は長径0.7m以上、短径約0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は黒色極細粒砂質シルトである。

土坑ＳＸ03（第46・48図）　土坑ＳＸ02の南東側に接して検出した。西側の一部をＳＸ02によって削平される。平面は円形を呈するとみられ、規模は直径0.3m、深さ0.16mを測る。埋土は黒色中粒砂を含むシルト質極細粒砂である。

②２トレンチの調査（第45・49図）

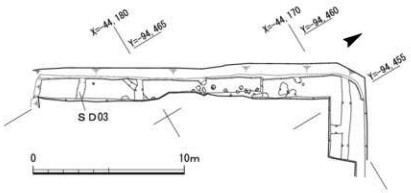
１トレンチの南側に位置するトレンチである。調査地の東側は、尾根筋が市道の脇まで延びる。調査では、現代の盛り土の下層でシルトのブロックを含む暗オリーブ灰色極粗粒砂（９層）を確認した。この層は１トレンチで確認した21層の下層にあたる。９層上面で精査を行ったが、遺構及び遺物は確認できなかった。地山の削平は第８次調査でも確認されており、報告では戦後の耕地整理以前に地山上面が削平されていたとしている。調査地北側の耕作土除去を行った際も壁面と平面に地山が露出しており、地山の削平が１トレンチ南端から２トレンチにかけての広い範囲に及ぶことが明らかとなった。

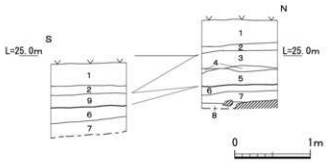
③３トレンチの調査（第45・49図）

２トレンチの南側に位置する。地表下約50cmの12層より下層は、黒色や黒褐色の粘性の強い砂層で木片や有機質を多く含み、湿地状堆積と考えられる。13～15層は、古代以降の遺物を含む２次包含層である。今回の調査では、安定面および遺構は確認できなかった。掘削深度の制限から地山を確認するには至らなかったが、２トレンチとの地山の高低差は1.5m以上となり、急激な高低差が生じる。３トレンチは東側の丘陵から広がる谷筋に位置することから２トレンチと３トレンチの間が谷の北側斜面にあたると考えられる。

④４トレンチの調査（第45・49図）

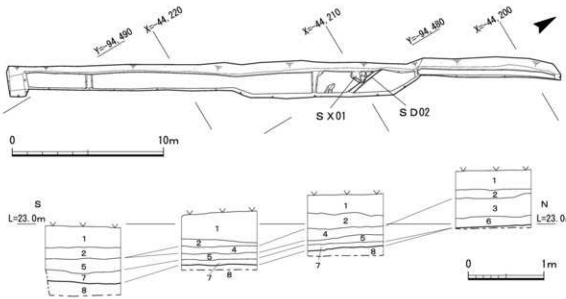
東側に設定したトレンチの北端に位置する。６層から下層は湿地状の堆積である。７層は、黒色シルトが混じる粗粒砂で、弥生時代から中世にかけての遺物が出土したほか、有機質を多く含





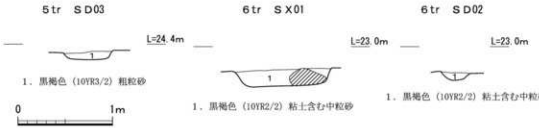
1．（表土）
2．（盛り土）黒褐色（10YR3/2）細礫含む極細砂
3．暗褐色（10YR3/3）細礫含む細粒砂
4．灰黄褐色（10YR4/4）細粒砂
5．黒褐色（10YR3/2）粗粒砂
6．（地山）黒褐色（10YR3/1）細礫含む粗粒砂
7．（地山）黒色（7.5YR2/1）シルト含む粗粒砂
8．（地山）黒色（10YR2/1）粗礫（直径30～150cm大の石多く含む）

第50図　女布遺跡第９次調査５トレンチ遺構配置図(1/250)・土層断面図(1/50)



1．（表土）
2．（盛り土）黒褐色（10YR2/2）細粒砂含むシルト質極細粒砂
3．黒色（10YR2/1）中粒砂（上層に直径１～20cmの石堆積）
4．褐色（7.5YR4/6）細礫含む極細粒砂
5．褐灰色（7.5YR4/1）細礫混じる極細粒砂
6．黒褐色（10YR2/2）粘土含む細粒砂
7．黒褐色（7.5YR3/1）シルト質極細粒砂（直径0.5～3cmの石含む）
8．（地山）黒色（10YR1.7/1）シルト含む極細粒砂

第51図　女布遺跡第９次調査６トレンチ遺構配置図(1/250)・土層断面図(1/50)



第52図　女布遺跡第９次調査５・６トレンチ検出遺構土層断面図(1/40)

む。安定面および遺構は確認できなかった。

⑤５・６トレンチの調査（第50・51図）

調査地の西側に設定したトレンチである。現地表面は、５トレンチの北端と６トレンチの南端で約2.4mの標高差があり、北から南へ向かって緩やかに傾斜している。

a．基本層序

５トレンチの３～５層は灰黄褐色や黒褐色を呈する遺物包含層で、古代以降の遺物が出土した。それより下層は黒褐色細礫含む粗粒砂（６層）、黒色シルト含む粗粒砂（７層）が堆積する。調査では、６層上面で遺構検出を実施した。８層は直径30～150cm大の石を含む粗礫層である。この層は第８次調査でも確認されており、土石流による堆積層と考えられる。

６トレンチは２枚の水田にまたがっており、X=－44.206付近に現代の水田境界の段差がある。それを境として北側と南側で堆積が異なる。１・２層は現代の盛り土である。３層は、境界の北側で確認した黒色中粒砂である。遺物は出土していない。４・５・７層は境界の南側で確認した。４層は、トレンチ中央付近に堆積する褐色細礫含む極細粒砂で、18世紀以降の遺物を含む。５・７層は古代以降の遺物を含む褐灰色または黒褐色の粘性の強い砂質土である。８層は黒色シルト含む極細粒砂で遺物を含まない。５トレンチの７層と同一の堆積と考えられる。調査では８層上面で遺構検出を行った。

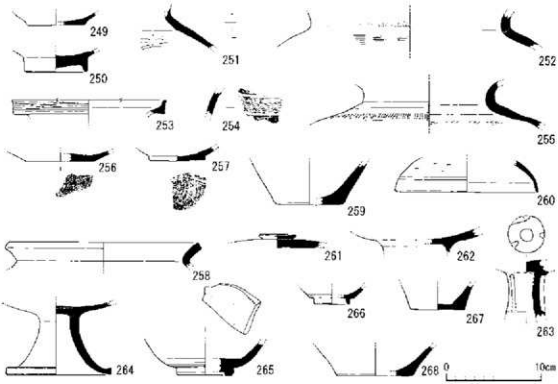
b．検出遺構

検出した遺構は、溝２条、土坑１基である。５トレンチでは、調査面に径0.3m大の礫が点在するが、いずれも下層の土石流により運ばれたと考えられる。

溝ＳＤ03（第50･52図）　５トレンチの南側で検出した北西から南東へ延びる溝である。規模は、幅0.5m、深さ0.1mを測り、検出長は1.4mである。溝の方位は西に対して北に36°振る。９層から掘り込まれており、埋土は黒褐色粗粒砂である。遺物は土師器甕が出土した。

土坑ＳＸ01（第51・52図）　６トレンチの中央よりやや北側で検出した土坑状の遺構である。平面、底面ともに不定形で、その規模は南北約1.0m、東西0.7m以上、深さ約0.2mを測る。埋土は黒褐色粘土含む中粒砂である。遺構内には、直径0.4m前後の礫があるが、遺構に伴うものではなく土石流によって運ばれた礫が下層から露出したものと考えられる。遺物は出土していない。

溝ＳＤ02（第51・52図）　土坑ＳＸ01の北側で検出した南北方向の溝である。中央付近をＳＸ01によって削平されている。規模は、幅0.2m、深さ約0.08mを測り、検出長は約2.5mである。溝



第53図　女布遺跡第９次調査出土遺物実測図(1/4)

の主軸は北に対して西に８°振る。５層から掘り込んでおり、埋土は黒褐色粘土を含む中粒砂である。弥生時代と考えられる土器の細片が出土した。

（３）出土遺物

249・250は１トレンチから出土した遺物である。いずれも15層から出土した。249は、底部を糸切りする土師器皿である。250は、中国製白磁椀Ⅳ類の底部である。高台径は6.0cmを測る。

251・252は、３トレンチの15層から出土した。いずれも須恵器甕の肩部である。251の焼成および還元は不良でやや軟質である。外面はタタキのちカキメで、内面にはわずかに当て具圧痕が残る。252は、外面をタタキ成形し、わずかに残る頸部にも斜方向のタタキが確認できる。

253～257は、４トレンチの湿地状堆積から出土した遺物である。253は、弥生土器甕の口縁部である。外反する口縁で、端部を上方につまみ上げる。口縁外面に４条の擬凹線が巡る。弥生時代後期である。254・255は須恵器甕の破片である。254は、口縁部の破片と考えられる。外反する口縁で、外面に２条の沈線とその間に波状文を施す。破片上部にもわずかに波状文が確認でき、２段もしくは３段に波状文が巡るとみられる。255は、肩部である。タタキ成形し外面にカキメを施す。口縁部はロクロナデで成形する。256は土師器皿の底部である。体部はロクロナデで成形し、底部を糸切りする。257は、須恵質の椀の底部である。底部を糸切りする。

258～265は５トレンチから出土した遺物である。258は、溝ＳＤ03から出土した土師器甕口縁部である。口縁はやや外反しながら外方にのび、口縁端部はヨコナデによって面をつくる。259は、弥生土器甕の底部である。底部外面にケズリを施す。260は、須恵器杯蓋である。古墳時代後期と思われる。261は須恵器蓋である。天井部外面は平坦で、扁平なつまみがつく。262は黒色土器

の底部である。内黒の黒色土器A類で、比較的高い高台がつく。263は三方にスカシをもつ須恵器高杯の脚部である。形状から2段にスカシを施すと考えられる。残存するスカシは切り込みを入れるだけのものである。古墳時代後期である。264はトレンチ東側の耕作土除去中に出土した、須恵器高杯である。脚部は緩やかに外反し、脚部端部に面をもつ。265はトレンチ壁面精査中に出土した中国製青磁椀の底部である。体部内面と見込みに文様を除刻する。

266は6トレンチ4層から出土した萩焼とみられる陶器小杯の底部である。削り出し高台で腰部に明瞭な稜をもつ。釉薬は乳白色を呈し、体部下方まで施釉される。

267・268は6トレンチ東側の耕作土除去中に出土した遺物である。いずれも弥生土器甕の底部である。267は、摩滅が著しく外面の調整は不明瞭である。底部内面は粘土を充填し、その後ユビオサエで成形する。いずれも弥生時代中期後葉と思われる。

（4）小結

今回の調査では、1トレンチで土坑、5・6トレンチで溝・土坑を検出した。それぞれ遺物の出土が少なく明確な遺構の時期は不明である。2トレンチを除く調査地で二次包含層は確認できたが、下層において3・4トレンチでは湿地状堆積、5トレンチでは土石流によると考えられる粗礫層を確認している。調査では、掘削深度の関係もあり確認できなかったが、第8次調査において6トレンチ付近で5トレンチと同一の粗礫層が確認されており、今回の調査地は定住には向かない立地であったことが考えられる。調査範囲においては女布遺跡の集落の広がりを直接示す遺構を確認できなかったが、6トレンチの東側で耕作土除去中に耕作土直下から弥生土器底部がまとまって出土しており、5・6トレンチの東側には集落が展開する可能性がある。

（綾部侑真）

５．まとめ

女布遺跡及び女布北遺跡が所在する佐濃谷川流域では、集落遺跡として知られているものに、河口部に近い久美浜湾に面する段丘上では浦明遺跡及び北東に隣接する日光寺遺跡がある、浦明遺跡では、弥生時代中期及び古墳時代前期から後期の竪穴建物が計９棟、日光寺遺跡では古墳時代前期、後期及び飛鳥時代の竪穴建物計７棟が検出されている。

一方、女布遺跡及び女布北遺跡が位置する佐濃谷川中流域では、周辺の丘陵上で多くの弥生時代の墳墓や古墳時代の古墳が確認されていたが、それらの築造基盤となる集落の実態については必ずしも明らかではない。女布北遺跡では、これまで弥生時代後期末から古墳時代前期の竪穴建物が３棟検出されていたが、南に隣接する女布遺跡については遺物の散布が認められたものの、これまで竪穴建物の検出はなかった。

今回の調査で、女布遺跡で弥生時代から古墳時代の竪穴建物が初めて検出されたことで、周辺に弥生時代から古墳時代の集落が広がっていることがあらためて確認された。特に、平成29年度に確認された古墳時代の竪穴建物は、女布地区の現集落に近接していることから、古墳時代の集落については、現在の女布地区の集落域に重なって広がっている可能性が高まった。

また、女布北遺跡ではこれまでも平安時代の掘立柱建物を検出していたが、今回の調査で新たに平安時代後期の掘立柱建物ＳＢ07を検出したことにより、当地の平安時代における集落の移動を考える手がかりとなった。

なお、丹後地域では平野部が狭小なうえに、平野部での調査履歴が少ないことから、今回の竪穴建物ＳＨ402の床面付近において出土した土器は、丹後地域の古墳時代前期初頭頃の土器組成を考える上で良好な一括資料となる。

（細川康晴）

注１　口径と器高は口縁部から高台まで残存する８点を計測した。

注２　筒井崇史・村田和弘・松尾史子「共同研究　古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討（上）（下）」（『京都府埋蔵文化財情報』第93・94号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004

注３　山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」（『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編）　1995

注４　伊野近富「中世土器の編年（中）」（『京都府埋蔵文化財情報』第59号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

注５　筒井崇史「女布北遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第60冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

注６　小森牧人・若林邦彦「第２節　弥生・古墳時代集落出土の未焼成粘土塊をめぐって－近畿の事例から－」（『岩倉忠在地遺跡』　同志社大学歴史資料館）　2006

付編１　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克也

１．はじめに

京都府京丹後市に所在する女布北遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行なわれている（樹種同定の項参照）。

２．試料と方法

試料は、２区のＳＰ４から出土した柱１点（試料No.1：PLD-33206）である。樹種はクリで、最終形成年輪は残っていなかったが、辺材部が残っていた。発掘調査所見によれば、ＳＰ４は古代末～中世初頭の遺構と考えられている。測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33206	試料 No.1 調査区：２区 遺構：ＳＰ４	種類：生材（クリ） 試料の性状：辺材部 器種：柱 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

３．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、暦年較正結果を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（$\pm 1\sigma$）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-33206 試料 No.1	-26.23 ± 0.10	969 ± 18	970 ± 20	1022-1045 cal AD (36.7%) 1096-1120 cal AD (27.4%) 1142-1147 cal AD (4.1%)	1019-1051 cal AD (43.3%) 1082-1128 cal AD (41.0%) 1135-1152 cal AD (11.1%)

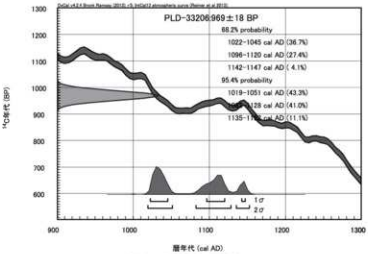


図１　暦年較正結果

４．考察

２区のＳＰ４から出土した柱である試料No.1（PLD-33206）は、2σ暦年代範囲（確率95.4%）が1019-1051 cal AD（43.3%）、1082-1128 cal AD（41.0%）、1135-1152 cal AD（11.1%）で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。発掘調査所見による遺構の推定時期は古代末～中世初頭であり、測定結果は発掘調査所見による推定時期に対して整合的である。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、最終形成年輪が残っておらず、辺材部を測定しており、古木効果の影響を僅かに受けていると考えられる。試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも僅かに新しい年代であったと考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20．日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

付編２　女布北遺跡出土の柱の樹種同定

小林克也(パレオ・ラボ)

１．はじめに

佐濃谷川中流域右岸の河岸段丘上に所在する女布北遺跡から出土した柱の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行なわれている(放射性炭素年代測定の項参照)。

２．試料と方法

試料は、２区のSP４から出土した柱１点(試料No.1)である。発掘調査所見によれば、SP４は古代末～中世初頭の遺構と考えられており、柱の放射性炭素年代測定の結果では11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

３．結果

同定の結果、柱(試料No.1)は広葉樹のクリであった。同定結果を表１に示す。

表１　女布北遺跡出土柱の樹種同定結果一覧

試料No.	地区	出土遺構	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	２区	SP４	柱	クリ	芯去材	PLD-33206

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(１)クリ　Castanea crenata Siebold. et Zucc.　ブナ科　図版１　1a-1c(No.1)

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同

性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

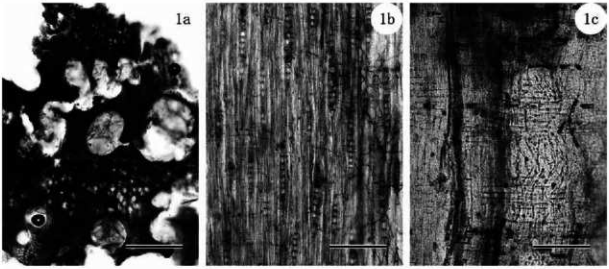
4．考 察

柱（試料No.1）の樹種はクリであった。クリは堅硬で耐久性が高いという材質を持っており（伊東ほか，2011）、柱に適した樹種の一つである。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌．238p．海青社．

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p．海青社．



図版1　女布北遺跡出土の柱の光学顕微鏡写真

1a-1c. クリ(No. 1)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)

付表4　出土遺物観察表

（凡例）
・口径欄の記号　（　）：復元径　・－：該当部位なし
・器高欄の記号　（　）：残存高　・／：測定不能
・残存率は特に断らない限り口径の残存率を示す　・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示

女布北遺跡第7次

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点／遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
1	須恵器	杯蓋	2区	SD02	15.4	(2.0)	－	1/12	灰 7.5Y6/1	内外面：回転ナデ	やや密 径2mm以下の白・乳白粒を少量含む
2	須恵器	杯身	2区	SD02	11.0	(3.1)	－	1/12以上	黒褐 10YR3/1	内面：回転ナデ、摩滅 外面：回転ナデ、摩滅	やや密
3	須恵器	甕	2区	SD02	－	－	－	－	灰白 N7/0	内外面：タタキ	密
4	須恵器	甕	2区	SD02	－	－	－	－	灰白 N7/0	内外面：タタキ	やや密 径4mm以下の白粒含む
5	黒色土器	椀底部	2区	SD02	－	(1.6)	6.0	底）3/12	浅黄橙 10YR8/3	内外面：摩滅	密 径2mm以下の砂粒含む（白・灰・黒・赤茶粒・石英・雲母）
6	黒色土器	椀	2区	SD02	不明	(1.6)	－	不明	褐灰 10YR4/1	内外面：ミガキ	密 径0.5mm以下の微砂粒を含む（白・黒粒・雲母）
7	黒色土器	椀	2区	SD04	不明	(2.6)	－	不明	外）灰黄 2.5Y7/2 内）黒褐 2.5Y3/1	内面：ミガキ　外面：ナデ	密 径1mm以下の黒・赤茶・白粒・石英を含む
8	土師器	皿	2区	SP08	8.6	2.0	－	3/12	灰白 10YR8/2 にぶい橙 7.5YR7/4～6/4	内面：ヨコナデ（ほぼ摩滅） 外面：ヨコナデ、摩滅、糸切り痕か・ほぼ摩滅	密 径1～3mm大の赤斑粒含む
9	黒色土器	椀口縁部	2区	SP08	13.4	(3.8)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい橙 7.5YR7/3	外面：ヨコナデ	密 径1～3mm大の白・半透明砂粒と雲母含む
10	黒色土器	椀口縁部	2区	SP08	16.0	(2.0)	－	1/12以下	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面：ヨコ方向ミガキ	密
11	黒色土器	椀口縁部	2区	SP08	－	(1.7)	－	－	灰白 2.5Y8/1	内面：ヨコ方向ミガキ 外面：ヨコナデ	密
12	黒色土器	椀	2区	SX01	16.2	4.9	－	4/12	灰黄 2.5Y7/2	内面ミガキ（摩滅気味）外面ヨコナデ、糸切り痕	密 径1～3mm大の白・灰砂粒、3mm大の赤砂粒含む
13	黒色土器	椀	2区	SX01	16.0	5.3	6.0	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	内面：不定方向ミガキ　外面：ヨコ方向ミガキ、糸切り痕	密 径1～5mm大の白砂粒・雲母含む
14	黒色土器	椀	2区	SX01	16.7	(5.5)	－	2/12	外）にぶい黄橙 10YR7/2 内）黒褐 2.5Y3/1	－	密
15	黒色土器	椀	2区	SX01	15.8	(5.0)	－	2/12	灰白 2.5Y7/1	外面：ヨコ方向ミガキ	密 径1mm大の白砂粒含む
16	黒色土器	椀	2区	SX01	15.8	5.3	6.8	9/12	黒 N2/0 浅黄橙 10YR8/3	内面：摩滅の為ミガキ不明瞭 外面：ナデ、糸切り痕	密 径2mm以下の白砂粒含む
17	黒色土器	椀	2区	SX01	16.2	5.1	－	1/12	灰白 10YR3/2	外面：ナデ全体に摩滅、糸切り痕	密
18	黒色土器	椀	2区	SX01	16.6	5.4	－	2/12	灰白 10YR8/2	内面：ミガキ　外面：ヨコナデ、摩滅、糸切り痕	密 径1～3mm大の白砂粒含む
19	黒色土器	椀	2区	SX01	15.9	(5.3)	－	4/12	暗灰 N3/0 にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ナデ、ミガキ摩滅の為不明瞭　外面：ナデ	密 径5mm以下の白濁砂粒、径1mm以下の雲母状の砂粒含む
20	黒色土器	椀	調査地中央部	SX01	16.0	(4.0)	－	2/12	にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ミガキ摩滅気味 外面：ヨコナデ	密
21	黒色土器	椀	2区	SX01	16.2	最大）5.95	6.1	2/12	黒褐 2.5Y3/1 淡黄 2.5Y8/3	外面：ナデ、糸切り痕	密 径3mm以下の白・白濁砂粒含む
22	黒色土器	椀	2区	SX01	15.8	5.2	－	1/12	灰白 10YR8/2	－	密 径1～2mm大の白・半透明砂粒含む
23	黒色土器	椀	調査地中央部	SX01	15.2	5.5	－	1/12	灰黄 2.5 Y 7/2	外面：ナデ後ミガキ、糸切り痕（摩滅気味）	密 径1・2mm大の白・灰砂粒含む
24	黒色土器	椀	2区	SX01	15.2	(4.8)	－	4/12	黒褐 2.5Y3/1 灰黄 2.5Y7/2	内外面：ナデ、ヨコナデ	密 径3mm以下の黒灰砂粒・白砂粒・雲母状の砂粒含む
25	黒色土器	杯	2区	SX01	16.6	(4.9)	－	3/12	黄灰 2.5Y6/1	内面：ミガキ 外面：回転ナデ、ケズリ後ナデ	密 径1mm大の白砂粒含む
26	黒色土器	椀底部	2区	SX01	－	(2.5)	6.2	底）9/12	暗灰 N3/0 灰白 2.5Y8/2	内面：摩滅一部ミガキ残る 外面：ナデ、糸切り痕	密 径2mm以下の白砂粒・白濁砂粒含む
27	黒色土器	椀底部	2区	SX01	－	(2.8)	6.4	底）12/12	灰白 2.5Y8/2	内面：ミガキ（暗文）摩滅気味　外面:摩滅、糸切り痕（摩滅気味）	密 径1mm大の白砂粒含む

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点／遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
28	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(2.6)	7.4	11/12	灰黄 2.5Y7/2	内面：ナデ後ミガキ 外面：摩滅、糸切り痕	密 径1～2mm大の白・灰砂粒含む
29	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.9)	6.5	底）9/12	オリーブ黒 10Y3/1 にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ナデ（摩滅） 外面：ナデ、糸切り痕	密 径2mm以下の白・白濁砂粒含む
30	黒色土器	椀 底部	調査地中央部	SX01	－	(2.0)	6.3	底）3/12	黒 7.5Y2/1 灰黄 2.5Y7/2	内面：ミガキ 外面：ナデ、糸切り痕	密 径2mm以下の白砂粒含む
31	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.5)	6.4	底）12/12	外）灰白 10YR8/1 内）黒褐 2.5Y3/1	内面：ミガキ（摩滅）外面：ナデ、糸切り痕、ナデ（摩滅）	密
32	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.8)	7.0	底）12/12	にぶい黄橙 10YR7/2	外面：摩滅、糸切り痕	密 径1mm大の白砂粒含む
33	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.7)	6.6	底）12/12	灰白 2.5Y8/2	内面：ミガキ不定方向　外面：摩滅、糸切り痕（摩滅）	密 径1mm大の白砂粒含む、5mm大の半透明の砂粒含む
34	黒色土器	椀 底部	2区	SX01 最下層	－	(1.8)	6.0	底）完形	内）褐灰 10YR4/1 外）にぶい黄橙 10YR7/3	内面：ミガキ 外面：ナデ、糸切り痕	密
35	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.9)	5.8	底）4/12	褐灰 10YR6/1	外面：ミガキ、糸切り痕	密 径1mm大の白砂粒含む
36	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(2.6)	6.0	底）8/12	灰白 2.5Y8/2	内面：摩滅 外面：摩滅、糸切り痕	密 径1～2mm大の白砂粒・雲母含む
37	黒色土器	椀 底部	調査地中央部	SX01	－	(1.4)	5.9	底）11/12	灰黄 2.5Y7/2	内面：摩滅著しく調整不明 外面：摩滅、工具によるケズリ	密 径1mm前後の白砂粒含む
38	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.5)	5.6	底）9/12	黒 N2/0 にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ミガキ　外面：ナデ、糸切り痕（糸切り後ケズリか）	密 径2mm以下の白砂粒含む
39	黒色土器	椀 底部	2区	SX01	－	(1.4)	6.9	底）5/12 以上	外）浅黄橙 7.5YR8/3 内）灰 N4/0	内面：ミガキ（摩滅） 外面：ナデ、糸切り痕	密
40	黒色土器	Ⅲ	調査地中央区	SX01	11.6	(2.2)	－	2/12	黒褐 2.5Y3/1	内外面：ナデ	密 径5mm以下の白砂粒含む
41	黒色土器	Ⅲ	調査地中央部	SX01	9.6	1.8	－	6/12	黒 2.5GY2/1 灰黄 2.5Y7/2	内面：ミガキ（摩滅）、糸切り痕（摩滅）	密 径2mm以下の白砂粒含む
42	黒色土器	Ⅲ	2区	SX01	9.4	1.8	－	3/12	黒 N2/0 褐灰 10YR6/1	外面：ミガキ（摩滅）、糸切り痕	密 径1mm以下の白砂粒・雲母状の砂粒含む
43	須恵器	杯	2区	SX01	15.5	(3.5)	－	1/12	灰 N4/0 灰白 5Y7/1	内面：回転ナデ（摩滅気味） 外面：回転ナデ	やや密
44	白磁	椀	2区	SX01	15.6	(3.6)	－	1/12	釉）黄灰 2.5Y7/2 素地）灰白 7.5Y8/1	内外面：施釉	精良
45	白磁	椀	2区	SX01	－	(1.3)	－	－	灰白 10Y7/1	－	密
46	土師器	Ⅲ	2区	SX01	9.0	1.6	－	9/12	灰白 10YR8/2 にぶい橙 5YR7/3	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ、糸切り痕	密 径1～2mm大の白砂粒・雲母含む
47	土師器	Ⅲ	2区	SX01	7.4	1.6	－	15/12	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：摩滅 外面：摩滅、ヨコナデか	密 径1mm大の白砂・赤褐粒を含む
48	土師器	Ⅲ	2区	SX01	8.0	(1.2)	－	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面：ヨコナデ	密 径1mm以下の白・褐砂粒・赤褐粒を含む
49	土師器	Ⅲ	2区	SX01	9.0	(1.7)	－	1/12	内）にぶい橙 5YR7/3 外）橙 5YR6/6	内外面：ヨコナデ	密
50	土師器	Ⅲ 口縁部	2区	SX01	－	(1.5)	－	－	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面：摩滅、ヨコナデか	密
51	土師器	Ⅲ	2区	SX01	/	(2.9)	－	－	にぶい橙 5YR7/4	内外面：摩滅（ナデか）	密径1～2mm大の白砂粒を含む
52	土師器	Ⅲ 口縁部	2区	SX01	－	(2.1)	－	－	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面：ヨコナデ	密 径1mm大の白砂粒を含む
53	土師器	Ⅲ 口縁部	2区	SX01	－	(2.6)	－	－	にぶい橙 5YR6/4	内外面：ヨコナデ	密 径1mm以下の白砂粒を含む
54	土師器	Ⅲ	2区	SX01	－	(1.8)	－	不明	灰白 2.5Y8/1	内外面：ヨコナデ	密
55	土師器	盤 口縁部	2区	SX01	－	(2.0)	－	－	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：摩滅、沈線　外面：表面摩滅黒斑あり、ヨコナデ	密 径1mm大の白・灰砂粒を含む
56	土師器	杯／Ⅲ 底部	2区	SX01 最下層	－	(2.8)	6.2	底）5/12	灰白 10YR8/2	内外面：摩滅、糸切り痕	密 径1～3mm大の半透明・白砂粒を含む
57	土師器	甕 底部	2区	SX01	－	(1.6)	7.8	2/12	浅黄 2.5Y7/3	内外面：摩滅	粗 15mm前後白・灰砂粒多く含む
58	土師器	甕	調査地中央部	SX01	23.0	(7.3)	－	15/12（歪みあり）	灰黄 2.5Y7/2	内面：ヨコ方面ハケ　外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タテ方向ハケ（14mmに6条）	密 径1～5mm大の白・半透明砂粒・雲母含む

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点／遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
59	土師器	鉢	2区	SX01	15.0	(4.3)	－	2/12以下	外）灰黄褐 10YR6/2 内）褐灰 10YR4/1	内面：ヨコナデ　外面：ヨコナデ、ケズリ後ナデ	密 径2mm以下の白・乳白粒含む
60	土師器	鉢	2区	SX01	13.6	6.8	－	3/12	黄灰 2.5Y5/1	内面：ヨコ方向のケズリか、ユビオサエ　外面：ヨコ方向のケズリか、ユビオサエ	やや粗 径2mm以下の白・白濁・黒灰砂粒を含む
62	弥生土器	高杯脚部	3区	第2面精査	－	(3.3)	15.0	底）1/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面：摩滅、ヨコナデ 端部外面：凹線文	密 径3mm以下の白・白濁色砂粒含む
63	土師器	小形丸底壺	3区	第3面精査	10.4	(5.6)	－	2/12	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面：ミガキ	密 径2mm以下の白・白濁砂粒・赤斑粒含む
64	土師器	高杯杯部	3区	黒色土層1	15.2	(4.5)	－	2/12	橙 5YR7/6	内外面：ハケ後ナデ	密 径1～4mm大の白砂粒、1mm位の黒・褐砂粒・雲母含む
65	土師器	壺	1区	第3面精査中	18.2	(7.8)	－	15/12	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ケズリ 外面：摩滅	密 径1～2mm大の白・半透明砂粒を含む
66	須恵器	甕	1区	瓦溜	12.8	(5.5)	－	4/12	灰白 N7/0	内外面：回転ナデ	密 径4mm以下の白・白濁砂粒含む
67	須恵器	杯蓋	1区	第2面精査	11.6	(2.3)	－	1/12以下	灰 N6/0	－	密 径1mm大の白砂粒を含む
68	須恵器	高杯	2区	調査区北東隅砂層	11.0	7.9	10.0	11/12	青灰 5B5/1	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、ケズリ、ナデ	粗 径5mm以下の白濁・白砂粒含む
69	須恵器	高杯杯部	2区	第2面精査	12.0	(3.6)	－	1/12以下	灰 7.5Y4/1	内外面：回転ナデ	密
70	須恵器	高杯杯部	2区	第2面精査	10.8	(2.5)	－	1/12	灰 5Y6/1	内外面：回転ナデ	密 径1～5mm白粒を含む
71	須恵器	平瓶口縁部	2区	第2面	9.4	(3.8)	－	1/12	灰白 N7/0	内外面：回転ナデ	密
72	須恵器	杯蓋	2区	遺構面精査	9.8	4.7	－	1/12	灰白 10YR7/1	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、ハケメか	密 径4mm以下の白砂粒含む
73	須恵器	杯蓋	1区	調査区北東隅砂層	12.3	4.3	－	9/12	灰白 5Y8/1	内面：回転ナデ（摩滅） 外面：回転ナデ（摩滅）、ケズリ（摩滅）	密 径7mm以下の白濁色・白砂粒含む
74	須恵器	杯蓋	3区	南壁	12.2	(3.8)	－	2/12	明青灰 5B7/1	内面：回転ナデ、ナデ 外面：回転ナデ	密 径1mm以下の白・黒灰砂粒含む
75	須恵器	杯蓋	2区	第2面精査	(10.7)	(2.7)	－	1/12	外）灰 2.5Y7/1 内）褐灰 10YR6/1	内外面：回転ナデ	密
76	須恵器	杯蓋	2区	遺構面精査	－	(2.9)	－	不明	にぶい橙 5YR7/4	内外面：ナデ、摩滅気味	密 径1～2mm大の白砂粒を含む
77	須恵器	杯蓋	1区	2面精査	13.4	(3.3)	－	2/12	灰白 N7/0	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ、ケズリ	密 径1mm以下の黒斑粒を含む
78	須恵器	杯蓋	2区	1面精査	9.0	(1.9)	－	1/12	灰白 N7/0	外面：回転ナデ	密 径1～2mm大の白砂粒・黒斑粒含む
79	須恵器	杯蓋	1区	2面精査	11.3	4.1	－	6/12	浅黄橙 10YR8/4	内面：ナデ、回転ナデ 外面：ケズリ	密 径5mm以下の白濁砂粒含む
80	須恵器	杯蓋	1区	第2面精査	12.8	(3.0)	－	1/12	灰白 N7/0	内面：回転ナデ　外面：回転ナデ、摩滅気味ケズリ	密 径1mm大の白砂粒を含む
81	須恵器	杯身	2区	法面表土	13.8	3.9	－	6/12	灰白 10YR8/2	内外面：回転ナデ（摩滅）	密 径3mm以下の白・白濁砂粒、径1mm以下の雲母状の砂粒含む
82	須恵器	杯身	2区	第1面砂層	10.4	(2.4)	－	1/12	灰白 N7/0	内外面：回転ナデ	密 径1mm大の白砂粒含む
83	須恵器	杯身	1区	砂層精査	不明	－	－	1/12以下	褐灰 10YR5/1	内面：回転ナデ 外面：ケズリか	密 径1mm以下の白・黒灰砂粒含む
84	須恵器	杯身	2区	アゼ1	9.8	3.1	－	2/12	灰白 N7/0	内面：ヨコナデ、一定方向ナデ　外面：ヨコナデ、ケズリ、ヘラ切り	密 径1mm大の黒・白砂粒含む
85	須恵器	杯	2区	遺構面精査	－	(1.5)	7.6	底）4/12	灰白 N7/0	内外面：回転ナデ	密 径1mm以下の白・黒灰砂粒含む
86	須恵器	杯	2区	遺構面精査	－	(2.0)	13.2	2/12	灰白 5Y7/1	内面：回転ナデ（摩滅） 外面：回転ナデ	密 径2mm以下の白砂粒含む
87	須恵器	杯	1区	2面精査	12.6	5.0	－	1/12以下	浅黄橙 10YR8/3	内面：摩滅、ヨコナデ 外面：ナデ、ヨコナデ、ヘラ切り	密 径5mm以下の白砂粒含む
88	土師器	甕	－	断ち割り2	18.8	(3.9)	－	1/12	にぶい褐 7.5YR5/4	内面：ヨコナデ、ケズリ 外面：ヨコナデ、ハケ	やや粗 径3mm以下の白濁砂粒含む
89	土師器	皿口縁部	－	断ち割り2	不明	(2.5)	－	－	灰白 2.5Y8/1	内面：ヨコナデ、摩滅 外面：ヨコナデ	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点／遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
90	土師器	皿 口縁部	3区	第2面 精査	不明	(1.6)	－	－	灰白 2.5Y8/1	内外面：ヨコナデ	密
91	土師器	皿 口縁部	2区	砂層精査	不明	(1.6)	－	－	灰白 2.5Y8/1	内外面：ヨコナデ	密 径1mm 大の半透明・白・灰砂粒を含む
92	土師器	杯／皿	2区D－5	第1面 精査	－	(2.0)	6.0	不明	浅黄橙 10YR8/4	内面：摩滅 外面：ヨコナデ	密 径1mm 以下の白・雲母状の砂粒含む
93	黒色土器	椀	2区	第2面 精査	15.0	(4.2)	－	1/12 以下	内）黒褐 2.5Y3/1 外）灰白 10YR8/2	内面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ（摩滅）、ミガキ 外面：ヨコナデ、ミガキ	密
94	青磁	椀 口縁部	調査地中心部	重機掘削	不明	(2.6)	－	不明	素地）灰白 N8/0 釉）明オリーブ灰 5GY7/1	－	精良
95	白磁	椀 口縁部	－	－	不明	(2.5)	－	－	素地）灰白 N8/0 釉）透明か	－	精良

女布遺跡第３次

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
111	弥生土器	甕	1トレ	SP115	20.0	(3.0)	－	0.5/12	外）褐灰 10YR6/1 内）にぶい黄橙 10YR 7/3	内外面：摩滅 口縁部：キザミメ	径8mm 大の白い石粒と径2mm 以下の砂粒含む
112	弥生土器	甕	1トレ	SH101	14.6	(2.9)	－	1/12 以下	浅黄橙 10YR8/4	内外面：摩滅	径2mm 以下の砂粒含む
113	弥生土器	甕 底部	2トレ	SH02	－	(2.8)	5.4	2/12	にぶい褐 7.5YR5/3	内面：ケズリ 外面：ハケ	径5mm 大の白い石粒と径2mm 以下の砂粒多く含む
114	弥生土器	甕 底部	2トレ	SP205	－	(3.2)	3.4	1/12	灰黄褐 10YR4/2	内面：ケズリ 外面：ハケ	径5mm 大の石粒と径2mm 以下の砂粒多く含む
115	弥生土器	甕	2トレ	SH201	13.6	(4.6)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内面：ナデ・ユビオサエ 外面：ナデ	径3mm 以下の砂粒多く含む
116	弥生土器	甕	2トレ	SH201	12.4	(2.2)	－	0.5/12	にぶい橙 5YR6/6	内外面：ハケ・ナデ	径5mm 大の石粒と径1mm 以下の砂粒含む
117	弥生土器	甕 底部	2トレ	SH201	－	(4.6)	5.2	底部のみ	にぶい褐 7.5YR 6/3	内面：ケズリ 外面：ハケ	径3mm 以下の砂粒多く含む
118	弥生土器	壺の取手	2トレ	SH201	－	－	－	完存	灰 2.5Y8/2～淡黄橙色 10YR8/3		径4mm 大の石粒と径2mm 以下の砂粒含む
119	土師器	高杯の杯部／器台	2トレ	SH201	14.0	(2.7)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面：ハケ	径3mm 以下の砂粒含む
120	弥生土器	甕／壺 口縁部	2トレ	SH201	12.0	(1.7)	－	1/12	橙 5YR7/6	内外面：ハケ 口縁部：ナデ	径2mm 以下の砂粒多く含む
121	土師器	高杯の脚部	2トレ	SH201	－	(5.2)	15.6	1/12 弱	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面：摩滅	径3mm 以下の砂粒多く含む
122	弥生土器	台付壺か	2トレ	SH201	－	(2.8)	－	－	黒褐 2.5Y3/1	内面：ナデ 外面：竹管文	径0.5mm 以下の微砂粒含む
123	弥生土器	短頸壺	9－2トレ	包含層	17.8	(6.4)	－	1/12 強	にぶい黄橙 10YR 7/2	内面：ハケ　外面：摩滅・細いヘラ状工具痕　口縁部：キザミメか	径2mm 以下の砂粒多く含む
124	弥生土器	台付甕	8－2トレ	土器溜まり	24.0	(6.0)	－	1/12 強	にぶい黄橙 10YR6/3	内面：ナデ・ケズリ　外面：ミガキ　口縁部：4条の凹線文・ナデ・煤付着	径4mm 大の白い砂粒と径2mm 以下の砂粒多く含む
125	弥生土器	壺／甕 口縁部	8－2トレ	河川堆積層	16.0	(1.9)	－	1/12 強	にぶい橙色 5YR6/4	外面：ナデ　内面：剥離　口縁部：ハケ	径3mm 以下の砂粒含む
126	弥生土器	長頸壺	8－2トレ	土器溜まり	13.0	(17.7)	－	5/12	にぶい橙 7.5YR6/4	外面：ハケのちナデ　内面：ハケのちナデ・ケズリ	径3mm 以下の砂粒含む
127	弥生土器	甕	8－2トレ	土器溜まり	－	(14.0)	5.0	5/12	にぶい橙 7.5YR6/4～にぶい黄 2.5Y6/3	外面：ハケ・指圧痕　内面：ケズリ	径10mm 大の白い石粒と径3mm 以下の砂粒多く含む
128	弥生土器	鉢	1トレ	P119	－	5.5	3.8	底）3/12	橙 7.5YR7/6）・黒褐 2.5Y3/1	内面：ケズリか全体に摩滅著しい　外面：ハケかタタキか	径3mm 以下の砂粒多く含む
129	弥生土器	高杯	8－2トレ	土器溜まり	18.4	(8.6)	－	杯部体部完存	にぶい黄橙 10YR 7/3	内面：ハケ・ケズリ　外面：ハケのちミガキ　口縁部：キザミメ	径3mm 以下の砂粒多く含む
130	弥生土器	高杯	8－2トレ	河川堆積層	－	(13.8)	12.0	底）3/12 脚部完存	にぶい黄橙 10YR7/3	杯部内面：ナデのちミガキ 杯部内面：ケズリ・ナデ　脚部外面：ミガキ・ナデ　脚部内面：ケズリ・ナデ	径3mm 以下の砂粒含む
131	須恵器	杯蓋	2トレ	P217	14.0	(4.2)	－	1/12 （検部分）	灰白色（N7/0）	内面：回転ナデ 外面：ヘラケズリ・回転ナデ	径1mm 以下の砂粒含む

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
132	黒色土器	椀	2トレ	SP209	17.8	(4.1)	－	1/12	外）にぶい黄橙10YR7/4 内）黒褐2.5Y3/1	内面：ヘラケズリのちミガキ 外面：ヘラケズリ	径2mm以下の砂粒含む
133	土師器	皿	2トレ	SP201	12.0	1.5	－	1/12弱	橙2.5YR6/8	内外面：摩滅	径1.5mm以下の砂粒含む
134	土師器	皿	2トレ	SP231	8.0	1.3	－	3/12	灰黄褐10YR5/2	内面：ナデ 外面：ナデ・ユビオサエ	径1mm以下の微砂粒含む
135	土師器	皿	2トレ	SP231	10.0	(2.5)	－	1/12強	褐灰10YR5/1	外面・内面：ナデ	径1mm以下の微砂粒含む
136	青磁	椀	2トレ	SK220	16.0	(5.7)	－	1/12	明緑灰7.5GY7/1	－	径0.5mm以下の微砂粒含む
137	陶磁器古瀬戸	鉢	1トレ	重機掘土中	30.0	(5.5)	－	1/12	オリーブ黄5Y6/3	－	径1mm以下の微砂粒含む

女布遺跡第6次

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
140	須恵器	杯B蓋	1トレ	SD101	－	(1.5)	－	不明	灰N6/0	内面：一定方向ナデ、回転ナデ　外面：ナデ	密
141	須恵器	杯B	1トレ	SD101	－	(1.7)	11.4	6/12	灰白5Y7/1	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、ヘラ切り	密、転用硯か
142	須恵器	蓋	1トレ	SD102	10.8	(1.1)	－	1/12	灰N5/0	内外面：回転ナデ	密
143	須恵器	蓋	1トレ	SD102	11.8	(1.3)	－	1/12	灰黄2.5Y7/2	内外面：回転ナデ	密
144	須恵器	蓋	1トレ	SD102	15.7	(2.0)	－	1/12強	灰白2.5Y7/1	内外面：回転ナデ	密
145	黒色土器	椀	1トレ	SD102	－	(5.5)	6.5	底）12/12	外）にぶい黄橙10YR7/2 内）黒10YR1/7	内面：ミガキ 外面：ナデ、糸切り痕	やや密
146	弥生土器	高杯脚部	1トレ	谷地形	－	(11.1)	－	不明	にぶい黄橙10YR7/3	内面：横方向ケズリ 外面：タテ方向ミガキ（摩滅気味）、凹線文	密 1～2mm大の白・淡橙砂粒を含む、内面：粘土紐り痕
147	弥生土器	高杯脚部	1トレ	谷地形	－	(11.0)	－	不明	にぶい橙7.5YR7/3	杯部内面：摩滅著しい、粘土充填　脚内面：ナデ　脚・杯部外面：縦方向ミガキ	密 1～3mm大の白・半透明砂粒含む
148	弥生土器	高杯脚部	1トレ	谷地形	12.0	(3.2)	－	15/12	にぶい黄橙10YR6/3	内面：ケズリ、ユビオサエ 外面：ミガキ、ヨコナデ	密 1～3mm大の白砂粒含む
149	弥生土器	把手	1トレ	谷地形	長さ5.5	幅3.1	厚さ2.3	不明	にぶい黄橙10YR7/2	外面：ナデ、ユビオサエ、ハケメ	やや粗 径4mm以下の白・白濁砂粒を含む
150	白磁	椀	2－Aトレ	精査	15.6	(3.5)	－	1/12	釉）灰白7.5Y7/1 素地）灰白2.5Y8/1	内外面：施釉	密
151	白磁	椀底部	2－Aトレ	精査	－	(2.0)	5.8	1/12	釉）灰白7.5Y7/2 素地）灰白7.5Y8/1	内面：施釉	密
152	土師器	鉢	2－Bトレ	SK219	15.8	(3.9)	－	1/12	外）にぶい橙7.5YR6/4 内）にぶい黄橙10YR7/3	内面：摩滅 外面：ヨコナデ、不定方向ナデ、ユビオサエ	密 1mm以下の褐・赤砂粒含む
153	土師器	高杯脚部	2－Bトレ	SK219	－	(5.1)	－	不明	外）にぶい橙7.5YR7/3 内）橙7.5YR7/6	内面：ヨコナデか 外面：ヨコナデ	密 1～3mm大の白・半透明・褐砂粒含む
154	弥生土器	台付鉢	2－Bトレ	谷地形	15.0	(3.6)	－	1/12	にぶい橙7.5YR6/4	内面：ナデ、ミガキ、外面：ナデ、口縁：擬凹線	やや粗 0.5～0.3mm白砂粒　1mm前後茶砂粒含む
155	弥生土器	甕	1トレ	谷地形	(17.4)	(4.1)	－	1/12	にぶい橙7.5YR7/3	内面：ナデ、ケズリ 外面：ナデ、ハケ	密 白・灰色礫含む
156	弥生土器	壺底部	1トレ	谷地形	－	(5.1)	10.0	3/12	にぶい黄橙10YR6/3	内面：ケズリ、ユビオサエ、ナデ　外面：ミガキ（一部摩滅）	やや粗 径5mm以下の白・白濁砂粒、赤褐粒を含む
157	弥生土器	鉢	2－Bトレ	谷地形	26.1	(4.6)	－	1/12	にぶい黄橙10YR7/3	内面：ナデ後ミガキ、ヘラケズリ後ミガキ　外面：ミガキ、ナデ後一部ミガキ	やや粗 0.5～2mm白・グレー砂粒含む、雲母含む
158	土師器	皿	2－Bトレ	谷地形	－	(2.4)	7.6	2/12	にぶい橙7.5YR6/4	内面：ナデ 外面：ナデ、糸切り痕か	やや密 0.5mm茶砂粒、金雲母多く含む
159	土師器	皿	3トレ	SK301	8.6	(1.5)	－	3/12	灰白10YR8/2	内外面：回転ナデ 外面：糸切り痕	密 径4mm以下の白砂粒、雲母状砂粒含む
160	土師器	皿	3トレ	SK301	8.0	1.8	4.0	3/12	浅黄2.5Y7/3	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、糸切り痕	密 金雲母含む

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
161	黒色土器	椀	3トレ	SK301	16.2	(3.9)	－	3/12	黒 N2/0、灰 5Y5/1	内外面：ヨコナデ 外面：ミガキ	密 径3mm以下の白砂粒含む
162	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	15.6	(4.7)	－	2/12	灰 N4/0、灰白 7.5Y7/1	内面：ミガキ 外面：ナデ	密 径6mm以下の白砂粒、雲母状砂粒含む
163	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	16.8	(3.9)	－	2/12	黒 10Y2/1、灰白 2.5Y8/2	内面：ミガキ 外面：ナデ	密 径2mm以下の白砂粒含む
164	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	16.6	(4.4)	－	2/12	黒 N2/0、灰白 7.5Y7/1	内面：ミガキ 外面：ナデ、ミガキ	密 径1mm以下の白・黒灰砂粒含む
165	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	(15.8)	(5.2)	－	1/12	内）暗灰 N3/0 外）灰黄 2.5Y7/3	内外面：ミガキ	やや密　1mm前後の白砂粒少量含む
166	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	(15.8)	(3.8)	－	1/12	黒褐 2.5Y3/1　灰黄褐 10YR6/2	内面：ミガキ 外面：ナデか（摩滅）	密 径4mm以下の白・白濁砂粒含む
167	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	－	(1.5)	6.4	9/12	灰黄 2.5Y7/2、黒 N2/0	内面：ミガキ 外面：ナデ、糸切り痕	密 径5mm以下の白砂粒含む
168	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	－	(1.3)	6.9	12/12	外）明黄褐 10YR7/4 内）黒 10YR2/1	内面：摩滅 外面：ナデ、糸切り痕	やや粗 1mm前後白砂粒含む
169	黒色土器	椀	3トレ	SK304、305	－	(2.0)	6.4	12/12	暗灰 N3/0、灰白 7.5YR8/1	内面：摩滅 外面：ナデ、糸切り痕	密 径2mm以下の白・白濁砂粒含む
170	土師器	皿	3トレ	SK304、305	－	(1.5)	4.3	6/12	褐灰 10YR6/1	内面：ナデか（摩滅） 外面：ナデ	密 径1mm以下の雲母状砂粒含む
171	土師器	底部	3トレ	SK304、305	－	(1.7)	－	不明	灰白 2.5Y8/2	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：摩滅	密 径3mm以下の白砂粒、雲母状砂粒含む
172	須恵器	杯B	3トレ	SK304、305	－	(4.2)	6.6	4/12	オリーブ灰 2.5GY6/1	内外面：回転ナデ	密 径3mm以下の白砂粒含む
173	須恵器	杯／椀	3トレ	SK304、305	－	(1.8)	5.8	6/12	灰白 2.5Y7/1	内面：ナデ 外面：ナデ、糸切り痕	密
174	黒色土器	椀底部	3トレ	SK316	－	(1.7)	6.5	10/12	外）灰黄 2.5YR7/2 内）黒 2.5Y2/1	内面：ミガキ 外面：ナデ、糸切り痕	やや密
175	黒色土器	椀／皿底部	3トレ	精査	－	(1.5)	5.8	4/12	外）灰白 2.5Y8/2 内）オリーブ黒 5Y3/1	内面：ミガキ 外面：ナデ、糸切り痕（ほぼ摩滅）	密
176	黒色土器	皿底部	3トレ	包含層	8.6	1.7	4.9	2/12	黒褐 10YR3/1	内面：摩滅、ナデ 外面：ナデ（摩滅）、糸切り痕	密 径1mm以下の白砂粒含む
177	土師器	椀／皿底部	3トレ	精査	－	(0.8)	5.5	9/12	灰黄 2.5Y7/2	内外面：摩滅、ナデ	密
178	土師器	皿底部	3トレ	精査	－	(0.8)	4.6	底）12/12	灰黄 2.5Y7/2	内面：摩滅 外面：ナデ、糸切り痕	やや密 金雲母含む
179	土師器	皿底部	3トレ	包含層	8.2	(1.5)	－	4/12	淡赤橙 2.5YR7/3	内外面：ヨコナデ、 外面：糸切り痕	密 径2mm以下の白砂粒、雲母状砂粒含む
180	須恵器	椀底部	3トレ	精査	－	(2.2)	6.6	10/12	灰 7.5Y5/1	内面：ヨコナデ（摩滅） 外面：ヨコナデ、糸切り痕	密 1mm大の白砂粒含む
181	須恵器	壺底部	3トレ	壁面	－	(3.6)	12.8	1/12以下	灰 N6/0	内面：ナデ 外面：ナデ後ユビナデ	やや密 1mm前後の白・黒・茶砂粒含む
182	土師器	羽釜	3トレ	包含層	20.6	(5.0)	－	1/12	灰白 2.5Y8/2	内面：ナデ 外面：ヨコナデ、ナデ、ユビオサエか	やや密
183	磨製石斧	太型蛤刃石斧	3トレ	包含層	長(5.7)	幅 7.5	厚(3.7)	－	－	－	－
184	石製品	砥石	3トレ	包含層	長(7.2)	幅 3.9	厚 2.8	－	灰白 5Y7/1	－	仕上げ砥石、重さ13 g
185	土師器	短頸壺	4トレ	SH402	11.6	(3.6)	－	1/12	黒褐 10YR3/2	内面：ナデ 外面：ナデ、強いナデ	やや粗 1mm前後の白・茶砂粒含む
186	土師器	甕	4トレ	SH402	17.0	(3.7)	－	1/12	にぶい橙 7.5YR6/4	内面：ナデ（摩滅） 外面：ヨコナデ、ナデ	やや粗 1mm前後の白・茶・灰砂粒多く含む
187	土師器	甕	4トレ	SH402	16.2	(4.4)	－	1/12	灰白 10YR8/2	内面：摩滅 外面：ヨコナデ、ナデ	粗 1～3mm白・茶・灰砂粒含む
188	土師器	甕	4トレ	SH402	18.0	(4.2)	－	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面：摩滅 外面：強いナデ	やや粗 1mm前後の白・茶・黒砂粒含む
189	土師器	甕	4トレ	SH402	16.0	(7.1)	－	4/12	にぶい褐 7.5YR5/3	内面：ハケ後ケズリ、ナデ 外面：タテハケ、ナナメハケ、ヨコナデ	やや粗
190	土師器	甕	4トレ	SH402	14.7	(7.5)	－	2/12	外）褐灰 5YR4/1 内）褐灰 5YR5/1	内面：ヨコハケ後ケズリ、 外面：ヨコナデ、ヨコハケ	密 1～3mm大の白・半透明・赤褐砂粒含む
191	土師器	甕	4トレ	SH402	19.6	(5.5)	－	25/12	灰黄 2.5Y7/2	内面：ケズリ、ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ、タテハケか（摩滅）	粗 0.5～1mm位の白・灰白・黒灰・茶褐小石多く含む

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
192	土師器	甕	4トレ	SH402	19.8	(11.3)	－	3/12	にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ケズリ、ナデ 外面：ナデ、ハケ	粗 0.5～2mm位の白灰・白・茶褐小石多く含む
193	土師器	甕	4トレ	SH402	14.4	(20.5)	－	10/12	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：タテ・ヨコ方向ケズリ、ヨコナデ 外面：タテハケ	密 径6mm以下の白濁砂粒含む
194	土師器	高杯脚部	4トレ	SH402	脚部直径 4.0	(6.1)	－	不明	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：タテナデか　外面：摩滅	密 1～3mm大の白・灰・茶・半透明砂粒含む
195	土師器	高杯脚部	4トレ	SH402	－	(6.4)	13.0	3/12	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：ヨコナデか（摩滅） 外面：摩滅	密 1～5mm大の白・半透明灰砂粒含む
196	土師器	台付鉢か	4トレ	SH402	13.6	6.8	－	4/12	浅黄橙 10YR8/3	内面：摩滅 外面：ヨコナデ、ユビオサエ、（摩滅）	密 1～4mm大の白・半透明赤褐・灰砂粒含む
197	土師器	鉢	4トレ	SH402	最大幅 13.4	(5.5)	－	不明	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面：摩滅	密 1mm大の白砂粒含む
198	土師器	鉢	4トレ	SH402	9.0	6.5	－	12/12	にぶい橙 7.5YR7/3 橙 7.5YR6/6	内面：ケズリ、ナデ 外面：タテ方向ミガキ	密 1～2mm大の白・灰・赤褐・黒砂粒含む
199	土師器	ミニチュア鉢	4トレ	SH402	5.3	4.5	2.6	12/12	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：ナデか 外面：ナデ、ユビオサエ	粗 0.5～1mm位の白・灰・茶褐小石多く含む
200	弥生土器	壺 底部	4トレ	SH402	－	(15.0)	5.6	3/12	外）浅黄橙 10YR8/3 にぶい橙 7.5YR7/3、内）灰白 7.5Y7/1	内面：ヨコナデか（摩滅） 外面：摩滅	密 1～5mm大の白・半透明・灰・赤褐砂粒含む
201	土師器	手焙形土器	4トレ	SH402	－	－	－	－	にぶい黄橙 10YR6/3 灰黄褐 10YR6/2	内面：ケズリ、ユビオサエ 外面：ナデか（摩滅）	密 1～3mm大の白・灰・赤褐砂粒
202	土師器	手焙形土器か	4トレ	SH402	－	(2.3)	4.4	8/12	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面：ナデか	密 1～4mm大の白・半透明褐砂粒含む
203	弥生土器	甕 口縁部	4トレ	SH402	17.0	(2.3)	－	1/12以下	にぶい褐 7.5YR5/3 にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ナデ、ケズリ 外面：ナデ、擬凹線	密 1～2mm大の白・半透明・赤褐砂粒含む
204	弥生土器	甕 口縁部	4トレ	SH402	18.1	(2.9)	－	1/12以下	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面：ナデ 外面：ナデ、擬凹線	密 1mm大の白・半透明・にぶい橙砂粒含む
205	土師器	甕 口縁部	4トレ	SH402	16.6	(3.2)	－	1/12以下	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面：ナデ	密　1～2mm大の白・半透明・褐灰砂粒含む
206	弥生土器	甕 口縁部	4トレ	SH402	15.8	(3.4)	－	1/12	灰白 10YR8/1	内面：ナデ 外面：摩滅	やや粗 0.5mm前後白・茶・灰砂粒多く含む
207	土師器	甕 口縁部	4トレ	SH402	16.0	(7.3)	－	1/12以下	にぶい橙 5YR6/4	内外面：タテ方向ハケか（摩滅）	密 1～3mm大の白・半透明灰砂粒含む
208	土師器	甕 口縁部	4トレ	SH402	14.2	(8.0)	－	1/12	灰白 10YR8/2	内面：摩滅 外面：タテハケ	やや密 径3mm以下の白・乳白粒
209	土師器	甕 口縁部	4トレ	SH402	17.0	(4.8)	－	1/12	外）オリーブ黒 10Y3/1 内）浅黄橙 10YR8/3	内外面：摩滅	やや密 径3mm以下の白・乳白粒含む
210	土師器	甕 口縁部	4トレ	SH402	15.9	(3.3)	－	1.5/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面：ユビオサエ（ほぼ摩滅）	粗 2mm前後白・茶砂粒多く含む
211	土師器	小形壺／鉢	4トレ	SH402	11.5	(2.8)	－	1/12以下	にぶい褐色 7.5YR6/3	内外面：ヨコナデ	密 1～2mmの白・半透明砂粒を含む
212	土師器	鉢	4トレ	SH402	15.7	(3.7)	－	1/12以下	橙 7.5YR7/6	内面：ユビオサエ、摩滅 外面：ナデ	粗 1～25mmの白砂粒、1mm大の茶砂粒多く含む
213	土師器	小形丸底壺	4トレ	SH402	－	(5.8)	－	不明	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ミガキ 外面：摩滅	密 1mm大の白砂粒含む
214	土師器	台付甕脚台部	4トレ	SH402	－	(5.0)	9.6	3/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内面：ナデか　外面：タテ方向ミガキ（摩滅）	密 1mm大の白砂粒含む 輪芯痕あり
215	弥生土器	壺 底部	4トレ	SH402	－	(2.9)	5.5	12/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内面：ユビオサエ 外面：ナデ、ユビオサエ	粗 1～3mm白・茶砂粒多く含む
216	土師器	広口壺	4トレ	SH402	14.0	(5.7)	－	1.5/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内面：ナデ 外面：ナデ、ハケか	やや粗 1mm前後白・灰砂粒、金雲母含む
217	土師器	甕	4トレ	SH402	19.2	(5.3)	－	1/12以下	浅黄 2.5Y7/3	内外面：摩滅	粗 2.5mm以下の茶・白砂粒含む
218	土師器	甕	4トレ	SH402	17.2	(4.8)	－	1/12	内）にぶい橙 7.5YR7/4 外）にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ナデか、ケズリか 外面：ナデ	密 径1mm大の白・灰・黒礫含む
219	土師器	甕	4トレ	SH402	13.3	(2.5)	－	1/12	内）浅黄橙 7.5YR8/4 外）にぶい黄橙 10YR7/3	内外面：摩滅	密

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
220	土師器	壺か	4トレ	SH402	(23.1)	(4.2)	－	不明	内）灰黄褐 10YR4/2 外）にぶい黄橙 10YR4/2	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ハケメ	やや粗 1～2mm の白砂粒含む
221	土師器	小形壺	4トレ	SH402	－	(4.8)	－	1/12 以下	橙 5YR7/6	内外面：摩滅	密 1～2mm 大の白・灰色砂粒含む
222	弥生土器	高杯 杯部	4トレ	SH402	21.6	(2.6)	－	1/12	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面：ナデ	やや密 1mm 強の白砂粒少量含む
223	土師器	鼓形器台	4トレ	SH402	18.8	(5.0)	－	1/12	浅黄橙 10YR8/3	内外面：摩滅	やや粗 1～3mm 白砂粒含む
224	弥生土器	有孔鉢	4トレ	SH402	(8.5)	(6.4)	－	12/12	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ケズリ、ユビオサエ 外面：タテ方向ハケ	密 1～5mm 大の白・半透明赤褐砂粒含む
225	打製石器	敲石	4トレ	SH402	長 (6.1)	幅 8.1	厚 4.4	不明	－	－	重さ 320g
226	土師器	壺	4トレ	SH402	17.8	(3.8)	－	1/12	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面：ヨコナデ（摩滅）	密 径6mm 以下の白濁砂粒、径2mm 以下の赤褐粒含む
227	土師器	甕口縁部	4トレ	SH402	15.4	(4.9)	－	1/12	にぶい橙 7.5YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ケズリ、摩滅 外面：ヨコナデ、摩滅	密 2～3mm 大の白・半透明砂粒含む
228	弥生土器	甕／壺	4トレ	SH402	－	(4.3)	4.8	4/12	にぶい橙 5YR6/3	内面：ナデ（摩滅） 外面：ナデ	密 径3mm 以下の白濁・白砂粒、赤褐粒含む
229	土師器	高杯 脚部	4トレ	SH402	－	(4.6)	12.6	1/12 以下	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面：ナデ（摩滅）	密 径6mm 以下の白濁・白砂粒・赤褐粒含む
230	土師器	小形鉢	4トレ	SP424	9.6	6.0	－	10/12	にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい褐 7.5YR5/3	内面：ハケ、ナデか 外面：ヨコナデ、ハケ	密 1mm 大の白砂粒含む
231	土師器	高杯脚部	4トレ	SP424	－	(6.6)	－	不明	橙 7.5YR6/6	内面：ナデ 外面：ミガキか	密 1～3mm 大の白・半透明赤褐砂粒、雲母含む。軸芯痕あり
232	土師器	壺	4トレ	SP429	11.4	(7.9)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	内面:不定方向ケズリ（摩滅）、ユビオサエ、ヨコナデ　外面：ヨコナデ（摩滅）	密 径3mm 以下の白濁砂粒含む
233	土師器	壺	4トレ	SP415	11.4	(6.6)	－	1/12	灰白 10YR8/2	内面：ユビオサエ 外面：ヨコナデ、ナデ	やや密 0.5～1mm 白・茶・黒砂粒少量
234	須恵器	皿	4トレ	SP415	13.9	(1.8)	－	1/12	灰 5Y6/1	内外面：回転ナデ	密
235	弥生土器	甕	4トレ	包含層	26.0	(1.7)	－	1/12	灰黄 2.5YR7/2	内外面：ナデ	やや粗 0.5mm 前後の白・灰砂粒少量含む
236	弥生土器	高杯	4トレ	包含層	14.7	(1.4)	－	1/12 強	灰褐 7.5YR6/2	内外面：ナデ 外面：擬凹線	やや密
237	土師器	甕	4トレ	包含層	16.0	(2.4)	－	1/12	にぶい橙 5YR7/3	内外面：摩滅	やや密 径4mm 以下の白・乳白粒含む
238	土師器	甕	4トレ	包含層	15.0	(4.2)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ナデ、強いナデ	粗 0.5～5mm 白・茶・灰砂粒多く含む
239	土師器	甕	4トレ	包含層	15.0	(3.2)	－	1/12 以下	にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ナデ、ヨコナデ 外面：ヨコナデ、ナデ	やや粗 2mm 前後茶・白砂粒含む
240	須恵器	杯身	4トレ	包含層	15.2	(2.8)	－	1/12	灰 N6/0	内外面：回転ナデ	密 1mm 以下の白砂粒・黒粒含む
241	須恵器	杯身	4トレ	包含層	13.3	2.8	－	4/12	灰 N6/0	内面：回転ナデ、ヨコナデ後ユビナデ　外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ	密 1mm 以下の黒斑粒含む
242	須恵器	杯 B	4トレ	包含層	－	(3.5)	8.8	2/12	内）黄灰 2.5Y6/1 外）明青灰 5B4/1	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、ヘラ切り	密
243	須恵器	高杯 脚部	4トレ	包含層	－	(4.2)	－	不明	灰 N5/0	内外面：ナデ	密 1mm 大の白砂粒含む
244	須恵器	壺 把手	4トレ	包含層	－	(3.2)	－	不明	灰 7.5Y6/1	－	やや粗 0.5mm 以下の白・茶砂粒少し含む
245	白磁	椀	4トレ	包含層	14.6	(3.5)	－	1/12 以下	釉）明オリーブ灰 2.5GY7/1	内外面：施釉	精良 1mm 以下の黒粒含む
246	白磁	椀 底部	4トレ	包含層	7.6	(2.7)	－	3/12	素地）灰白 5Y8/1 釉）灰白 7.5Y8/1	内外面：施釉	精良 1mm 未満の黒粒含む

女布遺跡第９次

報告番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	調整	胎土・備考
249	土師器	皿	1トレ	15層	－	(1.3)	8.6	1/12	浅黄橙 7.5YR8/6	外面：ヨコナデ 内面：摩滅	底部糸切り（摩滅）
250	白磁	椀底部	1トレ	15層	－	(2.3)	6.0	底）12/12	釉）灰白 5Y8/1 素地）黄灰 2.5Y6/1	外面：施釉 内面：施釉、圏線	削り出し高台
251	須恵器	甕	3トレ	黒色粘土質	－	(4.4)	－	－	灰 N5/0	外面：ロクロナデ・タタキ 内面：ロクロナデ・タタキのちカキメ	胎土：密。直径２mm以下の白砂粒を含む
252	須恵器	甕	3トレ	黒色粘土質	－	(4.2)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR6/3	外面：タタキ（摩滅気味）・ヨコナデ 内面：ナデ・ユビオサエ・一部摩滅	胎土：0.5mm前後の白砂粒含む
253	弥生土器	甕	4トレ	床面精査	(16.1)	(1.6)	－	1/12	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部外面：擬凹線	
254	須恵器	甕	4トレ	床面精査	－	(2.6)	－	－	褐灰 10YR6/1	外面：波状文 内面：ロクロナデ	胎土：密。直径２mm以下の白・黒灰色砂粒を含む
255	須恵器	甕	4トレ	床面精査	－	(5.0)	－	3/12	灰 5Y6/1	外面：カキメ・タタキ 内面：ナデ・同心円タタキ	胎土：やや密。まれに１mm強の白砂粒含む
256	土師器	皿	4トレ	重機掘削	－	(1.1)	(7.0)	底）1/12	外）褐灰 10YR4/1 内）灰黄褐 10YR5/2	内外面：ロクロナデ	底部糸切り
257	須恵器	椀	4トレ	重機掘削	－	(1.2)	5.6	底）4/12	灰黄 2.5Y6/2	外面：ロクロナデ 内面：ナデ・ロクロナデ	底部糸切り
258	土師器	甕	5トレ	ＳＤ03	(20.0)	(2.7)	－	1/12	灰黄 2.5Y6/2	内外面：ヨコナデ	
259	弥生土器	底部	5トレ	精査中	－	(4.4)	(6.9)	1/12	外面：黒 2.5Y2/1 内面：淡黄 2.5Y8/3	外面：炭素吸着し黒色化 内面：摩滅	胎土：やや粗。１mm前後の白粒含む
260	須恵器	杯蓋	5トレ	中央遺物包含層	(15.0)	(3.4)	－	15/12	褐灰 10YR6/1	外面：ヘラケズリ・ロクロナデ 内面：ロクロナデ	
261	須恵器	蓋	5トレ	精査中	－	(1.4)	－	－	灰白 5Y7/1	外面：ロクロナデ 内面：ナデ	胎土：密
262	黒色土器	底部	5トレ	中央遺物包含層	－	(2.5)	(7.0)	－	外）にぶい黄橙 10YR7/3 内）黒 2.5Y2/1	外面：ナデ 内面：摩滅	
263	須恵器	高杯の脚部	5トレ	中央遺物包含層	－	(6.1)	－	－	自然釉）灰黄褐 10YR4/2 素地）褐灰 10YR6/1	外面：スカシ（貫通していない） 内面：ナデ・ヘラケズリ	胎土：やや密。径１mm前後の白粒砂少し含む
264	須恵器	脚部	5トレ	東排水路掘削中砂	－	(7.7)	10.9	5/12	にぶい黄橙 10YR7/3	外面：黒斑あり（摩滅） 内面：摩滅	胎土：密。１～３mm大の白・明褐灰色の砂粒を含む
265	青磁	椀底部	5トレ	壁面精査	－	(3.4)	(5.7)	底）3/12	釉）灰オリーブ 7.5Y5/3 素地）灰白 2.5Y8/1	内外面：施釉	削り出し高台
266	陶器	小杯	6トレ	4層	－	(1.7)	3.6	底）4/12	釉）灰オリーブ 5Y5/3 素地）灰白 5Y7/1	内外面：施釉	削り出し高台
267	弥生土器	底部	6トレ	排水路掘削中	－	(2.7)	5.6	9/12	灰黄 2.5Y6/2	外面：タテ方向ミガキか、底部全体的にススス	胎土：密。１～４mm大の白・半透明・灰色砂粒を含む
268	弥生土器	底部	6トレ	東排水路掘削中	－	(3.0)	(7.9)	2/12	灰オリーブ 5Y6/2	外面・内面：摩滅	胎土：粗。0.5～５mm白・茶砂粒多く含む

２．平成30年度新設高等学校（丹後地域）校舎整備工事関係遺跡　奈具遺跡第５次発掘調査報告

１．はじめに

今回の発掘調査は、平成30年度新設高等学校（丹後地域）校舎整備工事に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて実施したものである。

調査地は現在の府立峰山高等学校弥栄分校の敷地内であり、調査地は調査前にはテニスコートとして使用されていた。弥生時代中期後葉の遺物が多量に出土した第１～３次調査地に近接し、かつての丘陵の先端近くにあたる。今回の調査は、奈具遺跡の調査としては第５次の調査となる。調査終盤の11月１日には、１年生を対象として遺跡の見学会を行い、37名の参加を得た。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会をはじめ、各関係機関、府立峰山高等学校弥栄分校の方々のご指導とご協力をいただいた。また、小長谷誠氏、小滝篤夫氏には、現地の地質についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府教育委員会が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	小池　寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第１係長	細川康晴
	同　　調査員	桐井理揮
調査場所	京都府京丹後市弥栄町黒部（府立峰山高等学校弥栄分校敷地内）	
現地調査期間	平成30年９月25日～11月９日	
調査面積	500㎡	

２．遺跡の位置と環境

奈具遺跡は、丹後半島では最大の河川である竹野川の右岸の河岸段丘上の丘陵端部に位置する。竹野川流域には花崗岩類が広く分布しており、奈具遺跡が位置する丘陵も花崗岩の風化土と灰白色の旧流路由来の粘土が互層となった地山からなる。

「奈具」という地名は『丹後国風土記』逸文の中にある羽衣天女伝説に由来があるとされる。中世の文献資料のなかには「那具志」とみえ、奈具付近に集落が存在したことは確実であるが、嘉吉３（1443）年の洪水によって廃村状態となり、周辺の集落に分村したと伝えられる。現在、奈具神社は延喜式内社とされ、奈具遺跡のある丘陵の北側に位置しているが、溝谷集落の付近にあったものを近代になってから移設したという。(註1)

この奈具周辺には弥生時代前期～中期の集落である奈具岡遺跡、奈具谷遺跡をはじめ、弥生墳墓である奈具墳墓群、陶質土器を副葬品として有する奈具岡北１号墳等があり、遺跡が密集している。なかでも、もっとも古くから知られているのが奈具遺跡である。奈具遺跡は1911年に付近の耕地整理の際に、多数の弥生土器、石器が出土したことで知られるようになった。(注2) 1962年には府立峰山高校弥栄分校建設工事の際に丘陵の北斜面を中心に弥生土器を中心とする遺物が採集されている。(注3) この調査では、遺跡北側で竪穴建物と考えられる土色変化が確認されたようであるが、詳細は不明である。1971年には学校拡充のための工事が行われ、弥生時代中期後葉を中心とする遺物が多数出土した。(注4) この工事では大幅な地形改変が行われたようで、本来の丘陵は現在の校舎付近まで張り出していたことを当時の写真等からうかがうことができる(図版第１)。この調査では、弥生時代中期の竪穴建物１棟と、古墳時代の竪穴建物２棟の存在が確認された。1980年の校舎増築の際には丘陵北斜面を中心に調査が行われ、中世前期の溝やピットが検出された。(注5)

他方、遺跡の谷を挟んで南側の丘陵上に位置する奈具岡遺跡では、1982年以降、９次に及ぶ調査が行われており、顕著な成果が挙がっている。特に、第４次調査、第７・８次調査では丘陵斜面より、弥生時代中期中葉から後葉にかけての竪穴建物が多く検出され、緑色凝灰岩製管玉、ガラス玉、水晶玉、鉄器等各種の手工業生産が行われていたことが明らかとなった。(注6) また、奈具遺跡の位置する丘陵の東側の奈具墳墓群では、同時期の方形周溝墓が５基検出され、(注7) 谷部の奈具谷遺跡でも竪杲類の使用を示す遺構が検出されるなど、(注8) 奈具周辺の遺跡群は丹後を代表する弥生時

1．谷古墳群　5．奈具遺跡　9．奈具谷遺跡　13．奈具岡南古墳群
2．新宮古墳群　6．奈具古墳群　10．奈具谷古墳群　14．奈具岡北古墳群
3．福西古墳群　7．奈具墳墓群　11．奈具岡遺跡　15．奈具岡北１号墳
4．奈具神社裏古墳群　8．小墓（藤碇）古墳群　12．奈具岡古墳群　16．鳥取橋遺跡

第１図　調査地及び周辺の遺跡(都市計画図1/10,000)

代の集落として認識されることとなった。

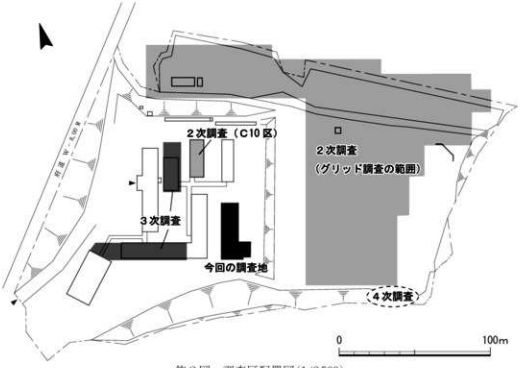
そのような状況で、奈具遺跡は奈具岡遺跡の手工業生産「専用工房」に対する居住域として注目されることとなった。[注10] この意見に対しては、竹野川の氾濫原に位置する鳥取橋遺跡を含めた、より広いエリアとの関連を考える意見や[注11]、奈具岡遺跡の範囲内に居住域を求める意見等があるが[注12]、奈具遺跡自体の実態が不明瞭であることが遠因となり、意見の一致をみていない。2018年には、40年以上調査が行われず実態が不明瞭であった奈具遺跡の調査が京都府教育委員会によって実施され、弥生時代中期から奈良時代までの遺物が多量に出土した。今回の調査は奈具遺跡の調査としては第５次の調査となる。

３．調 査 の 概 要

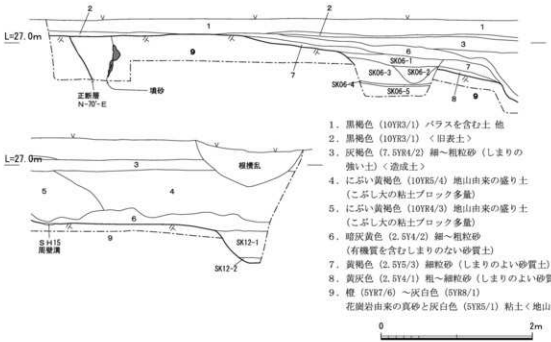
１)基本層序と壁面の層位

今回の調査では、工事の掘削がおよそ約500㎡の範囲に「Ｌ」字状の調査区を設定した。先述のように、調査区が位置する丘陵は学校建築・竹築の際に大きく改変されている。

第１層はバラスと地山由来の堆積からなる造成土であり、第２層は学校増築時の旧表土、第３層は学校建築に伴う造成土である。調査地の大部分では第３層を除去したところで、花崗岩の風化土からなる地山面を検出した。地山面は標高27ｍの高さで水平に整地されており、学校建築の際に大幅な削平を被ったものと考えられる。また、調査地付近はかつて段々畑として利用されていたようで、南斜面では地山の人工的な切土を確認することができた。第４・５層は造成土、その下層の第６層は耕作土であり、有機質を含む砂質土である。第７・８層は遺構面となる地山由来の堆積土であり、方形土坑群は第７層で、ＳＤ17・18は第８層で検出した。



第２図　調査区配置図(1/2,500)



第３図　東壁土層断面図(1/50)

２)検出遺構

検出した遺構はすべてが調査区南側の落ち込み周辺で確認したものである。

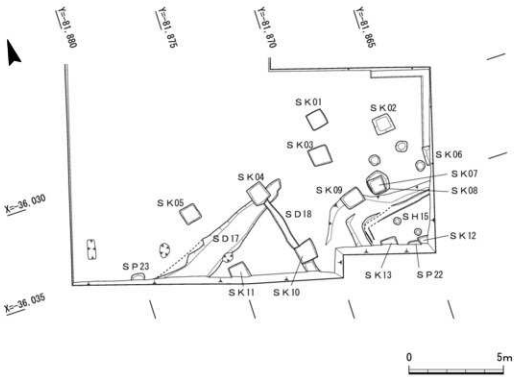
竪穴建物ＳＨ15(第５図)　調査地南東隅で検出した、一辺４ｍ以上を測る方形の竪穴建物である。地山を削り出して成形したと考えられる。段々畑に伴う耕作土(６層)直下で、周壁溝と考えられる幅約0.3m、残存深0.03mの溝を検出した。また、西側では高さ0.1mほどの地山の立ち上がりを確認したが、これは本来竪穴建物の壁面を反映している可能性が高い。地山の成形は２か所で確認することができ、建物の建て替えが行われた可能性がある。建物内の同一面で複数のピットを確認したが、いずれも残存深が0.1m以下と削平が著しく、竪穴建物に伴うものかどうかは不明である。また、建物に伴う出土遺物はなく、明確な時期は不明である。

ピットＳＰ22(第５図)　竪穴建物ＳＨ15内で検出したピットであるが、ＳＨ15に伴うものかどうかは明らかではない。大半は調査区外であるが、径１ｍ程度の楕円形のピットであろう。埋土より遺物がややまとまって出土した。８世紀代の遺構と考えられる。

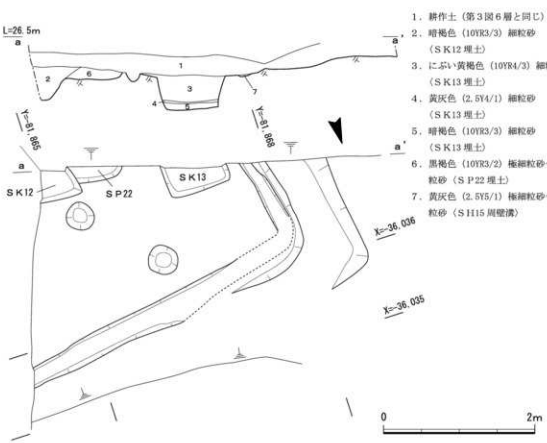
溝ＳＤ17(第４図)　幅1.5m、残存深0.3mを測る溝である。西側に向かって深度が浅くなっており、本来の丘陵の傾斜に沿うようにして掘削されていた溝の深い部分のみが遺存したと考えられる。埋土中から土師器、須恵器の細片、土玉が出土した。ＳＰ22と同じく８世紀代の遺構であろう。

溝ＳＤ18(第４図)　幅0.4m、残存深0.3mを測る溝である。ＳＤ17に直交するように掘削されているが、切り合いから、ＳＤ17の埋没後に掘削されたと考えられる。時期は不明である。

方形土坑群(第６図)　調査区南半の落ち込み中及びその周辺で検出した、平面形状が隅丸正方形の土坑群である。全てで13基を確認した(付表１)。上面は削平されていると考えられるが、一



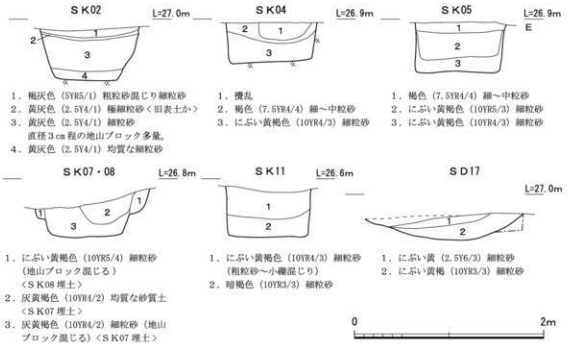
第４図　遺構配置図(1/200)



第５図　竪穴建物ＳＨ15実測図(1/50)

付表1　方形土坑一覧

遺構名	規模（m）		断面形状	出土遺物	備考
	南北×東西	深さ			
ＳＫ01	0.88 × 0.90	0.04	不明	なし	
ＳＫ02	0.92 × 0.96	0.45	台形	土師器・須恵器・染付	
ＳＫ03	0.96 × 1.00	0.68	台形	土師器・染付	
ＳＫ04	0.96 × 0.96	0.42	長方形	須恵器	
ＳＫ05	0.88 × 0.88	0.52	長方形	弥生土器・鉄器	
ＳＫ06	(0.38) × 1.00	0.54	台形	なし	東半は調査区外
ＳＫ07	0.65 × 0.73	0.46	長方形	須恵器	円形土坑ＳＫ08と切りあい
ＳＫ09	1.07 × 0.85	0.40	長方形	なし	
ＳＫ10	1.00 × 1.04	0.45	長方形	土師器・陶器・鉄器	
ＳＫ11	0.94 × 0.88	0.55	長方形	土師器・染付・瓶瓦	
ＳＫ12	(0.20) × (0.30)	0.47	台形	なし	1/4のみ検出
ＳＫ13	0.81 × (0.24)	0.46	長方形	なし	南半は調査区外



第6図　各遺構断面図(1/40)

辺0.9m前後で、最も深いＳＫ02は深さ0.68mを測る。断面形状は垂直に掘り込まれた長方形のものと、逆台形のものがあり、台形のものは調査区東側でのみ認められる。ほぼ東西方向を主軸として列状に配置されているが、厳密な規則性は認められない。最も北に位置するＳＫ01は深さ0.04mのみしか残存していなかったものの、平面形状から同一の遺構群であろう。このことから、削平を被っているものの、この遺構群は本来はさらに北に広がっていた可能性が高いと考える。

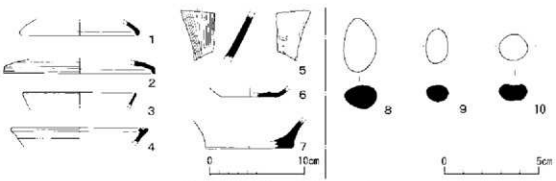
埋土は、下層にはわずかに遺物を含むものの、上層は東壁第6層の耕作土と共通するものが多い。ＳＫ06やＳＫ16では上層と下層の間に3cmほどの水成堆積層が認められたことからも、下層が堆積したのち開放状態となり、時間をおいて埋められたものと考えられる。

今回の調査のみではこの土坑群の性格を明らかにしえないが、学校増築前には段々畑として利用されていたようであり、畑の利用に伴う遺構の可能性もある。出土遺物の中には染付や瓶瓦を含むため、近世末期～近代にかけての遺構であると考えられる。

付表２　出土遺物観察表

報告番号	出土地点	種類	器種	法量（cm）		残存率	胎土	色調	備考
				口径	器高				
1	ＳＰ22	須恵器	杯蓋	（12.4）	（1.6）	1/12	密	灰（N5/0）	
2	ＳＤ17	須恵器	杯蓋	（16.0）	（1.4）	1/12	密	黄灰（2.5Y6/1）	
3	ＳＤ17	須恵器	椀	（11.8）	（1.5）	1/12	密	外：灰（5Y5/1） 内：灰（N5/0）	
4	ＳＫ07	須恵器	杯身	（14.0）	（1.7）	2/12	密	外：褐灰（10YR4/1） 内：灰（N5/0）	
5	ＳＫ10	陶器	擂鉢	－	（5.2）	1/12	粗	にぶい赤褐（2.5YR5/3）	信楽焼
6	ＳＤ17	須恵器	椀（底部）	底（6.0）	（1.0）	2/12	密（直径0.5～1mmの白・黒色粒含む）	外：灰白（10YR7/1） 内：褐灰（10YR6/1）	
7	ＳＰ22	弥生土器	底部	底（9.0）	（3.1）	2/12	粗（直径1mmの白色粒多く含む）	外：灰（5Y4/1） 内：灰（N4/0）	
8	ＳＤ17	土製品	－	長）2.8	幅）1.7	－	密	明赤褐（5YR5/6）	重さ6.0ｇ
9	ＳＤ17	土製品	－	長）2.0	幅）1.1	－	密（直径0.5mmの黒・白色粒多く含む）	にぶい黄橙（10YR7/2）	重さ1.6ｇ
10	ＳＤ17	土製品	－	長）1.4	幅）1.5	－	密（直径0.5mm以下の黒色粒多く含む）	にぶい黄橙（10YR7/3）～明赤褐（5YR5/6）	重さ1.4ｇ

（凡例）・口径欄の記号　（　）：復元径　　・器高欄の記号　（　）：残存高
・小数点第２位を四捨五入、第１位で表示　　・－：該当部位なし、不明



第７図　出土遺物実測図(1/4・1/2)

３）出土遺物（第７図）

今回の調査で出土した遺物は整理箱１箱分である。

１はＳＰ22から出土した須恵器蓋であり、８世紀代のものであろう。４はＳＫ07から出土した古墳時代後期後半の杯身である。２・３・６はＳＤ17から出土した。図化したものは、奈良時代を中心とするものである。ＳＤ17・18からは須恵器のほか、弥生土器、土師器なども出土しているが、図化できるものはない。５は擂鉢である。近世後期の信楽産であろうか。ＳＫ10から出土したものであるが、遺構の年代を示すものかどうかは不明である。７は弥生土器の底部である。

８～10はＳＤ17から出土した用途不明の土製品である。確認できただけで10点以上がある。形状は楕円球状のものが多く、ユビオサエで成形するために片側に反る。また、10のように球状の生地を指で押しつぶしたような形状のものも認められる。出土須恵器から８世紀代のものの可能性が高いが、この溝からは弥生土器の破片も多く出土しており、土製品自体の時期は不明である。

４）地震痕跡

今回の調査では２か所で地震痕跡が観察されたため、報告する。１か所目は東壁断面で観察された断層である。正断層であり、平面の観察から北から東におよそ70°振った断層である。同じ東壁では、断層の南側で噴砂の痕跡も確認された。２か所目はＳＫ02の東壁で観察された噴砂（第３図）の痕跡である。いずれも、更新世中期末に形成された痕跡である可能性が考えられる。(第12図)

４．まとめ

今回の調査では、調査区南側を中心に遺構を確認することができた。奈具遺跡の位置する丘陵の地形は学校建築のために古くに改変されており、遺跡の実態が不明瞭であったが、今回の調査によって旧地形、あるいは土地利用の一端を明らかにすることができた。今回の調査地の大部分は西側から張り出す丘陵の最も高い地点に位置しており、遺構を検出することができた範囲はその丘陵の南斜面部分に相当すると考えられる。

今回の調査では、弥生時代の遺物はほとんど出土していないが、このことは過去の奈具遺跡の調査で、丘陵の北側斜面を中心に弥生時代の遺物が採集されているという事実とも符合すると言えるだろう。限られた情報から推測すると、弥生時代の奈具遺跡は、傾斜がより緩やかな丘陵北側を中心に展開した集落であった可能性が高いと考える。

今回検出した遺構の中で、ＳＤ17・18は奈良時代の遺構であると考えられる。奈具遺跡群ではこれまで確認されていなかった時期の遺構であり、奈具丘陵が弥生時代以降、継続的に利用されていたことが明らかとなった。

（桐井理揮）

注１　京都府竹野郡役所『竹野郡誌』 1915

注２　梅原末治「深田村字黒部彌生式土器遺跡」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第１冊　京都府） 1919

注３　釋龍雄・林和広『奈具遺跡発掘調査報告書』弥栄町文化財調査報告第１集　弥栄町教育委員会 1972

注４　注３に同じ

注５　長谷川達・大槻真純「奈具遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－1）』京都府教育委員会） 1980

注６　①増田孝彦・田代弘「（１）奈具岡遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第55冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1993

②河野一隆・野島永「（２）奈具岡遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第76冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1997

注７　河野一隆「（２）奈具墳墓群・奈具古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1995

注８　田代弘「（４）奈具谷遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第60冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1994

注９　河野一隆「奈具の弥生人―奈具地区の発掘調査と丹後の弥生社会―」（『古代文化』第49巻４号　古代学協会） 1997

注10　田代弘「丹後の弥生集落遺跡」（『丹後の弥生社会を斬る―ムラ・墓・玉・鉄・土器―』加悦町・加悦町教育委員会） 1999

注11　桐井理揮「奈具遺跡群の再検討―丹後半島の大規模遺跡―」（『近畿弥生の会第20回集会京都場所発資料集』近畿弥生の会） 2017

注12　京都府立大学小滝篤夫氏、府立峰山高等学校教員小長谷誠氏のご教示による

３．平成27～29年度由良川緊急治水対策事業関係遺跡　阿良須遺跡第１～３次発掘調査報告

１．はじめに

京都府福知山市大江町北有路大坪ほかに所在する阿良須遺跡は、福知山市の北東端に位置し、由良川左岸の古墳時代遺物が散布する遺跡である。福知山市大江町北有路は、かつては加佐郡大江町北有路で、平成18年(2008年)の天田郡夜久野町・天田郡三和町の二町とともに編入合併して福知山市になっている。

阿良須遺跡が所在する京都府北部の主要河川である由良川は、京都府・福井県・滋賀県の府県境にある三国岳(標高775.9m)に源があり、西方向に流れる南丹市・京丹波町から福知山市で大きく北東に流れを変え、支流である土師川と合流して若狭湾に注ぐ流路延長146kmの一級河川である。

由良川は、綾部市・福知山市域の中流域では広い沖積平野を流れるが、福知山盆地の北東の上天津付近で狭窄され、それより河口まで約35kmの由良川下流域は、沖積平野や三角州の発達がみられず、小規模な平地が存在する。若狭湾に注ぐ由良川下流での平野部の幅は、0.3～0.5km前後と狭く河道勾配がゆるいことから、洪水が多発する地域として知られており、近年では河川改修・築堤等の整備が進んでいる。

今回、国土交通省近畿地方整備局では、継続して行われている由良川の河川改修・築堤等の整備を進める由良川緊急水治水対策事業として、福知山市阿良須遺跡周辺での築堤建設が計画され、それに先立つ埋蔵文化財発掘調査として実施した。

阿良須遺跡周辺では総延長1.0km以上、幅60mと大規模な築堤建設が予定されており、かつ今後の自然災害に備えるためにも早急な事業が望まれたことから、現地文化財調査に先立って、関係機関で協議が行われた。そこで、遺跡をより詳細に把握するため、平成27年度には総延長1.0kmの範囲に、ほぼ200m間隔で100㎡程度のトレンチを11か所設定して文化財調査を実施した(第１次調査)。特に、調査対象地の西南部で遺構・遺物が顕著であったため、平成28年度(第２次調査)、平成29年度(第３次調査)に分けて発掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期から中世に至る各時代の土器が出土するとともに、阿良須遺跡での遺構の様子が明らかとなった。

平成27年度から平成29年度までは現地発掘調査を優先して実施し、最終年度である平成30年度は、３か年の検出遺構の検討・出土遺物の整理作業とともに、調査報告集の編集・刊行作業を行った。

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会･福知山市教育委員会をはじめ、関係機関・地元自治会や住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝したい。なお、

調査に係る経費は、全額国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が負担した。

〔調査体制等〕

平成27年度現地調査

現地調査責任者	調査課長	有井弘幸
現地調査担当者	調査課調査第２係長	中川和哉
	同　主　査	竹原一彦
	同　調査員	桐井理揮
現地調査期間	平成27年11月５日～平成28年２月26日	
調査面積	1000㎡	

平成28年度現地調査

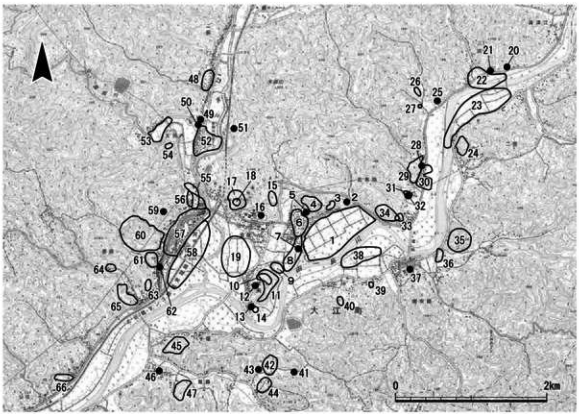
現地調査責任者	調査課長	森　正
現地調査担当者	調査課調査第２係長	中川和哉
	同　主　査	竹原一彦
	同　第１係調査員	浅田洋輔
現地調査期間	平成28年５月25日～平成28年12月26日	
調査面積	1,500㎡	

平成29年度現地調査

現地調査責任者	調査課長	小池　寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第２係長	中川和哉
	同　総括主査	石井清司
	同　調査員	藤田智子
現地調査期間	平成29年８月22日～平成28年12月25日	
調査面積	1,100㎡	

平成30年度整理作業

整理作業責任者	調査課長	小池　寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第２係長	中川和哉
	同　総括主査	石井清司
	同　副主査	竹原一彦



1．阿良須遺跡
2．阿良須神社境内古墳
3．阿良須古墳群
4．阿良須城跡
5．上野古墳
6．上野遺跡
7．大良古墳
8．平遺跡
9．仲仙古墳群
10. 波美古墳群
11. 波美城跡
12. 大久保古墳
13. 宮裏古墳
14. 宮山古墳群
15. 柏谷古墳群
16. 芝居原遺跡
17. 金屋城跡
18. 小山端古墳群
19. 金屋波美遺跡
20. 石ブロ古墳
21. 三河古墳
22. 三河宮の下遺跡
23. 二箇遺跡
24. 二箇村城跡
25. 赤穂谷口遺跡
26. 九郎殿屋敷遺跡
27. 比丘尼屋敷遺跡
28. 五日市古墳
29. 北有路別城跡
30. 仲ノ段遺跡
31. 大安寺遺跡
32. 大安寺古墓
33. 三ヶ村遺跡
34. 北有路城跡
35. 南有路城跡
36. 引地城跡
37. 長橋寺古墳
38. 高川原遺跡
39. 丸山古墳群
40. 小山田古墳群
41. 持野辺窯跡
42. 大石北遺跡
43. 尾藤漆谷窯跡
44. 大石遺跡
45. 千原城跡
46. 尾藤古墳
47. 尾藤城跡
48. 河田谷遺跡
49. 大明神塚古墳
50. 荒神塚古墳
51. 向山古墳
52. 天田内遺跡
53. 深田遺跡
54. 天田内古墳群
55. 段古墳群
56. 段遺跡
57. 河守北遺跡
58. 段古墳群
59. 城坂古墳
60. 河守城跡
61. 新治城跡
62. 新町古墳
63. ヲカ古墳群
64. 蓼原遺跡
65. 蓼原城跡
66. 公庄下城跡

第 1 図　調査地及び周辺遺跡分布図（国土地理院1/50,000　河守）

２．位置と環境

阿良須遺跡は京都府福知山市大江町北有路に位置する、古墳時代の散布地である。

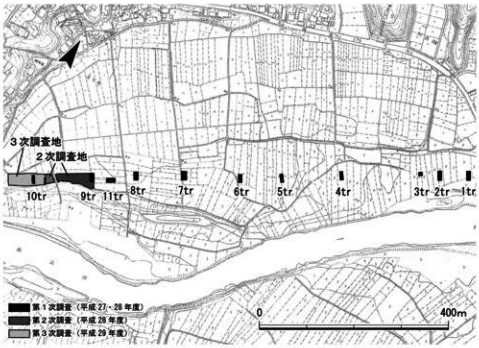
旧大江町域は、近畿北部地方では最大の河川である由良川が貫流しており、由良川が形成する狭隘な谷底平野、あるいは両岸に自然堤防が発達している。由良川は丹波高地に源を発する河川であり、その特性から上流域(源流から綾部)、中流域(福知山盆地)、下流域(旧大江町から河口)に区分される。阿良須遺跡のやや上流側は由良川が北東へと流れを大きく変化させる部分であり、下流域の最上流部に位置づけられる。由良川下流域は、中・上流域と比較してきわめて流路勾配が緩く、また広い平野部も少ないため、歴史的に見てもたびたび水害による打撃を被ってきた地域である。地質学的には阿良須遺跡周辺は夜久野複合岩類の分布域であり、花崗岩や変成岩等の入り混じった様相を示す。

次に、周辺の歴史的環境を概観する(第１図)。由良川下流域では自然堤防等の微高地上に多くの遺跡が分布しているが、その中でも最も時期がさかのぼるのは、阿良須遺跡の2.5km下流に位置する三河宮の下遺跡である。1980年に行われた発掘調査では、土偶をはじめ、縄文時代前期から晩期まで各時期の遺物が出土し、竪穴建物跡や配石遺構等の遺構も確認された。ほかにも縄文時代後期の遺物が、高川原遺跡や梅ヶ平遺跡で、晩期の凸帯文土器が河守北遺跡で出土している。続く弥生時代前期から中期の遺跡の密度は希薄であるが、阿良須遺跡のさらに下流部の自然堤防上では、方形貼石墓が検出された舞鶴市志高遺跡や大規模な集落跡が確認された大川遺跡、方形周溝墓からガラス玉が出土した桑飼下遺跡等が知られる。阿良須遺跡周辺で再び遺跡数が増加するのは後期以降であり、河守北遺跡、河守遺跡、天田内遺跡など、由良川の支流である宮川流域で弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が多く出土している。

古墳時代の集落も同じように段丘上や自然堤防上を中心に検出されており、高川原遺跡では古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴建物跡が９棟調査された。また、旧大江町内では60基程度の古墳が知られているが、発掘調査によってその内実が判明している古墳は数基のみであり、多くは過去の表採資料によってその存在が伝えられているに過ぎない。その中でも、阿良須遺跡に西接する丘陵上では大良古墳と仲仙古墳群は発掘調査が行われており、その内容が明らかにされた。平遺跡地内に位置する大良古墳は、墳形は不明ながら、棺床に礫敷をもつ主体部が検出され、棺内から須恵器、鉄刀などが出土した。

和銅６(713)年に丹後国が分国されると、福知山市大江町以北は丹後国加佐郡として再編されることとなった。平安時代には、加佐郡では延喜式内社が11座あり、由良川流域には今回の阿良須遺跡の北縁にあたる阿良須神社を含め、４座が存在する。

ところで、阿良須遺跡では今回当調査研究センターが調査を行う以前は発掘調査が行われたことはなかったものの、『大江町史』のなかで条里制地割が残存していることが指摘されていた。旧大江町内において条里制遺構が残存している地域として、阿良須地区のほか、河守地区、金谷波美地区、二箇地区が指摘されている。(注1) なかでも河守地区では平安時代初頭の矢板が打ち込まれた畦畔が検出され、条里に伴う遺構であると評価されている。(注2) 河守北遺跡では、稜椀を含む須恵

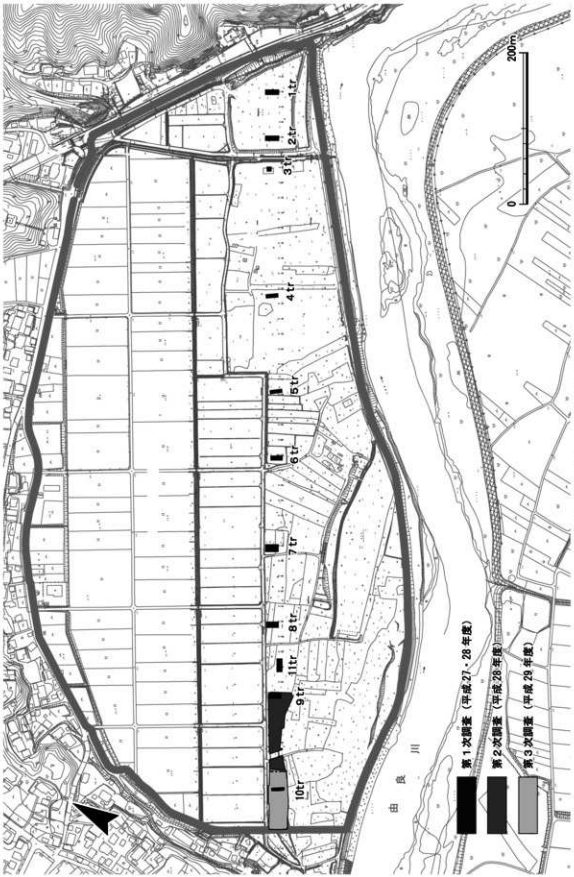


第 2 図　阿良須遺跡周辺地形図（区画整備前の田畑の状況）(1/8,000)

器類、多量の瓦のほか、「津丸一段」と墨書された木簡等やや特異な遺物も得られており、平安時代における当地域の中心的な集落であると考えられる。この地点で由良川本流に合流する宮川は大江山を源としており、宮川沿いに大江山を越え、宮津に至る古道は元普甲道と呼ばれ、近世に宮津街道が整備される以前は、日本海への主要なルートの一つであったと考えられている。阿良須遺跡の対岸では奈良時代の窯跡の存在も確認されており、[注3] この一帯が古代加佐郡の中心的な地域の一つであったということも想定できるだろう。

中世以降の集落の様相は明らかではないが、下流の大川遺跡では、1,000点を超す輸入陶磁器が出土している。阿良須遺跡周辺では多くの山城が確認されており、その中でも引地城では発掘調査が行われ、城全体を横堀と土塁で囲む構造が明らかとなった。[注4]『丹哥府志』や『一色軍記』などの記載から阿良須城（山名氏）や金屋城（金屋氏）、河守城（上原氏・新治氏）などでは、城主が伝えられる山城も多い。[注5]

近世の幕藩体制下では、由良川下流域は大部分を占める田辺藩の知行下のほか、本庄領、山家領で占められ、波美や蓼原は天領とされた。江戸時代には由良川は貢租米、あるいは福知山藩への物資の輸送に重要な役割を果たしたことが知られており、船株が河口部の由良神崎と福知山に、宝暦 3（1753）年以降には北有路に設置された。阿良須遺跡周辺の有路に置かれた船株は有路船とよばれ、神崎・福知山両船株の荷の積み替え場として機能していたとされる。[注6] 由良川水運は近世を通じて活発であり、西廻り航路の短縮、大坂・京都といった大都市への物資輸送を目指し、由良川と加古川、あるいは大堰川との連結通線路開削も計画されたほどである。[注7] また、河守周辺は宮津藩最南端の宿場町として位置づけられ、当地域周辺は近世においては由良川水運、あるいは丹後方面との陸路との両面で重要な役割を果たしていたといえる。　（桐井理揮）



第3図　年度別トレンチ配置図(1/5,000)

3．調 査 の 概 要

1）調査の経過

阿良須遺跡周辺では、由良川の対岸（右岸）に縄文土器が出土した高川原遺跡が、阿良須遺跡の北方の丘陵上位に阿良須古墳群や阿良須城跡などがあり、縄文時代から古墳時代、古代、中世の遺跡が連綿と存在する地域である。調査前の阿良須遺跡には広大な農地が広がっており、現地調査着手時の土地区画は正方位に対して29°西に振っているものの、東西約200m、南北約100mの長方形の大区画でその区画の振れは真北に対して29°西に振っている。ただ、この大区画以前の土地利用をみると、南北に長い短冊形の小区画が存在するものの、調査対象地は条里制地割りがくずれたような小区画のところが含まれており、由良川の河道域を想像させるような地形変化がある。

〔平成27年度（第1次調査）〕

由良川緊急治水対策事業に係る阿良須遺跡内での築堤建設予定箇所は、阿良須遺跡の南東端に近く、条里制地割りがくずれたかのような地点で、幅50～60m・長さ1kmで、遺跡を東西に横断するように計画された。今回の文化財調査の対象地は5ha以上と広範囲であり、かつこれまでは発掘調査を実施していない遺跡であるため、遺構・遺物の有無、遺構検出深度、遺跡の性格を明らかにする目的で、調査区内の総延長1kmに対して200m間隔で、100㎡程度のトレンチを11か所設けて発掘調査を実施した。

調査では、集落から由良川河川敷や河川敷にある農地につながる里道を確保した上でトレンチを設定し、表土から遺構・遺物の検出面までを重機により慎重に掘削作業を進めた。その結果、後述するように遺跡の東半部に設定したトレンチ（1～6トレンチ）は現代の造成等によって深く削り取られており、明確な遺構・遺物が確認できなかった。一方、遺跡の西半部に設けたトレンチ（7・8・11トレンチ）では、中世遺物をわずかに含む包含層を確認した。さらに、遺跡の西端近くに設定した9・10トレンチでは、中世洪水層の下層から古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構の広がりを確認することができた。11か所の小規模なトレンチ調査ではあるものの、調査成果と現地形を鑑みて、11トレンチよりも北西の現集落域に近い地点に阿良須遺跡の生活域が存在する可能性があるとの結果を得た。

〔平成28年度（第2次調査）〕

平成28年度（第2次調査）は、第1次調査の調査成果を踏まえて7トレンチ以西、特に集落域に近い9トレンチ以西を調査対象として発掘調査を実施した。9トレンチは、標高6.5mで中・近世の遺物、包含層を確認するともに、標高6.0m前後で土坑・ピットなどを、その下層の標高5.0mで弥生時代後期の遺物を検出したことから、遺構・遺物の状況をより明らかにするため、9トレンチを囲むように東西60m、南北100mの範囲で調査計画を検討した。

里道を挟んで東側のAトレンチは、長さ約80m、幅約16～35mの東西に長いトレンチで、里道の西側のB1トレンチは、長さ約22m、幅約15mの方形のトレンチを設定して発掘調査を実施した。

Aトレンチでは、標高6.4m前後で中世遺物包含層、標高5.6m前後の遺構面で溝・土坑・柱穴

等を、標高4.4m前後で古墳時代後期の完形に近い土器が出土した。

Ｂ１トレンチでは、標高5.7m前後の第２遺構面で円形ピットを、その下層の第３遺構面を基盤面とし、標高6.4m前後の第１遺構面に達する高まりがある砂利堆積層を検出した。

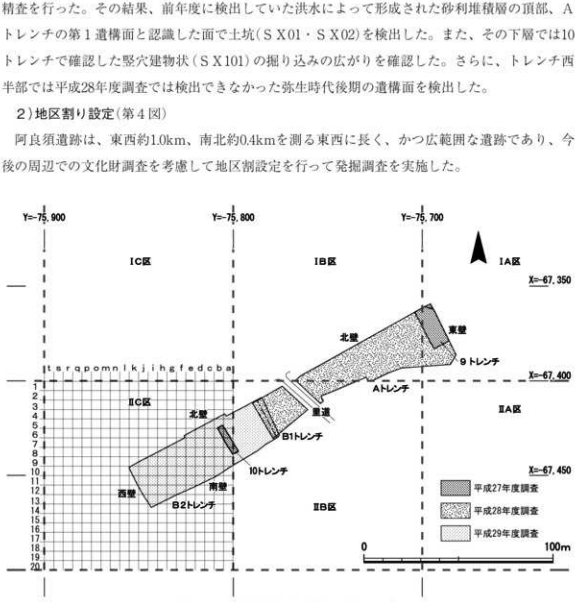
〔平成29年度（第３次調査）〕

平成29年度は、平成27年度の10トレンチで竪穴建物跡と思われる遺構を標高6.0m近くで検出したこと、平成28年度のＢ１トレンチでピットとともに砂利堆積層を検出したことから、Ｂ１トレンチの西端から10トレンチを中心にして新たに東西70m、南北20～25mのトレンチを設定して発掘調査を実施した。

調査では、標高8.6～9.2m前後で西側に向かってわずかに傾斜する現地表面から、第１遺構面の標高6.6m前後で検出すると思われる第１遺構面とその上層に堆積した円礫を含む黄褐色中粒砂（ｇ層）直上までを重機によって慎重に掘削作業を進め、その下層を人力によって慎重に掘削し、精査を行った。その結果、前年度に検出していた洪水によって形成された砂利堆積層の頂部、Ａトレンチの第１遺構面と認識した面で土坑（ＳＸ01・ＳＸ02）を検出した。また、その下層では10トレンチで確認した竪穴建物状（ＳＸ101）の掘り込みの広がりを確認した。さらに、トレンチ西半部では平成28年度調査では検出できなかった弥生時代後期の遺構面を検出した。

２）地区割り設定（第４図）

阿良須遺跡は、東西約1.0km、南北約0.4kmを測る東西に長く、かつ広範囲な遺跡であり、今後の周辺での文化財調査を考慮して地区割設定を行って発掘調査を実施した。



第４図　阿良須遺跡地区割り図（1/2,000）

阿良須遺跡の地区割設定は、世界測地系の新座標をもとにX軸・Y軸とも100m単位で大地区とし、東西ラインはX＝－67,400.0mを境に北側をローマ数字のⅠ区、南側をⅡ区の大地区とし、南北ラインはY＝－75,700.0mより東をA区、Y＝－75,700.0mより西でY＝－75,800.0mまでの100mの範囲をB地区、Y＝－75,800.0mより西でY＝－75,900.0mまでの100mをC地区と設定した。このため、平成28年度調査のAトレンチはⅠA・B、ⅡB区内、B１トレンチはⅡB区、平成29年度調査のB２トレンチはⅡB・C区内に設定したトレンチとなる。

トレンチ内出土遺物は、大地区を５mの小区画で東西方向を東からａ～ｔ、南北方向は北から１～20に分け、遺構・遺物出土箇所の表記は各小区分の北東隅として現地調査を進めた。

平成27年度からはじまる阿良須遺跡A・B１・B２トレンチは、築堤建設予定地での文化財調査であり、各トレンチとも正方位では設定されておらず、前述のように30°程度の振れで設定されている。このため、トレンチ壁面などの土層堆積状況等の表記・記述に際しては、第４図のように表現は厳密ではないが、トレンチの長軸を東西方向としその方向を基準にして北壁・東壁・西壁として表記した。

３）平成30年度の整理作業及び報告書刊行業務

平成27年度調査面積1,000㎡、28年度調査面積1,500㎡、平成29年度調査面積1,100㎡の現地発掘調査を実施し、平成30年度は３か年（総調査面積3,600㎡）の遺構・遺物の整理作業とともに、報告書刊行に向けての遺構・遺物の製図、執筆作業と編集作業を現地担当者を中心に行った。

４．検出遺構

１）第１次調査

平成27年度は平成27年11月５日から平成28年２月26日のおよそ４か月をかけて、東西に長い調査区に11か所のトレンチ（総調査面積1000㎡）を設定して調査を実施した。

調査地は由良川左岸に広がる休耕地で、調査区が東西方向の長さがおよそ１kmで、南北方向の幅が50～60mを測る広い範囲を対象とし、かつ遺跡の実態が明らかでないため、およそ200m間隔で幅６m、長さ10～15m程度の小規模トレンチを設定し、遺構面までの深さ、遺構・遺物の有無などの確認に努めた。

なお、当初は10か所のトレンチを設定する予定であったが、調査期間等の関係から、３～11トレンチを平成27年度に、１・２トレンチは平成28年度に実施した。

現地発掘調査では、表土より重機掘削を行い、各堆積層ごとに遺構・遺物の有無を確認して調査を進めた。東側に設定した１～６トレンチでは、地表下３～４mまで掘削作業を進めたが、明確な遺構・遺物包含層は確認できなかった。一方、７トレンチより西側では地表下２m程度（標高5.5m地点）で中世遺物を確認し、さらにその下層堆積層を順次調査したところ、飛鳥時代以前の土器類が出土した。特に10トレンチでは、掘り込み状の遺構を検出し、今回の調査対象地では、西側に偏在して遺構・遺物が確認できた。以下、各トレンチの概要を略述する。

（石井清司）

（1）各トレンチの概要

1・2トレンチ　調査対象地内では、由良川の下流部に設定したトレンチである。2.5m以上の造成土があり、旧表土は標高約4.2mで確認した。造成土を除去したところ、その下層にはシルト質微砂・シルトが自然堤防の砂の西側斜面に水平堆積していた。

（竹原一彦）

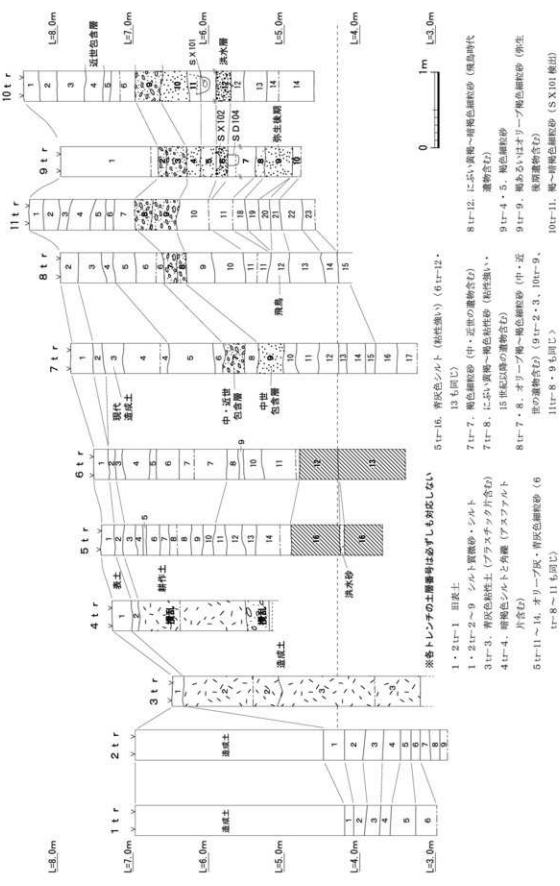
3トレンチ　由良川と農業用排水路をつなぐ樋門の西側に設定した、一辺7.0mの方形トレンチである。標高6.3～6.5mの表土から標高3.2mまでの、深さ3.3m前後まで掘削作業を行った。当初は表土から標高3.2mまでを重機により慎重に掘削作業を行ったが、最深部付近の青灰色粘性土でプラスチック片が出土した。由良川の砂を採取した際の造成が深い地点まで及んでいることが明らかとなった。

4トレンチ　3トレンチの南160m、阿良須神社参道の正面方向に設定した、東西約6.0m、南北22mの南北に長いトレンチである。現地表面の標高は7.3m前後を測り、調査での最終掘削深は標高5.2mで、地表面から2.1mまで掘削した。その結果、第3トレンチと同様、堆積土はほぼ水平で、最下層の暗褐色シルトとその下層の直径20cm程度までの大きさの角礫層に、路面に敷設されたのち廃棄されたかのような現在のアスファルト片が含まれていた。

5トレンチ　4トレンチの南約130mに設定した東西6.5m、南北20.5mの南北に長いトレンチである。現地表面の標高7. 5m付近から最終掘削深は標高3.7mで、地表面から3.7mまで掘削作業を行い、遺構・遺物の確認に努めた。地表下0.4m（標高7.0m前後）から標高6.0m前後まではイネ科植物根の酸化痕を多量に含む層が水平堆積しており、湿地帯における自然堆積土層であると判断した。標高5.9m以下では、1m程度の深さまでオリーブ灰色・青灰色の細粒砂で、標高4.9m以下の粘性の強い青灰色シルト層（最下層）まで顕著な遺構・遺物はなかった。

6トレンチ　本事業における小規模トレンチの調査箇所としては、均等に配置した11か所のトレンチの中で中央にあたり、阿良須遺跡では東西の中央に位置するトレンチである。6トレンチは、東西7.0m、南北21.0mの南北に長いトレンチで、地表面の標高7.5m付近から最終掘削深は標高3.4mまでで、地表面から2.6mまで掘削作業を行い、遺構・遺物の確認に努めた。6トレンチも5トレンチと同様、標高5.8m程度までは酸化痕を多量に含む層が水平堆積しており、自然堆積層と思われる。標高5.8m以下では、酸化痕を含まないオリーブ灰色・青灰色の細粒砂で、標高4.8m以下は粘性の強い青灰色シルト層であり、いずれも顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

7トレンチ　6トレンチの南120mに設定した東西14.0m、南北23.0mを測る南北に長いトレンチである。現地表面の標高7.8m付近から、最終掘削深は標高3.3mで、地表面から4.5mまで掘削作業を行い、遺構・遺物の確認に努めた。表土下2.0m、標高5.8mの褐色細粒砂層で土師器片や土錘、備前焼擂鉢などの中・近世の遺物を含んでいたが、その上層は後世の攪乱が及んでいた。この中・近世の遺物を含む褐色細粒砂層の前後で人力による精査を繰り返したが、遺構を確認するには至らなかった。標高5.5m前後のにぶい黄褐～褐色の粘性の強い砂層から、15世紀以降の土師皿・陶器の細片が出土したものの、その後、表土下4.6m、標高3.2mの地点まで慎重に調査



第５図　平成27年度調査各トレンチ柱状図(1/50)

を進めたが、明確な遺構を検出することはできなかった。

8トレンチ　7トレンチの南方100mに設定した東西7.6m、南北21.5mを測る南北に長いトレンチである。現地表面の標高7.9m付近から最終掘削深は標高4.1mまでで、地表面から深さ3.8mまで掘削作業を行った。8トレンチでは、表土下1.4mで、ほぼ水平堆積層であるオリーブ褐～褐色の細粒砂層から中世土師器皿・近世陶磁器の細片が出土した。この堆積層は由良川の洪水による堆積層であると考えられるもので、断面観察から、砂層は由良川の上流側から下流側にかけて傾斜するように堆積していることが判明した。中・近世の遺物を含む堆積層での精査の後、さらに下層堆積層の調査を進めたところ、表土下3.0m（標高5.0m）で、厚さ25～30cm前後のにぶい黄褐～暗褐色の細粒砂が水平堆積しており、同層から飛鳥時代の甕が出土したものの、明確な遺構は確認できなかった。なお、さらに表土下3.8m（標高4.1m）前後まで掘削作業を進めたが、顕著な遺構・遺物を確認することはできなかった。

9トレンチ　8トレンチの南方110mに設定した東西9.5m、南北22.0mの南北に長いトレンチである。現地表面の標高7.9m付近から最終掘削深は標高4.8mまでで、地表面から深さ3.2mまで掘削作業を行った。9トレンチは8トレンチと同様、表土下1.3mで、ほぼ水平堆積層であるオリーブ褐～褐色の細粒砂層で中・近世遺物を確認した。さらに、下層の標高6.0m前後では、20～40cm程度の厚さで北から南に向かって堆積する褐色細粒砂があり、その細粒砂層を除去した面で、落ち込み1基（SX102）、ピット1基および溝（SD104）1条などを検出した。落ち込みSX102は、西壁に接して検出した不整形の落ち込みで東西1.2m、南北0.5m以上を測り、埋土中からほぼ完形に復元できる土師器甕1点（第33図1）が出土した。土器の特徴は飛鳥時代前半のものである。この面での精査・図化作業の後、さらにその下層での遺構・遺物の有無を確認するため精査したところ、表土下2.7～2.8m付近の褐あるいはオリーブ褐色細粒砂層から、弥生時代後期後半の有段口縁甕の口縁部片（第33図14）が出土した。なお、この9トレンチは出土遺物と遺構の検出状況から、平成27年度に調査区を広げて調査を実施した。

11トレンチ　8トレンチでは中世土師皿・近世陶磁器遺物を含むオリーブ褐～褐色の細粒砂層を確認し、9トレンチでも同層に対応する堆積層を確認した。さらに9トレンチではその下層で飛鳥時代の土坑などを確認したことから、8トレンチと9トレンチの間の状況を確認するために設けたトレンチである。11トレンチは、8・9トレンチの中間地点で調査対象地に平行するように設定した東西21.0m、南北8.0mを測る東西方向に長いトレンチである。現地表面の標高は8.4mで、調査での最終掘削深は標高4.6m、地表面からの深さは3.8mである。地表下1.2mで耕作溝と考えられる溝を1条検出し、その下層（標高7.0m付近）でほぼ水平堆積するオリーブ褐～褐色の細粒砂層から、瓦質羽釜の口縁部片など少量の中・近世遺物が出土した。さらに下層堆積層での精査を進めたが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

10トレンチ　阿良須遺跡の西端近くで、由良川の最も上流側に設定した東西8.5m、南北21.5mを測る南北に長いトレンチである。10トレンチでは8・9トレンチと同様、表土下1.5～1.8m（標高6.6～6.9m）で中世の遺物を含む包含層の下層を確認するために調査を進めたところ、オリーブ

褐～褐色細粒砂層が0.2～0.3mの厚さで堆積する遺物包含層を検出しており、同層を精査するとともに、その堆積層を除去した段階で遺構の有無を確認するために精査を行った。その結果、遺構を検出するには至らなかったものの、製塩土器脚柱、土錘、平行タタキを外面に残す須恵器甕の体部片などが出土した。下層（標高6.0m近くの褐～暗褐色細粒砂層）で、完形の土師器甕を含む竪穴状遺構（ＳＸ101）を検出した。同遺構の埋土中から須恵器、土師器のほか、鉄製の釘・刀子などが出土した。10トレンチでは、トレンチ北端のＳＸ101を避けて南半部でさらに下層遺構・遺物の有無を確認するために掘削作業を進め、表土下3.8m（標高4.6m）の地点まで掘削を行ったが、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

（桐井理揮）

（2）第1次調査の成果から見た阿良須遺跡の状況

各トレンチでの調査状況は以上のとおりであり、各トレンチの土層堆積状況の概略は平成27年度第1次調査の柱状図（第5図）で表記した。

調査前の地表面の標高は、東側が6.5m、西側は8.5mを測り、東から西へと高くなっている。表土下には、イネ科植物痕と思われる酸化痕を多量に含む水平堆積層などがあり、以下の層も基本は水平堆積層となる。7～10トレンチで確認している中世包含層（7・8・9層）は、上流域にあたる10トレンチでは標高6.5m前後、阿良須遺跡の中央部にあたる7トレンチでは標高5.5m前後にあり、遺跡中央部に向かって包含層が低く傾斜していることがわかる。さらに、7トレンチ表土下3.0m（標高3.4m）では弥生時代後期～古墳時代の遺物を含む層を確認したほか、10トレンチでは、標高6.2m前後で飛鳥時代の土器を含む竪穴状遺構（ＳＸ101）を検出した。

以上の第1次調査の成果から、調査区の西端である9・10トレンチ付近を中心に調査区を広げ、発掘調査を実施することにした。

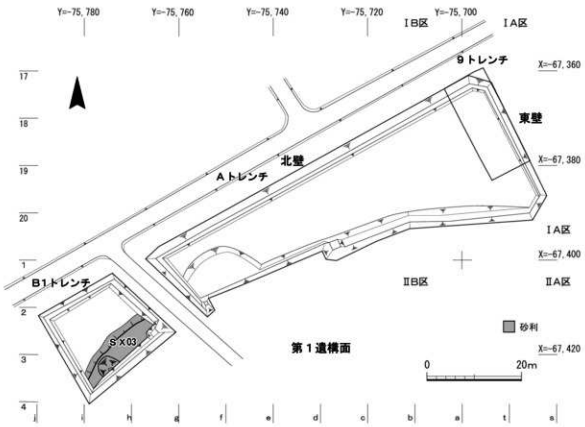
（石井清司）

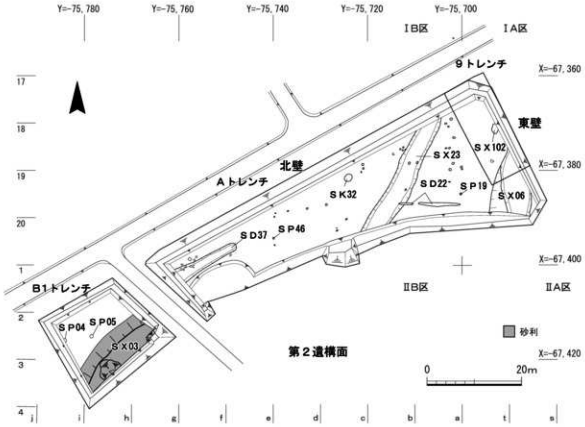
2）第2次調査

第1次調査の9トレンチで中・近世遺物を含む層、標高6.0m前後で土坑（ＳＸ102）とピット1基を検出したことから、周辺部での遺構の広がりを明らかにするため、第2次調査では新たに9トレンチの南西側を拡張する形で調査区を設定して発掘調査を行った。調査計画段階では、全長50m、幅約40mの長方形トレンチを設定して調査を開始したが、重機による表土掘削を進めた結果、トレンチ南部で砂利採掘（昭和後半頃）によるものと思われる撹乱部分を確認し、その痕跡は地表面にも数10cmの段差として視認できた。関係諸機関との協議の結果、大規模撹乱範囲は調査対象から除外し、新たに里道を挟んで西側に方形トレンチを設定して調査を行った。2か所のトレンチは里道を境に西側をＡトレンチ、東側をＢ1トレンチとした。

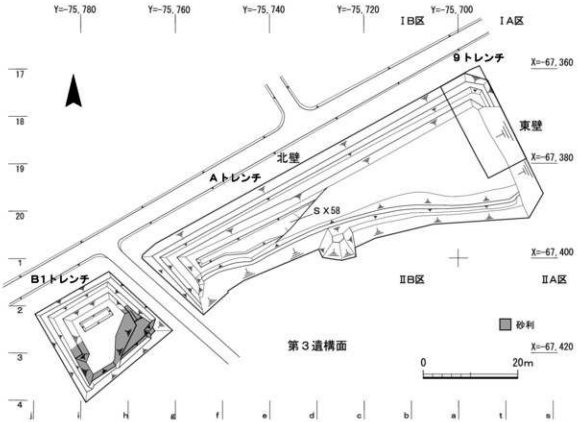
（1）Ａトレンチ

Ａトレンチにおける地表最高所はトレンチ南西隅にあって、標高8.6mを測る。地表は緩やかに東方向に下り、最低所となるトレンチ北東隅は、標高約7.6mを測る。現地表面より4.6m程度（標高4.1m付近）の深さまで掘削して調査を実施した。その結果、標高6.3m付近で中世の堆積層を、





第6図　A・B1トレンチ全体図1(1/800)



第7図　A・B1トレンチ全体図2(1/800)

標高5.6m付近でピット・土坑・溝・流路跡を、標高4.7m付近の細粒砂層上面でSX58の堆積層を、第1・2・3遺構面として認識し、精査を行った。

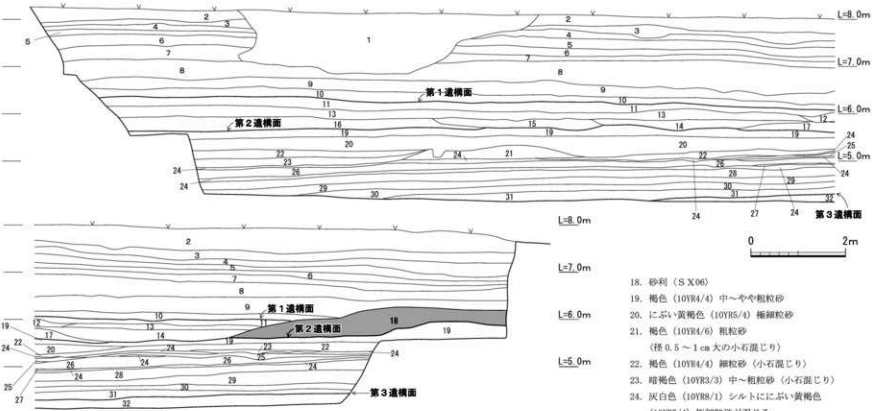
なお、Aトレンチの基本的層序は砂の堆積であり、安全面からトレンチ壁面を階段状に掘り下げて調査を行った。Aトレンチはトレンチ南側が大きく後世に削平されており、トレンチ北壁を中心に土層堆積状況を確認した。Aトレンチの北壁土層(第9図)は表土直下より30層程度の堆積土が確認でき、第1次調査9トレンチで観察したように、1～9層までは近世遺物を含み、標高6.3m前後の10層が中世包含層として確認できた。9層以下1m程度までは、5～6層に細分できるが、いずれも水平堆積の細粒砂層である。その下層(19層)の上面で土坑・柱穴を確認した。

①第1遺構面(第6図)

標高6.2～6.4m付近で、土師器・須恵器・瓦器などを含む遺物包含層を検出した。この包含層は小石を多く含むにぶい黄褐色細粒砂(第8・9図10層)であり、出土遺物も器壁表面の摩滅が著しいものが多い。同層での精査とともに10層の包含層を除去し、その下層の暗褐色細粒砂(11層)直上を第1遺構面とし、精査を繰り返した。その結果、明確な遺構は検出できなかったが、遺物の出土数が東半では少なく、西半部では多いことが明らかとなった。

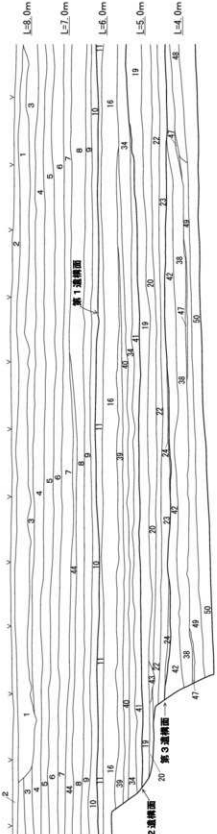
②第2遺構面(第6図)

第1遺構面での精査終了後、下層面での調査を進めるために、順次掘削作業を進めたところ、標高5.6m付近の褐色中粒砂～やや粗粒砂層(19層)の上面で溝・土坑等を検出したため、この層



1．攪乱（表土）
2．暗褐色（10YR3/4）細粒砂（表土）
3．暗褐色（10YR3/3）粘質細粒砂（表土）
4．にぶい茶褐色（10YR2/3）粘質細粒砂
（小石混じり）
5．褐色（7.5YR4/3）微粒砂
6．暗褐色（7.5YR3/4）細粒砂（小石混じり）
7．暗オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂
8．暗褐色（7.5YR3/3）粘質細粒砂
9．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂（土器多し）
10．にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂
（小石を多く含む・土器多し）
11．暗褐色（7.5YR3/3）細粒砂
12．暗褐色（7.5YR3/4）細粒砂
13．褐色（10YR4/6）細粒砂
14．暗褐色（7.5YR3/3）細粒砂
（径0.5～1cm大の小石を含む）
15．灰黄褐色（10YR5/2）中粒砂（小石混じり・SX06）
16．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂
17．褐色（10YR4/6）細粒砂
18．砂利（SX06）
19．褐色（10YR4/4）中～やや粗粒砂
20．にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂
21．褐色（10YR4/6）粗粒砂
（径0.5～1cm大の小石混じり）
22．褐色（10YR4/4）細粒砂（小石混じり）
23．暗褐色（10YR3/3）中～粗粒砂（小石混じり）
24．灰白色（10YR8/1）シルトににぶい黄褐色
（10YR5/4）極細粒砂が混じる
25．暗灰黄色（10YR4/2）細粒砂
26．灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂（所々に粗砂あり）
27．褐灰色（10YR4/1）細粒砂
28．にぶい黄色（2.5Y6/3）細粒砂
29．黄褐色（2.5Y6/6）細粒砂
30．暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂とシルトの細いラミナ
31．灰黄褐色（10YR4/2）粘質微粒砂
32．褐色（10YR4/4）粘質細粒砂

第8図　Aトレンチ東壁土層断面図(1/80)



第９図　Ａトレンチ北壁西側土層断面図(1/100)

を第２遺構面として精査を行った。なお、第２遺構面の上面に堆積している、にぶい黄褐色細粒砂(16層)には、第１遺構面の上層で認められたような遺物包含層は確認できなかった。

第２遺構面で検出した主要な遺構は、流路跡(ＳＸ06・23)・溝(ＳＤ22・37)・土坑(ＳＫ32)・柱穴(ＳＰ19～21・46)等である。

流路跡ＳＸ06(第10図)　トレンチ南東隅で検出した遺構である。平面形は浅い溝状を呈し、主軸方向は北から東に約12°振る。遺構の規模は上面幅約9.0m、深さ0.1mを測る。埋土は下層が薄い砂礫(１～1.5cm大の小石を多量含む)であり、その上層は褐色中粒砂からなる。

直近の東側トレンチ壁では厚さ約0.6mの砂利層(18層)がみられ、その先端は北方向に尖がって終わる。ＳＸ06の下層の砂礫は、この18層砂礫の一部と判断している。18層は由良川洪水氾濫に伴う堆積層であることから、ＳＸ06は自然堤防を越えて多量の水が北側後背低地に向かって突流した痕跡とみられる。ＳＸ06の下層から土師器皿の破片が出土した。

流路跡ＳＸ23(第10図)　ＳＸ06の北西約15mで検出した溝状遺構である。ＳＸ06と同様の洪水突流の痕跡と考える。流路の軸線方向は北から東に約26°振り、幅4.1～5.0m、深さ約0.1mの規模を測る。埋土は褐色中粒砂であり、少量の小石を含んでいる。遺物の出土はみられない。

溝ＳＤ22(第10図)　トレンチ東部で検出したＳＸ23を切る素掘り溝である。溝の主軸方位はほぼ正方位(東西方向)であり、検出長13.1m、上面幅0.4～0.5m、深さ0.1mを測る。溝の埋土はにぶい黄橙色細粒砂で、遺物の出土はみられない。

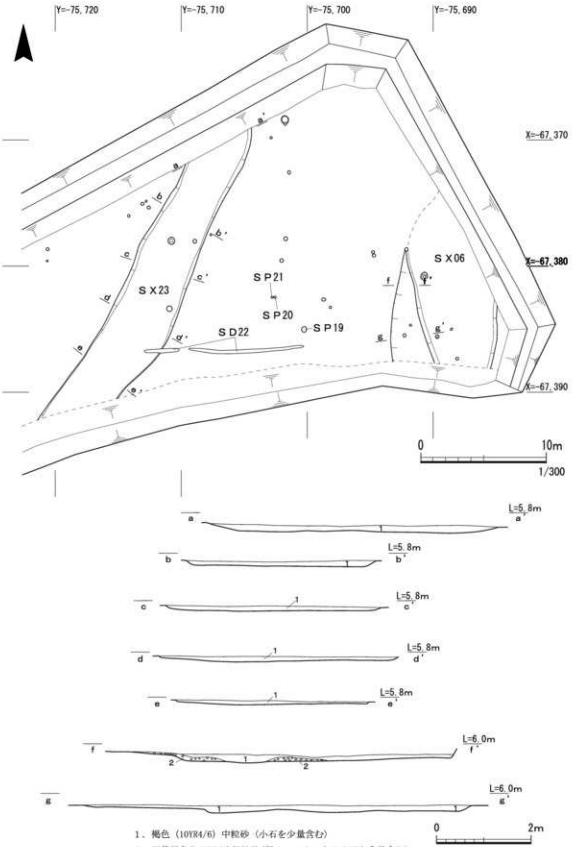
溝ＳＤ37(第６・11図)　トレンチ西端部で検出した素掘り溝である。主軸方位は真北から東に60°振っている。検出長14.2m、上面幅2.3～3.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色中粒砂である。ＳＸ06･23と同様な自然流路ともみられるが、主軸方向が異なり大きく東に振ること、埋土に小石を含まないことから、人為的な溝の可能性が高い。遺物の出土はみられない。

落ち込みＳＸ102(第６図)　第１次調査の際に９トレンチの西壁際で検出した遺構である。当初は土坑になると考えていたが、第２次調査の際に拡張して確認した結果、不整形の落ち込みであると判断した。埋土中から小形の土師器甕が出土した。出土遺物の時期から、飛鳥時代前半のものである。

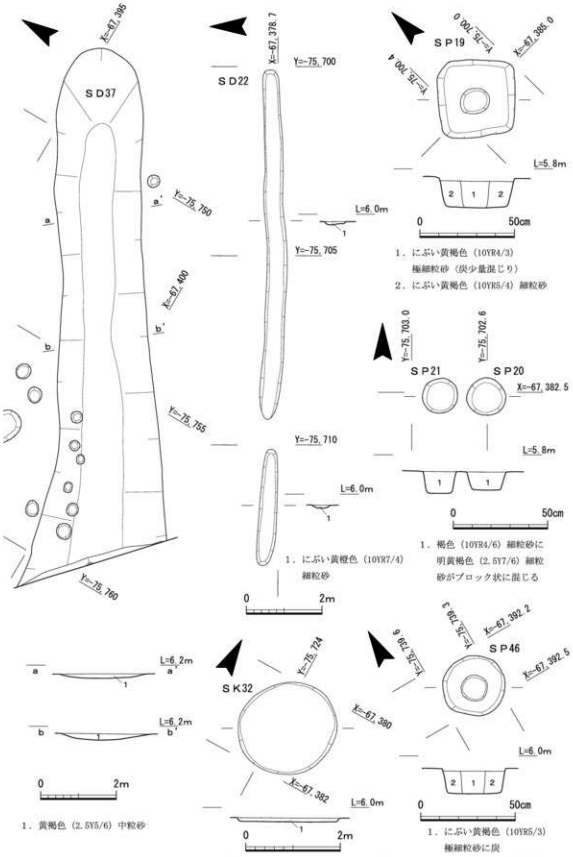
土坑ＳＫ32(第６・11図)　トレンチ中央部北壁付近で検出した、直径1.3m、深さ0.2mを測る円形の土坑である。底面はほぼ平坦であり、埋土はにぶい黄褐色細粒砂で小石を少量含む。規模・形状から野井戸の痕跡の可能性が高い。遺物の出土はみられない。

柱穴ＳＰ19(第10・11図)　トレンチ東部、ＳＤ22東端付近で検出した柱穴である。掘形は方形で、一辺0.4～0.5m、深さ0.15mを測る。掘形の埋土はにぶい黄褐色細粒砂で、中央付近から柱痕跡を検出した。柱痕跡は円形で直径約0.15mを測る。埋土はにぶい黄褐色極細粒砂で、炭化物を少量含んでいる。遺物の出土はみられない。

柱穴ＳＰ20(第10・11図)　トレンチ東部、ＳＰ19の北約4.3m付近で検出した柱穴である。ＳＰ20は掘形が円形で、直径約0.22m、深さ0.2mを測る。柱痕跡は検出されず、埋土は褐色細粒砂に明黄褐色細粒砂がブロック状に混じる。



第10図　Ａトレンチ第２遺構面ＳＸ06・23実測図(1/300・1/80)

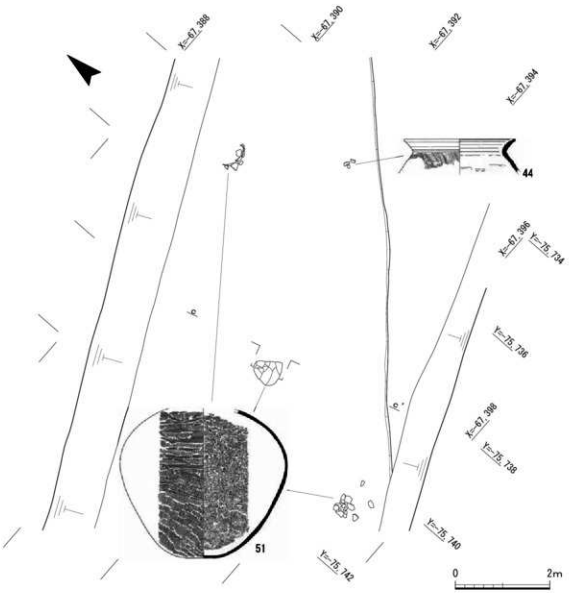


第11図　Ａトレンチ第２遺構面ＳＤ37・ＳＤ22ほか実測図(1/100・1/80・1/20)

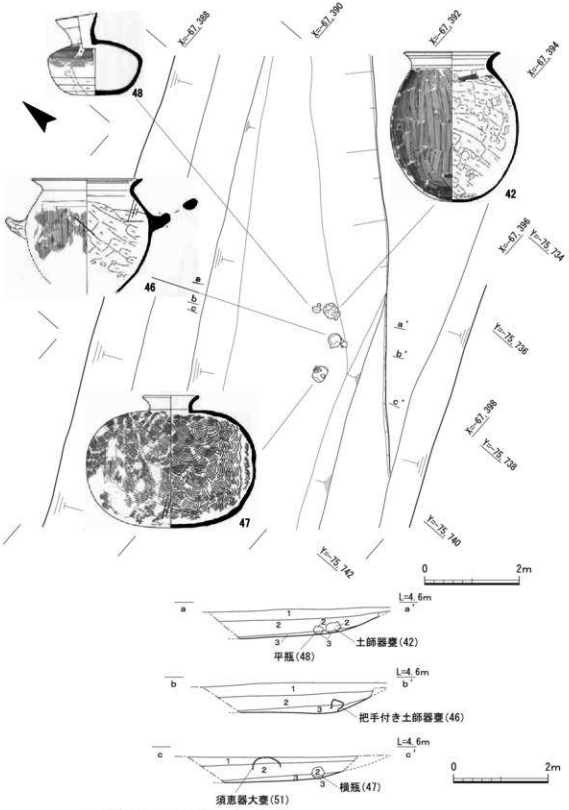
柱穴ＳＰ21（第10・11図）　ＳＰ21はＳＰ20の西５cmと近接して位置する円形柱穴で、直径0.18m、深さ0.23mを測る。掘形の底面は平坦で、柱痕跡は検出されない。埋土はＳＰ20と同じく、褐色細粒砂に明黄褐色細粒砂がブロック状に混じる。遺物の出土はみられない。

柱穴ＳＰ46（第11図）　トレンチ西部、ＳＤ37の東端から東に約8.4m離れた地点で検出した柱穴である。掘形は円形で、直径約0.38m、深さ0.24mを測り、掘形中央から直径約0.25mの円形の柱痕跡を検出した。掘形の埋土は黄褐色細粒砂で、柱痕はにぶい黄褐色極細粒砂に炭化物を含む。遺物の出土はみられない。

その他の遺構（第６図）　第２遺構面では、先記の遺構のほかにも多数の柱穴を検出している。柱穴の分布はまとまりがなく、まばらであることから建物跡を復原することはできない。各柱穴の多くは小規模で、直径0.2m程度の円形掘形で柱痕跡が確認できないものが多い。埋土はにぶ



第12図　Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58上層実測図(1/80)



1．黄褐色（2.5Y5/6）中粒砂
2．灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂に明黄褐色（10YR7/6）細粒砂ブロックが混じる
3．褐色（10YR4/4）粘質微粒砂

第13図　Aトレンチ第3遺構面SX58下層実測図(1/80)

い黄褐色細粒砂で、無遺物であることの共通性がある。これらの中には、ＳＰ20やＳＰ21のような２基１対的に近接して存在する例も数多く存在する。

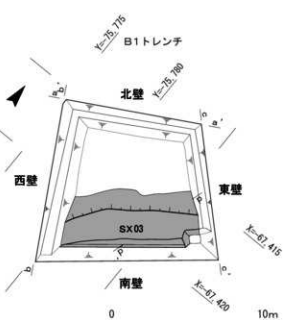
③第３遺構面（第７図）

第２遺構面の下に堆積した砂を重機掘削したところ、トレンチ西半部から流路跡ＳＸ58を検出した。ＳＸ58の東に広がる第３遺構面は、第２遺構面での遺構精査、図化作業ののち、さらに約0.9m下がった標高4.7m付近で確認した遺構面で、暗褐色中～粗粒砂や灰白色シルトとにぶい黄褐色細粒砂の互層（23・24層）をベースとする。

流路跡ＳＸ58（第12・13図）　トレンチ中央部やや西側の標高4.7m付近で、東から西方向に下がる砂を主体とした多数の堆積層ＳＸ58を検出した。このＳＸ58の堆積層は、Ａトレンチからさらに南西側のＢ１トレンチに広がる。ＳＸ58の東岸は直線的で、検出全長は約16mを測る。東岸にみるラインは北から東に約43°振っている。このＡトレンチでは、注意を払いながら標高約3.1m（地表下約5.5m）まで掘り下げて下層の確認調査を行ったが、ＳＸ58の底面を認識することはできなかった。

ＳＸ58の東岸沿い標高4.1～4.4m付近の黄褐色細粒砂（42層）から、同一個体の須恵器甕の破片が３か所に分かれて出土した（第37図51）。この甕破片の南東側東岸部付近では、土師器甕の口縁部（第35図44）も出土した。これらの土器を包含する42層は、ＳＸ58の堆積層の最上部を形成するものである。

42層の下層となる灰黄褐色中粒砂（50層）の掘削を行ったところ、ＳＸ58東岸の南部から完形比率の高い土器４点が集中して出土した。また、出土位置は東岸から約1.4m離れている。この４点の土器は、土師器甕２点（第35図42・46）と須恵器の平瓶（48）・横瓶（47）である。出土状況は、平瓶（48）と甕（42）は隣り合わせの状態で横たわる。甕（46）は、甕（42）から南西に0.3m離れ、口縁部を下にして出土した。横瓶（47）は、甕（46）から西に0.4m離れ、口縁部を欠くがほぼ正位置からやや傾いた状態で出土した。調査最終段階で４点の土器以外の遺物の確認を目的に、南側犬走りの掘削を行ったが遺物の出土はみられない。



第14図　Ｂ１トレンチ平面図（1/250）

ＳＸ58の底は確認できないが、トレンチ西端部ではシルトに近い粘質微砂の薄い堆積がみられる。これはＳＸ58が埋まる過程で旧河道部が滞水状態であったことを示している。

（２）Ｂ１トレンチ

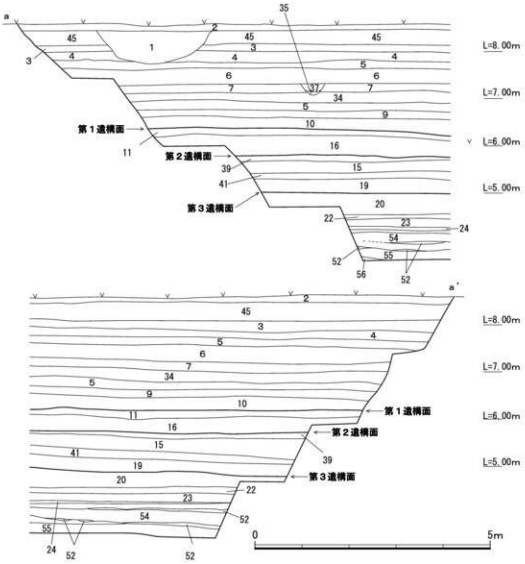
Ｂトレンチは里道によりＡトレンチと隔てられ、調査年度によってＢ１トレンチ（第

２次調査)とＢ２トレンチ(第３次調査)に分かれる。

Ｂ１トレンチは、Ａトレンチ南西端から南西に約6.5m離れている。ほぼ台形を呈する平面形のトレンチは、一辺18～22mの規模を測る。安全対策上、トレンチは法面と犬走りを設けた階段掘りで調査を行った。地上最高所であるトレンチ北西部は、標高8.5mを測る。

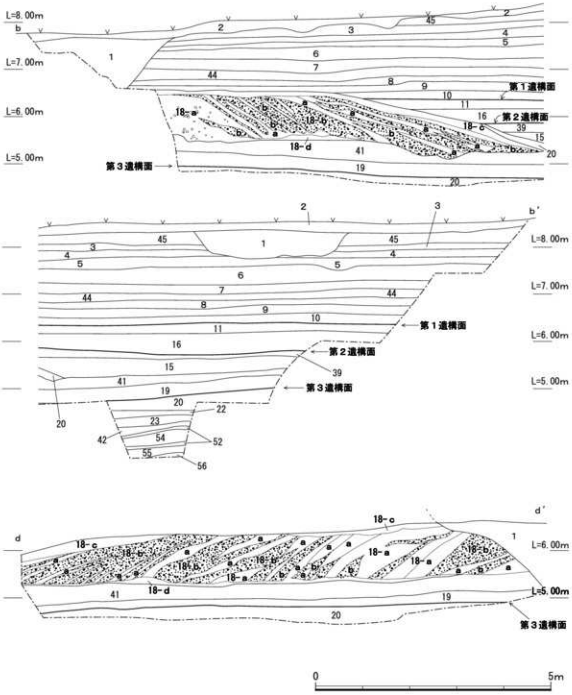
①第１遺構面(第６図)

Ａトレンチと同様、重機を使用して表土部の除去を行った。標高6.4m付近から遺物の出土が顕著になり、遺物包含層である10層については人力で掘削を行った。10層の下の11層上面で精査を行ったが、遺構は検出できない。トレンチ南東部では砂利の堆積層ＳＸ03を検出した。ＳＸ03の上端は第１遺構面から約0.2m突出した標高6.6mに位置する。出土遺物は、土師器・須恵器・陶磁器の破片が多数を占め、特に土師器は器表面の摩滅が著しい。そのほか、土師質土錘や鉄釘も出土した。

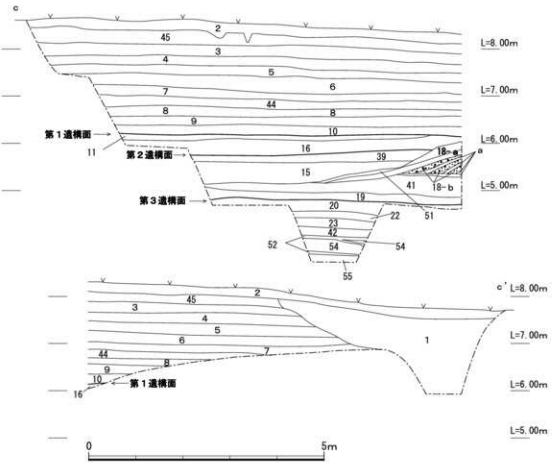


第15図　Ｂ１トレンチ北壁土層断面図(1/80)

砂利堆積ＳＸ03（第14図）　由良川氾濫に関連した自然堆積層であり、調査トレンチの南西部約２分の１を占める。ＳＸ03は第３遺構面の上に堆積したにぶい黄褐色中粒砂層(41層)上に堆積し、その下端面の標高は5.4mを測る。ここでは砂利の堆積状況確認のため、南半部を撤去し砂利層の縦断面（第16図ｄ－ｄ'）を記録した。砂利の堆積は基部に近い東側が1.2mの厚さを測り、西方向の裾部先端は単純に尖って終わる。砂利の堆積状況は２～３cm大の小石を中心とするものと、0.5～１cm大の小石や粗砂を中心としたものの２種に大別できる。いずれも西方向に下が



第16図　Ｂ１トレンチ西壁及びＳＸ03土層断面図(1/80)



土色は第 15 ～ 17 図共通

1．攪乱＜表土＞
2．暗褐色（10YR3/4）細粒砂＜表土＞
3．暗褐色（10YR3/3）粘質細粒砂＜表土＞
4．にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質細粒砂(小石混じる)
5．褐色（10YR4/4）微粒砂
6．暗褐色（7.5YR3/4）細粒砂（小石混じる）
7．暗オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂
8．暗褐色（7.5YR3/3）粘質細粒砂
9．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂
10．にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂（小石混じる）
11．暗褐色（7.5YR3/3）細粒砂
15．褐色（10YR4/6）細粒砂（小石混じる）
16．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂
18-a．灰色（5Y6/1）の荒粒砂（３～５mm 大）に３cm 大の河原石を含む
18-b．１～３cm 大の河原石群中に灰色（5Y 6/1）の粗粒砂（２～３mm 大）と粗粒砂（３～５mm）が混じる
18-c．灰黄色（2.5Y6/2）中～粗粒砂（小石を含む）
18-d．灰オリーブ色（5Y5/2）粘質極細粒砂に小石が混じる
19．褐色（10YR4/4）中～やや粗粒砂
20．にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂
22．褐色（10YR4/4）細粒砂（小石混じる）
23．暗褐色（10YR3/3）中～粗粒砂（小石混じる）
24．灰白色（10YR7/1）シルトににぶい黄褐色（10YR5/4）細粒砂が混じる
41．にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂
42．黄褐色（2.5Y5/6）細粒砂
44．暗褐色（10YR3/3）粘質細粒砂
45．褐色（10YR4/6）粘質細粒砂
51．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂
52．灰白色（10YR8/2）シルト（上下面に暗褐色酸化マンガン粒子あり）
53．にぶい黄褐色（2.5YR4/3）細粒砂
54．黄褐色（2.5Y4/3）細粒砂
55．灰色（5Y4/1）中粒砂
56．暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質微粒砂

第17図　Ｂ１トレンチ東壁土層断面図(1/80)

る斜め堆積を示し、交互に堆積を繰り返す状況が確認できる。この2種の堆積層は、基部に近い南側ではそれぞれが厚く堆積し、その境界が明瞭には分離しえない。基部から裾に向かうほど小石層と粗砂層は厚みを減じるとともに、堆積角度が次第に緩やかとなる。因みに基部側では傾斜角が4.1°であるのに対し、先端付近では25°となる。

そのほかＳＸ03最上面では土壌化が進んだ灰黄色中～粗粒砂層（18－ｃ層）があるほか、41層と接するＳＸ03最下部では粘質土（18－ｄ層）の堆積がみられる。砂利層の調査で土師器の破片が出土したが、明確な時期判定が下せない。ＳＸ58埋没後の堆積であることから奈良時代から平安時代の堆積とみられる。

②第２遺構面（第６図）

重機を使用して第１遺構面の下層を約1.0m掘り下げたところ、標高5.7m付近の39層上面で柱穴（ＳＰ04・05）を検出した。精査を行ったが、それ以外に遺構の出土はみられなかった。

ＳＰ04　トレンチの西端で検出した、円形の掘形をもつ柱穴で、直径約0.25m、深さ約0.1mを測る。底面は平坦である。埋土のにぶい黄褐色細粒砂で遺物の出土はみられない。

ＳＰ05　トレンチ中央付近で検出した、円形に近い掘形をもつ柱穴である。幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。底面は平坦である。埋土のにぶい黄褐色細粒砂に柱痕跡はみられなかった。遺物の出土はみられない。

トレンチ南東部では、ＳＸ03西側斜面の裾部が西に広がり、ＳＸ03の上端と第２遺構面の比高差は0.6mを測る。

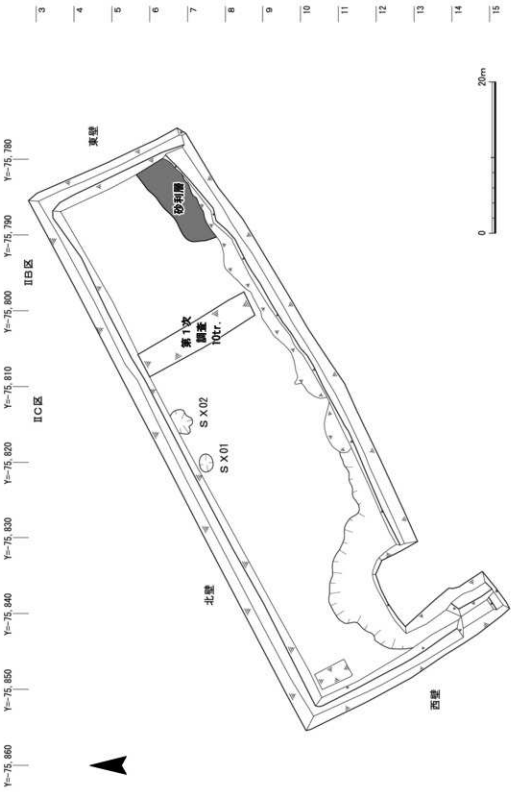
③第３遺構面（第７図）

重機を使用して第２遺構面の下層を約0.8m掘り下げ、標高4.8～5.1m付近のにぶい黄褐色極細粒砂層（20層）の上面で精査を行った。この20層はＡトレンチ検出のＳＸ58の堆積層である。特に遺構は確認できない。トレンチ北西部で下層確認のサブトレンチを設けた。ここでは標高3.8mと4.0m付近から東方向に下がる薄い粘土質極細粒砂（52層）の堆積を数層確認した。最深部は標高3.6mであり、壁面から水がにじみ出した結果、調査の安全面からそれ以上の掘削は行わなかった。ここでも遺物の出土はみられなかった。

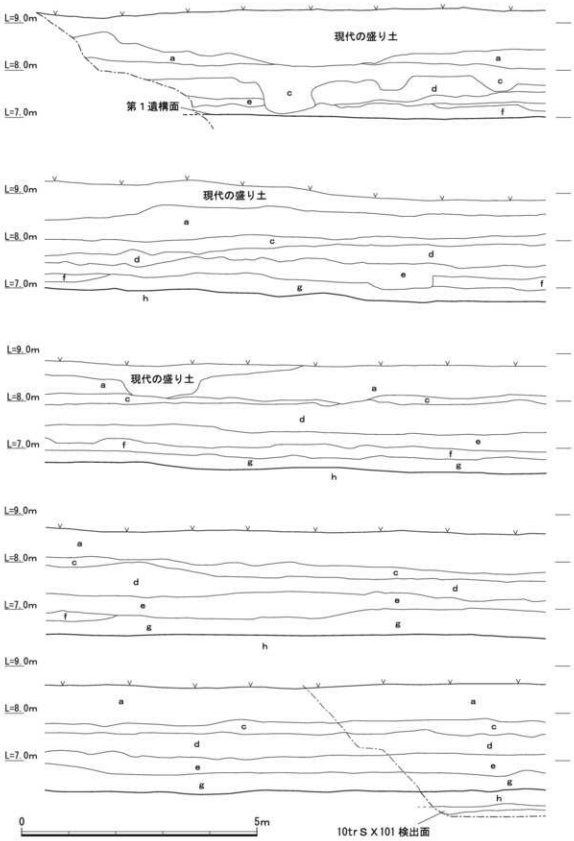
（竹原一彦）

３）第３次調査（Ｂ２トレンチ）

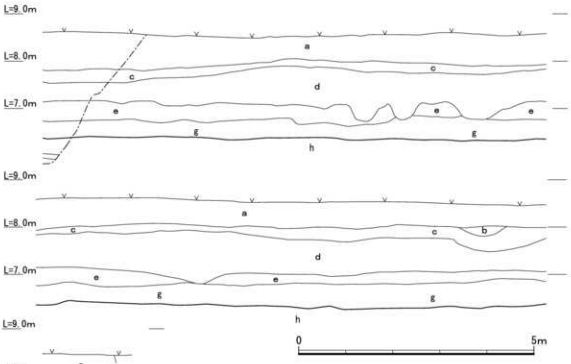
第３次調査のＢ２トレンチは、第２次調査のＢ１トレンチの西北延長部で、由良川本流に併行してトレンチを設定したものであり、トレンチ主軸は正方位とはなっていない。このため、Ｂ２トレンチでの概要説明に際しては、第18図のとおり、トレンチ長軸北面を北壁、長軸南面を南壁、短軸東面を東壁、西面を西壁と呼称して説明する。なお、第３次調査の調査面積は、表土面よりからの面積ではなく、第２次調査での第１遺構面相当部分からのトレンチ掘削面積で表記しており、その調査面積は1,100㎡（第１遺構面）を測り、以下、第２遺構面、第３遺構面での掘削では、安全面を考慮して幅1.2m程度の犬走りを四周して掘削作業を進めた。

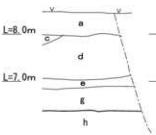


第18図　B２トレンチ第１遺構面平面図(1/500)



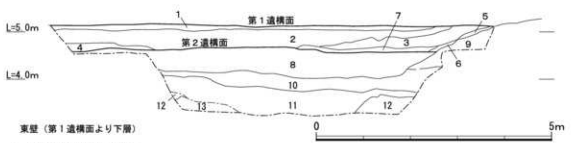
第19図　Ｂ２トレンチ北壁土層断面図(1/80)





北壁（第１遺構面より上層）

a．黄褐色（2.5Y5/4）細粒砂
b．黄褐色（2.5Y5/4）中粒砂
c．オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂
d．オリーブ褐色（2.5Y4/4）細粒砂
e．黄褐色（2.5Y5/6）中粒砂
f．明黄褐色（10YR6/6）中粒砂
g．黄褐色（2.5Y5/6）細粒砂
h．オリーブ褐色（2.5Y4/6）中粒砂



東壁（第１遺構面より下層）

1．黄褐色（2.5Y5/6）中粒砂
2．黄褐色（10YR5/6）微粒砂～中粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y 7/2）中粒砂をわずかに含む
3．オリーブ褐色（2.5YR4/6）極細粒砂～細粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y 7/2）細粒砂を含む
4．黄褐色（10YR5/6）シルト～中粒砂
5．オリーブ褐色（2.5Y4/4）細砂～微粒砂（粘性 やや弱　しまり やや弱　1～3cm 程度の大礫 10%混じる）
6．オリーブ褐色（2.5Y4/6）細粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y 7/2）細粒砂をわずかに含む
7．オリーブ褐色（2.5Y4/6）中粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y 7/2）細粒砂をわずかに含む
8．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y 7/2）シルトをわずかに含む
9．オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂～粗粒砂～極粗粒砂（砂礫土）（粘性 やや強　しまりやや強　0.2～6cm 程度の細礫～巨礫 90%以上混じる）
10．褐色（10YR4/6）極細粒砂（粘性 弱　しまり 弱）
11．にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～粗粒砂（粘性 なし　しまり なし）
12．黄褐色（10YR5/6）中粒砂（粘性 ほぼなし　しまり なし）
13．オリーブ褐色（2.5Y4/6）極細粒砂（粘性 ほぼなし　しまり なし）

第20図　Ｂ２トレンチ北壁及び東壁土層断面図(1/80)

（１）表土直下から第１遺構面

調査前の地表面の標高は、東端で8.2m、西端で9.2mを測り、西から東へとわずかに傾斜しており、トレンチ西端は、阿良須遺跡の西端部分に相当する。

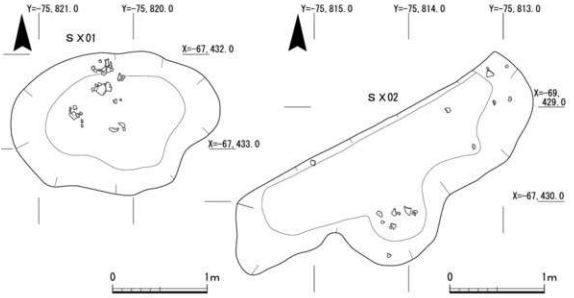
Ｂ２トレンチの調査では、第２次調査の成果を踏まえて、中世遺物が比較的まとまって出土したｅ層（黄褐色中粒砂：第１遺構面の上層堆積層・およそ標高6.3～7.5m）までを重機により慎重に掘削し、以下ｇ層（黄褐色細粒砂）で、遺構・遺物の有無を確認しながら、人力による精査を行った。その結果、ｇ層を除去した段階で、遺物がまとまって出土したところを確認し、第１遺構面として写真撮影・平面図の作成を行った。

第１遺構面の上層に堆積した堆積層（第19･20図）は、深さ0.6～0.8mまでは現代に近い盛り土（ａ層）であり、その下に厚さ0.2mのオリーブ褐色極細粒砂（ｃ層）、その下層にオリーブ褐色細粒砂（ｄ層）が0.7～1.0mと厚くほぼ水平堆積している。ｄ層下にはトレンチ西側では明黄褐色中粒砂（ｆ層）を挟んで黄褐色中・細粒砂（ｅ層）があり、東側では、ｆ層の間層はない。なお、後述するように表土から第１遺構面までの堆積層はほぼ水平堆積であり、かつ植物根が酸化したかのような斑点を多く含んでおり、由良川の洪水堆積層を利用して水田耕作等が行われていたことが想像できる堆積層の状況であった。

（２）第１遺構面（第18図）

Ｂ２トレンチでは、古墳時代後期の杯蓋、土師器甕細片から古代土師器・須恵器、中・近世の土師皿、須恵質土器、瓦器、陶磁器細片があり、新しい資料としては17～18世紀の越前焼の甕口縁部片が出土した。調査では、ｅ・ｇ層を慎重に除去した段階でトレンチ北端に偏って土坑・焼土坑を検出した。

第１遺構面での遺構（第21図）は、土師器を含む窪み状の土坑（ＳＸ01）、土師器甕・壺を少量含



第21図　Ｂ２トレンチ第１遺構面ＳＸ01・02検出状況図(1/40)

む窪み状の落ち込み（ＳＸ02）のほか、第２次調査（Ｂ１トレンチ）で検出した砂利堆積ＳＸ03の頂部を検出した。

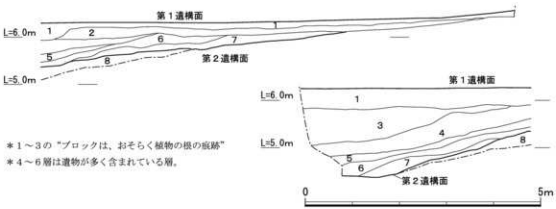
土坑ＳＸ01（第21図）　ＳＸ01は、トレンチ中央（ｅ・ｄ、6・7区）で検出した東西2.2m、南北1.8m、深さ0.2mを測る楕円形で土師器・須恵器細片が出土した。ＳＸ01は窪み状で明確な立ち上がりは確認できなかった。

落ち込みＳＸ02（第21図）　ＳＸ02はＳＸ01の北東３mで検出した不整形の落ち込みで、長軸3.0m、短軸3.0m、深さ0.2mを測り、中世陶磁器片のほか、土師器甕の細片、須恵器甕の体部細片が少量出土した。

（３）第１遺構面基盤層以下の第２遺構面

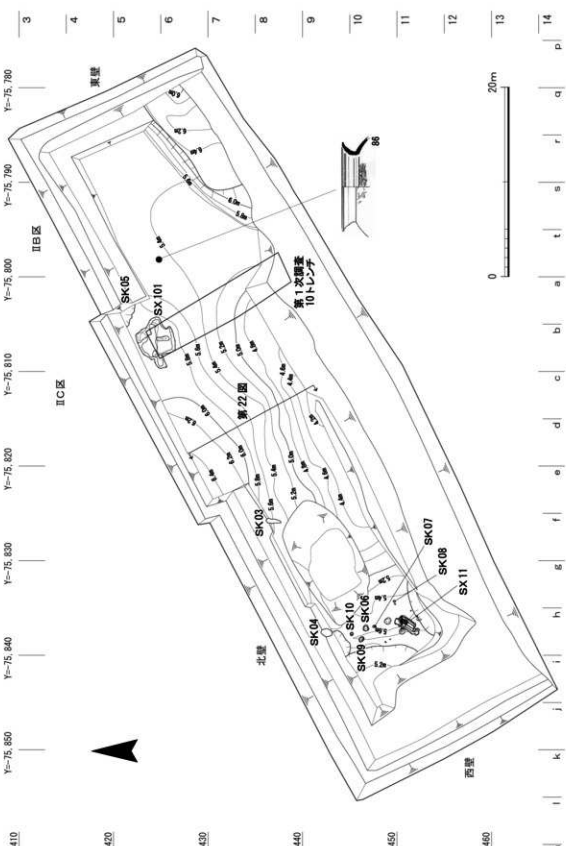
第１遺構面での写真撮影、平面図作成後、第２遺構面にむけて調査をすすめた。第２遺構面は12層（オリーブ褐色シルト）、37層（オリーブ褐色中粒砂）、38層（黄褐色砂層）などを除去して確認した遺構面である。また、第２遺構面は、第１次調査10トレンチで検出した竪穴状遺構（ＳＸ101）と同一遺構面であり、遺構・遺物の状況を確認するために、順次、発掘調査を進めた。

第２遺構面での検出作業では、トレンチの短軸（ｃ～ｅ区南北方向）に小規模トレンチを設定して、第１遺構面下層の堆積状況（第22図）を確認した上で掘削作業を進めた。トレンチ中央南北畔土層堆積状況（第22図）は、第１遺構面の基盤層である１層（黄褐色中粒砂）、その下層の２層（にぶい黄褐色砂層）が水平堆積しているのに対して、その下層では、北から南方向に堆積層が厚くなる３層（オリーブ褐色砂層）、４層（黄褐色砂層）、５・６・７層（褐色砂層）があり、北から南へと傾斜角20°程度で下がっている。一方、トレンチの南北軸は長さ15mに対して比高差が2.2mと

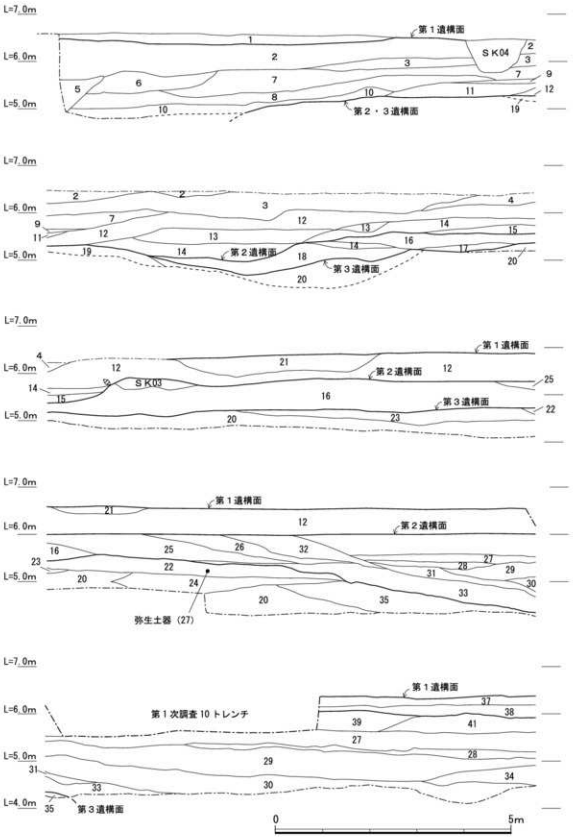


1．黄褐色（2.5Y5/6）中粒砂
2．にぶい黄褐色（10YR5/4）細粒砂～粗粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）細粒砂をわずかに含む
3．オリーブ褐色（2.5Y4/6）細粒砂～粗粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）細粒砂をわずかに含む
4．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂～粗で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）細粒砂をわずかに含む
5．褐色（10YR4/6）シルト～粗粒砂（粘性 弱　しまり やや強）
6．褐色（10YR4/6）シルト～粗粒砂で、炭化物をわずかに含む
7．褐色（10YR4/6）シルト～粗粒砂で、炭化物をわずかに含む
8．褐色（10YR4/6）極細粒砂～粗粒砂

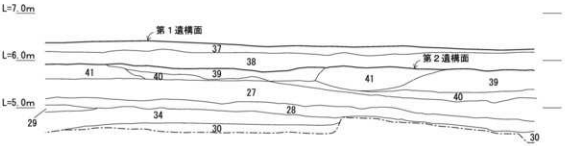
第22図　Ｂ２トレンチ中央南北畔土層断面図（1/80）

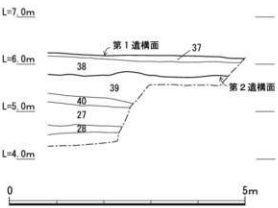


第23図　Ｂ２トレンチ第２遺構面平面図(1/400)



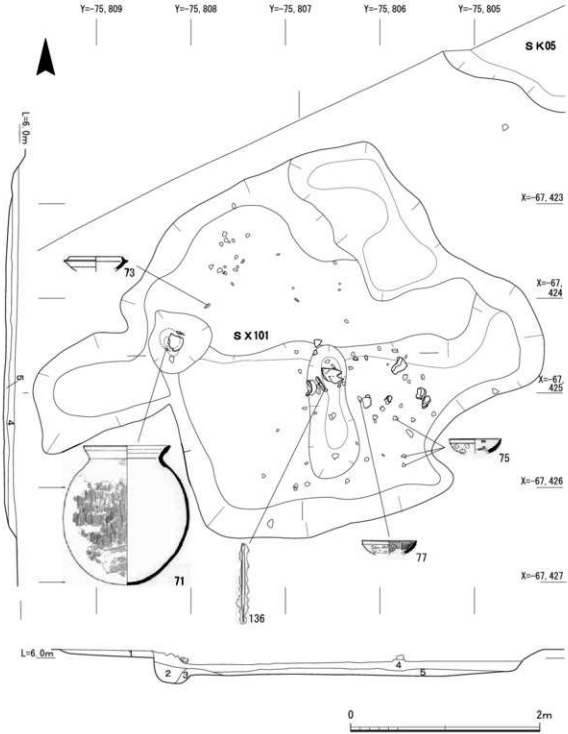
第24図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面北壁土層断面図１(1/80)





1．褐色（10YR4/6）粗粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）シルトが入り
2．オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルトで、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）シルトが入る
3．褐色（10YR4/6）シルト
4．褐色（10YR4/6）中粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）シルトが入る
5．褐色（10YR4/6）シルトで、灰白色（7.5Y7/2）シルトを少量含む
6．褐色（10YR4/6）粗粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）シルトが入る
7．褐色（10YR4/6）細粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）シルトが入る
8．褐色（2.5Y4/6）シルト
9．褐色（10YR4/6）シルトで、灰白色（7.5Y4/6）シルトを少量含む
10．褐色（10YR4/6）極細粒砂
11．褐色（10YR4/4）シルト
12．オリーブ褐色（2.5Y4/6）粗粒砂
13．オリーブ褐色（2.5R4/6）粗粒砂～細粒砂
14．褐色（10YR4/6）中粒砂～細粒砂
15．オリーブ褐色（2.5YR4/6）中粒砂～細粒砂
16．褐色（10YR4/6）細粒砂
17．オリーブ褐色（2.5Y4/6）粗粒砂～細粒砂
18．褐色（10YR4/6）中粒砂～細粒砂
19．褐色（10YR4/4）中粒砂～細粒砂
20．黄橙色（10YR6/3）粗～細粒砂で、ブロック状に灰白色（7.5Y7/2）シルトを含む
21．明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂
22．にぶい黄褐色（10YR5/4）細～粗粒砂
23．褐色（10YR4/6）シルト～粗粒砂
24．褐色（10YR4/4）シルト～粗粒砂
25．褐色（7.5YR4/4）シルト～細粒砂（粘性弱　しまりやや弱）
26．褐色（10YR4/4）シルト～細粒砂（粘性弱　しまりやや弱）
27．にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～粗粒砂（粘性なし　しまりなし）
28．黄褐～褐色（10YR5/6 ～ 4/6）中粒砂～粗粒砂（粘性ほぼなし　しまりなし）
29．にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂～粗粒砂（粘性なし　しまり微弱）
30．にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト～極粗粒砂（粘性 しまり弱）
31．褐色（10YR4/6）中粒砂～粗粒砂（粘性なし　しまりなし）
32．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト～極粗粒砂（粘性なし　しまり ほぼなし）
33．褐色（10YR4/4）シルト～細粒砂（粘性弱　しまりやや弱　灰白色（7.5Y7/2）シルトがブロックで少量混じる）
34．オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト～極粗粒砂（粘性ほぼなし　しまりなし）
35．黄褐色（10YR5/6）シルト～細粒砂（粘性やや弱　しまりやや強　灰白色（7.5Y7/2）シルトがブロックで少量混じる　0.5 ～ 2cm 程度の中礫がわずかに混じる）
36．褐色（10YR4/6）シルト～極粗粒砂（粘性弱　しまり弱）
37．オリーブ褐色（2.5Y4/6）中粒砂（粘性やや弱　しまりやや強　灰白色（7.5Y7/2）細粒砂がブロックで混じる　1 ～ 2 cm 程度の大礫がわずかに混じる）
38．黄褐色（10YR 5/6）微粒砂～中粒砂（粘性かなり弱　しまり弱　灰白色（7.5Y7/2）微粒砂～中粒砂がブロックで少量含む　0.5 ～ 2cm 程度の中礫が混じる）
39．黄褐色（10YR5/6）シルト～中粒砂（粘性弱　しまり弱）ラミナ状に堆積
40．褐色（10YR4/6）シルト～細粒砂（粘性弱　しまり弱）ラミナ状に堆積
41．黄褐色（10YR5/6）シルト～細粒砂（粘性弱　しまり弱　灰白色（7.5Y7/2）細粒砂がブロックで少量含む）
42．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂～中粒砂で、ブロック状に灰白色（10Y7/2）極細粒砂を少量含む

第25図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面北壁土層断面図２(1/80)



1．褐色（10YR4/4）極細～細粒砂（土師器・炭をわずかに含む）
2．暗褐色（10YR3/4）細粒砂（しまり弱い）
3．にぶい赤褐色（5YR4/4）細粒砂（しまり強い・焼土）
4．褐色（10YR4/4）細粒砂（わずかに炭混じる）
5．にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂（わずかに炭混じる）

第26図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＸ101実測図(1/40)

なっている。東西方向はほぼ同一標高にあり、調査区西端（ｇライン付近）では標高5.0mと低くなる傾向にある。

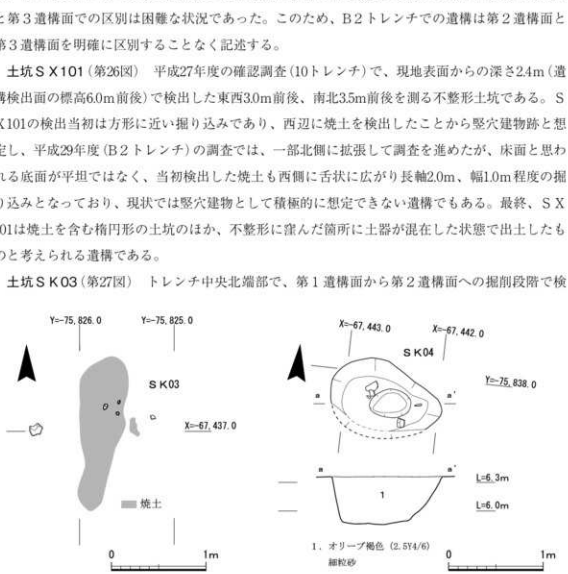
第３遺構面は、第１次調査(10トレンチ)、第２次調査(Ａトレンチ)では確認されていない遺構面で、第２次調査のＢ１トレンチで検出している弥生時代後期から古墳時代前期の土器を含む安定面（第３遺構面）に相当する。なお、第３遺構面はＢ２トレンチの西半部でピットなどは検出できたものの、東半部は東西に長いＢ２トレンチの中央部断ち割りで、東から西側に傾斜する包含層の一部を確認した程度で、明確な遺構は確認していない。

（４）第２・３遺構面

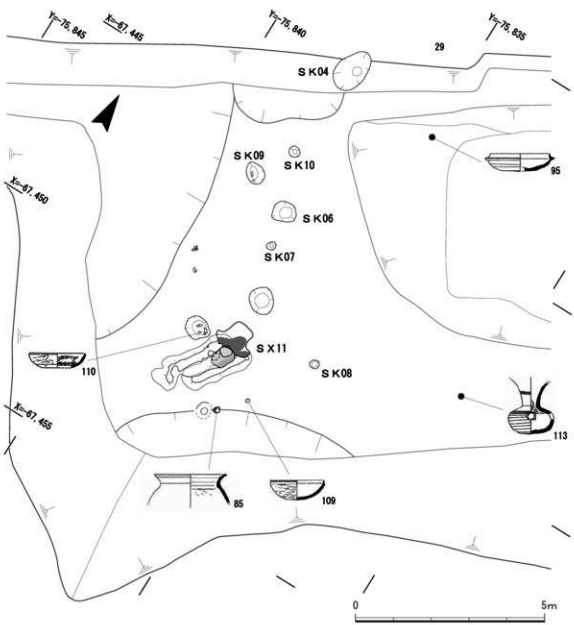
第２遺構面は主に飛鳥時代から奈良時代、第３遺構面は弥生時代後期から古墳時代前期までの遺物を含む遺構面である。ただし、Ｂ２トレンチの北壁、中央南北畔土層図での記述でもあるように、トレンチ西北側では第２遺構面での遺構検出面が高く、南東側に向かって堆積土が傾斜している。また、西側では第２遺構面と第３遺構面を同じ面で検出しており、厳密には第２遺構面と第３遺構面での区別は困難な状況であった。このため、Ｂ２トレンチでの遺構は第２遺構面と第３遺構面を明確に区別することなく記述する。

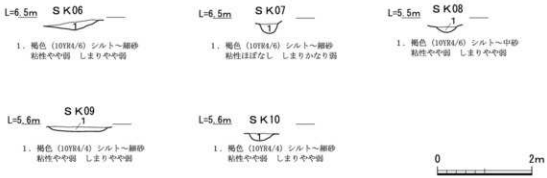
土坑ＳＸ101（第26図）　平成27年度の確認調査(10トレンチ)で、現地表面からの深さ2.4m（遺構検出面の標高6.0m前後）で検出した東西3.0m前後、南北3.5m前後を測る不整形土坑である。ＳＸ101の検出当初は方形に近い掘り込みであり、西辺に焼土を検出したことから竪穴建物跡と想定し、平成29年度（Ｂ２トレンチ）の調査では、一部北側に拡張して調査を進めたが、床面と思われる底面が平坦ではなく、当初検出した焼土も西側に舌状に広がり長軸2.0m、幅1.0m程度の掘り込みとなっており、現状では竪穴建物として積極的に想定できない遺構でもある。最終、ＳＸ101は焼土を含む楕円形の土坑のほか、不整形に窪んだ箇所に土器が混在した状態で出土したものと考えられる遺構である。

土坑ＳＫ03（第27図）　トレンチ中央北端部で、第１遺構面から第２遺構面への掘削段階で検



第27図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＫ03・04実測図(1/40)

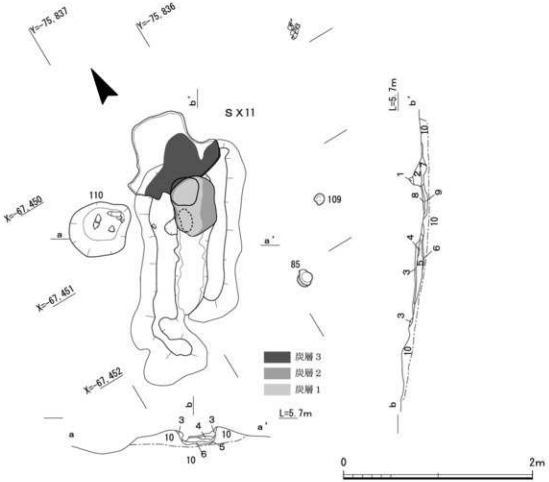




第28図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＫ06～10実測図(1/100・1/80)

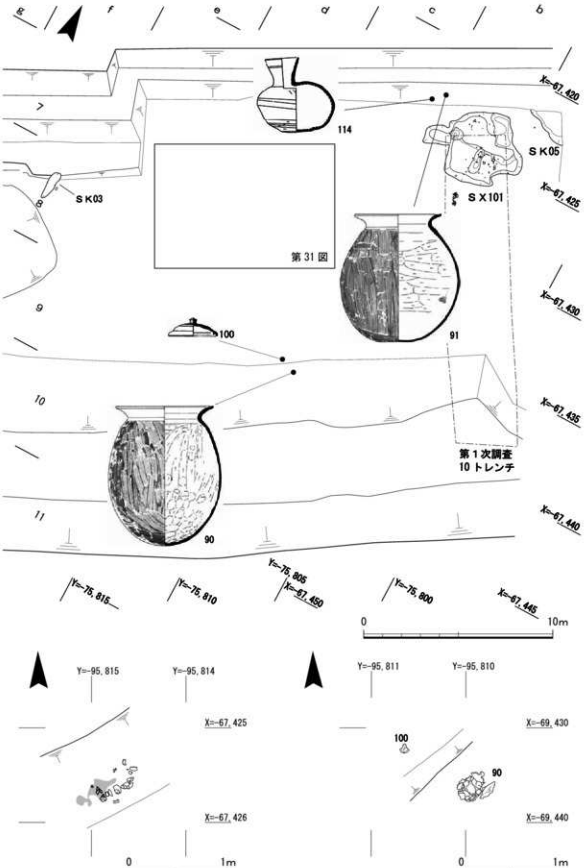
出した遺構である。南半部の一部は、本来検出すべき高さでは検出できず、底部のみ検出した。ＳＫ03は、南北長16.5m、東西幅0.25～0.5m、深さ0.2m程度で、土坑の底部には焼土があり、埋土には暗茶灰色・にぶい赤褐色などの焼土片がブロック状に含まれる。なお、ＳＫ03は調査時の台風13号でトレンチが水没したことにより、詳細な調査にあたるまでに大半が消失した。

土坑ＳＫ04（第27図）　ＳＸ06の北方約4.0mにあり、ＳＫ03と同様、第１遺構面から第２遺構面への掘削に必要な犬走り部分で検出した長軸1.2m、短軸0.85m、深さ0.5mを測る楕円形土坑で

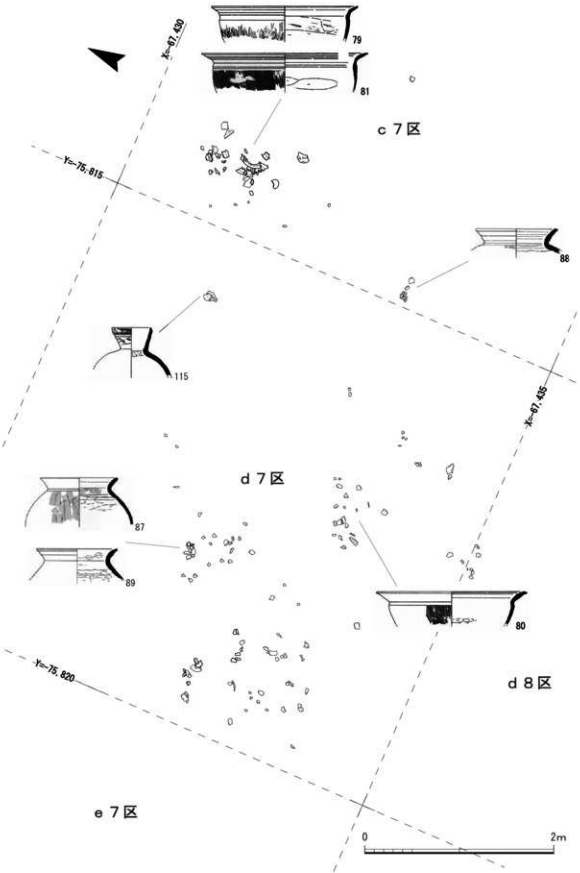


1．褐色（10YR4/6）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりやや強（にぶい赤褐色（5YR4/4）シルト10%混　明赤褐～赤褐色（5YR5/8～4/8）シルト～中粒砂２%混）
2．褐色（10YR4/6）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりやや強（炭2%混）
3．褐色（10YR4/6）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりやや強（炭2%混　明赤褐～赤褐色（5YR5/8～4/8）シルト～中粒砂２%混）
4．明赤褐～赤褐色（5YR5/8～4/8）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりなし
5．2．と同色
6．褐色（10YR4/6）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりやや弱（炭1%混　明赤褐～赤褐色（5YR5/8～4/8）シルト～中粒砂３%混）
7．褐色（10YR4/6）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりやや強（炭20%混）
8．にぶい赤褐色（5YR4/4）中粒砂　粘性やや強　しまりほどなし（明赤褐～赤褐色（5YR5/8～4/8）シルト～中粒砂炭10%混）
9．明赤褐～赤褐色（5YR5/8～4/8）シルト～中粒砂　粘性なし　しまりなし
10．褐色（10YR6/4）中粒砂

第29図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面ＳＸ11実測図(1/40)



第30図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面東半部包含層遺物出土状況図(1/200・1/40)



第31図　Ｂ２トレンチ第２・３遺構面中央包含層遺物出土状況図(1/40)

ある。ＳＫ04は第１遺構面から第２遺構面への掘削途中で検出した遺構であり、層位的には第２遺構面の上面で、第１遺構面の下層にあたり、埋土はオリーブ褐色の細粒砂に炭や暗赤灰色の焼土が含まれている。

土坑ＳＫ05（第28図）　ＳＸ101の北東で検出した遺構で、遺構の全容までには至っていないが、北・西壁での断面観察から土坑と判断した遺構である。土坑からは土師器片が出土した。

土坑ＳＫ06（第28図）　ＳＸ11（炉跡）の北３mの位置にある直径0.5～0.65m、深さ0.07m程度の浅い円形土坑で、埋土は褐色シルト～細粒砂である。

土坑ＳＫ07（第28図）　ＳＫ06の南0.7mにある直径0.25m、深さ0.15mの円形土坑で、埋土は褐色シルト～細粒砂である。

土坑ＳＫ08（第28図）　ＳＸ11の東2.0mにある直径0.25m、深さ0.07m程度の浅い円形土坑である。埋土は褐色シルト～中粒砂である。

土坑ＳＫ09（第28図）　ＳＫ06の北西1.0mの位置にある直径0.5m、深さ0.02mを測る円形土坑である。埋土は褐色シルト～細粒砂である。

土坑ＳＫ10（第28図）　ＳＫ06の北1.5mの位置にある直径0.3m、深さ0.07mを測る円形土坑である。埋土は褐色シルト～細粒砂である。

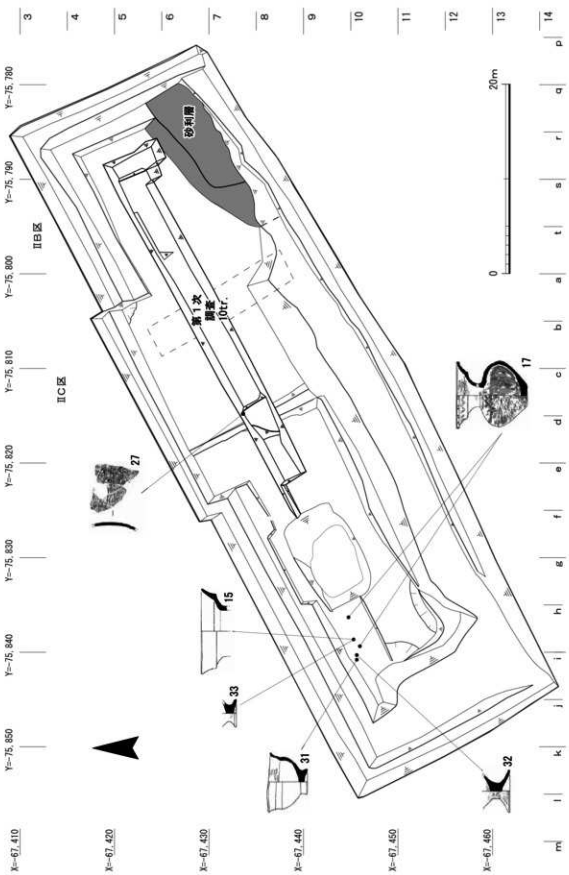
炉跡ＳＸ11（第28・29図）　Ｂ２トレンチ西端で検出した南北方向での長さ1.5m、東西方向での幅0.3～0.4m、深さ0.5mを測る遺構で、東西の両側には0.15m程度の削り出しがあり、中央部の底部高と削り出し部の基底部の標高がほぼ同じ高さになっている。ＳＸ11には３面の焼土面が認められ、８層下面に焼土面（９層）があり、焼土とともにわずかに炭（炭層１・２）を含んでいる。８層の上層には厚さ0.5m程度の褐色シルト層（１・２層）があり、その上面には９層と同様の焼土面がある。最終焼土面（３層）は南側に偏してあり、その北側には東西幅1.0m、南北幅0.8m程度の広がりで、厚さ0.2m程度の炭層（炭層３）が堆積している。焼成した製品までは不明であるが、炉跡と思われる遺構である。

包含層（第28・30・31図）　第２・３遺構面の調査では、明確な遺構としては認識できなかったが、完形に近い状態での土器の出土があった。特に調査区西端のＳＸ11を中心とした地点のほか、トレンチ中央、ＳＸ01とＳＸ11との中間点において、第２遺構面での最も遺構面の高いｃ・ｄライン付近で、土器がまとまって出土している。これら土器は飛鳥時代から奈良時代にかけての土師器甕・椀・皿のほか、須恵器杯蓋などが出土した。

（５）第３遺構面（第32図）

平成27年度調査の10トレンチ、平成28年度調査のＡトレンチでは確認されていないが、平成29年度調査のＢ２トレンチでは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を含む安定面（第３遺構面）を検出した。この面はＢ２トレンチの中央Ｃライン付近で水平気味に堆積する22層と、22層を切るように西から東側へ傾斜して堆積している33層を確認するとともに、トレンチ西側では明確な遺構は確認できなかったが、土器の出土を確認した。

（石井清司・藤田智子）



第32図　B２トレンチ第３遺構面平面図(1/400)

５．出土遺物

阿良須遺跡の調査では、３次にわたる調査によって多くの遺物が出土した。以下では、次数・地点ごとに出土遺物を概観する。弥生時代の遺物と土製品はややまとまって得られているため、次数に関わらずそれぞれ項を設けた。

なお、飛鳥時代の土師器・須恵器の分類は奈良文化財研究所の分類を、土師器甕の分類は本書の総括で行ったものを使用している。

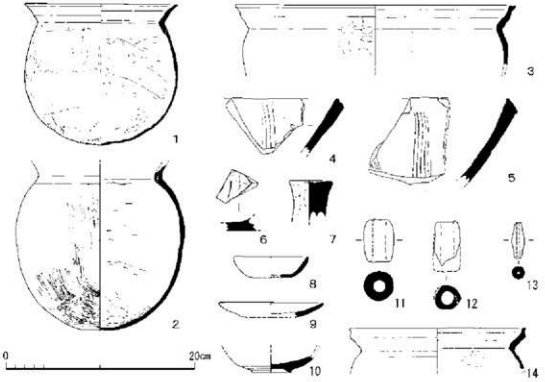
１）第１次調査出土遺物（第33図）

第33図は第１次調査で出土した遺物である。遺構の項で述べたように、下流側に設定した３～６トレンチでは遺物は出土しなかった。また、10トレンチで確認したＳＸ101は第３次調査の際に改めて調査を行ったため、第３次調査出土遺物の項で報告する。

５・６・９・10は７トレンチ７・10層から出土した。９は側面観が逆台形を呈す土師器皿で、近世初頭のものであろう。10は唐津の皿であり、同様に16世紀末～17世紀初頭に属する。１、２は土師器で小形の甕である。２は８トレンチ12層から単独で出土した（ＳＸ110）。器面の荒れが著しく、さらに上流からの混入である可能性も否定できない。１は９トレンチＳＸ102から出土したもので、体部の成形は第35図のような青野型甕と共通する。口縁部を上方に拡張するもので、頸部直上はナデで調整する飛鳥時代前半のものである。14も９トレンチで出土したもので、弥生時代後期後半～終末期の甕口縁部である。

７は製塩土器支脚である。10トレンチ８・９層から出土した。

以上のように、第１次調査で得られた遺物は７トレンチよりも上流側に限られた。また、７・



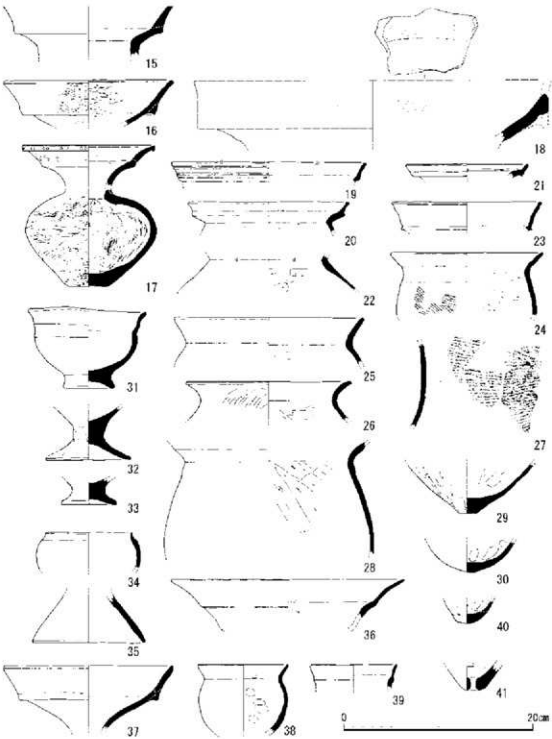
第33図　第１次調査出土遺物実測図（1/4）

8トレンチでは、標高6m付近に中～近世の包含層が形成されているが、出土した遺物はいずれも細片であり、2次包含層であると考えられる。それより下位の層では遺物は出土しなかった。

2)弥生時代の遺物(第34図)

弥生土器は各調査区で散見するが、多くは第3次調査で出土したものである。

15～17は二重口縁壺である。15・16は頸部が直立気味に立ち上がり、外方に拡張する口縁部を



第34図　第2・3次調査出土弥生土器実測図(1/4)

持つ。17は外反する頸部にさらに外方に広がる口縁部を持つ。玉葱形を呈する体部上位にはコンパス状に施文された波状文が4帯施され、口縁部にも波状文を持つ。口縁端部はつまみ上げるように拡張され、外面には竹管文が施される。由良川流域、あるいは近畿北部では類例がないが、体部の形や調整方法は近畿地方の二重口縁壺と大きな違いはない。波状文の施文方法からはむしろ近江以東の地域の影響を受けている可能性が高いが、在来系のものと考えておきたい。18は庄内系の加飾壺である。垂下部と上方の拡張部を欠くが、内外面ともにビッチの細かい波状文が施される。口縁部径は35cm以上に復元することができる大形品である。

19～30は甕である。甕には有段口縁をもつ在来系統のもの(19～22・29)、「く」の字状口縁を持ち、外面にタタキを残すもの(24～27)がある。在来系統のもので擬凹線をもつものは少数であり、19のみであった。外面にタタキを持つ甕は当該期の由良川流域では主体を占めることはないが、複数点出土していることは注目される。23は複合口縁をもつ、いわゆる山陰系の土器である。胎土は他のものとの明確な違いは認められず、搬入品かどうかは判断できない。28は胎土に多量の角閃石を含んでおり、東部瀬戸内地域からの搬入品の可能性がある。31～33は体部内外面をミガキで仕上げる台付甕である。31・33は脚部の形骸化が著しく、丹後の台付甕の最終形態であると考えられる。32にはタテ方向のミガキが認められる。

34～36は高杯である。34は椀状の杯部をもつものであり、口縁端部に強いナデが施される。36は外来系統であり、若狭湾以東の日本海地域の影響を受けた土器であろう。ただし、混和材にはチャート系の岩石を含むなど他の土器と大きな違いはなく、搬入品かどうかは肉眼観察では判断できない。37は在来系統の器台である。本来は内外面にミガキが施されていたと考えられるが、摩滅が著しい。38・39は小形鉢である。38はやや粗な胎土で作られており、器面にはミガキが認められない。口縁部の伸長は認められず、布留式期に下るものではないだろう。39の胎土はやや精製されたものを用いており、外面にはミガキが観察される。40は手づくねの鉢の底部である。41は焼成前穿孔を施された有孔鉢である。

今回の調査で出土した弥生土器は多くが包含層出土遺物であり、一括性には恵まれないものの、おおむね弥生時代終末期でも後半段階に属するものと考えられる。中でも、加飾された壺、あるいは外来系統のものが多いことが特徴である。弥生時代終末期、由良川流域では土器の搬入は全体的に低調である。その中で、今回の出土土器はこの地域では外来系統の土器の量が多く、注目すべき資料であると言えるだろう。

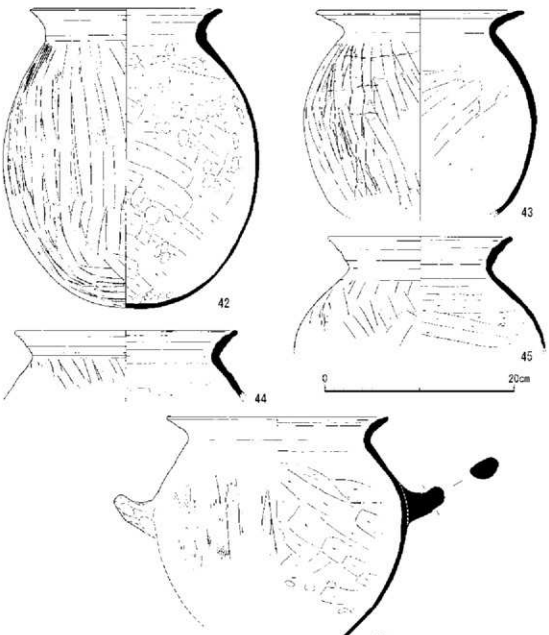
3)第2次調査出土遺物

第2次調査で出土した遺物の中で遺構から出土したものはＳＸ58出土遺物のみであり、その他の遺物は包含層から出土した。

ＳＸ58(第35～37図)　ＳＸ58からは、上層からも土器が出土しているが、下層に伴うものは42と46～48である。42～46は口縁部に強いナデを施す、いわゆる青野型甕である。総括で詳述するが、42・46は、口縁部が上方にのびる点で、口縁部の外反傾向が認められる43よりも古相を示すものである。このことは、43がＳＸ58の上層で出土していることと矛盾しない。

42は完形品で、口径19.5cm、器高31.7cmを測る。やや下膨れの体部であり、内面のヘラケズリは底部下半まで及ぶ。底部外面にはヨコ方向の仕上げのハケが施される。44・45は、口縁部の外反が認められず、総括で述べる様相4に近い時期のものであろう。46は球胴気味の体部に牛角状の把手を持つタイプの青野型甕である。

47は須恵器横瓶である。体部は平行タタキで成形され、側面にはカキメが施される。体部外面には径2～3cm程の断面クレータ状の剝離痕跡が多く認められるが、焼成時に生じたものなのか、2次被熱に伴う痕跡かは明らかにしえない。48は平瓶である。平底の底部を持ち、ラッパ状に広がる口縁部を持つ。肩部の稜は明確ではないが、カキメによって肩部の上位と下位は明確に



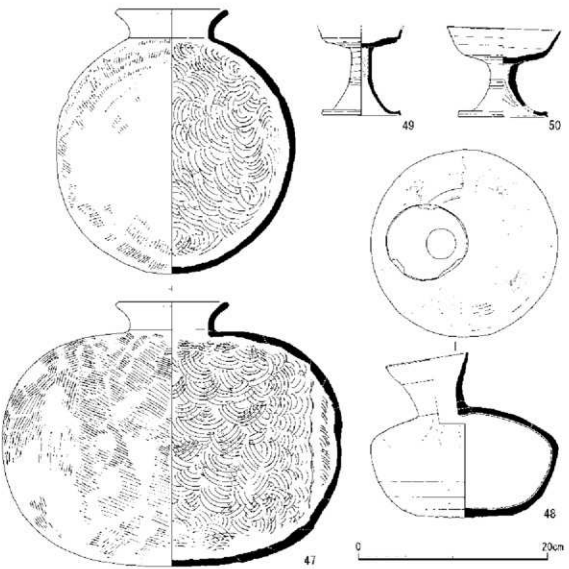
第35図　第2次調査SX58出土遺物実測図1 (1/4)

区分されている。49・50は須恵器で短脚の無蓋高杯である。いずれも脚端部は面を持たせるように成形しており、脚柱部には沈線がめぐる。51は須恵器大甕である。体部は平行タタキで成形され、肩部には櫛描文が8条以上施されている。

ＳＸ58出土遺物は残存率に恵まれたものも多く、特に下層から出土した42・46～48は、一括性の高い遺物であると考えられる。総括の項で後述するように、飛鳥Ⅱ～Ⅲに比定できよう。

包含層(第38図)　52は両黒の黒色土器椀であり、内面には緻密なミガキが施される。12世紀に属するものか。53～56は瓦器椀である。口縁部が残存する54は、口縁端部を上方につまみ上げる丹波型瓦器椀である。53・55・56は貼付高台を持つ底部である。高台はしっかりとした粘土でつくられるものが多く、古相を示す。いずれも内面には密な暗文が施される。

57は太筋の沈線が4条施された須恵器椀である。欠損しているため明らかではないが、本来は把手が付くコップ状の椀であった可能性がある。58は側面観が台形を呈す土師器皿である。59は厚手の土師器杯であり、外面には指頭圧痕を顕著に残す粗製品である。整形は青野型甕の底部に



第36図　第２次調査ＳＸ58出土遺物実測図２(1/4)

よく似ており、飛鳥時代のものであろう。60・61は東播系須恵器鉢口縁部である。口縁部をやや上方に拡張するものであり、12世紀代の製品であろうか。62は丹波焼擂鉢であり、内面にヘラ描きによる三角形の記号文を持つ。63はしのぎ連弁文の龍泉系青磁椀である。12世紀末～13世紀初頭にかけての年代が与えられる。

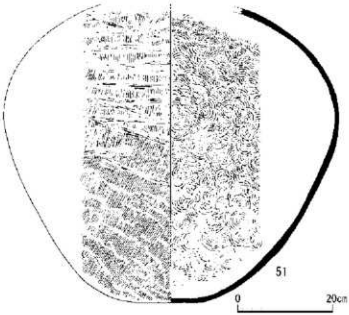
64～68は瓦質土器鍋の口縁部である。瓦質鍋は図化できなかったものも含めて出土量は比較的多いが、全形をうかがうことができるものはない。口縁部形態は65のように直立気味に立ち上がるものと、64、66～68のように外方に広がるように立ち上がるものの2者があり、後者が主体を占める。時期幅はあるが、おおむね中世前期の年代幅で理解できるものであろう。

4）第3次調査出土遺物

第3次調査で出土した遺物は、整理箱10箱分である。なお、第1次調査の10トレンチで確認したＳＸ101は、第3次調査で改めて調査したため、この項で報告する。

ＳＸ101（第39図）　69～78、136・137はＳＸ101から出土した。69・70は土師器で口縁部を強いナデで成形する青野型甕である。口縁端部は匙面を持つようにやや上方につまみ上げられている。71はＳＸ101の北西隅に口縁部を上にするように置かれていたもので、完形品である。口縁部はやや厚ぼったく、端部を上方にややつまみ上げるようにナデで成形している。内・外面に強いナデの段を残す青野型甕とは口縁部形態・体部の調整とも異なっており、在来系統で考えることができるものである。

72は須恵器蓋Ｇである。焼きひずみが著しいが、口径約10cmに復元することができる。73は須恵器杯Ｈである。復元口径11.2cmを測り、立ち上がりの角度は緩い。74は須恵器椀の口縁部である。75～78は土師器**供膳具**類である。75～77はやや小形のもので、76・77には内面に放射状の暗文が認められる。いずれも外面にはヘラケズリを施し、口縁端部はやや外反させる形状となる。



第37図　第2次調査ＳＸ58出土遺物実測図3（1/8）

78は放射状の暗文を施した後、さらに斜行するような暗文を施すものである。外面にヘラケズリを持つ点と暗文の施文方法は畿内産のものとよく似ているが、口径に比して器高が低く、畿内産土師器ではない。

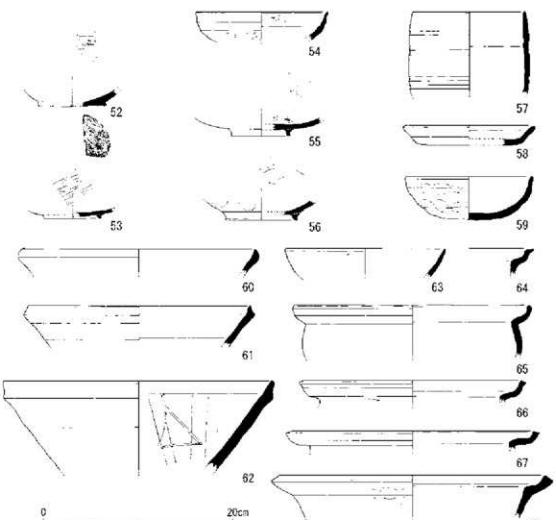
ＳＸ101の遺物は出土状況がやや安定しないとはいえ、器種も豊富であり、当地域においては数少ない飛鳥時代前半の資料群であると言える。

包含層（第39～41図）　79～81は口縁部に強いナデによる段を持つ

土師器鍋である。当遺跡出土の甕は口縁部の段が内面だけに認められるものが多いのに対し、鍋の口縁部には内外面ともに強いナデによる段が認められる。

82～92は土師器甕である。84・87は「く」の字状口縁部で端部を丸く単純に収める甕A、83・89は口縁部をややつまみ上げる甕B、88は端部を外突させる甕Cであり、口縁部に強いナデの段を残す、いわゆる青野型甕である。多くは内面に強いナデの痕跡を２～４段もつ。全形をうかがうことができる82・90は、いずれも内面はユビオサエとヘラケズリの痕跡が認められる。ヘラケズリはいずれも頸部直下までは及んでおらず、頸部から口縁部はナデで成形する。外面はハケで仕上げているが、底部付近は最終調整で横方向のハケを施すことが特徴である。91はやや平底気味の底部をもつ。内面にはユビオサエの痕跡は顕著ではなく、下半は平滑に仕上げられている。下半は椀状の土器を成形した後に体部を積み上げるようにして成形している。外面下半には同様に横方向の仕上げのハケが施される。

93～95は須恵器杯H・蓋Hである。古墳時代後期後半のものであろう。96～101は須恵器蓋G，102～108は須恵器杯Gである。飛鳥時代前半を中心とするものだが、一部飛鳥Ⅲに下るものもあ

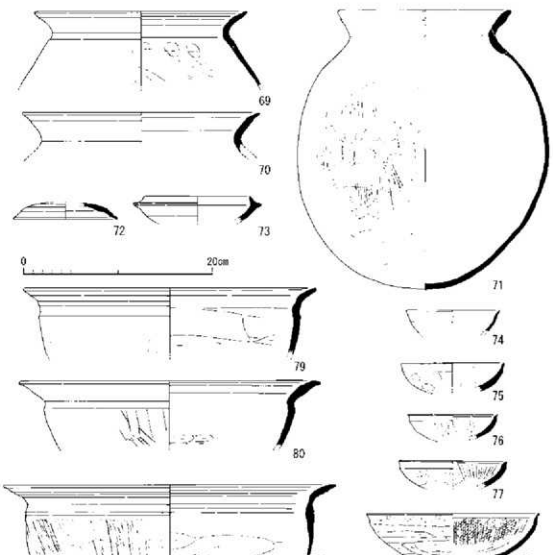


第38図　第２次調査包含層出土遺物実測図(1/4)

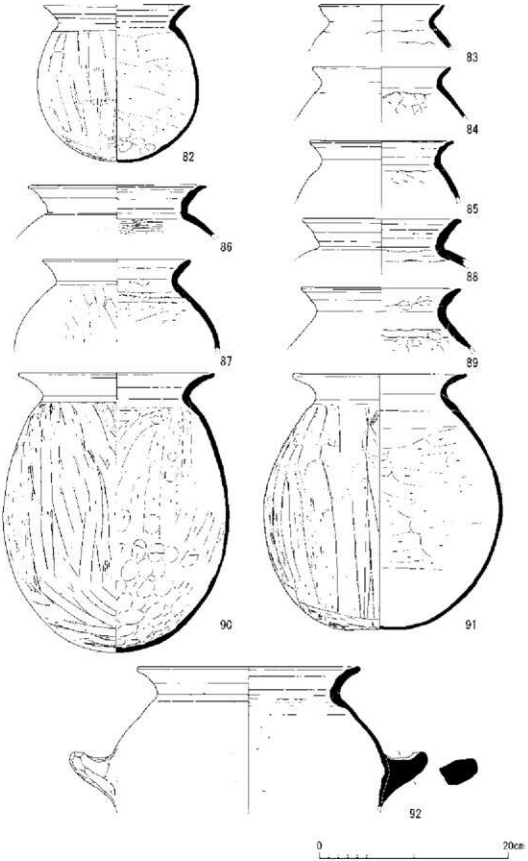
る。102～108は杯としたが、103は底部にケズリを施しておらず、あるいは蓋Hの可能性もある。108は大形のもので、口径17.6cmを測る。内面は平滑に仕上げられ、外面にはケズリが施される。底部を欠くが、やや丸底気味の器形であると考える。109～111は土師器杯である。109は外面を口縁部直下までヘラケズリするもので、口縁端部をナデによって外反させる。内面に暗文は認められない。110・111は内面に放射状の暗文をもつ。

112は須恵器で小形の壺類の口縁部であると考えられる。113は甑である。焼成がやや軟質で、器面の荒れが著しいが、体部下半には荒いケズリが施されている。114は平瓶である。丸底気味の底部に、やや球体気味の胴部をもつもので、古墳時代後期後半のものか。115は大半を欠損するものの、横瓶の口縁部であろう。これらの多くは包含層から出土したものであるが、おおむね古墳時代後期後半から飛鳥時代前半に収まるものであると考えている。

116～120は第1遺構面から出土した。116は小形の瓦質三足羽釜である。ススなどの使用痕跡は認められないミニチュア品である。口径4.8cm、体部高3.8cmに復元できる。117は肥前系の陶



第39図　第1・3次調査SX101及び包含層出土遺物実測図(1/4)



第40図　第３次調査包含層出土遺物実測図１(1/4)

器皿である。118は須恵質の擂鉢、119は備前の擂鉢である。120は内黒で底部糸切の丹後系の黒色土器底部である。

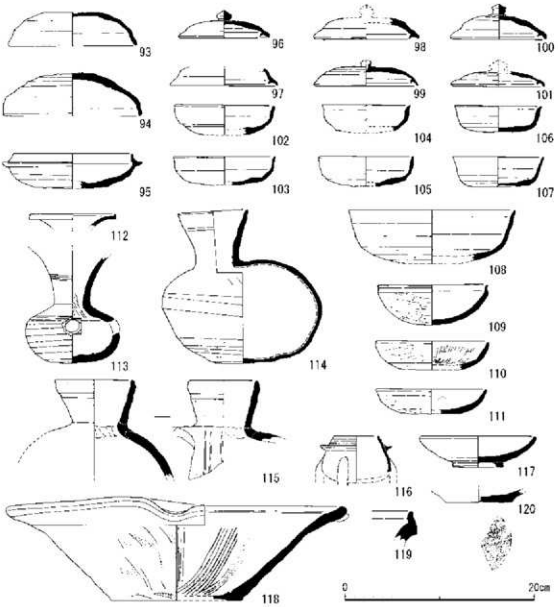
5）土製品（第42図）

第2次調査を中心に管状土錘が多く出土した。土錘は平面形状が縦長の長方形を呈するものが主体を占め、すべてが土師質である。平面形状はおおむね大きさが揃うが、123・126のように横幅に対して孔径が小さなものと、口径の大きなものの2者が認められる。

なお、完形品の重量平均24.3gである。

6）鉄製品（第43図）

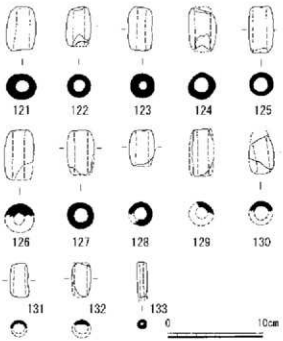
鉄器は5点を図化した。いずれも、保存処理前の所見である。



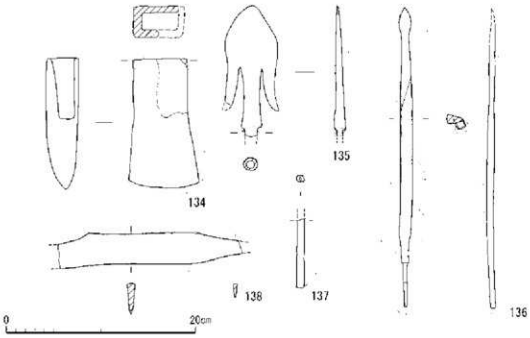
第41図　第3次調査包含層出土遺物実測図2（1/4）

134・135はＢ２トレンチ包含層から出土した。134は有肩鉄斧である。全長７cmの小形品であり、ミニチュア品の可能性もある。135は平根系の鉄鏃である。136～138はＳＸ101から出土した。136は長頸鏃２個体が融着したものであり、一方は片刃箭鏃であると考えられる。137は断面が方形の鉄器であり、長頸鏃の一部である可能性が高い。138は刀子である。木質は認められず、抜身の状態であったと考えられる。

（桐井理揮）



第42図　第２・３次調査出土土製品実測図(1/4)



第43図　第２・３次調査出土鉄製品実測図(1/2)

6．総 括　由良川下流域の地域社会と阿良須遺跡

1）検出建物数から見た由良川下流域の集落

阿良須遺跡の位置する由良川下流域は、律令制下ではほぼ丹後国加佐郡西半に相当し、丹後の最南端にあたる。当地域では古くから川底で多数の遺物が採集されていたが、[注8] 1973年の桑飼下遺跡の調査によって河川に隣接する自然堤防上に遺跡が立地することが知られるようになった。[注9] 特に弥生時代以降は居住域である由良川の自然堤防と、生産域である後背低地の存在するところに遺跡が存在することが強調され、[注10] 時には近世以降にも自然堤防上に重なるように集落が営まれている地域も多い。第44図は由良川下流域において、発掘調査によって古代以前の遺構が確認された遺跡の範囲を示したものであるが、ほとんどの場合は自然堤防の位置と重なっており、渡辺誠氏の指摘は40年以上が経過して資料の蓄積が進んだ現在においても、蓋然性が高いといえるだろう。阿良須遺跡もまさに由良川が形成した自然堤防上に位置する遺跡の一つであり、背後に低地部が控えるという点においても、由良川流域では典型的な立地条件のもとにある遺跡であるといえる。ここでは、当地域の遺跡の動態を縄文時代から平安時代にかけて通観し、阿良須遺跡を取り巻く地域社会について評価することで、本報告の総括としたい。

由良川下流域で得られている最も古い時期の遺物は、志高遺跡で出土した縄文時代早期の土器群である。志高遺跡は前期にも竪穴建物等の遺構が確認されており、当地域では最も古い居住域が形成されていたと評価できる。ほかにも採集資料によって各地で土器の存在は知られているものの、縄文時代中期以前は継続的に居住域が営まれた証左は今のところ得られていない。遺跡数の増加がみられるのは縄文時代後期であり、桑飼下遺跡では、掘削具と考えられる打製石斧や多量の土器とともに、竪穴建物に伴うとされる炉跡が47基検出された。渡辺氏は自然堤防上に存在する縄文時代集落の経済基盤について考察し、10棟程度の住居跡からなり、植物採集活動を中心とすることなど4点を掲げ、桑飼下型経済類型と呼称した。[注11] ほかにも土偶や耳管、石製装飾品が出土した三河宮の下遺跡、大型石棒の存在が知られている河口部の城ヶ谷遺跡など、地域全体で一時的であるが大幅な遺跡の増加が認められる。

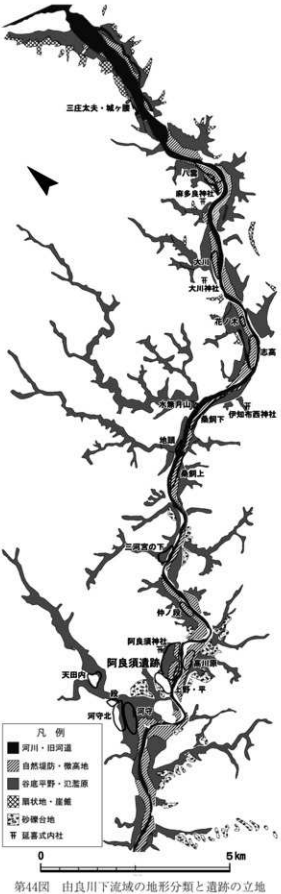
しかし、この傾向は縄文時代晩期以降に継続することはない。縄文時代晩期から弥生時代前期までは採集や包含層から出土した資料は散見するものの、遺構は未検出であり、この地域に安定した居住域が営まれるようになるのは弥生時代中期中葉を待たなければならない。志高遺跡、桑飼上遺跡では自然堤防上で居住域が形成されるとともに、それに伴う墓域も検出されており、集落が大規模化する。さらに中期後葉には大川遺跡、後期には河守北遺跡、終末期には花ノ木遺跡が加わり、弥生･古墳時代を通じて流域の自然堤防上には各地で居住域が形成されることとなる。由良川下流域でも、桑飼下遺跡より下流に位置する遺跡では大規模な調査が行われており、それぞれの遺跡で居住域の形成過程あるいは土地利用の変遷が検討されてきた。[注12] その成果によると、時期ごとに遺構密度や遺物の出土量には多寡が認められるものの、多くの遺跡では居住域が断続的に継持されているようだ。

以上のことを踏まえ、由良川下流域というややマクロな視点から、縄文時代から平安時代まで

の地域社会の状況を俯瞰してみたい。まずは、居住域に直結する要素である竪穴建物・掘立柱建物の棟数に着目し、その変遷について検討してみることにしよう。

付表1は遺跡ごとの竪穴建物（縄文時代～飛鳥時代）と掘立柱建物（奈良時代～）の検出棟数を集計したものである。このような視点に立つと、断続的に継続しているように考えられる遺跡においても時期によって検出建物数に大きな増減があり、ある特定の居住域が安定的に発展するわけではないということが読み取れる。竪穴建物が多く検出されている時期は各遺跡の「盛期」と表現され、その遺跡周辺では比較的安定した居住域が存在した時期であると言えるだろう。しかしながら、由良川下流域全体というエリアでみたとき、竪穴建物の検出棟数は、弥生時代後期に一時的な増加が認められるなど多少の増減はあるものの、弥生時代中期中葉から古墳時代後期まで大きな変化はないことを指摘することができる。各時期の時間幅は必ずしも均等ではないとはいえ、特定時期における大幅な人口増加は想定しがたく、時期ごとに居住域が形成される地点が移動したと評価することも可能であろう。

個別の居住域の成立・廃絶の要因を一様に考えることは適切ではないだろうが、由良川下流という地域性を考えたとき、水害による居住域の移動は想定されてもよいだろう。今回の阿良須遺跡の調査においても、Bトレンチでは奈良時代以降、複数回の洪水に見舞われたことが明らかとなったし、志高遺跡では洪水が奈良時代の掘立柱建物群廃絶の一因となったと推測されている。(注14) 実際に、近代の桑飼下集落は明治40年の洪水によって全村移転と



第44図　由良川下流域の地形分類と遺跡の立地
（注13文献を元に作成）（1/100,000）

付表１　由良川流域における検出建物数

遺跡＼時期	縄文 草	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生 Ⅰ	弥生 Ⅱ	弥生 Ⅲ	弥生 Ⅳ	弥生 Ⅴ	弥生 終	古墳 前	古墳 中	古墳 後	飛鳥 ※1	奈良	平安前期	備　考
八雲																			グリッド調査のみ
大川										2	2	2	1	2	1		2	2	
花ノ木												1	3						
志高			2							2	2		2	2		2	2	2	
桑飼下					2								1	1					
桑飼上									3	3	3	2		2			3	14	
三河宮の下				2	2										3	2			
仲ノ段																			
阿良須																			
高川原				2											2	1			
上野・平																			遺跡内に大良古墳あり
天田内																			
段																			
河守・河守北											2				2			2	墨書木簡、条里関連遺構
合計			2		51				8	13	20	9	12	17	9	11	38	54	2

包含層等から遺物出土　顕著な遺構あり　４棟以上の建物検出

※1　古墳時代後期～飛鳥時代として報告されているが、判別できないもの。
※2　数字は検出建物数である。

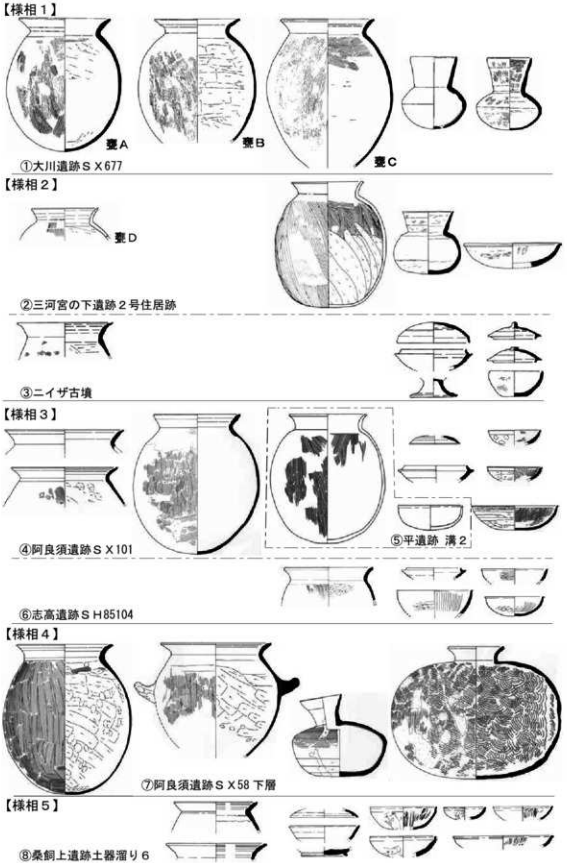
なったことが知られている。[注15] 想像力をたくましくするならば、度重なる水害のため、由良川下流域という一定エリアの中を移動しながら、自然堤防上に居住域が形成された結果が、居住域の変遷と竪穴建物の総数にも表れていると考えることもできる。

そのような状況で、古墳時代後期後葉～飛鳥時代にかけて、建物の数が劇的に増加する現象は注目される。この時期の竪穴建物数の急増は、志高遺跡で急激な居住域の拡大と、古墳時代後期以前の居住域が未確認であった上流部(旧大江町周辺)での居住域の形成が認められることが一因となっている。古墳時代後期以前、上流側では支流の宮川流域で小規模な遺跡が存在することは明らかとなっているものの安定した居住域は未確認で、量的に前段階からの飛躍が著しい。今回の阿良須遺跡の調査でも、竪穴建物の検出には至らなかったものの、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての土器がまとまって出土した遺構を確認しており、付近に当該期の居住域が存在した可能性は高いと考えている。このことは阿良須遺跡が成立する要因にも深く関連することであるので、やや立ち入って検討してみることにしよう。

２)阿良須遺跡出土土器群の位置づけ

丹波北部～丹後地域では、小山雅人氏が青野・綾中遺跡群で出土した土器を中心に、飛鳥時代を綾中０～Ⅳ期の５期に細分した編年案が、当地域における古代の土器編年としては唯一のものである。[注16] 小山氏は青野・綾中遺跡群から豊富に出土した須恵器食器類を基軸に据えて各期の変遷を示したが、由良川下流域では現状で須恵器が良好な状況で出土した事例が少なく、同じような基準で時期をとらえることはやや難しい。阿良須遺跡で出土した土器群に編年的位置づけを与えるためには、由良川下流域で多く出土する在来系統の土師器、特に土師器煮沸具の位置づけを行う必要があるだろう。

第45図は、由良川下流域における、古墳時代後期末～飛鳥時代の土器資料を遺構毎に羅列したものである。資料①とした大川遺跡ＳＸ677出土資料は、土師器直口壺の型式から考えると古墳時代後期後半、ＴＫ43～209並行期に位置づけられるだろう。[注18] この遺構では、口縁部形態、胴部



第45図　由良川下流域における古墳時代後期末から飛鳥時代の土器様相(GR17)

調整が異なる以下の3種類の甕が認められる。

甕A　「く」の字状口縁部を持つもの。体部内面はケズリを行い、頸部直下をヨコナデで仕上げる。

甕B　上方につまみ上げる口縁部を持つもの。体部内面はケズリ、頸部直下は未調整である。

甕C　口縁端部を外突させるもの。体部内面は下半をケズリ、上半をハケで仕上げるものが多い。

この中に口縁部に数段の強いナデをもつ青野型甕(甕D)と呼ばれる甕は含まれておらず、青野型甕出現以前の煮沸具の様相であると考える。

資料②、③は資料①に後続する段階の資料であり、口径の大きい須恵器杯Hの存在と古墳時代的な器種である土師器壺が残存することから、おおむね飛鳥Ⅰに相当すると考える。この直口壺は頸部が短く、古相を示しているように見えるが、底部のつくり方が共伴する甕と同じ手法を用いていることから、年代的に遡上するものではなく、資料①より後出するものである。この資料中の甕Dは、口縁部にナデによる凹みを残すものの最上段は細く摘み上げるような形状であり、口縁部も立ち上がりの角度が浅いことなど、飛鳥Ⅱ以降に多く認められるものとは異なった形状である。

後続する資料④では須恵器杯Hの器高と口径の縮小が認められるほか、在来系統の土師器椀に暗文を施し、外面をヘラケズリする畿内産土師器を模した椀が存在し、飛鳥Ⅱに並行する時期の様相であると考える。この資料中の甕Dの口縁部も同様に最上段のナデの段が弱く、上方につまみ上げるような形態となる。この段階では、在来系統の甕A・B・Cも一定量の組成を占めているようだ。

ところが、資料⑦・⑧では、この口縁部は認められず、甕Dは端部まで厚手の口縁部に強いナデの段をもつものが主流となる。資料⑦は須恵器編年との並行関係に問題を残すが、甕の変遷観から資料④よりも後出するものであり、飛鳥Ⅱ～Ⅲの幅でとらえておきたい。資料⑦に並行する時期以降の資料では甕B・Cは認められなくなり、当地域の主要な煮沸具は「く」の字状口縁の甕Aと、青野型とされる甕Dに収斂されていくことになる。

したがって、口縁部に段をもつものの、最上段のナデが口縁端部の拡張を志向している甕は、古墳時代後期末～飛鳥Ⅱにのみ認められる形態であり、初現期の甕Dの形態としてとらえうるだろう。この口縁部形態は資料①や④に含まれる、口縁部を上方に拡張するが段を持たない甕Bの口縁部と製作手法が類似しており、関連を伺うことができる。ただし、甕Dの内面調整に注目すると、頸部直下ケズリの方法が甕Bとは異なっており、むしろ甕Aとの共通性を認めることができる。また、阿良須遺跡で出土した甕Dの多くは、成形の最終段階で底部外面にヨコハケを施すという特徴的な調整が認められた(第40図)。この手法は在来の甕では三河宮の下遺跡の甕Cで用いられていることを確認しており、平底の鉢をベースに成形された甕の底部に、調整の最終段階でハケを施すものと推測している。甕Dでは、平底・丸底を問わずこの手法が多くの個体で用いられていると考えられる。したがって、甕Dは由良川流域在来の土師器甕の製作技法をベースに成立したものと言えるだろう。石崎善久氏は青野型甕の出現について、飛鳥Ⅱには確実に存在するとしながらも、綾中0期(TK217並行期)にはその初現があることを示唆し、初現は由良川中

流域にあるとする。[注19] また、赤澤徳明氏は若狭湾岸でも青野型とされる甕が多く認められることから若狭(湾沿岸)型甕と呼称し、初現は不明ながら生産の中心は若狭湾沿岸にあると説く。[注20] 近年では分布は篠山盆地まで広がりがあることが指摘されている。[注21] そして、両氏とも畿内産土師器との共伴関係、あるいは製塩遺跡から多数出土する頸向などを根拠として、畿内とのつながりを重視している。今回の阿良須遺跡の調査では在来系統の甕B・Cと新出の甕Dが混在して出土しており、これまで不明瞭であった青野型甕出現期の様相を示すものであるといえるだろう。この甕Dは、前述のように飛鳥時代に突然出現した訳ではなく、古墳時代の土師器甕の製作技術をベースとして成立したものであり、飛鳥Ⅱ以降には由良川流域から若狭湾沿岸、あるいは篠山盆地まで各地で定着する甕であると考えておきたい。

なお、今回提示した土器様相の変遷は、あくまでも甕の型式変化とそれに伴う他器種の共存関係を示したのみで、それぞれを１様式として認定することができるだけの資料的裏付けは得られていないが、それぞれの土器様相を仮に時期差として捉え、様相１～５として検討を進めたい。

３）７世紀の由良川下流域と地域社会

上述のような土師器甕の変遷をもとに、改めて付表１を検討することにしよう。志高遺跡では飛鳥時代として報告されている竪穴建物は25棟あるが、その中で様相４以前の土器が出土しているのは数棟のみであり、多くは様相５以降に形成されたものであると考える。同様に桑飼上遺跡では６棟すべてが様相５以降に属するものである。これらの遺跡でも様相２～４に並行する時期の遺構・遺物は得られているため、完全に居住域が廃絶したわけではないだろうが、前後の時期と比較すると落差は明白だろう。

他方、今回の阿良須遺跡の出土遺物は、古式土師器と中世以降の遺物を除くと第44図の様相１～４から大きく逸脱する資料は少なく、当該期に短期間営まれた遺跡であったと考えられる。また、対岸の高川原遺跡や２km下流の三河宮の下遺跡では確実に竪穴建物に伴う遺物かどうか明らかではないものも多いが、図示されている遺物から考えると、同様に阿良須遺跡と並行する時期に限定して居住域が展開していたものと考えて大過ないだろう。

この地域は、弥生時代以降、安定的な居住域が形成されてこなかったが、古墳時代後期末から飛鳥時代前半は一転して、密集度の高い居住域が営まれたと評価できるだろう。この地域には、暗文が密に施された畿内産土師器、あるいは在来の土師器の杯に暗文を施した畿内産土師器を模倣した杯が出土しており、居住域の継続期間は短期間であるとはいえ、外的な情報がもたらされるようなエリアであったといえる。同じ時期に由良川中流域では青野・綾中遺跡群で居住域が再形成され、寺院や官衙的様相を呈する建物群が成立する。現状では、阿良須遺跡周辺においては居住域が検出されているのみであり、積極的に両者の関係性に言及することは早計だが、古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけて急激に当地域の開発が進んだとみてよいだろう。本論では詳述しないが、阿良須遺跡の西の波美地区の台地上では、大良古墳、仲仙１、２古墳、宮山１～３号墳、宮裏古墳といった古墳が知られており、いずれも古墳時代後期後半から飛鳥時代前半にかけて築造されたと考えられる。実態が不明瞭であるとはいえ、いずれも木棺直葬墳で須恵器、

鉄刀などを副葬品として有しているなどの共通性があり、当地域では相対的に古墳の密度が高い地域といえる。特に、大良古墳はすでに墳丘が削平されて主体部のみが検出されたことを考えると、本来はさらに多くの古墳が存在したことは想像に難くない。このように地域社会の変化の様相は、居住域だけでなく古墳の動向にも表出していることも示唆的である。前・中期の古墳が不在である当地域において、この一連の現象は地域の内的な発展だけで説明することは困難であり、外的な要因も関連していた可能性が高い。

阿良須遺跡では飛鳥時代後半以降の遺物は希薄であり、次に遺物を確認することができるのは中世前期を待たなければならない。他方、飛鳥時代前半に一時的に遺構・遺物の密度が極端に少なくなる志高遺跡、桑飼上遺跡では、飛鳥時代後半になると再び居住域が形成され、奈良時代には、整然と並びたった掘立柱建物群が現われる。しかしながら、これらの建物群は洪水によって奈良時代末から平安時代初頭には廃絶するとされ、それ以降への継続は認められない。歴史的環境の項で述べたように、平安時代には河守遺跡群で墨書木簡や大規模な整地の痕跡が確認されており、平安時代に当地域の中心的な役割を果たすのは、河守遺跡群であると考えられる。

今回の調査では阿良須遺跡では明確な居住域を検出するには至らず、縁辺部の調査にとどまった。しかし、周辺の調査成果を総合して考えると、古代の阿良須遺跡は古墳時代後期から飛鳥時代前半にかけて短期間のみ継続した遺跡であり、それは周辺の遺跡とも期を一にして起こる現象であるといえる。７世紀前半は畿内地域全域で新たな低地部の集落が出現しており、各地で集落の再編が進む時期である。[注23] これらの集落は多くの場合、平安時代への継続が認められるが、由良川下流域ではその傾向は必ずしも認められず、飛鳥時代後半以降には弥生時代以降継続してきた遺跡の付近に地域の中心が形成されるということが明らかとなった。７世紀前半にこれまで密度の低かった地域に新たな集落や古墳群が出現する点では、周辺地域との共通性も見いだせるものの、[注23] その後の動向は必ずしも畿内地域との関係性だけでは理解することは適切ではないだろう。むしろ、平安時代には地域の中心が河守遺跡群に形成されることを勘案すると、密度の高い居住域であっても、長期的な継続性に乏しいということに、由良川下流域の地域社会の特質があるといえるのではないだろうか。本論では由良川下流域という１地域の状況を整理するにとどまったが、今後、周辺地域の動向も踏まえ地域社会の位置づけを考えていく必要があるだろう。

（桐井理揮）

注１　芦田忠司 「大江町の条里制遺構」（『大江町史』通史編上巻　大江町史編さん委員会）　1983

注２　松本学博「河守遺跡第３次調査概要」（『大江町文化財調査報告書』第５集　大江町教育委員会）　1998

注３　松本学博「大江町所在の窯跡」（『丹濤波考古』第11号）　1999

注４　黒坪一樹「引地城跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第66冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注５　石崎善久ほか編『京都府中世城館跡調査報告書』第１冊丹後編　京都府教育委員会　2012

注6　桂孝三　「由良川水運の歴史地理學的研究」(『人文地理』第5巻6号　社団法人人文地理学会)　1954

注7　川名登　「由良川・加古川連結通船計画について－西廻り航路の短縮－」(『千葉経済論叢』第34号　千葉経済大学)　2006

川名登　「由良川・大堰川連結通船計画について」(『千葉経済論叢』第35号　千葉経済大学)　2006

注8　杉本嘉美「由良川から採集した古代文化遺物について」(『舞鶴地方史研究』第8号　舞鶴地方史研究会)　1968

杉本嘉美「由良川から採集した古代文化遺物について(2)」(『両丹地方史』第10号　両丹地方史研究者協議会)　1969

注9　渡辺誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』　舞鶴市教育委員会　1975

注10　渡辺誠「第5章　総括」(『桑飼下遺跡発掘調査報告書』　舞鶴市教育委員会)　1975

注11　前掲注10文献

注12　①　肥後弘幸・三好博喜「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊　財団法人京都府埋蔵文化財センター)　1988

②　岸岡貴英・細川康晴「桑飼上遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第17冊　財団法人京都府埋蔵文化財センター)　1993

③　伊野近富・竹原一彦・綾部侑真・竹村亮仁「大川遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第164集　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター)　2015

注13　京都府『土地分類基本調査』大江山・出石　京都府農林水産部耕地課　1992

注14　前掲注12－①文献

注15　竹原和一郎・杉本嘉美「由良川の大洪水に伴う桑飼下村落の移転とその後の変貌」(『舞鶴地方史研究』第15号　舞鶴地方史研究会)　1972

注16　小山雅人「5　土器類の年代について(綾中Ⅰ～Ⅳ型式の設定)」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集　綾部市教育委員会)　1981

小山雅人「丹波綾中廃寺の創健年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　財団法人京都府埋蔵文化財センター)　1987

注17　①　前掲注12－③文献

②　竹原一彦「三河宮の下遺跡」(『京都府遺跡調査概報』　第2冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

③　松本達也「ニイザ古墳」(『八雲遺跡発掘調査報告書』　舞鶴市文化財調査報告第47集)　2012

⑤　松本学博「大良古墳」(『大良古墳・高川原遺跡・天田内遺跡』　大江町文化財調査報告書第9集)　2001

⑥　前掲注12－①文献

⑧　前掲注12－②文献

注18　中久保辰夫　「土師器直口壺と古墳時代土器の特質」(『待兼山考古学論集』3　大阪大学考古学研究室編)　2018

注19　石崎善久「青野型甕について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集　財団法人京都府埋蔵文化財センター)　1996

注20　赤澤徳明「第2節　古墳時代後期から奈良時代の若狭の土師器甕－若狭(湾沿岸)型甕提唱の可能性－」(『芝崎遺跡－一般県道岡田深谷線道路改良工事に伴う発掘調査－』　福井県埋蔵文化財調査報告

第51集　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）　2008
注21　池田征弘「的場遺跡・上ノ段遺跡」（『兵庫県文化財調査報告書』第225冊　兵庫県教育委員会）2002
注22　広瀬和雄「畿内の古代集落」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集　国立歴史民俗博物館）　1989
注23　菱田哲郎「７世紀における地域社会の変容」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集　国立歴史民俗博物館）　2013

付表2　出土土器観察表

（凡例）
・口径欄の記号　（　　）：復元径　・－：該当部位なし
・器高欄の記号　（　　）：残存高　・/：測定不能
・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示

報告番号	トレンチ	層位出土地点	種別	器種器形	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	残存率	胎土	色調	備考
1	9	ＳＸ102	土師器	甕	16.0	14.9	8/12	やや粗（直径1mm以下の混和材を2～3%含む）	外面：橙（7.5YR6/6） 内面：明赤褐（5YR5/6）	体部中位に黒斑あり 内面に対黒斑 容量：1.86L
2	8	12層	土師器	甕	－	(17.7)	5/12	やや粗（直径1mm以下の白・灰系粒、赤色斑粒含む）	外面：にぶい赤褐（5YR4/3） 内面：橙（5YR6/6）	内面最大径あたりに帯状のコゲ付着
3	10	重機掘削中	瓦質	鍋	(30.0)	(6.5)	1/12	やや密（直径5mm大の粗砂を2%含む）	外面：灰（N5/0） 内面：灰黄（2.5Y7/2）	外面にスス付着
4	10	重機掘削中	陶器	擂鉢	－	(5.8)	1/12	密（直径1mm以下の白粒、石英を含む）	にぶい黄橙（10YR7/4）	越前
5	7	7層	陶器	擂鉢	－	(9.0)	1/12	やや密（直径1mm以下の砂礫をわずかに含む）	にぶい赤褐色（2.5YR5/3）	備前（Ⅳ期）
6	7	7層	陶器	擂鉢	－	－	2/12	やや密	にぶい黄橙（10YR6/4）	備前か
7	10	8・9層	製塩土器	支脚	－	(4.0)	－	やや粗（1mm以下の白粒を少量含む）	赤（10R5/6）	
8	10	12層	土師器	皿	(7.7)	(2.2)	2/12	密	にぶい黄褐色（10YR5/4）	混入か
9	7	10層	土師器	皿	(15.6)	(2.1)	3/12	やや粗	外面：にぶい橙	
10	7	7層	陶器	皿	－	(1.9)	底部完存	密	無釉部：灰白（5Y7/1） 施釉部：明緑灰～緑灰（7.5～10GY7～6/1）	唐津16世紀末
14	9	砂層	弥生土器	甕	(18.9)	(4.4)	(1) 2/12	やや密（石英、長石、赤系チャート等2～3%含む）	外面：にぶい橙（7.5YR7/3～4） 内面：橙（5YR7/6）	後期後半～終末
15	B2	第3遺構面上面	弥生土器	二重口縁壺	17.8	(5.5)	3/12	直径2mm以下の長石、チャート、クサリ礫多く含む	黄橙（5YR6/6）	
16	B2	第2～3遺構面	弥生土器	二重口縁壺	(17.4)	(4.8)	1/12	やや粗（直径2mm以下の白粒、チャート、石英多く含む）	明赤褐（2.5YR5/8）	
17	B2	第3遺構面上面	弥生土器	二重口縁壺	13.8	15.0	(1) 9/12	直径1.5mm以下の石英・長石、チャート、赤色斑粒多く含む	橙（5YR7/6）	肩部～胴部波状文4条
18	A	第2遺構面	弥生土器	加飾壺	－	(4.5)	1/12	直径3mm以下の長石、チャート、石英、赤色斑粒含む	橙（7.5YR7/6）	波状文
19	A	ＩＡ区t17 第3遺構面上面	弥生土器	甕	(20.2)	2.3	1/12	やや密（直径1mm以下の茶粒、0.5mm以下の白粒を少量含む）	橙（2.5YR6/6）	
20	A	ＳＸ58上層	弥生土器	甕	16.6	3.3	1/12	粗（直径1～2mmの灰・白・赤茶粒を多く含む）	外面：橙（5YR7/6） 内面：浅黄橙（7.5YR8/6）	
21	A	ＳＸ58上層	弥生土器	甕	12.7	1.6	1/12	やや粗（直径1～2mmの白・茶・灰粒を少量含む）	橙（5YR6/6）	
22	B2	第3遺構面精査中	弥生土器	甕	－	3.4	1/12	粗（直径1mm以下の白・半透明・黒・茶粒多く含む）	外面：橙（7.5YR6/6） 内面：灰黄褐（10YR4/2）	
23	B2	第3遺構面精査中	弥生土器	甕	(15.4)	(3.2)	1/12	やや粗（直径2mm以下の茶褐・灰・白・黒粒含む）	にぶい橙（7.5YR6/4）	
24	B2	第2～3遺構面	弥生土器	甕	15.8	(6.8)	3/12	粗（直径3mm以下のチャート・クサリ礫・白粒・石英を非常に多く含む）	橙（5YR6/8）	
25	A	重機掘削中	弥生土器	甕	20.0	(4.4)	1/12	直径3mm以下のチャート・赤色斑粒・長石多く含む	黄橙（10YR8/6）	
26	B2	第3遺構面	弥生土器	甕	17.4	(4.0)	4/12	直径3mm以下の長石・赤色斑粒含む	黄橙（10YR8/6）	
27	B2	第3遺構面	弥生土器	甕	－	(8.9)	体部片	直径2mm以下の褐・赤粒多く含む	外面：にぶい褐（7.5YR6/3） 内面：浅黄橙（10YR8/3）	

報告番号	トレンチ	層位出土地点	種別	器種器形	法量		残存率	胎土	色調	備考
					口径(cm)	器高(cm)				
28	B2	ＳＫ 04 南半救中	弥生土器	甕	(20.0 強)	(11.5)	1/12	直径３mm 以下の長石、茶粒、角閃石含む	にぶい黄橙 (10YR4/3)	東部瀬戸内系か
29	B2	第２遺構面	弥生土器	甕	－	(5.2)	底部完存	粗（直径３mm 以下の白粒、石英、チャート非常に多く含む）	にぶい褐 (7.5YR5/4)	スス・コゲ付着
30	B2	第３遺構面	弥生土器	甕	－	(3.4)	－	粗（直径２～５mm 以下の長石、チャート非常に多く含む）	橙 (7.5YR7/6)	
31	B2	第３遺構面上面	弥生土器	台付甕	12.3	8.7	11/12	粗（直径２～５mm 大の白・赤・黒粒多く含む）	橙 (5YR6/8) 断面：褐灰 (0YR5/1)	
32	B2	第３遺構面上面	弥生土器	台付甕	－	(5.4)	底）3/12	直径２mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	橙 (2.5YR6/8)	
33	B2	第３遺構面上面	弥生土器	台付甕	－	(2.6)	底）9/12	直径３mm 以下の長石、チャート、茶粒含む	橙 (5YR6/6)	
34	B2	精査中	弥生土器	小形壺	(9.0)	(3.9)	2/12	直径２mm 以下の白・灰・赤粒少量含む	明赤褐 (2.5YR5/8)	
35	B2	精査中	弥生土器	高杯	－	(5.2)	底）2/12	直径２mm 以下のチャート、長石非常に多く含む	赤褐 (5YR4/8)	
36	B2	第３遺構面南側	弥生土器	高杯	(24.6)	4.1	1/12	直径 25mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	内面：橙 (5YR6/8)	北陸系 国府クルビ式か
37	B2	第２・３遺構面精査中	弥生土器	器台	(17.6)	(6.7)	3/12	粗（直径４mm 以下の白・灰褐 (5YR 4/2)・褐・淡褐粒を非常に多く含む）	明赤褐 (2.5YR5/8)	
38	B2	第３遺構面南側トレンチ掘削	弥生土器	小形鉢	(9.4)	(7.2)	3/12	直径４mm 以下の長石、チャート多く含む	黄橙 (7.5YR7/8)	
39	B2	第３遺構面南側	弥生土器	小形鉢	8.8	(2.5)	6/12	直径１mm 以下の長石、チャート、赤色斑粒含む	橙 (5YR7/8)	
40	B2	第３遺構面南側トレンチ掘削	弥生土器	ミニチュア土器鉢	－	(2.6)	底）完存	粗（直径２～４mm 大の長石、チャート、クサリ礫含む）	橙 (2.5YR6/8)	
41	A	ＩＡ区 t17 サブ 第２遺構面	弥生土器	有孔鉢	－	2.4	底）4/12	やや粗（直径１mm 以下の白・こげ茶・黒系粒を含む）	外面：橙 (2.5YR6/8) 内面：橙 (7.5YR7/6) 断面：にぶい褐 (7.5YR6/3)	
42	A	ＳＸ 58 下層	土師器	**甕**	**19.5**	**31.7**	**完存**	**やや粗**	外面：橙 (2.5YR6/8) 内面：明黄褐 (10YR 7/6) 口縁部：橙 (2.5YR 6/6)	容量：12.07L
43	A	ＳＸ 58 上層	土師器	甕	(20.8)	(21.8)	3/12	やや密（直径 10mm 以下の細かなチャート、長石多く含む）	明赤褐 (2.5YR5/6)	
44	A	ＳＸ 58 上層	土師器	甕	23.0	(7.2)	6/12	やや密（直径２mm ～５mm 大の白・赤粒、チャート、長石含む）	黄橙 (7.5YR7/8)	
45	A	ＳＸ 58 上層	土師器	甕	18.9	(119)	7/12	やや粗（直径１mm 以下の長石、チャート、赤粒非常に多く含む）	外面：橙 (7.5YR6/6) 内面：明赤褐色 (5YR5/6)	
46	A	ＳＸ 58 下層	土師器	甕	23.2	(24.1)	11/12	密（直径３mm 以下の石英、長石、黒・茶粒含む）	外面：灰褐色 (5YR4/2) 内面：橙 (2.5YR6/8)	容量：8.71L
47	A	ＳＸ 58 下層	須恵器	横瓶	11.2	28.0	完存	密	灰白 (7.5Y8/1) ～灰 (N6/1)	外面に焼成破裂あり
48	A	ＳＸ 58 下層	須恵器	平瓶	8.6	17.5	完存	密	灰白 (2.5Y7/1) ～黒褐色 (2.5Y3/1) 検潤：暗オリーブ (7.5Y4/3)	自然釉付着
49	A	ＳＸ 58 上層	須恵器	無蓋高杯	－	(9.2)	底部完存	やや粗（直径２mm 以下の長石多く含む）	青灰 (5PB5/1)	
50	A	ＳＸ 58 上層	須恵器	無蓋高杯	(12.0)	9.4	2/12	やや粗（直径１～２mm 以下の白・黒粒を含む）	外面：灰白 (2.5Y8/1) 内面：黄灰 (2.5Y6/1)	
51	A	ＳＸ 58 上層	須恵器	甕	－	62.4	底）9/12	密	灰 (N6/0)	
52	A	ＩＢ区 t19 第１遺構面	黒色土器	椀	底）7.0	1.7	底）4/12	やや粗	黒 (N2/0)	両黒

報告番号	トレンチ	層位出土地点	種別	器種器形	法量		残存率	胎土	色調	備考
					口径(cm)	器高(cm)				
53	A	ⅠB区 b17 第1遺構面 8層精査中	瓦器	椀	底)(6.0)	(1.1)	底)1/12	密	灰白（2.5Y7/1）	
54	A	ⅠB区 f17 第1遺構面 8層	瓦器	椀	(13.8)	(3.0)	1/12	密	灰（N4/0）	
55	B1	ⅡB区 p3 第1遺構面 11層	瓦器	椀	底)(4.0)	(2.1)	底)3/12	密	灰（N5/0）	
56	A	ⅠB区 e20 砂利層	瓦器	椀	底)(7.4)	(2.1)	底)2/12	密	オリーブ黒（5GY2/1）	
57	B1	ⅡB区 O2K3 第1遺構面 11層	須恵器	椀	(11.9)	(8.7)	2/12	密	灰白（5Y7/1）	全体に自然釉かかる
58	A	ⅠB区 c17 第1遺構面 8層 精査中	土師器	皿	(13.7)	2.1	2/12	密（直径2mm以下のシャモット、茶粒少量含む）	橙（7.5YR7/6）	
59	A	ⅠB区 e17 第3遺構面 上25層	土師器	杯	(13.2)	4.7	4/12	粗（直径1mm～4mm大のチャート少量含む）	赤褐（2.5YR4/6）	黒斑あり 粗製
60	A	8層 重機掘削中	須恵器	鉢	(24.6)	(2.6)	1/12	密	灰（N6/1）	東播系
61	A	ⅠB区 e17 9層	須恵器	鉢	(23.4)	(4.4)	1/12	やや密（直径3mm以下の黒粒多く含む）	灰（N6/0）	東播系
62	A	8層 重機掘削中	陶器	擂鉢	(28.4)	(9.5)	2/12	粗	外面：赤橙（10R6/8） 内面：にぶい橙（2.5YR6/4）	丹波
63	A	ⅠB区 t18 8層	青磁	椀	(16.8)	(3.0)	1/12	密	明緑灰（10GY6/1）	龍泉系 12世紀後半～13世紀
64	A	ⅠB区 t18 8層	瓦質	鍋	/	(2.7)	1/12	密	にぶい黄橙（10YR7/3）	
65	A	ⅠB区 d17 8層	瓦質	鍋	(24.6)	(5.5)	1/12	粗	灰（5Y4/1）	
66	B1	ⅡB区 g3 第1遺構面 11層	瓦質	鍋	(23.0)	(2.5)	1/12	粗（直径1.5mm以下のチャート、石英、長石多量に含む）	黄灰（2.5Y6/1）	
67	A	ⅠB区 t18 8層	瓦質	鍋	(25.4)	(2.0)	1/12	密	灰（5Y5/1）	
68	A	8層	瓦質	鍋	(28.0)	(4.6)	1/12	密（直径1～3mm以下の白粒少量含む）	灰白（2.5Y7/1）	
69	B2	S X 101	土師器	甕	(22.1)	(8.0)	4/12	やや粗（直径1mm以下の茶・白・黒粒多く含む）	にぶい橙（7.5YR7/4） 断面：明赤褐色（5YR5/6）	
70	10	S X 101	土師器	甕	(25.0)	(4.3)	1/12	やや粗（直径1mm以下の石英、長石、赤色斑粒多く含む）	橙（7.5YR7/6）	
71	10	S X 101	土師器	甕	18.0	(29.7)	ほぼ完形	密（直径3mm以下の石英、長石、チャート、赤色斑粒、黒粒含む）	橙（2.5YR6/8）	外面にコゲ・スス付着 容量：9.08L
72	10	S X 101 上層	須恵器	蓋G	(11.1)	(1.7)	4.5/12	やや粗（直径3mm以下の白粒多く含む）	灰（N6/0）	
73	10	S X 101	須恵器	杯H	(11.2)	(2.9)	1.5/12	やや密（直径1mm以下の砂粒をわずかに含む）	灰白（5Y7/1）	
74	10	S X 101	須恵器	椀	(9.8)	(2.5)	2/12 弱	密	灰（N6/0）	
75	10	S X 101	土師器	杯	(10.8)	(3.0)	3/12	密（直径0.5mm以下の微細な白粒少量含む）	橙（2.5YR6/8）	
76	10	S X 101	土師器	杯	(9.5)	(2.6)	2/12 弱	密	橙（2.5YR6/8）	内面に放射状の暗文
77	10	S X 101	土師器	杯	11.4	(2.8)	6/12	密（直径3mm以下の白・茶粒少量含む）	橙（2.5YR6/8）	内面に放射状の暗文
78	B2	S X 101	土師器	杯	18.2	5.1	11/12	直径3mm以下の長石、赤粒含む	橙（5YR6/8）	内面に放射状の暗文
79	B2	第1～2遺構面 包含層	土師器	鍋	30.6	(7.3)	9/12	直径1mm以下の長石、チャート、赤色粒多く含む	橙（2.5YR6/6）	

報告番号	トレンチ	層位出土地点	種別	器種器形	法量		残存率	胎土	色調	備考
					口径(cm)	器高(cm)				
80	B2	第1～2遺構面包含層	土師器	鍋	(31.9)	(7.0)	2/12	やや密（直径2mm以下の白・黒・赤・褐色粒少量含む）	灰褐（7.5YR4/2）	
81	B2	第1～2遺構面包含層	土師器	鍋	35.0	(7.9)	6/12	直径3mm以下の石英、長石、チャート、赤粒多く含む	橙（5YR7/6）	
82	B2	第2遺構面西拡張部西壁	土師器	甕	15.3	16.7	11/12	粗（2mm以下の白・半透明・黒・茶粒多く含む）	にぶい赤褐色（5YR5/3）	内面：胴～肩部にかけてコゲ 容量：2.25L
83	B2	SK09	土師器	甕	13.0	(4.4)	5/12	直径1mm以下の石英、長石、チャート、赤色斑粒多く含む	橙（7.5YR7/6）	
84	B2	第2～3遺構面	土師器	甕	(14.4)	(5.3)	2/12	直径2mm以下の長石、チャート、茶粒含む	橙（5YR6/6）	
85	B2	第2遺構面上面	土師器	甕	15.0	(6.7)	11/12	直径1mm以下の長石、チャート含む	橙（5YR6/6）	
86	B2	第3遺構面包含層	土師器	甕	(18.8)	5.3	2/12	やや粗（直径1mm以下の白・半透明・茶・黒粒多く含む）	赤橙（10R6/6）	
87	B2	第1～2遺構面包含層	土師器	甕	15.3	(9.5)	9/12	やや粗（直径1mm以下の赤茶・白・黒粒含む）	橙（5YR7/6）	
88	B2	第1～2遺構面包含層	土師器	甕	(16.2)	(5.1)	3/12	やや粗（直径2mm以下の白・半透明・茶粒多く含む）	にぶい橙（7.5YR6/4） 断面：褐灰（7.5YR4/1）	
89	B2	第1～2遺構面包含層	土師器	甕	(16.5)	(6.7)	2/12	やや粗（直径1mm以下の赤茶粒多く含む）	橙（5YR7/6）	
90	B2	第2遺構面	土師器	甕	(20.4)	29.5	1/12	やや粗	外面：橙（7.5YR7/6） 内面：にぶい褐（7.5YR5/3） 断面：部分的に（肩部付近）黒褐色（7.5YR3/1）	
91	B2	第2遺構面西拡張部西壁	土師器	甕	18.2	27.0	ほぼ完存	やや粗（直径1.5mm以下の石英、長石、チャート、赤色斑粒含む）	橙（7.5YR7/6）	容量：8.43L
92	B2	第2遺構面上面	土師器	把手付甕	23.0	(15.0)	5/12	粗（直径2mm以下の白・茶・黒粒多く含む）	明赤褐（2.5YR5/6）	把手は1か所のみ残存。口縁付近と把手の下面にスス付着
93	B2	包含層	須恵器	蓋	(13.4)	3.6	3/12	密（直径1.5mm以下の赤・灰粒少量含む）	外面：灰白（2.5Y8/1） 内面：浅黄橙（7.5YR/0）	
94	B2	第1～2遺構面包含層重機掘削中	須恵器	蓋	14.2	4.6	6/12	密（直径5mm以下の白粒少量含む）	灰白（2.5Y7/1）	
95	B2	第1～2遺構面包含層重機掘削中	須恵器	杯	12.5～14.8	(3.7)	7/12	密（直径1.5mm以下の白・黒色粒少量含む）	灰（N6/0）	
96	B2	第2遺構面重機掘削中	須恵器	蓋G	(9.4)	2.9	3/12	やや粗（直径2mm以下の白・黒粒多く含む）	灰白（5Y7/1）	
97	B2	第2遺構面	須恵器	蓋G	(11.3)	(1.9)	2/12	やや粗（直径1mm以下の白・黒色粒多く含む）	青灰（5PB6/1）	
98	B2	第2遺構面重機掘削中	須恵器	蓋G	(10.8)	(2.2)	2/12	密（直径2mm以下の白粒少量含む）	灰（N6/0）	
99	B2	第2遺構面	須恵器	蓋G	10.9	(2.6)	5/12	やや密	灰（N5/0） 断面：明褐灰（5YR7/2）	
100	B2	第2遺構面上面	須恵器	蓋G	9.9	3.7	9/12	密	灰白（N7/0）	
101	B2	第2遺構面	須恵器	蓋G	(9.7)	(1.6)	2/12	やや粗（直径0.5mm以下の白・黒粒多く含む）	灰（N5/0）	
102	B2	第2遺構面重機掘削中	須恵器	杯G	(10.4)	(3.2)	3/12	やや粗（直径1.5mm以下の白・黒色粒多く含む）	灰（N6/0）	
103	B2	第2遺構面重機掘削中	須恵器	杯G	10.7	3.1	6/12	やや粗（直径3mm以下の白粒多く含む）	暗青灰（5PB4/1）	
104	B2	第2遺構面包含層重機掘削中	須恵器	杯G	(9.2)	(2.8)	3/12	密	灰白（2.5Y8/1）～黒褐（2.5Y3/1）（自然釉のない部分）	自然釉

報告番号	トレンチ	層位出土地点	種別	器種器形	法量		残存率	胎土	色調	備考
					口径(cm)	器高(cm)				
105	B2	第2遺構面上面精査中	須恵器	杯G	(9.7)	(3.2)	3/12	やや粗（直径2mm以下の白粒多く含む）	青灰（5PB6/1）	
106	B2	第2遺構面上面精査中	須恵器	杯G	(9.0)	2.8	3/12	密（直径2mm以下の白・黒粒含む）	底部：灰白（2.5Y7/1） 口縁部：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	
107	B2	第2遺構面	須恵器	杯G	9.5	3.2	2/12	やや粗	灰（N5/0）	
108	B2	第2遺構面	須恵器	杯G	17.5	(5.5)	2/12	やや粗（直径2mm以下の白・黒粒多く含む）	外面：灰（N5/0） 内面：灰（N6/0） 断面：灰白（7.5Y7/1）	
109	B2	第2遺構面上面	土師器	杯	11.5	4.2	ほぼ完存	直径3mm以下の石英、長石、チャート、赤色斑粒多く含む	外面：橙（7.5YR6/6） 内面：橙（2.5YR6/8）	
110	B2	第2遺構面	土師器	杯	(11.8)	(3.0)	2/12	やや粗（直径1～3mm以下の石粒、石英、赤色粒少量含む）	明赤褐（5YR6/6）	内面に放射状の暗文
111	B2	第2遺構面	土師器	杯	(11.6)	2.6	2/12	やや粗（直径1mm以下の白・赤・灰色多く含む）	橙（5YR6/8）	内面に放射状の暗文
112	B2	第2遺構面重機掘削中	須恵器	壺	(9.0)	(1.4)	2/12	密（直径1mm以下の白粒少量含む）	灰（N6/0）	
113	B2	第2遺構面上面	須恵器	甕	－	(12.1)	底）9/12	密	灰白（2.5Y8/1）～灰（N6/1）	
114	B2	第2遺構面	須恵器	平瓶	(7.1)	16.4	1/12	密（直径3mm以下の長石、黒粒少量含む）	灰白（2.5Y7/1）	
115	B2	第1～2遺構面包含層	須恵器	横瓶	7.0～8.0	(10.5)	口）7/12 体）1/12程度	密	灰（N5/0）	
116	B2	第1遺構面重機掘削中	瓦質	三足羽釜	(4.8)	(3.8)	3/12	密	灰白（N5Y5/1）	ミニチュア土器か
117	B2	第1遺構面重機掘削中	陶器	皿	(12.0)	3.3	1/12	密	釉：灰黄（2.5Y7/2） 胎土：にぶい褐（7.5YR6/3）	唐津16世紀末～17世紀初
118	B2	第1遺構面南壁壁面	須恵器	擂鉢	(35.0)	11.0	3/12	密	黄灰色（2.5Y6/1）	
119	B2	第1遺構面重機掘削中	陶器	擂鉢	/	(3.4)	1/12以下	やや粗（直径1mm以下の白粒多く含む）	にぶい赤褐（5YR5/4）	備前
120	B2	第1遺構面	黒色土器	底部	底）(6.9)	(1.4)	底）4/12	密	外面：にぶい橙（7.5YR7/3） 内面：黒（7.5YR2/1）	内黒、底部糸切り

付表3　出土土錘観察表

（凡例）
・幅欄の記号　（　）：復元幅　・長さ欄の記号（　）：残存長　・重さ欄の記号（　）：欠損などによる現状の重さ
・小数点第 2 位を四捨五入、第 1 位で表示　・－：該当部位なし又は不明

報告番号	トレンチ	層位出土地点	法量			残存率	胎土	色調	備考
			幅（cm）	長さ（cm）	重さ（g）				
11	10	重機掘削中	3.15	4.5	37.5	完存	密	橙（7.5YR6/6）	
12	7	7 層	2.7	（4.6）	（18.4）	下半部欠損	密	にぶい橙～橙（7.5tr6/4 ～ 6）	
13	9	包含層	1.5	3.9	5.6	ほぼ完存	密（直径 1 mm 以上の混和物）	橙（2.5YR6/6）	
121	A	Ⅰ B 区 e18 8 層	2.6	4.7	30.7	完存	密	灰白（2.5Y8/1）	
122	A	Ⅰ B 区 e18 8 層	2.6	4.0	（19.7）	一部欠損	密	にぶい橙（7.5YR7/4）	
123	B1	重機掘削中	2.7	4.6	（32.3）	一部欠損	密	にぶい橙（7.5YR7/4）	外面：ススか？ 内側：ススか？黒ずんでいる（灰オリーブ（5Y4/1））
124	A	Ⅰ B 区 e18 8 層	3.0	4.6	（25.4）	一部欠損	密	灰白（2.5Y8/1）	
125	B1	Ⅱ B 区 q3 第 1 遺構面精査中	2.5	4.8	23.4	完存	密	灰白（5Y8/1）	
126	B1	Ⅱ B 区 S X 02	3.1	（5.3）	（21.8）	1/3 程度	密	にぶい橙（5YR7/4）	
127	A	Ⅰ B 区 d17 8 層	2.8	（4.8）	（26.9）	2/3	密	にぶい橙（7.5YR7/4）	
128	A	Ⅰ B 区 t19	2.7	3.8	（15.2）	11/12	密	浅黄橙（10YR8/4）	
129	A	8 層	（2.2）	5.0	（9.5）	－	密	にぶい黄橙（10YR7/4）	
130	A	8 層	2.6	（3.5）	（6.1）	－	密	灰白（2.5Y8/1）	内側黒ずんでいる（灰（N4/0））
131	A	Ⅰ B 区 t18 8 層	（1.9）	3.6	（4.0）	－	密	外面：灰白（2.5Y8/2） 内面：灰（N4/0）	外面：ススか？付着、内面黒ずんでいる（灰（N4/0））
132	A	8 層 重機掘削中	（2.0）	3.6	（4.3）	－	密	にぶい橙（7.5YR6/4）	
133	B2	第 1 遺構面	（4.0）	1.1	（4.0）	ほぼ完存	密（直径 1 mm 以下の白・灰色の砂粒少量含む）	淡橙（5YR8/3）	

付表4　出土鉄製品観察表

報告番号	トレンチ	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
134	B2	包含層	有肩鉄斧	7.0 サビ含む：7.2	3.7 サビ含む：4.4	1.7 サビ含む：2.0	
135	B2	包含層	鉄鏃	6.9	2.8 サビ含む：3.3	0.6 サビ含む：1.5	
136	10	S X 101	長頸鏃か	16.0	0.9	不明	2 個体が融着
137	10	S X 101	長頸鏃	3.7	0.5	0.3	
138	B2	包含層	刀子	9.8	2.2	4.0 サビ含む：5.0	

図　　版

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第１

女布北遺跡第７次

(1) 調査区上層全景(南から)

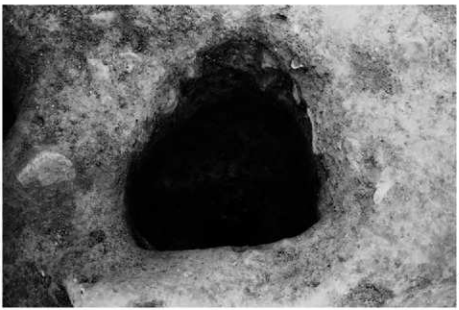
(2) 調査区上層全景(北西から)

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第２

女布北遺跡第７次

(1)調査区上層遺物出土状況
（西から）

(2)溝ＳＤ02全景(南から)



(3)柱穴ＳＰ08柱根出土状況
（南から）

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第３

女布北遺跡第７次

(1)土坑ＳＸ01遺物出土状況
（南から）

(2)土坑ＳＸ01遺物出土状況
（西から）

(3)土坑ＳＸ01完掘状況（西から）

女布北遺跡第７次

(1)掘立柱建物ＳＢ07全景
（北東から）

(2)柱穴ＳＰ04半截状況(南から)

(3)柱穴ＳＰ06半截状況(南から)

女布北遺跡第７次

(1) 調査区下層全景(北西から)

(2) 調査区下層全景(南東から)

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第６

女布北遺跡第７次

(1)杭列ＳＸ10検出状況(北西から)

(2)杭列ＳＸ10検出状況(南から)

(3)杭列ＳＸ10検出状況(南から)

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第７

女布北遺跡第７次

(1)自然流路ＮＲ11完掘状況
（南から）

(2)柱穴ＳＰ12・13・14・15
完掘状況（北東から）

(3)杭列ＳＸ09検出状況（南西から）

女布北遺跡第７次

(1) 調査区断ち割り１断面
(北から)

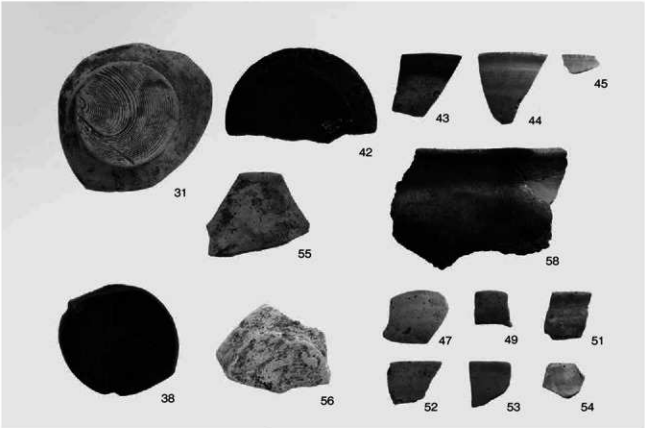
(2) 調査区断ち割り２断面
(北から)

(3) 調査区南壁断面(北から)

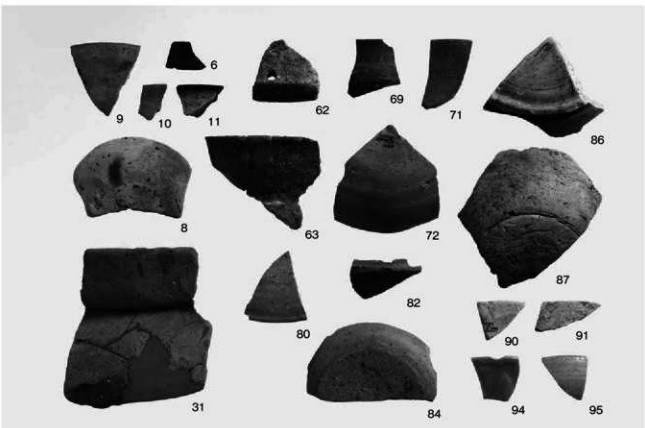
女布北遺跡第７次

女布北遺跡第７次出土遺物１

女布北遺跡第７次



(1)女布北遺跡第７次出土遺物２



(2)女布北遺跡第７次出土遺物３

女布遺跡第３次

(1) 調査対象地北半部調査前全景
（南西から）

(2) 調査対象地南半部調査前全景
（北東から）

(3) １トレンチ全景（南から）

女布遺跡第３次

(1) １トレンチ全景(東から)

(2) １トレンチ竪穴建物ＳＨ101全景(北西から)

(1) ２トレンチ全景(東から)

(2) ２トレンチ竪穴建物ＳＨ201(南から)

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第14

女布遺跡第３次

(1) ２トレンチ土坑ＳＫ202全景
（南から）

(2) ３トレンチ全景（西から）

(3) ４トレンチ全景（東から）

女布遺跡第３次

(1) 5 トレンチ全景(南東から)

(2) 6 トレンチ全景(南西から)

(3) 7 トレンチ全景(北東から)

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第16

女布遺跡第３次

(1) ８－１トレンチ全景(南から)

(2) ８－２トレンチ全景(南から)

(3) ８－２トレンチ遺物出土状況
(南から)

女布遺跡第３次

(1) ９－１トレンチ全景(南から)

(2) ９－２トレンチ断面(西から)

(3) 10トレンチ全景(南から)

府営農業競争力強化基盤整備事業女布地区関係遺跡　図版第18

女布遺跡第３次

(1) 11トレンチ全景(南西から)

(2)12トレンチ西半部全景(南から)

(3) 13トレンチ全景(南西から)

(1) 14トレンチ全景(東から)

(2) 14トレンチ溝ＳＤ1401全景(東から)

女布遺跡第３次

126

127

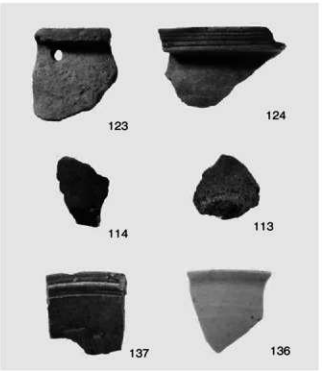
138

139

129

130

122


123

124

114

113

137

136

女布遺跡第３次調査出土遺物

女布遺跡第６次

(1) １トレンチ調査前状況(北から)

(2) １トレンチ全景(南東から)

(3) １トレンチ溝ＳＤ101・102
完掘状況(東から)

女布遺跡第６次

(1) １トレンチ谷地形遺物出土状況
（北東から）

(2) ２－Ａ・Ｂトレンチ調査前状況
（北東から）

(3) ２－Ａトレンチ全景（南西から）

女布遺跡第６次

(1) ２－Ａトレンチ全景(北東から)

(2) ２－Ａトレンチ ピットＳＰ201
遺物出土状況(南から)

(3) ２－Ｂトレンチ全景(南西から)

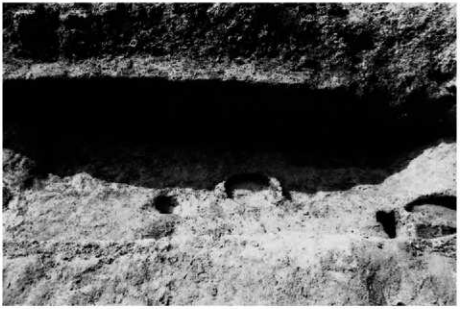
(1) 2－Bトレンチ土坑SK219
完掘状況(南東から)

(2) 3トレンチ調査前状況(北から)

(3) 3トレンチ全景(北東から)

女布遺跡第６次

(1) ３トレンチ土坑ＳＫ301遺物出土状況(東から)



(2) ３トレンチ土坑ＳＫ301完掘状況(南東から)

(3) ３トレンチ土坑ＳＫ304・305検出時遺物出土状況(北西から)

女布遺跡第６次

(1) ３トレンチ土坑ＳＫ304遺物
出土状況（南西から）

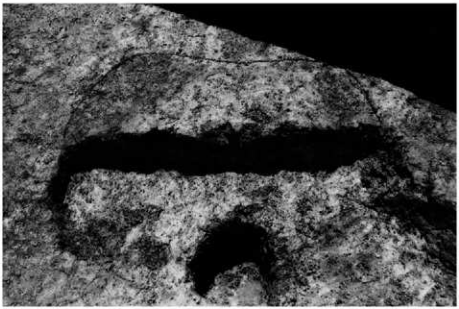
(2) ４トレンチ調査前状況
（南東から）

(3) ４トレンチ全景（東から）

女布遺跡第６次

(1) ４トレンチ全景(西から)

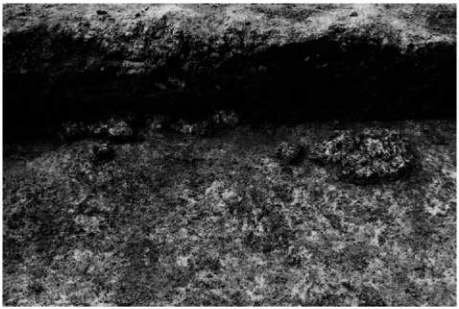
(2) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ401
掘削状況(南から)



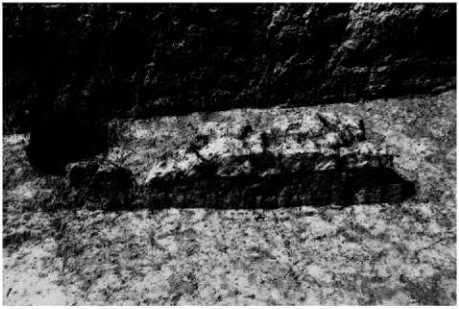
(3) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ401内
焼土半截状況(西から)

(1) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ402遺物出土状況（西から）

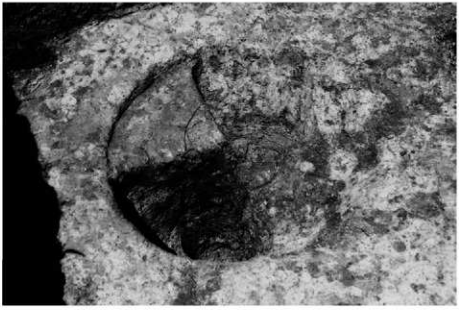
(2) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ402完掘状況（南から）



(1) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ402
粘土塊出土状況（南から）



(2) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ402
粘土塊半截状況（南西から）



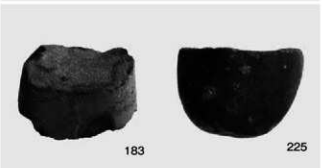
(3) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ402
主柱穴ＳＰ425四分割状況
（北東から）

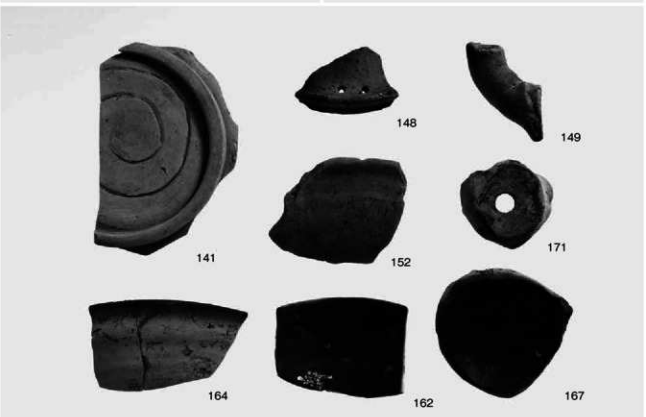
女布遺跡第６次

(1) ４トレンチ竪穴建物ＳＨ402
主柱穴ＳＰ425完掘状況
（東から）

(2) ４トレンチ ピットＳＰ424遺物
出土状況（西から）

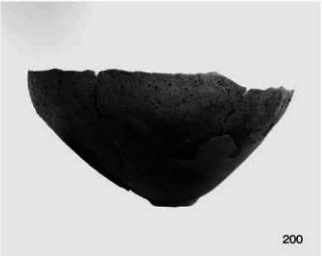
(3) ５トレンチ全景（南西から）





女布遺跡第６次調査出土遺物１

193


200

195

196

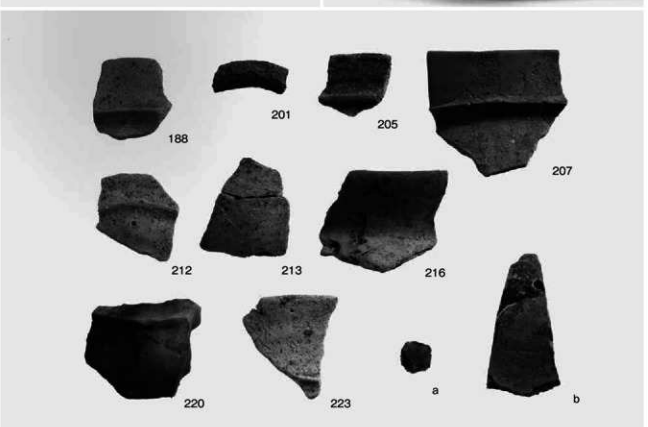
214

194

198

199

女布遺跡第６次調査出土遺物２

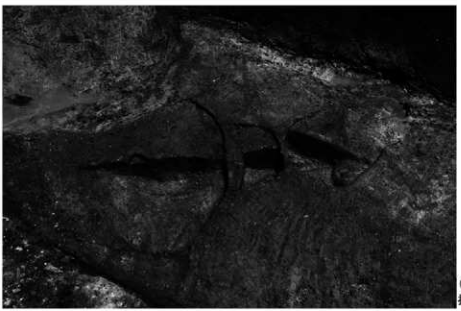


女布遺跡第６次調査出土遺物３

女布遺跡第９次

(1) １～４トレンチ調査地遠景
（南西から）

(2) １トレンチ土層断面(北から)



(3) １トレンチ土坑ＳＸ02・03
掘削状況(西から)

女布遺跡第９次

(1) １トレンチ遺構完掘状況
（東から）

(2) １トレンチ全景（北から）

(3) ２トレンチ遠景（北から）

女布遺跡第９次

(1) 2トレンチ全景(北東から)

(2) 3トレンチ土層断面(北から)

(3) 3トレンチ全景(北東から)

女布遺跡第９次

(1) ４トレンチ土層断面(北西から)

(2) ４トレンチ全景(北から)

(3) ５・６トレンチ遠景(南から)

女布遺跡第９次

(1) 5 トレンチ土層断面(東から)

(2) 5 トレンチ遺構完掘状況
(北東から)

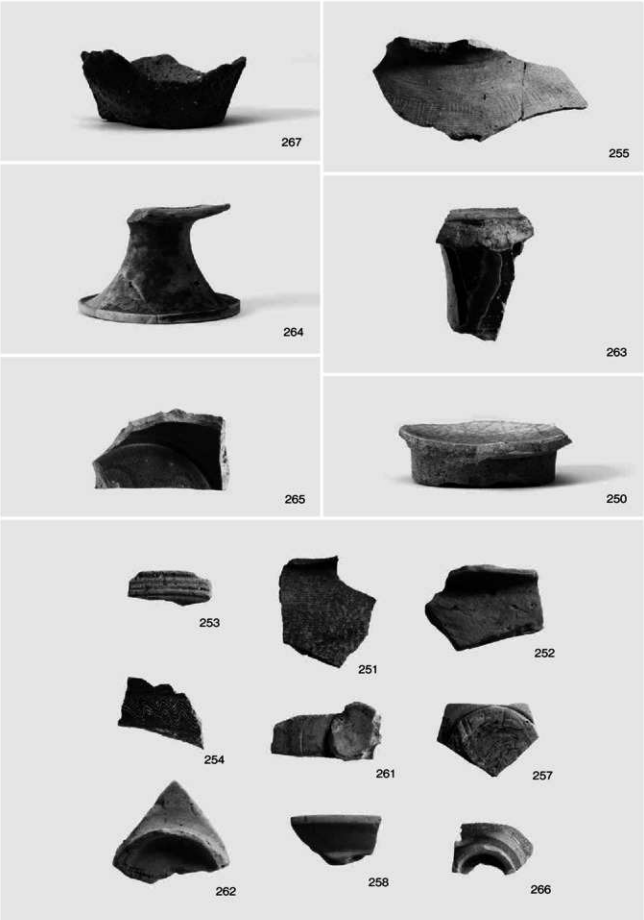
(3) 6 トレンチ土層断面(東から)

女布遺跡第９次

(1) ５トレンチ土坑ＳＸ01・
溝ＳＤ02掘削状況（東から）

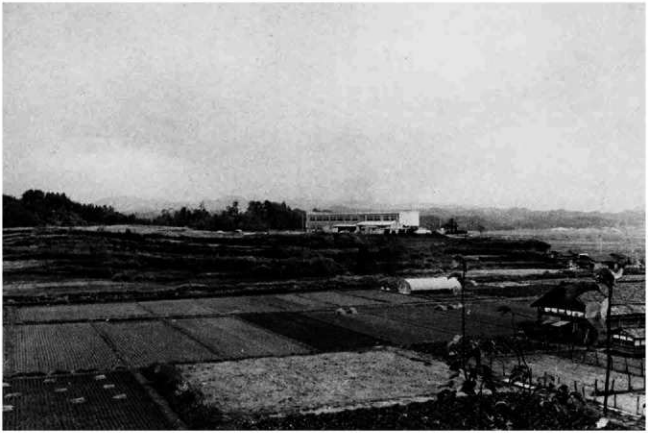
(2) ５トレンチ全景（北東から）

(3) ６トレンチ全景（北東から）



女布遺跡第９次調査出土遺物

奈具遺跡第５次



(1)調査地遠景(北から)(『奈具遺跡発掘調査報告書』　弥栄町教育委員会　1972.12より転載)

(2)調査地遠景(北から)

新設高等学校(丹後地域)校舎整備工事関係遺跡　図版第2

奈具遺跡第５次

(1)土坑群検出状況(東から)

(2)土坑群検出状況(西から)

(3)溝ＳＤ17・18検出状況(東から)

新設高等学校(丹後地域)校舎整備工事関係遺跡　図版第3

奈具遺跡第５次

(1)土坑ＳＫ02断面(南から)

(2)土坑ＳＫ07・08断面(南から)

(3)溝ＳＤ17断面(東から)

新設高等学校（丹後地域）校舎整備工事関係遺跡　図版第4

奈具遺跡第５次

(1) 竪穴建物ＳＨ15検出状況
（南から）

(2) 東壁断面の地震痕跡（西から）

(3) 調査地完掘状況（南から）

由良川緊急治水対策事業関係遺跡　図版第１

阿良須遺跡第１～３次

(1)阿良須遺跡全景(北から)

(2)阿良須遺跡全景(西から)

(3)１トレンチ全景(西から)

由良川緊急治水対策事業関係遺跡　図版第２

阿良須遺跡第１～３次

(1) ２トレンチ全景(南東から)

(2) ３トレンチ全景(西から)

(3) ４トレンチ全景(北西から)

由良川緊急治水対策事業関係遺跡　図版第３

阿良須遺跡第１～３次

(1) ５トレンチ全景(北西から)

(2) ５トレンチ東壁土層断面
(西から)

(3) ８トレンチ全景(北西から)

由良川緊急治水対策事業関係遺跡　図版第４

阿良須遺跡第１～３次

(1) ８トレンチ遺物出土状況
（南から）

(2) ９トレンチ全景（東から）

(3) ９トレンチＳＸ102遺物出土
状況（南西から）

由良川緊急治水対策事業関係遺跡　図版第５

阿良須遺跡第１～３次

(1)10トレンチ全景(北から)

(2)10トレンチ北部東壁面
(南西から)

(3)10トレンチＳＸ101遺物出土
状況１(東から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況２（南東から）

(2) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況３（南東から）

(3) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況４（南東から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況５（西から）

(2) 10トレンチＳＸ101遺物出土状況６（東から）

(3) 11トレンチ全景（南西から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａ・Ｂトレンチ調査前全景
（北東から）

(2) Ａトレンチ第１遺構面調査地
全景（南西から）

(3) Ａトレンチ第２遺構面調査地
全景（南西から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａトレンチ第２遺構面調査地遠景(北東から)

(2) Ａトレンチ第２遺構面調査地全景(右上が北)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａトレンチ第２遺構面遺構検出状況(北東から)

(2) Ａトレンチ第２遺構面東部遺構検出状況(北西から)

(3) Ａトレンチ第２遺構面ＳＤ22・ＳＸ23全景(南西から)

阿良須遺跡第１～３次

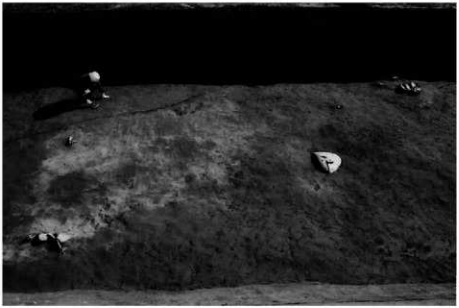
(1) Ａトレンチ第２遺構面柱穴
ＳＰ19(南西から)

(2) Ａトレンチ第２遺構面土坑
ＳＫ32(北西から)

(3) Ａトレンチ第２遺構面溝
ＳＤ37(南西から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａトレンチ第３遺構面調査地全景(北東から)



(2) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58上層遺物検出状況(北西から)

(3) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58上層遺物検出状況(北西から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58
下層遺物出土状況（北東から）

(2) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58
下層遺物出土状況（南西から）

(3) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58
下層遺物出土状況（南東から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58
下層遺物出土状況(南西から)

(2) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58
下層遺物出土状況(北西から)

(3) Ａトレンチ第３遺構面ＳＸ58
下層遺物出土状況(北東から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ１トレンチ第２遺構面調査地全景（北西から）

(2) Ｂ１トレンチ第２遺構面調査地全景（南西から）

(3) Ｂ１トレンチ第３遺構面調査地全景およびＳＸ03断ち割り調査状況（北東から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ１トレンチＳＸ03断ち割り
南壁面全景(西から)

(2) Ｂ１トレンチ西壁面にみる
ＳＸ03砂利堆積状況(北東から)

(3) Ｂ１トレンチ第３遺構面断ち
割り調査状況(南西から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチ第１遺構面全景
（北東から）

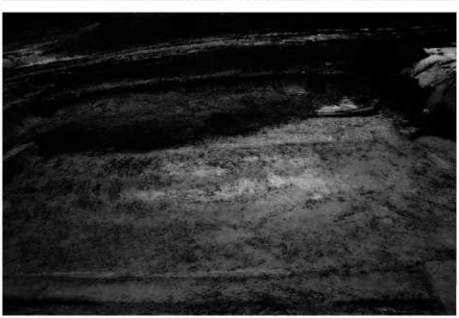
(2) Ｂ２トレンチ第１遺構面全景
（南西から）

(3) Ｂ２トレンチ第１遺構面北壁
土層堆積状況（南東から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチ第２遺構面全景
（北東から）

(2) Ｂ２トレンチ第２遺構面全景
（南西から）



(3) Ｂ２トレンチ第２遺構面砂利層
全景（北西から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチ西壁土層断面
（北東から）

(2) Ｂ２トレンチ中央南北畦土層
断面（西から）

(3) Ｂ２トレンチ西半部北壁土層
断面（南西から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチ第２遺構面完掘状況（南西から）

(2) Ｂ２トレンチＳＸ01全景（北東から）

(3) Ｂ２トレンチＳＸ01遺物出土状況（南西から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチＳＸ11完掘状況
（北東から）

(2) Ｂ２トレンチＳＸ11南東半部
断ち割り状況（南西から）

(3) Ｂ２トレンチＳＸ11南東半部
断ち割り状況（北東から）

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチ第２遺構面
西拡張部西壁遺物(91)
出土状況(南東から)

(2) Ｂ２トレンチ第２遺構面
西拡張部西壁遺物(114)
出土状況(南東から)

(3) Ｂ２トレンチ第３遺構面遺物
(17)出土状況(北から)

由良川緊急治水対策事業関係遺跡　図版第23

阿良須遺跡第1～3次

(1) B２トレンチ第３遺構面掘削状況(北東から)

(2) B２トレンチ北側東壁砂利層の深さ(北西から)

(3) B２トレンチ西半部第３遺構面完掘状況(南西から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチＳＸ02
遺物出土状況(北東から)

(2) Ｂ２トレンチ第１面から第２面
間遺物出土状況(北から)

(3) Ｂ２トレンチ第３面
遺物出土状況(東から)

阿良須遺跡第１～３次

(1) Ｂ２トレンチ第２・３遺構面
遺物(31)出土状況(南西から)

(2) Ｂ２トレンチ第２・３遺構面
遺物(109)出土状況(北東から)

(3) Ｂ２トレンチ第２遺構面遺物
(113)出土状況(北から)

出土遺物 1

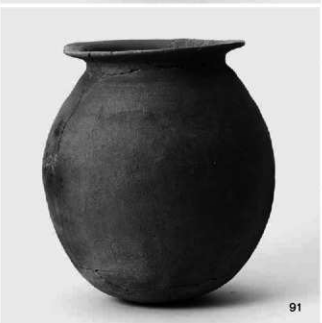
47

48

90

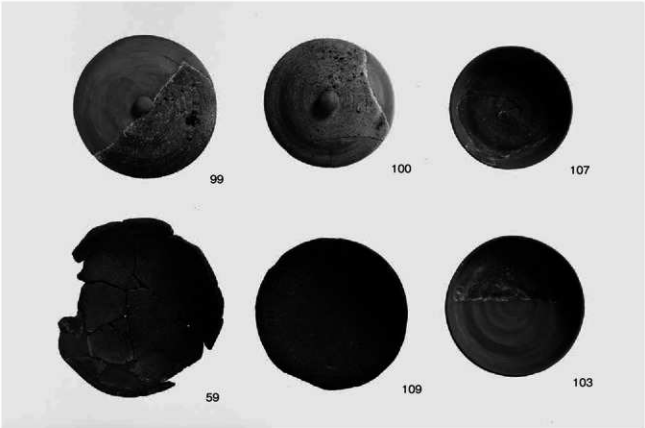
114

94

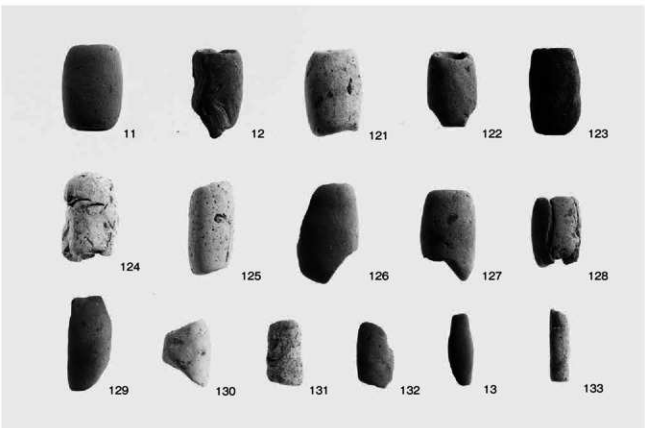

91

95

78



(1) 出土遺物 3



(2) 出土遺物 4

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第177冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第177冊
編著者名	細川康晴・石井清司・引原茂治・竹原一彦・福山博章・綾部侑真・桐井理揮・荒木瀬奈
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番#3　Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2019年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
にようきたいせき・によういせき 女布北遺跡・女布遺跡	きょうとふきょうたんごしくみはまちょうにより 京都府京丹後市久美浜町女布	262129	1534 1506	35° 36′ 05″ 35° 35′ 51″	134° 57′ 15″ 134° 57′ 25″	20150721～20150828 20160802～20160929 20170601～20170728 20180619～20180801	1,392	農地整備
なぐいせき 奈具遺跡	きょうとふきょうたんごしやさかちょうくろべ 京都府京丹後市弥栄町黒部	262129	4509	35° 40′ 19″	135° 05′ 43″	20180925～20181109	500	学校建設
あらすいせき 阿良須遺跡	きょうとふふくちやましおおえちょうきたありじおおつほか 京都府福知山市大江町北有路大坪ほか	262013	553	35° 23′ 22″	135° 10′ 05″	20151105～20160226 20160525～20161226 20170822～20171225	3,600	堤防建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女布遺跡・女布北遺跡	集落	弥生～中世	竪穴建物・土坑・柱穴	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・柱材	
奈具遺跡	集落	弥生	竪穴建物・方形土坑	弥生土器・土師器・須恵器	
阿良須遺跡	遺物散布地	弥生～中世	土坑・柱穴・自然流路	弥生土器・土師器・須恵器・青磁	

所収遺跡名	要　　約
女布遺跡・女布北遺跡	女布北遺跡及び女布遺跡地内において府営農業競争力強化基盤整備事業に伴い発掘調査を行った。女布北遺跡では今回の調査で新たに平安時代後期の掘立柱建物跡等を検出した。また、女布遺跡では弥生時代後期から古墳時代の竪穴建物をはじめて検出した。
奈具遺跡	奈具遺跡は丹後半島を貫流する竹野川右岸に位置する。調査地は大きく削平を受けていたものの、竪穴建物や溝、土坑群等の遺構を検出した。
阿良須遺跡	京都府北部を流れる由良川の下流域に位置する阿良須遺跡は、平成27・28・29年の3か年にわたって調査を実施した。調査地は由良川左岸にあたり、弥生時代後期から古墳時代、古代、中世の遺物が層位ごとに確認でき、特に7世紀代の遺物がまとまって出土した。検出遺構は、由良川の洪水などにより削り取られた箇所が多く、土坑・柱穴・自然流路などに限られていた。

京都府遺跡調査報告集 第177冊

平成31年3月29日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel　(075)256-0961　Fax　(075)231-7141